
名も無き者達の物語

大雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名も無き者達の物語

【Nコード】

N4474U

【作者名】

大雪

【あらすじ】

「大根と王妃」、「冥姫」と世界観は一緒だけれど、さらりと読める短編ばかり集めたものになる予定です。

王とか王妃とか、王子とか姫とか、宰相とか貴族とか。

あとは身分違いとかすれ違いとか、軽く読めるのを書いていきます。

宰相×下級貴族は、以前に私が短編として此处に掲載した（「嫁き遅れ女の受難」の改訂版）となります。

更新は完全に不定期です。

宰相×下級貴族（嫁き遅れ女の受難の改訂版）（前書き）

以前に私が短編として此処に掲載した（「嫁き遅れ女の受難」の改訂版）となります。

宰相×下級貴族（嫁き遅れ女の受難の改訂版）

鬼。

悪魔。

鬼畜。

大魔王――。

貴族というものに生まれ育ったからには、本音隠してにっこり笑顔が基本。

その分、本音はおろか怒りの全ては日記に書き連ねるという特技を習得した私ではあるが、この溢れる猛る思いを表わす言葉は見付からない。

鬼？

いやいや、生ぬるい。

悪魔？

あんなの、悪魔すら裸足で逃げ出す。

鬼畜？

うん。

大魔王――

むしろ物語の大魔王の方が礼儀正しい――！

「ちくしょうおおっ！ あの腹黒鬼畜具現化男があああっ！」

女顔のくせに！

男女のくせに！

道を歩けば三分に一回の確率で男に声をかけられるくせに！！

「ふざけんなよこんちくしょおおおおっ！」

女顔とねちっこく言ってやれば、人の顔を見て不憫そうに鼻で笑
い。

男女と怒鳴れば、「お前の男らしさが羨ましいよ」と蔑まされ。

男に声をかけられる事を徹底的についてやれば、お前は視線すら
向けられないなあ——と、目で言いながら肩を軽く叩かれた。

そして私の斜め上からのビンタが炸裂した。

上官ビンタと周囲では恐れられる切れ味は見事に奴の頬を打ち払
い——その後、奴の報復を食らった。

ってか、女の子にロープぐるぐる巻きってどうよ。

しかも、そのまま窓から吊すってどうよ。

一つ間違えれば死ぬぞまじで。

神だからって不死身じゃねえんだよ。

神々の世界たる天界十三世界の一つ——炎水界。

その中でも、比較的小さな国ではあるが、そののれっきとした貴
族の姫である私。

しかも隣国からの客人。

なのに奴は容赦なく蓑虫にしてくれた。

そこで私は今まで書き続けていた日記帳を閉じた。

『怒りの日記帳 ？ 856』

そうか……もうそんなに冊数を重ねたのか、私。

けれど、家に居た頃はまだ数冊ぐらいで、この国に来てから筆が
はかどった気がする。

私は最初のページを捲った。

そこには、もはや文字とも判別のつかない訳の分からない字が雄
々しい勢いで書き連ねられている。

あれだ、芸術は爆発するもの、魂のままに書きあげる書道家のよ
く読めない字の如き文字だった。

というか、何故ここで私は筆を使ったのだろう。

時には赤いペンで書かれている事もあるし、ひたすら「憎い」と
書かれているページもあった。

昔の日記を見て、その時の情景やら過去の自分に思いを馳せると
いう話をよく聞く。

しかし、私の日記帳は一目見ただけでその時の心情は一目瞭然だ
った。

奴に対する怒りの念が渦巻き、後世まで残ればどんな歴史家だっ
て私の思いを瞬時に理解してくれるだろう。

よし、後で綺麗に保管して置こう。

とりあえず私の死後ならこれが世に出ても特に問題はない。
むしろ出て欲しい。

そして名宰相と言われる奴の元婚約者による暴露本が造られると
いいさ。

「あははははははは！」

ザザザ！と一気に引いていく気配に、そういえば此処が大衆食
堂である事を思い出す。

だがなんだ。

久しぶりに感じた愉快さを前に、もはや恥など関係なかった。

旅の恥はかきすて。

正確には違うが、もう自分の家に帰るし、そもそもこの国に長く
居たけれど、その殆どが王宮だから何の問題もない。

それよりも、家に帰った後の事を考えなければ。

当時二十五歳。

完全に嫁き遅れ状態だった娘の事に頭を悩ませ続けていた両親が、
婚約が決まった瞬間泣きながら喜んだ姿は今でも覚えている。

そりゃそうだ。

貴族社会では二十五は完全なる嫁き遅れ。

しかも婚約すらしていないとなれば、本人に重大な欠陥があると
思われてもおかしくない。

既に二十歳を超えた時点で、既に賞味期限が切れたと判断され、
今旬真つ盛りの若い妹達や他の姫君達に群がる男達を壁際から見守
るのが日課となった。

下の弟妹達が優秀過ぎたせいか私が平凡すぎたせいかは分らない。
私としても、結婚に憧れなかったわけではなかったが、何せ相手
が居ないのだから仕方が無い。

思えば、求婚者どころか声をかけてくれる相手も殆どいなかった。そんな問題ありまくりの娘が、ようやく婚約してくれた娘が、家に帰ってくる。

しかもほぼ出戻り状態。

となれば、当然両親は卒倒するだろう。

何せ婚約させるまでの苦労があれだから。

それだけでなく、きつとまた新たな婚約者を捜してくる筈だ。

だが、この国の名宰相と婚約破棄した女と誰が婚約したいものか。

誰もが憧れ、その名声は他国にすら響く賢人にして美貌の主。

女と見紛う麗しい伶俐な美貌から、『雪華』と呼ばれる奴と結婚したい者はそれこそ星の数。

それと婚約した当初は世界中の恨みを買ったと錯覚したほどで、毎日毎日暗殺されかけた。

でも、婚約者が守ってくれた事なんて一度もなく、その程度？と笑顔で聞いてきた奴の横っ面を張り倒したのが上官ビンタ炸裂第一弾。

その後も婚約者を労るような事は一度もなかった。

何せ、奴は別の女に夢中。

ええ、そうですよ。

どうせ私は可愛くないですよ。

あんたの大好きな大好きな愛しい巫女姫様と比べて私は男男しますよ！！

いっつもいっつも何かにつけて比べてくれましたよね。

その度に、巫女姫の方が、巫女姫の方が言い放ってくれた婚約者様。

でもそれも今日でおしまい。

婚約者の横つ面に最後にふるった上官ビントは、同時に奴に婚約破棄状も叩付けた。

ばいばい。

これで存分に巫女姫とイチヤイチヤ出来るでしょう。

ああ、私ってあんだけ虐げられていたのにこんな良い事をするなんて本当に心優しい女よね。

それこそ聖女よ聖女。

巫女姫は本物の聖女だけど、私だってきつと聖女に違いない。

一人の恋に溺れ苦しむ男を自由にしてあげたんだもの。

代わりに私は一生独身よ。

何度も言うけど、他国まで轟く名宰相と婚約破棄した女を誰がわざわざ嫁にするものか。

そもそも絶対に勘ぐられる。

そればかりか、絶対に私の方が何かして宰相に見限られて捨てられたと思うだろう。

今までだってそう。

宰相が何かしても、全て私の責任。

私が悪くて私の存在がそうさせたと言われ中傷された。

全て、全て、私が悪くて宰相は悪くないのだ。

二十五歳で、永遠の独身決定。

こういう時は神である事が腹立たしい。

いつそのこと、私のことを知らない他の世界にでも行ってみようか。

名宰相と別れた女。

いや――。

名宰相に捨てられた女。

よりもよって、あんな男を婚約者に選んだ両親に腹立たしさを覚えても、もうどうしようもない。

それよりも新しい生活に思いを馳せよう。

婚約者の事なんてどうでもいい。

いや、元婚約者の事なんて関係ない。

ばいばい。

ばいばい。

目を瞑れば、あいつが喜び勇んで巫女姫に駆け寄っていくのが見える。

そう――私が居なくなつた所で何にも変わらない。

だって、あいつにとって邪魔者が居なくなるだけだから。

あの王宮にとって、あいつを悩ませ苛立たせる存在が居なくなるのだから。

「なのに……なんで泣いてるのよお」

ボタボタと滴がテーブルの上にのせた手に落ちていく。

しかも十代のようなピチピチの肌でない手の甲は受け止めた涙を弾けず、それはテーブルへと滴り落ちていた。

「くううつ」

涙ぐらい気合いで止めてやる。

己の肉体の一部ぐらい、根性でどうにかしてやる。

でも——やっぱり無理で、涙はどんどん溢れ出る。

それが悔しくて、元婚約者を罵った。

「ばゝか」

ばゝかばゝかばゝか。

なんで、あんな奴の為に、こんな風にならなきゃならない。

なんで、あんな奴の為に、こんなに苦しくならなきゃならない。

婚約者に見向きもしなかったくせに。

私の名前すら呼ばなかったくせに。

どうしてあんな奴の為に涙なんて流すのよお！

「こんちくしょう……」

巫女姫は可愛かった。

巫女姫は綺麗だった。

巫女姫は優しかった。

そして、この国の誰もがその存在を慈しみ愛した。

反対に、私はずっと忘れられた宰相の婚約者だった。

でも、本人にまで忘れられていたとは――。

『ああ、そういえばお前は私の婚約者だったな』

それを聞いた瞬間、全てがどうでも良くなった。

婚約者の横っ面を張り倒し、さっさと荷物を纏めて王宮を飛び出した。

忘れられた婚約者。

隣国の貴族といっても、所詮は下級貴族。

それがたまたま父の伝手だからで祖国よりも大きな国の宰相の婚約者などになっってしまったのがそもそも悪かったのだ。

別に身分差があっても結婚するカップルは多い。

暗黒大戦以降は、身分違いを乗り越えて結婚する者達も上層部や貴族に増えている。

でもね、でもね。

それは互いに想い合うからこそ可能であって、私達のような場合

には当てはまらない。

そもそも、奴は巫女姫が好きなのだ。

巫女姫が好きで好きでたまらなくて——愛してるのだ。

さっさと帰れば良かった。

なのに、なんでか残ってしまった。

そればかりか、穀潰しと馬鹿にする宰相の信崇者達に対抗し、出来もしない仕事までした。

といっても、満足に仕事のした事のない貴族の姫に出来る事は特になく、しかもまず雇ってさえくれなかった。

当然だ。

隣国の貴族の姫——しかも、宰相の婚約者が、である。

誰がそんな面倒な相手を雇うだろうか。

しかも何も出来ない、ただの小娘を。

それでも何とか必死に食らいつき、ようやく出来た仕事は所謂下働きだった。

今度は『貴族の我が儘姫のままごと遊び』と揶揄されたのは言うまでもない。

ただ、それでも婚約者は何も言わなかった。

働く事を告げて「そう」だけで終わったぐらいだ。

隣国の貴族の姫が？
しかも宰相の婚約者が？

むしろそうした疑問や不安、反対意見は周囲からの方が多かったぐらいである。

けれど一年、二年、五年、十年と働き続ける事でようやくそういう声も小さくなっていった。

そうしてようやく『貴族の姫君のままごと遊び』から『下働きの戦力』と周囲に認められ、このまま下働きとして生きていくのも楽しいかもしれないと思い始めていた時だ。

自分が婚約者である事も忘れていたあの男に耐えきれず、その頬を殴った。

そして王宮を飛び出し、今、王宮から三日ほどの距離にあるこの街の食堂に居る。

今頃王宮は大騒ぎだろう。

私が飛び出した事ではなく、宰相が殴られた事に。

捕まえるなら捕まえれば良い。

でも、ただで捕まってなどやらない。

いざとなったら、婚約者を蔑ろにした事を暴露してやるとでも脅せば良い。

確かに取るに足らない下級貴族の姫だが、それでも隣国の貴族という立場上外交問題に発展する事だってある。

まあ——実際にはこの国の国力を恐れてもみ消されるかも知れないが、それでも隙を突く事は出来るだろう。

と息巻いてはいるが、実際には三日経っても追っ手の姿は見えないから、向こうは最初から追う気すらないと見ていいだろう。

追い掛ける価値すらない女なのだ。

いや、むしろ邪魔者が居なくなつたとせいせいしているかもしれない。

それどころか、居なくなつた事すら気づかずに巫女姫の元に何時もの様に通いつけているのかも。

でも、もうどうだっていい。

「負けるもんか」

祖国に帰り、新しい生活を始める。

そうしたら忙しくて、この国でつけられた傷など構ってなどいられなくなる。

負けるもんか。

負けるもんか。

絶対に、負けない。

「そしていつか見返してやる」

巫女姫に夢中だった元婚約者すら無視できないほど、幸せになつてやる。

「そして悔しがればいいんだ!」

そう言い捨てながらも、巫女姫と並び幸せそうなあいつが脳裏に浮かぶのはどうしてか。

それはきっと、私があいつの事を少なからず思っていたからだろ
う。

たった一度だけ、助けられた。
たった一度だけ。

巫女姫お披露目の宴の際に、巫女姫を奪取しようと襲い掛かってきた他国の者達に襲われた時に見たあの横顔。

あいつが守ったのは、巫女姫。

でも――。

『危ない、下がれ』

短く言い捨て、茫然とする私の手を引っぱったあいつを。
後ろに下からされる中、見た横顔を。

そして笑みを浮かべながらも敵を殲滅し、巫女姫を守る姿に――
私は。

「やっぱり馬鹿だ」

別の女性を守っている姿に惚れる私は、真性の馬鹿。

だが、奪われた心は取り返す――わけには行かないから、また育ててやる。

そして――。

「新しい男を見つけてやる!!」

昔の恋を忘れるには新しい恋。

よし、祖国に戻ったら

「へえ？ 堂々と浮気宣言するのか」

後ろから聞こえて来た声の禍々しさに私はそのまま固まった。

その後起きた事はもう思い出したくもない。

ただその時居た食堂では、すれ違いの末に出て行った婚約者を取り戻した宰相という言葉だけ聞けばロマンチックな物語が残されていたり。

私が帰る場所が何故か祖国ではなく王宮だったり。

何故かその次の年、あいつの子供を産んでいて宰相夫人と呼ばれていたり。

するけど――。

「おい、宰相夫人が逃げたぞ!」

「何としても連れ戻せ!」

「今回逃げられたらオレ達全員今度こそ殺されるぞ!」

「宰相夫人、どうかお待ち下さい!」

っ
てかね。

実は婚約破棄状を叩付けた後――

婚約者が眼の色変えて搜しまくった挙げ句に文字通り王宮を凍り付かせたとか――なんて傍迷惑な奴か。

邪魔者が居なくなつて意気揚々と縁者の娘を紹介する者達を半殺しにしたとか――それでもこりずに娘を紹介する貴方がた勇者だよ。

王や上層部すら半泣きになるほど、徹底的に婚約者に攻撃されたとか――お前が真の支配者か。

しかし、私が連れ戻された後に凄く機嫌が良くなつたのを見た瞬間、「よっしゃあああ！生贄来たああっ」とか思つたらしいとか――ああ、だから私を生贄にしたのか。

確かに気持ちは分かるが、これだけは言いたい。

悪いのは全部あいつだああああ！

そうして、今日も必死に幼い我が子を抱えて悪魔から逃げる私だった。

王×王妃

「あの方は本気ですよ」

美しい衣を身に纏った妖艶な側室が言う。

「そうそう、絶対にぞつこんだよ」

煌びやかな衣を身に纏った側室が言う。

「こんな事は初めてだな」

落ち着いた衣を身に纏った理知的な美貌の側室が言う。

「ですから、どうか陛下の思いを受け入れて下さい」

四人の中で最も長らくあいつの側に居た清楚な側室の艶麗な微笑みに、私はつられる様に頷き。

「かけてたまるかあああ！」

「うわっ！　王妃が乱心したよ！」

「王妃様！　そっちは窓だ！　ここは五階だ死ぬぞ！」

「すぐに窓の下に衛兵をつ」

「離せ詐欺集団！」

天界十三世界が一つ——炎水界。

炎と水を司る国々が存在する中、水の第六位に位置する海国後宮にその悲鳴が木霊した。

＊

一時間後、仕事で身動きの取れなかった奴がようやく駆け付けた。

「来たな、詐欺男」

「誰が詐欺男だよ」

他国の王の例に違わず、妖艶な美女と見紛う如き美貌。

聡明で文武両道、水の第六位に位置する国を繁栄させる政治手腕。顔に似合わぬ狡猾で腹黒い策士家だが、その悲惨な過去の経験から弱気者達を保護する賢君。

海国国王――。

建国当時は誰がその花嫁になるかで騒がれたものだ。

しかし――誰が想像するだろう。

この目の前の佳人が毎日入り浸る、後宮に数多咲き誇る花が、全て男だと。

そう――海国後宮の花の全ては、美少年、美青年で構成されている。

つまり、先程私にふざけた事を抜かしていたあの四人も男。

しかもあの四人は、後宮に百名存在する男の愛妾達のトップに君臨する四妃。

後宮のボスだといっていい。

え？私？

私はただの通りすがりの。

「で、私の后は何をそんなにご立腹なんだ？」

「誰が后かこのやろっ！」

くそっ！余計な事を言いやがって。

そうよ、私は后よ。

それもこの男の正妃、つまりあの四妃の上に君臨させられている。

因みに、男好きの王の后ならもちろん男と思われるかもしれない。
しかし私はれっきとした女だ。

そう——今年二十一になるピチピチの女なんだよ！
地味な平凡顔だけど！

おかげで、逆に美形揃いの後宮で浮く浮く。

しかも見かけより年増に見えるらしく、同い年の王と並べば姉女
房と噂される始末。

死ね、美形！

クタバレ、この詐欺男！！

そのまま飛びかかろうとしたら、部屋の奥で優雅に笑って見守っ
ていたあの四妃が私を捕獲した。

「王妃様、なんという事を」

美しい衣を身に纏った妖艶な側室は賢妃。

「諦めなよお」

煌びやかな衣を身に纏った側室は徳妃。

「そうそう、諦めが肝心」

落ち着いた衣を身に纏った理知的な美貌の側室は淑妃。

「他の三人の言うとおり、ですから、どうか陛下の思いを受け入れて下さい」

再び一番ふざけた事を抜かす清楚な側室は貴妃。

因みに、貴妃、淑妃、徳妃、賢妃は地位名で、正妃のすぐ下に位置する四夫人に当たる。

通常ならば、それだけ王の寵愛が高いという事だろう。ただ普通なら、そういう位は妃の家格や後見人の力など様々なものが関与するが、ここの後宮の場合は妃が全て男という事もあって、寵愛の差によるらしい。

と、知りたくもない事を知る私は此処に来てから既に五年目になる。

すなわち、詐欺に遭ってから五年目だ。

「ちくしょおおおつ！ 詐欺男に騙されたあああつ」

「だから、私は何もしてない」

一本に纏めた長い髪を背中で揺らしながら近付く詐欺男から私は逃げる。

捕まっただが最後、最悪な目に遭わされる。

「それに来たのはお前の方からだろ」

「それは陛下のせいだあつ」

陛下——といっても、それは目の前にいる詐欺男ではない。

結婚前までに私が仕えていた炎水界でも一、二を争う大国——
風国の王様の方だった。

*

こう見えても私は、この国に嫁ぐ五年前までは、水の第一位に位置する風国で下働きをしていた。

頼るべき身内もない孤児だったが、そんな苦難にも負けず、私は、
風国王宮に一生を捧げる覚悟だった。

当然結婚する気は全くなかった。

というのも、今まで側に居た男達が最悪な相手ばかりだったからだ。

最初は親同士が決めた婚約者は私が孤児になった途端に別の女性と婚約した。

次の彼氏は所謂暴力彼氏、その次の彼は所謂貢がせ君、その次の彼は遊び人で、最後の彼氏はどこぞの貴族の姫に見初められて私を捨てた。

しかも当時私は妊娠していたのに、相手の男の暴行によって子は流れ、再び妊娠する確率も低いという。

暫くふさぎ込んだ私は、もう二度と恋愛する気はなかった。

そんなある日、私は王に呼ばれて言われたのだ。

「三食昼寝付きのお仕事があります」

呈示されたのは、海国の王妃という仕事。

いや、それは姫の役目だろうと突っ込めば、陛下は哀しげに言われたのだ。

「実はその王は男色でしてね」

賢君だが、建国後に開いた後宮に沢山の美少年、美青年の妃妾達を待らす好色男好き。

特に四妃という飛び抜けた美男子達を寵愛しているとか。

「跡継は養子をという事に決まったのですが、せめて正妃だけでも女をと国民が言いまして」

いいじゃん男で。

跡継を養子にするなら正妃も男でいいじゃん。

しかももう男はイヤだと言ってるじゃん。

「他の女性」

「以前何度か試しましたが、全て失敗しました。そもそも考えて下さい。どこの世界に最初から男の妃がわんさかいる相手に嫁ぐ女性がいいますか。しかも、完璧に飾り物の妃にされると分かってるんですよ。それに、自分がほっとかれてる間、女よりも見目麗しい男達を夫が寵愛する事実には普通は耐えられませんよ」

何でも以前に何度か壮絶なる争いというか、女性の妃が男性の妃達を刃物で切りつけたとかあったらしい。

なので、それにうんざりした王宮側が女性を妃にするというのを

諦めたらしい。

だが、せめて正妃だけはとお願いしたとか。

「他には居ないんですか。官吏の女性とか、女官とか」

「割り切ってくれる相手は既に伴侶や恋人が至り、仕事に一生身を捧げるらしいです。なので友好国のうちに良いのが居ないかと言われました」

つまり、夫の男好きを認め、男の妃達と仲良く付き合い、まあもし可能だったら子供も産めたらいいけど、たぶん養子になるからその子を愛情深く育てられる女性が欲しいと。

「で、うちの女性達を審査したところ」

「勝手に審査しないで下さい」

「貴方が最適だという事でした」

「……」

最適ってなんだと問い詰めれば、陛下はにこやかに言った。

「だって、そんな若い身空でもう二度と男なんていらぬ。結婚なんてしないっていうのは貴方ぐらいですから。つまり、夫が誰を寵愛しようとも割り切れるでしょう」

確かに、出来る、かもしれない。

「それに子供も養子ではありますが、手に入りますし、何よりも三食昼寝付きです」

むしろそちらに惹かれる。

子供と三食昼寝付き。

「まあ、タダ飯ぐらいがイヤなら働く事も可能でしょう。向こうの王宮は王の嗜好ゆえに女性の働き手が少ないですからねえ」

「なるほど」

「という事でどうです？」

男は嫌いだ。

というか、恋愛事はもううんざり。

「わ、わか、りました」

男好きならたぶんこっちに来る事はないだろう。

いや、そもそも来て欲しくないし、こんな地味女の元にくる筈もない。

なので私は三食昼寝付きと養子を手に入れたウハウハ生活を送れるだろう。

と、思って海国に来た筈なのに――。

やはりうまい話には裏があつた。

最初は順調だった。

王宮からは大歓迎され、諦観していた国民達には頑張れとエールを送られた。

形だけの婚儀を行い、その後引き合わされた後宮の妃達はみんな良い方達で、目の上のたんこぶともなりかねない正妃の私をこれまた歓迎してくれた。

おかげで今までずっと、後宮の妃妾達とは仲の良い友好関係を築き上げている。

その中で王への好感度も、最初は上昇傾向だった。
というのも、元々後宮入りしている男の妃妾達は、その美貌ゆえに性奴隷として身を落とさせられた者達、また望みもしない愛妾として囲われていた過去を持つ者達が殆どだった。

しかし本人達は居たってノーマル。
女性とお付き合いしたいし、普通に家庭も持ちたい。

けれど、彼らを狙う周囲の者達はそれを許さず、隙あらば拉致監禁を企命中。

そんな彼らを一時的に保護する為に、王は後宮にその手の被害を受けた者達、また更に被害を受けそうな者達を入れているのだと妃妾達から聞かされた。

因みに、建国以前から寝食を共にする上層部は男性女性問わずにその事を知っているが、それ以外の王宮勤めの者達には隠しているという。

もしバレたら、妃妾達が後宮入りしてもなお諦められない者達が煩くなるからだ。

と、そんな王も過去に愛妾として長年囲われた悲惨な経験を持っているらしい。

しかも王を巡って何度も争いが起き、『傾国の美姫』という称号まで押し付けられたとか。

そんな過去を持つからこそ、見捨てられなかったのだと上層部や妃妾達は私に教えてくれた。

因みに王も完全にノーマルらしいが、今まで後宮入りしてきた女性達は完全に権力目当てで食指が動く事もなく、また妃妾達の事を片付けてからと決めた為に探しに行く事もしない。

つまり、男好きは完全なる誤解というより、性的被害にあった妃妾達を守る為にわざと流した誤情報だったと知り、純粹に尊敬した。

しかし、王が異性に手を出さなかったのは好みの相手が居なかったからだけであり、もし向こうからやってきた場合はどうなるか――

その事に対して、誰も考えて居なかったのは誰が悪いというわけでもない。

悪いわけではない、けど――！

「どうしてそれが私なのよおっ！」

「諦めてくれ」

寝台に押倒される私に笑顔を見せる王は、たぶん幸せそうなのだろう。

しかし私は幸せではない。

飾りものの妃だというから来たのだ。

王は男好きで女性には興味がないというから来たのだ。

まあ、王がノーマルと分かった時には、全ての妃妾達がそれぞれの望む相手と結ばれ、更に王が想い人を見つけるまでの女除けぐらいならなってやるかと思った。

そう――想い人を見つけるまでの女除けになら、なってもいいと決意した。

「けど、私に食指を動かすなんて聞いてなあああいつ！」

というより、実は王が虬国に來た際に私に一目惚れし、それを知った妃妾達が虬国王様に私を欲しいと嘆願状を出した結果、傷付けられた挙げ句に全てを仕事に捧げようとした若い下働きを不憫に思つて私を笑顔で差し出した事も聞いていない。

そんな私が全てを知るのは、最後の妃妾が愛する女性と共に後宮を去る日のことだった。

王×王妃？（前書き）

海国国王夫妻のお話です。
王×王妃の続き。

王×王妃？

「なあ、私が浮気したらどうする？」

「相手の後宮入り手続きを取ります」

そう答えた私が夫である海王に襲い掛かれたのは、その三分後だった。

*

「どう思う？！」

完全に抜けてしまった腰はどうにもならず、蛞蝓のように這いつて辿り着いた先は、正妃以外は全て男妃達からなる後宮の談話室。その中でも、正妃に次ぐ四妃たる四人の男妃達の居る居室にて保護された私の問いに、四妃達は何故か苦笑した。

「どうもこうも、それは王妃様が悪いです」

代表するように貴妃がやんわりと告げた。

「なんで私が悪いのっ」

王が手をつけた相手を後宮入りさせ、しかるべき地位と生活を保証する。

それこそ、後宮の主たる私の勤め。

な筈なのに、貴妃達までこんな風に言うなんて。

「王妃様、普通の妻は夫が浮気したら怒り狂うものです、と書物に書かれています」

「そうそう、夫の胸倉を掴み往復ビンタ百回、って書物に書かれました」

「更に、弁護士を雇って慰謝料をふんだくるらしいぞ、書物によると」

「それぐらい怒るものだと、どの書物にも書かれている」

書物、書物、書物、書物。

以前に四妃に対し、まるで本物の女性よりもその気持ちが出るのねと伝えて以降、彼らはそうやって「」に書かれていた「、」が言っていた」と告げるのが常となっていた。

そこまでイヤか、女性らしいと言われるのが。

まあ、その性別を超越した美貌ゆえに女として生きる事を強いられてきた者達だから、仕方ないといえば仕方ない。

「とにかく、今からでも王に謝りましょう」

「そうそう、浮気されたらイヤです！　って涙目で見つめてっ」

「なんで。王なら沢山の女性に手を付けても許されるじゃない。むしろ歴代の王達の後宮なんて美女の博物館そのものじゃない」

だから、王族には美形が揃う。

王が手当たり次第に美女を後宮入りさせて手を出しまくるからだ。それが普通。

というか、多くの女性を囲う事で王としての権威を表わしているとか何とか。

逆に妃の数が少なければ甲斐性無し、又は同性愛者と思われる国もあったとか。

そうして多くの美女達に手を付けまくり、後宮の維持費と妃達のが儘で傾いた国々も多かった。

歴史書を見る度に思う。

学習能力ないだろ——と。

別に奥さんの数は良いのだ。

しかし、国傾けるまで金使うつて何なんだ。

それよりは、民達も楽しめる盛大な祭りでも催して国民にキャッシュバックした方がよっぽどいい。

その方が経済も上向くつてものである。

まあその点で言えば、せっせと地方の状態を把握し、そこに仕事を興していく夫は素晴らしいと言えよう。

「とにかく、王妃様。余所は余所、うちはうち。この国の妃は王妃様ただ一人です。後宮の他の妾妃達は全て避難してきた者達だけな

のですから」

「いや、新しい妃が入るっていう可能性もあるかも」

「ないです、絶対ないです」

いつも優しい貴妃の笑顔に黒さが増した。

「良いですか？ 王妃様。とにかく、王の浮気発言に対しては、そんな事は嫌だと言って下さい」

嫌だ……いや、それだと心の狭い妃と思われないだろうか。

そもそも、私が以前付き合った男達の殆どが、多くの女性達を味見する事は男としての勤めだと言っていたし。

「そうです、雨の日に捨てられた小犬の様な眼差しを王に向けて下さい」

難易度が上がった。

「さ、練習です！」

「は？！」

「お任せ下さい、夜までには完璧な小犬の視線を伝授してご覧に入れますからっ」

やる気だよ貴妃。

しかし、他の三妃もがっちり私を羽交い締めにしてくれた。暴れても無駄。

どんなに見た目は美女でも、所詮彼らは男。

というか、男に小犬の視線を伝授されるって一体どんだけなんだ、私の女レベル。

「さあ、あの若く麗しい偉大なる賢君という完璧な外面とは裏腹に、妻に冷たくされ耳を垂れさせている王を喜ばせるのです！」

そつだそつだ〜とBGMが聞こえる。

しかも、何時の間にか増えている妾妃達。

「って、絶対あんたら陛下の事を下に見てるでしょっ！」

そんな私の叫びも、彼らの美しい笑みによってさらりと流されたのだった。

*

「とりあえず——三十点？ 貴妃の方が上手かった」

こいつ、どうしてくれよう。

夜、貴妃達のスパルタ修行を終えた私は、早速寢所にて夫に小犬視線を試して見た。

その結果が、三十点。

貴妃は六十点が合格点で、駄目だったら再度追加講習をすると言っていた。

が、今はそれよりもこの駄目男である。

点数が低いのはまだいいとして、他の女、いや、仮とはいえ妾妃と比べるな！！

しかも相手は男だぞ、おいっ！！

男に負けたという事実には打ちのめされた。

だがそれ以上に気になったのは、いつ貴妃の小犬視線を見たのかという事で。

「私ならもつと上手く出来る」

「は？」

いつ貴妃のを見たのかと問う間もなく、夫の小犬視線が炸裂した。
「はうっ！」

その細やかな顔面筋の動き、潤んだ瞳、哀愁漂う切ない色香と哀しげな雰囲気。

母性本能を撃ち抜かれました。

もう駄目です、完全に負けました。

「どうだ？！」

満点です。

ついでに小犬の耳としっぽも見えた私は、素直にそう評価しました。

というか、男に負けました（二回目）。

女としての尊厳というより、私は自分が女に生まれた意味から問うことにします。

と、そんな私の服をすると脱がす――。

「ちよい待て、何してくれてるんですか」

「夫婦にとつて大切な事だ」

ニヤリと笑う夫に私の中で嫌な予感が渦巻く。

駄目だ、逃げよう。

しかし、明け方まで散々酷使してくれた腰に力は入らない。

そういえば、ここに来るまでも侍女達に運んで貰ったぐらいだ。

「む、むむむ無理です！ 死ぬ、死にます、マジで冥府に行つてしまいますっ」

「冥府の神になど渡さない。お前は私の妃だから」

「いや、神に渡すとかじゃなくて渡つちやいます川を！」

「大丈夫だ。三途の川の橋渡しは今日から一週間ストライキと聞いている、賃上げ請求で」

冥府の神も大変なんだ――なんて事よりも、迫り来るは私の貞操の危機。

遠くの冥府の神々の賃金の危機より、身近に迫る私の危機の方が大事。

「つて、無理です、本当に無理！」

「大丈夫だ。神の肉体は強靱だし、それに私も一週間不眠不休で犯られても大丈夫だった」

「いや、それ違うし！ つてか、誰よそんな酷い事したのはっ！」

一週間不眠不休で？！

もちろん、そんな事をするのは、過去に夫を奴隷や妾として飼っていた男達以外には居ないだろう。

しかし酷すぎる。

夫の過去は聞いていたし、夫の美貌ならばそういう経験はあってもおかしくない。

その相手の男達に強い苛立ちを憶える。

が、それも耳元に息を吹きかけられるまでだった。

「大丈夫だ、私は上手い、たぶん」

「いや、そんな事別に気にして——ってか、たぶんって何?! 上手いじゃんっ」

そして私は地雷を踏んだ。

頬を赤らめる夫。

チラチラとこちらに視線を向ける夫。

塞がれる唇と、服をはぎ取る腕。

「いやあああああっ!」

翌日、私は寝台からも出られなくなった。

反対に夫の肌の張りや艶は五割増しだったという。

王×王妃？

飛ぶ鳥を落とす勢いという言葉がある。

但し、その意味は本当に鳥を叩き落とすのではなく、権力や威勢が盛んな様子というごく普通のそれだ。

その日、海国王宮の奥深くにある王妃の室にある中庭にて、その琴の音が鳴り響く。

びよん！！

ビロビロリン！

ばさばさと飛ぶ鳥が大量に中庭に落下してきた。そのどれもが口から泡を吹き、目を回している。

「凄いぞ、王妃。正しく飛ぶ鳥を落す音色だな」

王に悪気は一切無かった。

しかし、ビィンと琴の糸を捻りきった王妃は、そのまま琴で王の側頭部を殴り、始まった大乱闘。

控えていた侍女達やら侍従達、また王の護衛として部屋の外に居た武官達も入り乱れる大騒ぎとなったのだった。

*

「どう思う」

「それは陛下、貴方が悪いでしょう。嫌味ですか」

王妃から暫く出入り禁止令を食らった王は、後宮の主である四妃の名を冠する四人の妃達の元を訪れていた。

王妃に相手にされないから別の妃の所へ——そんな王は歴史を顧みれば数多く居たが、海王の場合は意味が違う。

そもそも、後宮に居る妾妃達は全員男である。

まあ、男色家の王ならば別におかしくもないが、海国後宮の妃達は全員その美貌が災いし酷い目にあってきた過去から避難してきた者達であり、いわば後宮は避難場所。

王は手を付ける気は全くなく、妾妃という立場も避難してきた者達を追いかけて回す者達の牽制の手段にしか過ぎない。

そんなわけで、後宮の妾妃達は王にとっては守るべき避難民であり、同時に同じ過去を持つ同志、そして気の置けない仲間みたいなものだ。

他の妾妃達も物陰から様子をうかがっている中、事情を聞いた四妃達は溜息をつく。

政治に関してはあれだけ有能で、軍部も掌握し、民達からの人気も高い賢君のくせしてどうして王妃の心は掴めないのだろうか。

「私は王妃の事でわざと嫌味など言わない」

わざとでなければ言うのか。

「なら、飛ぶ鳥を落す音色って何ですか」

「飛ぶ鳥すら翼を休めるほどの音色という事で」

王妃からすれば全くそんな風には取れなかっただろう。

「そう、常に張り詰めている聴覚神経を強制的に麻痺させた挙げ句、三半規管を破壊し、バランス感覚を失わせ永遠の眠りへと誘う素晴らしい音色だと褒めた」

「そしたらなんて言われました？」

「死んでくれと言われて殴られた」

確かに四妃も王妃の樂の才は知っていたが――。

「これは、徹底的に教育し直す必要がありますね」

どちらをと聞かず、他の三人の妾妃達が艶やかに微笑む。

「貴妃、淒く楽しそうだね」

「そもそも教師志望だったしな」

小さい頃の夢は教師――そんな可愛らしい夢を抱いたこともあった。

そしてその夢を、王妃が思い出させてくれる。

馬鹿な子ほど可愛い、出来ない子ほど教え甲斐がある。

貴妃にとって王妃は可愛い大切な生徒だった。

「いや、琴ぐらいなら私が」

「また殴られたいんですか」

王はあらかじめの事は出来る。

殆どの楽器を弾きこなし、女としての教養も完璧。

男なのにどうして女に必要な教養を学んでいるのかについては、彼を女として飼っていた者達の趣味だ。

貴族夫人にも匹敵する程の教養は、絶対に自分の妻にしようとバカ共が企んでいたからだろう。

だが、それを披露したら確実に王は王妃に捨てられる。絶対にだ。

一切の躊躇いもなく王妃は王を投げ捨てて行くだろう。

それは王に男としての魅力がないからか――いや、王妃が他の女性の様に王の地位や身分、外見に拘らない素敵な女性だからだろう。

「ん？ それだと、王は中身の点で失格という事になりますか？」

「は？ 私の中身がどうした？」

王の言葉を見せしめ、四妃達は考える。

王として最高、男としても最高、女としても最高、でも夫として

は――。

四妃達は顔を見合わせ、揃って王を盗み見る。
どうしてそこだけ落第点になるのか。
すると、王が溜息をつくのが見えた。

「陛下？」

「近頃王妃は怒ってばかりだ」

哀しげに微笑む王の色香に、四妃達は引き摺り出される欲望に震える体を押え付ける。

「王妃は私の事が嫌いなんだろうか」

「陛下――」

自分の知らない間に勝手に目を付けられ、更に知らない所で勤め先である凧国国王と身柄のやりとりをされ、なおかつ相手は同性愛者だと思っていたら嘘でしたとなり――。

嫌う要素ばつちり！！

特に向こうは今までロクな男に恵まれず、最後の男に至ってはその愚かな暴挙によって子供を望めない体にされた。

もう男は沢山とっていて、同性愛者でただのお飾りだからと説得されて来てみれば、実はそういう目でみる男が夫。

「嫌われる要素が多すぎますね」

「んなっ？！」

四妃達は、自分達も王妃がこの国にくる原因となったにも関わらず、その所行を完全に棚上げした。

というか、例えば王が一目惚れしても、妾妃達が凧国国王に強く強く願わなければ、穩便に王妃を手に入れる事は叶わなかっただろう。

「とりあえず、全力で謝れ」

「離縁こそが王妃の幸せかと思うよ」

「徳妃の言つとおりだ」

「お前らは私と王妃の仲をどうしたいんだっ！」

別にどうもしたくない。

それが四妃の本音だった。

というか、王妃の事は気に入っているし慕ってもいる。

自分達の様な特殊な存在も丸ごと受け入れてくれる女性なんて王妃ぐらいだろう。

王妃が来る前に来た女性達など、勝手に嫉妬に狂い襲い掛かってきたし、また男妃として侮蔑と嘲笑を向け、中には見目麗しいからと色目を使ってきた者達も居た。

ある意味それが普通なのだと諦めていたのに、突然ポツと現れた王妃。

彼女との時間は本当に優しく、砂糖菓子のように甘く心地良かった。しかし彼女の幸せを望むなら、この王を犠牲にしなければならぬ。

だが、王も自分達を助けてくれた慕わしい存在であり、大切な仲間である。

というわけで、最終的に下した結論は、必要以上にかかわらず中立を保つ事だった。

「しかし怒ってばかりという事は、何処かに不満があるという事か」
王は必死に考えた。

妻の不満、それについて。

「王妃には色々なものを与えた。王妃としての地位と身分、安定した生活に」

与えたものは数知れず。

確かに、女として沢山のものを得ただろう。

しかし、それでも王妃は不満があるのだ。

ぶつぶつと呟く王に四妃達は思う。

どうしてそこで考えつかないのだ——自分の一言多い口を。

「もしや、外国の——隣国を攻め滅ぼせと」

「やったら殺すぞボンクラ亭主」

ズゴゴゴと凄まじい殺気を燃やす王妃の出現に、四妃達は一斉に部屋の隅まで逃げた。

五分後——王妃に意識を落された王が側近達に回収されていく中、

王妃は出されたお茶を片手に一息ついていた。

「ってか、何考えてるんですかあの王はっ」

常に貴方の事を考えてました——と心の中で突っ込む部屋の主たる四妃は乾いた笑みを浮かべた。

「それより、王の御前で琴の音を披露したと聞きましたが」

その瞬間、王妃は素手で茶器を握り潰した。

バキバキと粉々に砕け塵と成るそれに、四妃達は王妃の心の傷の深さを見た。

「あのボンクラ亭主が……話したの？」

「いえ、王妃様。あの陛下が話さずとも、情報を取る手段はいくらでもありますから」

おほほほと袖で口元を隠して笑う貴妃に王妃は溜息をついた。

その仕草が女らしいとは決して言わずに。

「ってか、確かに私の演奏が駄目なのは分かってるけど、飛ぶ鳥を落す音色ってなんですか！ 嫌味ですかあれはっ」

そうか、王妃も嫌味だと感じたのか。

「しかもその後、王が完璧に曲を弾きこなすし」

女の嗜みで覚えさせられたと言い切った王の顔面にどれだけ渾身の一撃を叩込みたかったか。

王妃の言葉に、貴妃達は血の気が引いた。

既に後の祭りだったらしい。

いや、まだ大丈夫だ。

大切なのはこれから。

これから、王が王妃に琴を教えるなんて余計な事をさせなければ、まだ何とかなるっ……！

「いつか、いつか——」

ボキボキと腕を鳴らす王妃に、その先の言葉を四妃達は正しく理解した。

「王妃様、では私達と練習しましょう。そして王を見返して差し上げましょう」

貴妃の言葉に、王妃は彼らを見る。

私達と練習——。

そういえば、後宮の妾妃達は皆楽器を嗜んでいるが、中でも四妃の奏でる音色は天上の調べと言われている——。

「嫌です」

べたんと床に寝つ転がった王妃に彼らは慌てた。

「何ですかっ」

王と練習する事に比べればマシではないか。

そう思う彼らだったが、やはり類は友を呼ぶ。

自分達もかなり王に似ているという事を、彼らは思い浮かべる事が出来なかった。

王妃にとっては、王の代わりに妾妃達に習うとしても、それはそれで女として何かが負けたような絶望感を味わせられるという女心があるという事を、彼らは完全に失念していた。

「王妃様らしくないよっ」

「戦う前から諦めるなど一体どうした」

「それとも王を殴りたいのか」

「私は一体どんな暴力王妃ですかっ」

もう嫌だ。

彼らに愚痴をこぼす事でストレス発散しに来たのに、これでは逆に倍増する。

王妃は素早く立ち上がると、そのまま出口へと向かって走り出した。

「王妃様?!」

「誰か王妃様をつ」

「警戒態勢を五段階にあげろっ」

四妃が後ろでギヤアギヤ騒ぎ、それと共に他の妾妃達が来る。というか、女性物、しかもあれだけヒラヒラしたものを身に纏ってよくそれだけ動けると思う。

しかも何が腹が立つって、男のくせに全く違和感なく着こなして

いるところだ。

どう見ても美女にしか見えない姿に、いつもならなんてことはないのに今は更に腹立たしさを増す。

その上、男妃達のもちもちスベスベな白い肌が、動く度に着崩れて露わとなる胸元から見え、王妃は切れた。

「こんちくしょうっ！ 羨ましくなんかないんだからっ」

「王妃様っ！」

武術を学んでいる男妃達の手をすり抜け、そのまま閉まりかけていた後宮の門の隙間を潜り抜ける。

ガタンと後ろで閉まる扉の音は勝利のファンファーレ。

だが安心はまだ早い。

「ふんっ！ 絶対に逃げ切ってやる」

しかし、走りだそうとした王妃の前に現れた相手に思わず呻いた。

「王妃様、何処に行かれるのですか？」

「さ、さささささ宰相」

やばいのが来たと思った。

銀の長い髪を靡かせ、ざらりと鋭い眼光を浮かべる麗しの麗人は夫の懐刀。

「おほほほ、相変わらず麗しいですね」

「ありがとうございます、ですが日の光が邪魔してよく見えないでしょう。どうぞお部屋に。存分に見せてあげますから」

確かに宰相の美貌は一日中、いや、ずっと見ていたいほどの代物だ。

全てと引き替えにしても欲しいと謳われ、更には今も多くの者達が宰相を望む。

しかし、王妃からすれば、宰相をものにしたところで自分が綺麗になるわけでもない。

それなら薔薇茶でも貰った方がマシである。

なので、王妃は宰相の申し出を笑顔で断った。

「お断り致します」

「そんな事を言わずに。まあ部屋が嫌なら、後宮にお戻り下さい」
後宮は確かに王妃の住まいでもあるが、中に居る妾妃達は全て男
普通は何かあったら困ると近付けないものだが、この国では違う。
はつきりいって、妾妃達が王妃を異性として見る可能性は、王が
妾妃達に手を出す可能性よりも低い。

なので、全く問題なしであり、むしろ四妃達に王妃のお守りをし
てもらう方が安全とばかりに宰相は王妃を追いついていく。

「どいて」

「中に戻れ」

どちらも引かずに飛び散る火花。

その時、背後の後宮に続く門が動いた。

隙間から、強烈な怒りが伝わってくる。

それに釣られるようにして、王妃は後ろを振り向き悲鳴をあげた。
幾つも伸びてくる沢山の腕。

怪談とかで聞いた事がある、井戸から伸びる大量の手の様なそれ
に、王妃はわたわたと走り出した。

「いやあああつ！ お化けお化けお化けが出たあああつ」

妾妃達の白く滑らかな腕も、王妃にかかれただだのお化け。

わあわあ騒ぎながら、王妃はその腕を振り払う。

しかし前には宰相。

後ろには沢山の腕。

前門の虎後門の狼という言葉が頭によぎる。

というか、一体なんだってこんな目にあっているのか。

その時、ガシッと宰相に抱き留められた。

「はい、捕獲」

「離してええっ」

「ここで王妃様に質問です。このまま後宮で大人しくしているか、
部屋に戻るか、それとも陛下に食われるかのどれがいいですか」

「ちよっ！ 最後の選択肢おかしいって！」

「はい、三番目が宜しいという事でこのまま執務室に直行します」

宰相の無情な言葉に王妃の悲鳴が響き渡った。

王×王妃？（海王の想い）（前書き）

今回は、海王サイドのお話となっております。

また、最後の方には、活動報告にて載せている続き未定の小話に関連する部分がありますので、ご注意を。

王×王妃？（海王の想い）

彼女を見たのは、たまたまだった。

当時、後宮から殆ど出られなかった凧国王妃の為に、せつせと代わりに畑仕事をしていた女性。

彼女が私にとって特別になったのは、会議が終わり凧国から帰る前日の夜の事だった。

新月の闇の中、疲れ果てて寝室に戻れば、幾重にも張り巡らされた警備を潜り抜けて送り込まれた女が全裸で待っていた。

国では男色家という事が防波堤となり初めていたが、この凧国ではそうもいかず、滞在している間は毎日のように女達に追いかけ回され、忍び込まれた。

海王にはまだ正妃は居ない。

その正妃の座を狙う女達やその親族の妄執は、こちらが考えるよりもずっと強かった。

くどすぎる香水の香り、甘ったるい声、男を誘う豊満な体は、見た目だけが美しい腐った桃のようだった。

全てが男を誘う様に作られた女は、恐ろしいまでの権力欲でもってその魔手を伸ばしてきた。

男色家だからと断つても、「女の味を覚えさせてみせる」と宣言する女には何を言っても無駄で、連日連夜の会議で疲れ果てた頭での反論も難しかった。

その様に思い出したのは過去。

妾として奴隷として、ただの愛玩動物として自分を飼ったくせに、

自分に愛を囁き、それを断れば手酷い凌辱を与えてきた者達。

生まれた狂気をどうやって制御したかは分からない。

気付けば風王の影たる茨戯が居て、配下の影がぐったりとする女を運び出していた。

別室に移るようになると言われた時も、酷い疲れで頭がよく回らなかった。

それでもこの臭い部屋に居たくなくて、茨戯に許可を取ってしばらく外を彷徨く事にした。

女の臭いが体中に纏わり付き、酷く息苦しくて、少しでも外の空気を吸いたかった。

警備として影がついた事も気にせず、ただ闇雲に夜の中庭を歩き回った。

行き着いた先は、中庭でも最も奥まった緑の葉っぱが生い茂る畑だった。

美しい中庭には不釣り合いの光景に、茫然とするよりも先に見つけたのは一人の女性だった。

せつせと畑で何かしている。

しかし、お仕着せは下働きのそれで、もしかや畑の世話かと思い何気なく見守っていた。

その間、影は頼んでもいない情報を与えてくれた。

ここは王妃の畑である事。

王妃が後宮から殆ど出られない事により、王妃の信頼おける下働きが見かねて仕事が終わった夜に畑の世話をしているという事。

そして今、畑の世話をしているのがその下働きだとの事だった。

王妃とは違い、ゴボウみたいな細い大根しか出来ていないと苦笑する声に、自分の国を思い出した。

確かに農作業に不慣れな相手が作ったものは、痩せた野菜が多かった気がした。

そんな事を考えて居ると、女性が畑から出て何かを取り出した。まん丸い大きなお握り。

それを美味しそうに齧り付いている姿に、鳴ったのは自分のお腹。

「……」
「……」

何物だと誰何するのが当然。

けれど、少女がしたのは、竹皮に包まれたお握りを差し出す事だった。

「食べる？」

「……それはお前のだろう」

「だね」

「なら、なんで」

「私の美味しいお握りをより美味しく食べるため」

「はあ？」

「だから、このまま食べても美味しいけれど、一緒に食べた方がもっともつと美味しくなるの。私がより美味しくお握りを食べる為の犠牲となれ」

そう言つて渡されたお握りに、ようやく今日初めての食事である事を思い出しつつ、口いっぱいに広がったほどよい塩味をゆつくりと噛みしめた。

この味なら、普通に食べても美味しいだろうと思い、そこで気付

いた。

彼女なりに、こちらが気分を害しないように気をつかってくれたのだ。

その後、少女はさつさと夜食を済ませ、立ち上がった。

そして一人で戻れるかと聞かれ、大丈夫だと答えた途端さつさと踵を返した姿に、あつけにとられたのは確か。

それでも残された洋燈に、また気づかわれた事だけは分かった。

それが初めての出会い。

そして結婚前に言葉を交わした最初で最後の機会だった。

次の日、少女の事がどうしても気になって心ここにあらずの私の所に、風王が訪れた。

昨夜の詫びをしに来た風王に、我先にと聞いたのは畑で出会った少女の事。

下働きで孤児という以外は殆ど情報を貰えなかったのは、たぶん風王なりの牽制だったのだろう。

それだけの情報では満足出来ず、どうにか情報収集をしたいと願った私に味方したのは天候だった。

季節外れの嵐となり、帰国が伸びた中で、特にする事もなかった私は少女の事をそれとなく調べ始めた。

年齢は二十歳。

下働きとしての働きっぷりは優秀で、下女頭が特に目をかけている一人だという。

大戦中に家族を失った元孤児で、その時に婚約者が居たが捨てられた過去を持つ。

その後、恋人が出来たが口クでもない男ばかりで、最後の恋人は

三年前に妊娠中だった彼女を捨てた。

それも、権力と身分に目が眩んで別の女に乗り換えた挙げ句、邪魔になる彼女の子供を自らの手で殺したという。

断定でないのは、証拠がないからだ。

それでも、男の神柄や素行を調べれば、すぐにあいつがやったのだと上層部は見当を付けた。

しかし、結婚相手である貴族が非常に厄介な相手らしく、下手に騒ぎ立てる事も出来なかったという。

彼女自身も酷い怪我を負った上、子供を流産し、更には再び子供を産める可能性は低いと知った時には言葉もなかった。

心が壊れるには十分すぎる過去。

なのに、彼女はすんでの所で自分を保ち、凄惨な過去を必死に忘れようと努力してきた。

その健気な姿に、守ってやりたいという思いが湧いた。

と同時に、予感がした。

彼女が、自分の特別な相手ではないかと。

それから国に戻っても忘れられない彼女の存在に周囲が気付いたのは、半年も経たない頃。

周囲が独自に動いていた事を知ったのは、彼女と出会って一年後に新しい同盟間での取り決めの為に臨時会議で虬国を訪れた時の事だった。

「という事ですよ」

「……」

会議が終わった後、虬王に呼び止められ聞かされた話に目眩を覚えた。

心に秘めた恋心は既に周囲に知られ、他国の王側にも知らされて

いた。

羞恥で赤くなる段階を遙かに超え、言葉もなく聞き入るしかなかった。

しかも、話はそこで終わらず、なんと後宮の妾妃達が彼女を是非とも王妃として欲しいと懇願してきた所まで進んでいるという。

「よい妾妃達をお持ちですね」

「何処がだ。口煩い小姑じみている」

「貴方の事が心配なんですよ。慕われていますね。まあ、あなたは自分が盾となり、彼らを守っている」

海国後宮に居る妾妃達は全て男妃達だった。

現在は百名ほど居る。

皆、その美しさ故に男達に凌辱を受け、自由を奪われ奴隷として飼われてきた過去を持ち、外で生きる事が難かしい連中だった。というのも、今なおそこに居るだけで多くの者達が争い、彼らを手に入れようと手段を選ばず襲い掛かってくる。

そんな彼らを守る為に、後宮は開かれた。

王の妾妃達という身分と地位を与える事で、彼らを守る為に。

それは、私自身が似たような過去を持っていたという事が大きい。穢れた体。

男達の欲望に晒され、好き勝手に弄ばれた厭わしい肉体。今思い出しても吐き気が起こり、酷い自暴自棄が起きる。

「海王」

風王に呼ばれ、急速に頭が冷えていく。

そつだ、今はそんな事よりも大切な事がある。

「貴方は彼女に恋い焦がれている、そう妾妃達から頂いた書状には書かれていました。ですが、貴方自身の気持ちはまだ聞いていません」

その言葉に顔を上げて風王を見る。

だが、その冷たい氷のような眼差しに喉が引きつった。

それは、会議中に浮かべる王としての眼差しよりも更に冷たいものだった。

「それに貴方の事ですから、既に彼女の事を調べているのでしょね」

それは確定。

たぶん、前回の情報収集の事もばれているだろう。

いや、そもそも一番最初に私が彼女の事を聞いた相手こそ、この風王である。

「そして、彼女の過去についても知っている」

「……ああ」

過去の男達が彼女にどんな酷い事をしたのか、大体の事は調べた。暴言、暴力、暴行、たかり。

彼女の働いたお金を全て賭け事に使い込んだ男も入れば、彼女の部屋で他の女と交わる男も居た。

更に一番最後の男は、彼女との間に出来た子供を殺した。

「そう、あの子は今まで男に散々酷い目に遭わされてきた。そんな彼女にとって、恋愛も男も鬼門であり、結婚なんて到底考えられない——そこまで追い詰められたのです」

そう言うと、風王は彼女に起きた悲劇を詳しく説明し始めた。
特に最後の男のした暴力とその後の仕打ちを。

「証拠がない事に逃げ切った相手を野放しにしているのは、私達の
落ち度であり責任です」

何とか仕事に復帰するまで、長い時間がかかった。
そうして今、ようやく見た目だけでも普通に戻り、働けるように
なったのだと風王は言う。

「なのに、あの子を妻に欲しいと言われてもねえ」

見た目は普通でも、心には深すぎる傷を負っている。

それが何かのきっかけで、より大きく裂けて血が噴き出すことだ
けは避けたいという風王達の思いはよく分かった。

けれど、それで諦めたくないという思いがより強く募っていく。

忘れられなかった——ずっと。

彼女を初めて見た時から。

「今、あの子は男性とも普通に接しています。仕事ですから割り切
っているでしょう。でも、そういう関係を求められたとなれば、
あの子がどうなるか私達にも分からない。それが分かっている、貴
方はそれでもあの子を求めますか？」

「……」

再び彼女の心の傷を開くかもしれない。
それが分かっている。

「それに、貴方は王。世継ぎを求められる身。今は男色家を通して

いても、いつかは必ず子供と異性の妃を求められる。けれど、あの子は子供が産める可能性は低く、またあの子自身も妊娠を望むか分からない。その時、別の女性を迎えるかあの子と別れるかの選択肢が貴方の前に下されるでしょう」

その瞳が、より鋭さを増す。

「私達があの子に求めるのは平穏な幸せ。貴方が別の女性を妃に迎えるにしろ、迎えないにしろ、あの子は争いに巻き込まれる。それを黙って許すと思いますか？」

一言一言が突き刺さる。

全てが、真実であり、未来に起こりうる事だと分かっているから。

「というか、まあ簡単に言つと、あなたの下にあの子を嫁がせたくないんですよ」

「本当に簡単に言つな」

「ええ。だから出来れば貴方には諦めて頂きたい——って、それが出来れば妾妃達があんな嘆願書を送って来るわけもないですが」

笑う風王が、ふっと柔らかく笑む。

「まあ、それでも評価はしているんですよ。貴方は彼女の過去を知り、恋い焦がれながらも決して力で奪う事はしなかった。それだけの力がありながら、貴方はしなかった」

当たり前だ。

出来るわけがない。

どのようにすれば、彼女を手に入れられるか死ぬほど考えて、でも答えは出ないまま。

「だから、もし純粹にただの男としてあの子を任せるならば貴方でいいかと思いました」

「え？」

「だから、もしと言ってます。もし、つまり仮定ですがね。それに、実際には私達の思い違いで、貴方自身の想いは案外軽いかもしれませんし」

風王の言葉に、私はゆつくりと顔を上げた。

そして真つ正面から風王を見つめる。

「思い違いじゃないさ」

「はい？」

「さっきの質問に答えよう……私は、彼女を愛している」

「……」

「心から、欲しいと思った。何としても、どんな手段を用いても、けれど、それをする事で彼女を壊す事だけはしたくないと想ったのも事実だ」

そう、彼女を壊したくない。

けれど、膨れあがる思いは今この時も膨れていく。

「彼女の事を思えば、諦めるのが一番だという事も分かっている。

けれど、どうしても諦めたくないんだ。たとえ、どれだけ時間がかるうとも」

「……」

「私の思いが伝わったなら好都合だ。私は彼女を愛してる。そして彼女しか妻に欲しくない。子供の件も彼女の同意がなければ望まないし、また出来なくてもそれ相応の対応は取る」

「それ相応？」

「ああ。力が強く王としての資質を持つ子供。別に上層部の子供でも良いだろう?」

「——そう上手く行きますかね」

「今から対策を講じれば何とでもなる。いや、するさ」

海国の上層部にだって優秀な者達は多く居る。

その中の誰かの子供を王として育てれば良いだろう。

大切なのは、王の子供が必ず王になるという狂信家共をどうにかすればいいだけの事。

「ふふ、あなたも相当頭がまわる狸ですからねえ」

風王の言葉に、唇の端を引き上げる。

「風王には……いや、萩波には敵わない」

一番の狸がニタリと笑う。

「まあ、貴方の気持ちは分かりましたよ。でも、それでも彼女は手強い。そう——過去のケダモノ達のせいで」

「そうだな」

彼女は囚われ続ける。

いつまでも、過去の男達の仕打ちに。

そうして今もずっと彼女の心は過去の男達で一杯だ。

「殺してしまいませんか」

凍える吹雪のような声音が甘く囁く。

「そうすれば、あの子も解放されるでしょうしね」

彼らを殺してみると囁く風王に、それも良いかと考える。

今も彼女の心を占める彼らに苛立ちを覚え、強い殺意を噛みしめる。

彼らさえ居なくなれば、彼女もゆっくりと心を癒やせるかもしれない。

けれど、心の中のもう一人の自分が囁く。

その囁きに、ハッと我に返った。

危うく誘い込まれ、墮とされかけた穴から這い上がった地面で息を整え冷静さを取り戻す。

甘美なる殺意が囁く。

それを押し退け、つかみ取った真実を手に風王へと向き直った。

「私は殺さない」

「何故？」

確かに愛する相手を傷付けたケダモノ達を殺してしまいたいとは思う。

けれど――。

「殺したところで、彼女の心は解放されないからだ」

「……」

「確かに殺したいし、殺す事は簡単だ。けれど、それでは彼女はあいつらに囚われたままとなる」

風王が馬鹿にしたように笑っても、私は視線を逸らさなかった。

「それは私や後宮の妾妃達で実証している。殺す事は簡単だ。けれど、再び同じような奴に出会った時、すぐに恐怖に竦んで動けなくなる。それを彼女に味わせたくない」

「貴方が守ればいいでしょう」

「風王のように、閉じ込めてか？」

艶やかに笑う風王から匂い立つ魔性の色香を、頭を振ることで振り払う。

「まあ、ようは私とは別の道を取るという事ですな。けれど、果たしてそれが必ずしもあの子の為になるかは分かりませんよ？」

「分かっている」

「もし彼女が乗り越えられなかったり、相手が何かしてきた場合にはどうするのです？」

「その場合は仕方ない。けれど、それは最後の手段であって、今取るべき手段ではない」

風王の目を見つめて、私は一言一言噛みしめるように告げた。

「私は、彼女を幸せにしたい。過去の事が忘れられなくても、私が彼女を愛する事には変わりないし、出来るならば全ての不幸から切り離して守ってやりたい。けれど、それだけでは彼女はいつらに一生悩まされるし、時が解決するにしても同じ相手が現れればまた同じ悪夢に晒される。ならば、どれだけ時間がかかっても、彼女にはあいつらの事を乗り越えて欲しい」

「難しい事を言いますね」

「難しくても構わない。それより許せないのは、彼女の心が一生奴等に囚われること。乗り越えないまま奴等を殺せば、一生その機会

はなくなり、彼女の心は奴等の仕打ちに占められたままになる。そんな事は許さない」

「……」

「もちろん、彼女だけに任せたりしない。私も協力する」

「では、尚更海国に嫁がせずに、この国でトラウマを乗り越えるべきだと思いますが」

そう言われると痛い所がある。

だが、私は負けなかった。

「確かにそうだが、乗り越える前にやる事がある」

「何をですか」

「私を好きになってもらう事だ」

その言葉に、相手の顔が歪む。

はつきりいつてこれほど間抜け面をした姿は見たことがなかったが、それでも麗しいのはやはり真性の美女——いや、佳人だからか

「好きに……」

「私は海国の王だ。この国にはずっと留まれない。だから、彼女には海国に居る私の側にずっと居て貰いたい」

「だから、海国に行けば彼らから逃げる事になってしまつと」

「場所関係ない」

「は？」

「直接対決するだけが乗り越える手段じゃないという事だ。どんな方法でも良い。過去の事を忘れるぐらい幸せになれたらそれでもいいし、とにかく奴等が彼女の心を占めるほどの価値もないと分かれはそれでいい。そしてそれは、遠くに居ても出来る」

「つまり貴方の思いが優先ではないですか」

「違う。優先していたら、速攻攫っている」

「まあそうでしょうね」

「あいつらの事を心から追い出し、あいつらとの過去が彼女の中で無価値になればいいんだ。そして——代わりに私との事で一杯になればいい」

その言葉を最後に、風王の視線が和らいだ。

何処か呆れたような、それでいて——。

「まったく、私が下女頭に怒られる事は確定ではありませんか」

「風王？」

「下女頭は彼女を可愛がっていますからね。所謂姉代わりみたいなものですか」

そう言つと、風王はようやく心から優しい笑顔を向けてきた。

「おめでとう、海王。今より、この風国が彼女の後見役となりましたよう」

「は？」

「は？　じゃありませんよ。というか、大戦中の混乱期ならばまだしも、この時点で何の後見役もないまま、家族の居ない一般市民でただの下働きの彼女を王妃に迎える事がどれだけ難しいか分かっているのですか？　特に貴方の様な大きい国では尚更難しい」

突っ込まれ、返す言葉もない。

いや、考えてはいたが、それよりも気になっていたのは彼女の過去で。

「ですが、風国が彼女の後見役となれば話は違いますからねえ」

「風王」

「彼女を蔑ろにする事は、この風国を蔑ろにする事と同意味だと思

いなさい。彼女を泣かせれば、我らを敵にすると考えなさい」

王者の顔で淡々と告げる風王に、私もまた王としての顔で答える。

「ありがたく受け入れよう」

そして、更に言葉を続ける。

「私は試されたのだな」

「ええ、嘆願書を貰った後で、上層部で話し合いました。もし、貴方が合格すれば、我らは貴女に協力し、彼女を送り出し後見役となる。けれど、もし貴方が彼女に相応しくないと判断されればその時点で終わりにする」

「彼女の気持ちは無視なのか」

「彼女は恋愛しないと決め、結婚を諦めている。例え私達が何かしようとも、関係ありませんからね」

確かに、彼女はただ断れば良いだけだ。

「では、彼女に話を通しましょう」

「え？ それはまず私が」

「馬鹿ですね、言いましたでしょう？ 普通に言ったところで貴方の所になんて絶対に行くものですか。しかも自分を女として見ている相手のとこなんか」

「ぐっ！」

「だから、男色家という所を利用して頂きます。せめて正妃だけは女性の妃が欲しいと海国上層部が嘆いていたとでもしましょう。

ああ、民達でもいいですね」

「いや、それって騙すというか詐欺というか」

「送り出してしまえばこちらのものです。後は、ご自分で頑張りな

さい」

その言葉の裏に隠れた優しさに、素直に礼を言う。
期間を設けず、多くの条件を設けず。
信頼の証を見せられ、私は頭を下げる。

そして彼女は、海国に嫁ぐ事になった。

「普通、男妃達が後宮に溢れているなんて知ったら嫌がるもんなん
ですけどね」

風王の言葉に頷きつつ、私は腫れた頬を撫でた。
下女頭から「泣かせたら許さない」と殴られたが、彼女を妻に迎
えられるとして浮かれ過ぎていた頭は痛みを感知する事はなかった。

*

「あれから、数百年か……」

寝台に端に座り、眠る彼女の髪を撫でる。
嫁いで以降、一度も風国の地を踏まなかった彼女がようやく今日、
此处に戻って来た。

いつもは一人で使う風国王宮の来賓の間。
そこに今、彼女と共に滞在出来る事に浮かれる気持ちを抑えなが
ら、これまでの事を思い出す。
彼女は風国へと戻ってきた。
私の新しい妃問題を解決する為に。

けれど、それは同時に奴等との戦いでもある事に彼女も気付いているだろう。

自分が彼女にした仕打ちを棚に上げ、彼女を娶った男との縁組みを望む奴等に海国の堪忍袋の緒はとつくに切れていた。

三百年前、この風国を中心に始まった存亡の危機でも生き残ったゴキブリ共。

彼らの中には、彼女を利用しようと考え、また王妃となった彼女に利用価値を見出した者も居る。

海国で王妃となった彼女は、表舞台に立つことは少なくとも、王妃として申し分ない働きをしていた。

公正な立場で物事を判断し、努力に努力を重ね、少しずつ周囲の信頼を勝ち取っていった。

彼女もまた、王の妻に相応しい資質を備えていたのだろう。

けれど、備えているだけでは意味が無く、それを開花させなければならぬ。

彼女は、王妃はそれを見事に花開かせた。

そんな彼女を、王妃となり王にだけ体を許す至高の存在を味わいたいと企む奴等。

あの、子供を殺した男でさえその一人。

年々美しく咲き誇る王妃の姿を何処で見たのか。

海国への使者を願うあいつの望みは、考えるまでもない。

「どこまで厚顔無恥な奴等だ」

けれど、彼らが培った神脈や背後の存在は中々に手強い。
殺して終わり、というには少々難しい相手だ。

本当なら彼女を連れてくるつもりなどなかった。
たとえ、寝台に奴の義理の妹が潜り込もうとも。

しかし、年々欲望を募らせた奴が、王の居ない海国後宮に何を
てくるか分らない。

捕らえた間者が王妃の寝室に潜り込もうとした時。

それが、奴の放った間者であると知った時、決めた。

彼女を側から離してはならないと。

間者には舌をかみ切られて証拠を隠滅されたが、今度は許さない。

上層部と話し合い、幾つもの反対を押し切り同行させた。

離れているよりは、目の届くところに置いておく。

風国側にも連絡を取り、話し合った。

彼女の安全と、長年我慢していた奴等への報復の実行を。

今回攻め込んできたのは奴等の方だ。

本当に厚顔無恥で最悪最低な奴等。

それだけでなく、彼女自身をも狙う愚かな者達。

そんな奴等に、彼女は今も怯え続けている。

奴等の存在を消せるほどに彼女の心を埋め尽くせなかったのは私
の責任であるが、そろそろ私としても我慢の限界に来ている。

奴等は何も反省せず、彼女と同じような女性を生み出し続けた。特に彼女の子を殺した奴に至っては、彼女の時と同じように邪魔な愛人達の子を殺し、それを妻の実家がもみ消す。

愛人の中には、意思を無視して強引に囲われた少女も居たという。

消してしまった方が良かったのかも知れない。

風王の言葉が蘇る。

しかし、私にとっては名も知らぬ哀れな女達よりも、彼女だけが大切だった。

同時に、今回の風国への訪問は、ある意味彼女にとってあいつらの事を乗り越える良い機会だと思ったのも事実。

そして今回を逃せば、私の方が耐えられないだろう。

風国側も、そろそろ奴等の退場を願っている。

だが、彼女の怯えようからすれば、このままの退場させれば最も最悪な結果をもたらす可能性も高かった。

あいつらだって、ただで退場するわけではないだろうから。

彼女の心から、あいつらを追い出さなければ。

あいつらを、無価値なものにしなければ。

寝ている間も怯えて涙を流す彼女の目元を拭い、その頬を撫でる。

「大丈夫、ずっと側に居るから」

囁く様に告げ、誓う。

だから安心して、奴等への思いを断ち切って欲しい。

それが叶わない時は――。

「私が全員、殺してあげるから」

『海王×海王妃（因縁編）？』

幸せだったの

本当に

ようやく掴んだ幸せだった――

――子供？

――そうよ！赤ちゃんが出来たの。私達に家族が増えるのよ！！私、本当に嬉しく……え？どうしたの？どうして……そんなに怖い顔をしてるの？どうして……

――堕ろせよ

――な、何言ってる……ちょ、ちょっと……っ！ど、どう、して、殴……るの？どう……やだ、来、ないで、こな、来ないでやめ……

――堕ろさないなら、俺が殺してやるよ

――つつつつ！

ドンツと腹部に強い衝撃を受けたのは、そのすぐ後だった。逃げようとする体を引き摺られ、髪が抜けるほどの強い力で掴まれた。

ぶちぶちと千切れる髪も気にせず、腹部に当てた両手は蹴り上げられ、床にたたきつけられる。

やめて。

やめて。

何度頼んだらう。

けれど、駄目だった。

あの人には、子供の命などそこらの石ころよりも無価値だったから。

そうして、折られて動かぬ両腕を必死に動かし、散々蹴りつけられた足でそれでも這いずった私に、あの人は笑った。

——まるで芋虫みたいだな

最後に見たのは、心底楽しげに笑うあの人の顔と、腹部へと降ろされた足。

言い表せない様な不気味な音と共に、ぶつつりと途切れた意識。

その後、上司である下女頭様に私は発見された。

下肢から流れる血だまりの中、体中痣だらけで、両腕は折れてて、顔は腫れ、歯も何本か折れていた。

死ななかったのが奇跡

そう言われる中で、私は子供を失った事、再び子供を身籠もる可能性が低い事を知らされた。

そして心に決めた決意。

もう、二度と恋愛なんてしない。

ようやく出会えたと思っていた。

何人もの男性達に捨てられ、それでも最後に見つけた人。

お前と一緒に家庭を築いていきたい——そう言ったのに。

あの人は、去って行った。

それから数年。

風国でも力有る貴族の娘の婿養子となったあの人が、王に謁見するのを陰から見た瞬間、全身の血が逆流し、私はパニックに陥った。隣に立つあの人の妻のふくらと膨らんだお腹は、私が手に入れられなかったもの。

妻の幸せそうな笑顔を見る度に、私の中で何かが壊れていった。音を立てて、何度も、ガシャンと硝子が割れる様に。

——ねえ、貴方でしょう？私の夫の前の遊び相手って。ああ、そんな顔しないで。醜い顔が更に醜くなるわよ。別に私は怒ってないわ。結婚前の遊びなんて気にしないし、男の甲斐性にケチを付ける気もないわ。それが貴族の女性の嗜みですもの。ふふ、おかしいって顔ね？でも、大戦前からの由緒ある貴族の姫君である私には当然のこと。ただ、あなたみたいなのに手を出したなんて、よほどあの人も疲れていたのね。聞いているわよ？子供を産めない欠陥品だって、女の幸せは結婚とか子供だけじゃないから。

もう二度と、男に心など許さない。

——どうして、どうしてこの子は……お願い、もう二度とあなたの前に姿を現わさないから！だから、お腹の子だけはっ、私の家族

なの！

家族を失い、孤児になり、許嫁を失い、また今恋人さえ失う。
そんな私に残された、最後の希望。

それを、あの人は奪い取った。

——身辺整理はしつかりと行わないとならないんだよ。貴族の家に婿養子に入るには色々と煩いからな。

——お願い、やめ

——ああ、そういえばもう一人始末しなきゃならなかったな。当主様との約束。

視界が真っ赤に染まる。

——ゴミは、きちんと捨てないとなあ？

ケダモノが、笑った。

*

「泣くな」

泣きながら目覚めた私に囁く声が聞こえた。

ギョツと強い力で引き寄せられ抱き締められる。

横を見れば、現在の夫となった海王が心配そうに私の顔を覗き込んでいる。

互いに服は身につけていない。

昨夜、何度も求められた体は酷くだるかったが、体に触れるシーツの感触は真新しく、ふわりと薫る石鹸の匂いを感じた。

そういえば、どんなに激しく求められても、夫はきちんと私の後始末をしてくれる。

そこも、あの人とは違った。

あの人は自分が満足した後は、さっさと何処かに行ってしまった。ドロドロになった私を置いて、飲みに出かけた事もあった。

今思えば、あの人にとって私の価値などただの遊びでしかなかったのだろう。

なのに甘い言葉に騙されて、拳げ句の果てには赤ん坊を失ってしまった。

更に、もう子供を得られる可能性は低い。

欠陥品——そう、私は欠陥品なのだ。

あの人の妻となった貴族の姫君の言ったとおり、私は結婚など出来ない女。

誰も見向きもしてくれない、ただのガラクタ。

なのに、こうして抱き締めてくれる腕の優しさに涙が流れる。

背中を撫でてくれる掌の温かさが、逆に痛い。

「落ち着いたか？」

耳元で囁かれる声は甘く、腰が砕ける様に神経を振るわす。

「明日は仕事が一段落するから。久しぶりに外で食事を取るか。四妃達から後宮の中庭の花が見頃だと聞いたしな」

「……」

「あと、久しぶりに王妃の琴の音を聞かせてくれ」

「……私の琴は飛ぶ鳥も落ちるんでしょう？」

夫の言葉に思わずそう拗ねたように呟けば、つんと鼻の頭を突かれた。

「いつまでも根に持つな。私が悪かったから」

四妃から、夫が女性を褒め称える百の方法を叩込まれた知っている。

しかし、その効果の程は甚だ疑問であるが。

「それに四妃ばかりが聞くのはずるい」

「四妃達は私の先生だから」

楽器、調香、刺繍その他女性としての教養を、何故か男である四妃達から教わっている。

と、夫の体から、優しさとは別の何かゴゴゴと湧き上がってきたように見えた。

「四妃……」

「そう、明日は笛を習うんです」

笛は徳妃が得意だったから、彼に習う事になっているが。

「私が教える」

「は？」

「私が教える。夫は私だ」

「いや、そりゃあ四妃達は私の夫じゃないですけど」

むしろ、形式上では四妃は夫の妻に当たる。

「王妃」

「はい？」

「王妃は私と四妃のどちらが大事だ」

一体何を言い出すのかと暫し固まる。

いつもは賢君として冷製沈着に振る舞う海王のくせして、まるで
ただっ子の様に私に縋り付く。

見た目は絶世の美女。

けれど、今は幼い女の子にしか見えない。

「どっちが大事って」

「私は王妃が大事だ」

「ありがとう」

やはり妻として大切にされる事は嬉しいと素直に応じれば、王が
少しだけ怒ったように唇を尖らせる。

「王妃は本気していないな」

「してますよ」

十分に大切にして貰っている。

時々、いや、かなりの確率でバカにしているのかという褒め言葉を
くれるが、それでも一生懸命なのは分かっている。

「なら、明日笛を教えるのは私だ」

「は？だからどうしてそうなるんですか」

「王妃の夫は私だからだ」

どうしても譲らない夫に、私が折れるのはいつもの事。

ぎゅうと抱き締められ、頭を撫でられる。

そして、唇が頬に触れ、そのまま首筋を辿っていく。

ふわりと、夫の体から麝香の香りが漂った。

四妃から、王妃様は麝香を調査出来ますねと笑顔でからかわれるほど、既に私にも染みついた香り。

そういえば、あの人の香りも麝香だった。

今頃、あの人達はどうしているだろう。

結婚出来ないと蔑んだ私が海国王妃になった事は知っている。

けれど、あの人達に会うことはなかった。

事情を知っている風国王陛下や側近の方達が、決して私に会わせようとしなかったからだ。

地位有る貴族で唯一海国王妃となる私に挨拶出来なかったのは、あの人達だけ。

貴族は対面を重んじる。

昔ほどでは無いが、それでもあの人達だけ挨拶出来なかったとなれば、社交界では笑いものになるだろう。

それを、良くしてくれた貴族の当主夫妻が教えてくれた。

貴方は何も心配せず、ただ幸せになる事だけを考えなさいと送り出してくれた。

その夫妻は、少しだけ亡くなった両親に似ていた。

そう——もう、あの人達の事は忘れよう。

忘れてしまえばいいのだ。

私はこの国で、幸せに生きていく。

それだけで、十分。

なのに、私は再び出会ってしまった。

あの人に。

そして——昔の恋人達に。

封じた筈の悪夢の扉が、不気味な音を立てて開いていく。

『海王×海王妃（因縁編）？』

最近、頭が重い。

それは寝不足のせいという事は分かっていた。

近頃、よく昔の夢を見る。

あの悪夢のような過去を、何度も何度も繰り返す。

夫もそんな私の不調に気付いているのだろう。

今までは、政務の時間は私を後宮の四妃に預ける事が多かったのに、その時間すらも同行を求められるようになった。

そんな夫の行動に、いつもは口煩い宰相も何も言わず、他の官吏達には逆に氣遣われる始末。

というのも、日に日に私の顔色は悪くなっているようで、逆に王妃を休ませるようにと王に非難が集中した。

しかし、それも数日もすれば消えた。

それは王の執務室に滞在するようになって七日目の事だ。

夜眠れずにとんととしていた私は、襲い掛かった悪夢に悲鳴をあげながら飛び起きた。

丁度そこには、王に書類を届けに来た宰相や他の上層部が居て、私の様子に皆一様に驚いていたのを覚えている。

思えば、それが彼らの態度を大幅に軟化させたのだろう。

そうして、私が王の執務室に居ることが普通になって暫く経った頃、虬国からの使者がやって来た。

今年は二年に一度、虬国と海国での会議が行われる年で、今回は虬国がその開催場所となっている。

およそ一週間滞在し、同盟関係及び二国間での取り決めの確認、新たな決め事を行う。

それは共に建国して以来、変わらず行われてきた。

唯一の例外は、三百年前の事件である。

あの事件で凧国は王妹を得て、代わりに王妃を失った。

その事実、幾つかの国々がその影響を受けたと聞くが、当時は王妃を失う元凶となった事件でこの炎水界自体が大きく揺れた。

特に凧国の被害は凄まじかった。

けれど、それでもたった三百年で国を以前の水準まで立て直した凧国は、やはり凄かった。

私にとっても凧国は祖国であり、本当に誇らしく思うと同時に、何も出来なかった事に心苦しさを覚えていた。

当時は海国もそれだけの余裕はなかったとはいえ、一度も帰郷していないという事実が重くのし掛る。

凧国は一体どのように変わっただろう。

そんな風に懐かしく思う心は、日に日に強くなっていった。だからだろうか。

あんな夢を見たのは。

凧国を恋しく思う気持ちは本当。

でも、同時にあの国にはあの人が居る。

いや、正確にはあの人達が。

私を、傷付け、捨てた男達が。

もしかしたら、中々凧国に足が向かなかったのは、それも理由だったのかも知れない。

深い恐れが、私の帰郷を阻む。

なのに――。

「王妃、無理をするな」
「大丈夫」

今、私は屈国の地を踏み王宮へとやってきた。
今までは二年に一度の会議も夫だけが参加していたというのに、
今年に限って私も参加する事になった理由はただ一つ。

夫に新しい縁談話が舞い込んできたからだ。

そもそもの始まりは、私と夫の間に子供が居なかった事だ。
後宮の妾妃達は全員男だから問題外だし、かといって正妃は子供
が産めない石女。

ただ私の場合は、もともと供を産むことを求められて王妃になっ
たわけではないから、別に産めなくても問題なかった。

しかし、野心ある者達からすれば、子供が居ないという事は格好
の獲物でしかない。

もし自分の縁者の娘が世継ぎを産めれば、側室でも国母に、いや
正妃を引きずり下ろす事が出来る。

もちろん、今までにも色々と縁談は来ていたが、夫は男色家を通
すことで全て乗り切ってきた。

だが、今回ばかりは相手が悪かった。

男色家だろうと王として世継ぎを生む義務はあると言って引かず、
また嫁いで数百年になる正妃とも何とかやっていけている事に目を
付けた挙げ句、子供を得る為と割り切って新しい妃を迎えろと言っ
てきたのだ。

もちろん、男色家だから男妃達と楽しむ事には文句をつけず、子
供が出来たら好きな男妃達を側に侍らせても構わないとおかしな寛
大さを強調したほどだった。

確かに海王の強い力を受け継ぐ子供は必要だろう。

それは、海国を支える為にも、出来る限り多い方が良い。
しかし、問題はそれを言い出した相手だった。

いかにも海国の未来を憂いながら、我が物顔で他国にその触手を伸ばし、更には子供の産めない女を海国に王妃として送り出した風国上層部への批判を行う厚顔無恥達。

だが、独自に培った人脈は侮れず、下手に手出しをする事も難しい。

風王からの書状にも書かれていた。

今回の会議は向こうにとっても好機。

王を一人で来させた場合、向こうはあらゆる手段を用いて王をたらし込もうとするだろうと。

たとえ王が相手にせずとも、何かと理由をつけ、王が娘を娶らざるを得ないようにするに違いないと。

風国側としても、向こうを確実に罪にする為の罪状はまだ揃っておらず、会議までに全ての準備を整えることは難しい。

また王一人であれば、世話係だなんだと直接送り込んでくる事も考えられる。

それを防ぐには、王妃が王と寝食を共にする事であると。

確かに、王妃とまぐわっている所に、普通に割り込んでこれる女性には中々居ないだろう。

居たとしても、王妃に恥をかかせたとして何とでも叩き出すことは出来る。

しかし、王は男色家という事になっているから、王妃と共にいる事は逆に女性でも大丈夫だという事にならないだろうか。

その点を指摘すれば、宰相からそこはどうかともなると言われた。

ようは、例え肉体関係が無くとも、他国では割り切る夫婦は賞賛されこそすれ非難される事はないのだと言って。

そんなわけで、海国上層部とも話し合い、私も着いていく事になった。

もちろん、連れて行くべきではないという反対も沢山あがった。

そう——その貴族の名を聞いた瞬間、私も言葉を失った。

けれど、もしその貴族の娘が海王の新たな妃になれば、それこそ最後である。

今の私では、平然と海国王宮に留まることは出来ない。

そんな王の新たな妃候補は

あの人の

私の子を殺してまであの人が得た妻の、妹だった

今まで、あの人に会いたくなくて、凧国にも帰りたくても帰れなかった。

それほど会いたくなかったのだ。

もちろん、今回凧国に行けば、必ずあの人とも接触する事になるだろう。

娘の父親に加え、義兄であるあの人かなりこの話には熱心だというから。

その嫁ぎ候補たる男の正妻である私に接触してこないなんてわけがない。

私の過去については、上層部は熟知しており、後宮の妾妃達も同様だった。

特に四妃に至っては自分達も着いていくと騒ぎ、上層部とやりあったぐらいだ。

しかし、後宮に居る妾妃達に関しては、一步でも後宮から出れば彼らを狙う者達の手が伸びるとして上層部に反対された。

ならば王妃を風国に連れていかせないと四妃達を筆頭に騒ぎが起きたが、それが通るわけでもなく、逆に王がその娘を娶らなければならぬ状況に陥った方がまずいと説得される事となった。

もちろん、私の側には、宰相が選んでくれた腹心の侍女達が常に側に居る事となっている。

王妃は一人では無いと上層部は言ってくれた。

もちろん、行かないという選択肢だつてある。

けれど、行かなければもっと悪い事態になるだろう。

私の中に、夫と別れてこの国を立ち去るという選択肢も浮かんだりした。

もともと子供の産めない女が正妃でいる事自体が異質なのだ。

だが、すぐに思い直した。

確かに子供の産める相手は必要だろうが、それがあの人の妻の妹である必要はない。

そう——子供が産めて、なおかつ夫が此処の底から愛し尊敬しあえる相手の方が誰だつて良いだろう。

なおかつ、後宮の妾妃達の事も受け入れてくれて、上層部とも仲が良くて。

そうだ。

そういう相手と夫が結ばれる為にも、今ここで私が頑張らないと。それに、あの人の妻の妹姫は風王曰く、「海王の好みとは対極に位置しますので、是非とも結ばれないで欲しいです」と言われ、阻

止を求められているから、遠慮無く邪魔しようと思う。

そうして訪れた凧国は、私が住んでいた時よりも繁栄しているようだった。

王宮も、私の居た時とは構造も違っており、迷子になりかけたほどだ。

それでも変わらなかったのは、陛下や上層部、そして昔の同僚達の笑顔だった。

あの日、私が王妃として旅立つ時も、こうして揃って見送ってくれた。

違うのは、そこに王妃様が居ないのと、王妹様がいる事。

「アナタ、カジユしってる？」

「玉暎様？」

凧王様によく似た、儚くも美しい清楚な美貌に蠱惑的な肢体、同性すらも魅了する色香を漂わせた絶世の美姫——玉暎様に問われ、私は首を傾げた。

カジユ——それは、王妃様の事だ。

王妃様は、王妹様を大切にされていたという。

王と生き別れ、数奇な運命の下に愛妾として実の兄の元に侍る事になった王妹様。

呪われた運命から、自分を解き放ったのが王妃様であり、今もお心の底から慕っている。

そう、慕いすぎて。

「ウフフ、コレデかじゅの下着のコノミばっちり」

「え？」

じゅるると妖艶な唇から零れる透明な液体は、絶対に涎だと悟った。

近年小姑との付き合い方に悩む嫁は多いと言うが、風国王家は別の意味で危機的状況に陥っているらしい。

「ああ、あれは気にしなくていいので」

「ニイサマ、シットいけない」

「黙れ。果豎は私の妃です」

「ペチャパイ、たくさん」

「んなっ?! 私の妹でありながら、兄に別の女を薦めるなんてどいう根性をしているんですかつ」

「にいさま、ズットかじゅとイツシヨ。ワタシ、すこし。だから、いる」

「駄目です。果豎と一緒に居るのは私です」

そうしてバチバチと火花を散らす兄妹に、私は思わず笑ってしまった。

こんな風に愛されている王妃様が羨ま——うん、羨ましい。

少し戸惑ってしまったのは、ちょっと怖いとか思ってたわけではない、うん。

すると、隣に居た夫が何事かを考え出す。

「海王、どうしました？」

「いや、ただ萩波と果豎の仲がとても良かったのを思い出した」

「ええ、私と果豎は仲が良いのです。そう、私達こそ炎水界の理想のカップル!! 見習ってくれても構いませんよ」

その瞬間、側に居た両国それぞれの側近達からの凄まじい何かを感じしてしまった。

ただ共通するのは、「死んでも見習うな」という強い思い。

「そうか、見習ってみる」

「待て！ 海国を潰す気かつ」

「王妃様に逃げられてもいいのかっ！」

「うちの王妃様はこの国のいたいけで子羊の様な果豎后様とは違い、物事ははつきりと伝えられる方だ！」

「そうだ！ また死んで下さいと言われたいのかっ」

「今度こそ捨てられるぞっ」

一斉に騒ぎ出す側近達が王を囲み、私は一人ぼつんと立ち尽くす。だが、私って孤独——という事に思い至る以前に、思う事はただ一つ。

あれ？ 私けなされてる？

王を捨てるだとか、王をどつくだとか、王を蹴飛ばすとか。

確かにやってきたけど！！

けど、それは全て夫が悪いんだ。

私にだって言い分はあるが、口を挟めるような雰囲気ではなかった。

「それで、まずはどのようにすればいいんだ？」

「道具が必要です。特に、手枷足枷に檻は重要ですよ」

「それに鞭も必要ですの」

うつとりと囁く明燐様に、オロオロとされているのは夫君であられる蓮璋様。

宰相様である明睡様や他の側近の方々が慌てて凧王を止めに駆け寄るが、無理なのは分かり切っていた。

ああ見えて、凧王様が一番強いから。

凧国上層部の皆様は、津国上層部と並んで炎水界でも実力者揃いだというのに。

「海王、束縛、拘束とは愛の別名です。どれだけ気持ち良く縛り付けるかが、今後の結婚生活を円滑に進める為の重要な要因となるのですよ」

「んなわけないだろうおおっ！」

「黙りなさい、この虐められ大好き被虐ドM姫」

明睡様が壊れた。

眼前で繰り広げられる、炎水界でも十指に入る実力者達のとっくみあい。

いわば、世界を代表する実力者達の極めて低レベルな争いだが、それもすぐに決着がつく。

明睡様を投げ飛ばし、その体を笑顔で踏みつける凧王様。

「ふ、私に勝とうなど十億年早いのですよ」

が、一番の問題は、そんな凧王に対して尊敬の念を浮かべている夫。

そんな彼から距離を置き、安全な場所まで離れてホッと溜息をついた時だった。

「っ——?!」

まさか。

息を呑み、極限まで目を見開く。

一気に喉がからからになり、カタカタと小刻みに体が震える。

遠くに、見えた、のは。

「どうした？」

何時の間にか側に居た夫が、私の肩を掴んでいた。

まるで、向こうに見えた存在との間に壁となるように、私の前に立ってキョトンとしている。

体が確かめると叫ぶ。

背の高い夫の体が隠す、悪夢を。

夫を押し退け、そこにいる相手を。

けれど、心が、拒む。

見てはならないと。

夫は何かに気付いたのかもしれない。

「大丈夫だ」

私を抱き上げ、滞在する部屋に向かう中、夫はずっとそう言い続けてくれた。

そしてほどなく、私はまた自己嫌悪に陥る事になる。

というのも、あの人を見たショックで、私は高熱を出して伏せてしまったからだ。

これでは、何の為に来たのか分からず、熱で朦朧とする意識の中、私の瞳からは絶え間なく涙が流れ落ち続けた。

海国貴妃（男）×人間の少女（最後はアンハッピーエンド風）（前書き）

王×王妃に出て来た貴妃の話です

海国貴妃（男）×人間の少女（最後はアンハッピーエンド風）

それは、海を司る神々の国の王宮——その奥深くに存在した。
ごく限られたものだけが、幾重にも張り巡らされた結界の中に入りそこに辿り着ける。

沢山の花が咲き誇る中心に、その柱は静かに鎮座する。

蒼く輝く水の柱、そつと指を這わす美貌の麗人を周囲は貴妃と呼ぶ。

「来ましたよ——私の愛しい——」

柱の中に浮かび眠るのは、一人の少女だった。

*

炎水界における国が一つ、海を司る神々の国——海国後宮には一つの特徴がある。

それは、そこに居る妃達全員が美しい男達だという事。

正妃以外は、全員だ。

そんな中、一人の妃が居た。

海国国王の第一側室にて、後宮を統べる四妃の一人——貴妃。

男でありながら、その清楚な美貌は、性別を超越した麗しき美女そのもの。

海色の長い髪と瞳からなる造形美は、まるで奥深い神域に隠れ住

む巫女を思わせる清楚さだった。

しかしそれが災いし、多くの貴族達に男妾として飼われてきた彼は今、海国王の後宮にて匿われている。

それは、後宮に逃げ込んだでもなお虎視眈々と麗しい男妃達を狙う者達から、身を守るためだ。

何処までも追い掛けまわし、己がものにしようと企む者達。

誰もが死に物狂いで逃げ込み、時には王が差し伸べた手を掴み、上層部によって後宮に入れるように手筈を整えてくれた。

居なければいつまで居てもいい。

出る時は、愛するものを得て外で生きる覚悟をした時。

数百年が経ち、今までにも数人の男妃達がこの後宮を出て行った。一時は百名を数えたことも、今は三分の二まで減っている。

自分もいつかは——そう、誰もが願う。

後宮と王の偽りの寵愛を隠れ蓑とし、表では着飾り女の様に振る舞いながら、その影では勉強に武術、あらゆる学問を身につける。いつかこの後宮を出る為に。

いつか、自分達を助けてくれた王と上層部に恩返しをする為に。妃妾達は願い求めて止まない。

外の世界に飛び立つ機会を。

しかし中々その機会には恵まれなかった。

特にその筆頭とも言うべき貴妃。

そんな貴妃の無聊と憂いを慰める存在が居た。

「貴妃様の髪は本当に綺麗ですね」

貴妃の長い髪を梳きながら、侍女のお仕着せを纏う一人の少女。彼女は神ではなく、乗っていた客船が海に沈み死ぬはずだったのを、たまたま訪れた海王が見つけて助けた存在だった。

本来神が人間の運命に関わってはいけなさとされているが、その船はそもそも沈むはずではなかった船だった。

しかし、時空の歪みから這い出た魔性が贄を求めた結果、船は沈み一人生き残った少女。

当時まだ三つ。

目の前で両親を殺され、自身も大怪我をしたショックから心を閉ざした少女を不憫に思い、この国へと連れて来た。

それは本来であれば許されない事だったが、魔性から受けた毒の治療の為に使った宝玉により、少女は期間限定の半神へと変貌してしまったのだ。

半神は、神と別の種族の間に生まれた子供と、半分だけ神性を受けついでしまった存在の二種類が居り、少女はその後者に属した。

半神は神に比べて神力も身体能力も弱いというのに、魔性からすれば格好の獲物である。

けれど人に戻す術は見付からず、結果として此方側の不手際として、少女は半神としての神性が失われるその日まで海国王宮で引き取られる事になった。

せいぜい十年と少し。

それぐらいなら大丈夫だと認められて。

その身柄は後宮へと移され、その世話は貴妃に任された。
というのも、少女が貴妃に懐いてしまったからだ。

少女は面食いと後に擲掄されたが、理由は分かっている。

少女が引き取られた最初の夜。

他の誰もが気づかなかった少女の声無き泣き声に気づいたのは、
貴妃だけだったからだ。

そうして少女が眠りに就くまで、その小さな手を握り歌い続けた
子守歌。

その後少しずつ心を開き始めた少女は多くの者達に懐くが、それ
でも一番懐いたのは貴妃であり、それが貴妃にとっては誇らしく嬉
しかった。

端から見れば、女性の様に優美な貴妃は、その美しさを差し置け
ばまるで母親そのものだった。

貴妃も自分に懐く少女を殊の外可愛がり、また後宮の他の妃妾達
や正妃も少女を慈しんだ。

別れが近い事を分かっているながらも。

少女はあつという間に成長した。

十六歳——その誕生日を迎えると共に、彼女から神性が失われた。
それは少女の月の障りと共に訪れた。

女になったと同時に、消えた神性は少女を人間界に戻す合図。
もちろん、そのまま放り出す事はせず、こちらできちんとした後
見人を探し出し、一人前になるまで世話を任す手筈となっていた。

少女と離れがたかったのは貴妃だけではない。

何時の間にか、後宮だけでなく王宮の者達も少女が居なくなるこ

とを嘆き悲しんだ。

中には、神として生きる事を提案した者も居た。

しかし少女はその全てを断り、明日、この王宮を……いや、世界から出て行く。

「貴妃様の髪の毛を梳かせるのも、今日で最後ですからね。徹底的に行きますよ」

「……私の髪の毛を梳かしたいのならば、此処に居れば宜しいのに」
「おやおや？ 貴妃様は私と離れたくないんですか？」

軽口を叩くように言うのは、別れの寂しさを誤魔化す為。
少女の事なら貴妃は何でも分かった。

その、固い決意も。

だからこそ、無駄だと分かっている口にしてしまう。

「心は変わりませんか？」

「……はい」

少女は去る。

明日の早朝と共に、この国を出て行く。

元居た場所に帰るのだ。

しかし、我が身を狙う者達を避ける為にも、貴妃は後宮から出られない。

まだ——まだ——。

「貴妃様」

「何ですか？」

少女が床に座り込んだ。
所謂正座である。

「今まで、育ててくれてありがとうございました」

「……」

「独りぼっちになる筈だった私とずっと側に居てくれて……ありがとうございました」

少女は笑う。

沢山のことをくれた貴妃に対して。

男でありながら、その美貌ゆえに多くの者達に狙われ、それゆえにこの後宮から出られない囚われの妃。

最初に男だと知った時は驚いたが、それでも少女の心を開かせたのはその優しさが全てだった。

男なのに女のように嫺やかで、まるで儚くも清楚な巫女の如き貴妃。

その美貌が浮かべる笑みとは比べものにもならないが、それでも少女は微笑んだ。

これが、最後だから――。

「今まで、本当に幸せでした」

「……」

貴妃は何も言わない。
いや、言えなかった。

少女の心を開かせたのは貴妃だと言われている。
でも、本当は貴妃の方が沢山少女に助けられた。
少女と過ごしたこの十三年は沢山の事があった。
楽しい事も、苦しい事も、嬉しい事も、哀しい事も。

『貴妃様、大好きです！』

何度も自分の運命に嘆き屈しそうになった。

けれど、この十三年の間だけは、それが驚くほど減った。

少女の世話が、少女との生活が余りにも楽しくて、そんな事を想
う暇もなかった。

考えるのは、未来。

考えるのは、新しい生活の事。

少女の笑顔を見る度に自然とボロボロの心が癒されていった。

貴妃の方がよっぽど、少女に助けられていた。

なのに、言葉が出ない。

「皆さんから頂いた命を、精一杯生きます。貴妃様達が、いつかこ
の後宮から出られるまで」

真面目な顔の少女に、貴妃は意表を突かれて苦笑した。

人間の寿命は百年も持たない。

少女も七十まで生きられるかどうか。

そしてそれまでに、自分がこの後宮から出られるかも分からない。

だというのに、その強い眼差しに心奪われる。

「貴妃様達から頂いた沢山のことを、今度は私が返していきますね」

たとえ直接ではなくとも、少しずつ、少しずつ。
貴妃が自分の命を助けてくれたように、困っている人に手を差し
伸べる。

「私ね、海に関係する仕事に就こうと思っんです」

この国は海を司る。

少しでも、その側に寄り添えればいい。

「此処から出られない貴妃様の分まで、私は頑張ります。そして世
界最高齢を塗り替えるぐらいに長生きします。ですから——絶対に
いつか、外の世界でお会いしましょう」

少女の名を呼ぼうとした貴妃は、その笑みにただ魅入られた。
強い輝きの中に、まるで散り際に美しく咲き誇る桜の様な、儚い
美しい、笑みに。

「どうか、お元気で……今までありがとうございました」

そうして少女は貴妃の前から姿を消した。

上りゆく朝日の中、後宮にある塔の上から去って行く少女を見守
った。

少女が長き眠りについたのは、それから半年後の事だった。

*

「私の愛しい娘」

貴妃は棺を撫でる。

少女を女として愛していると気づいた時には、もう何もかもが遅かった。

今から十年前の事だ。

本来生きるべき世界で人として生き始めた少女は、通っていた高校の修学旅行というものに参加し、一つの船に乗った。

その船は、出航から数時間後、海から現れた魔性に襲われ海の藻屑と化した。

その報せが王宮を駆け巡るよりも早く――。

少女は、貴妃の元に現れた。

ある神にその体に乗っ取られて。

貴妃は、自分を襲うその神がもたらした嘲笑混じりの寝物語で全てを知った。

あの麗しい貴妃を手に入れるのは、この自分。
高貴なる我が身にこそ奉仕するのが相応しい。

そう声高に叫び続け、長きに渡って男である貴妃に身を焦がす様な劣情を抱き、我が物にしようと思いかけ回した挙げ句後宮に逃げ込まれた屈辱。

その後、ずっと後宮から略奪する機会を伺っていたその神は、見つけてしまったのだ。

貴妃に仕えていた少女という、格好の駒を。

自分が唯一望んで得られなかった『女』を手にする海王に対して、身を焦がすような嫉妬心に苛まれながらも、虎視眈々と機をうかがい、見つけた最大の駒。

人間などという下等な生き物を使うのは忌々しいが、それで本来自分に捧げられるべき『女』を手に入れられるならばあえて耐え抜こう。

そんな肅々とする自分に酔いしれつつ、また愛すべき『女』を手に入れるべく、その神は人間界へと向かい少女を手にした。

船を沈めたのは、少女を守る神々の力が余りにも強かった為。自分が直接手を下すとまずいから、魔性に襲わせたなら勢いが強すぎて沈めてしまった。

少女の体に乗っ取ったその神は、笑いながら言った。

「この少女に付加した特権が仇になったなあ」

いつか――。

いつか、また。

少女がこの海国に来るときにはと、王が少女に与えた一つの力。それは、この幾重にも結界が張り巡らされた後宮の結界を潜り抜ける許可そのもの。

少女は笑いながら言った。

そんなものは必要ないと。

けれど、それでも少女を惜しんだ者達が残した絆。

それが――少女を危機に陥らせた。

全ては自分達の罪。

少女の体に乗っ取ったその神は、少女を使って自分の本体を呼び寄せ、貴妃に襲い掛かった。

しかし、貴妃には特殊な印が結ばれており、結界が完全に壊れない限りは王の許可なく連れ出す事は不可能だった。

その為、すぐに外に連れ出す事は出来ず、少女を使って結界を解かせに行かせている間、自身は術で縛り付けた貴妃の体を貪った。

今まで会えなかった分を、寸でのところで取り逃がした分を取り戻すように、激しく、嬲られた。

その屈辱と恥辱に焼き尽くされながらも、貴妃は少女の名を叫び続けた。

早く、早く少女からその神を叩き出さなければ。

何の訓練もしていない人が神を宿す事は非常に危険な事だった。

たとえ、少女のように宿するのが神の一部だとしても、だ。

そして時間が長ければ長いほど、少女の体に負担をかける。

貴妃は暴れ、抵抗した。

その度に体への凌辱は増したが、構わなかった。

男から受ける恐ろしい暴力すらも、少女を想う気持ちを曲げることは出来なかった。

せめて、王か誰かが異変に気づく事を願うと共に、そして誰よりも自分が少女を追い掛けたいと願って。

そして貴妃は有り得ないものを見た。

自分に覆い被さる神が結界を破壊する為に放った筈の少女。
その神の一部が少女を乗っ取り、動かしている筈の少女。

なのに少女は確固たる強い意志を瞳に宿して寝台の前に立ち、手に持っていた短刀をその神の体へと沈めた。

ドンツと、大きく揺れた神の体。

少女を見て驚いたのは一瞬。

憎々しげに睨み付け、少女に呪いの言葉を吐く途中で駆け付けた王達によって、その神は貴妃から引きずり出された。

しかし全てが遅かった。

男に穢された体のまま、貴妃は倒れた少女へと駆け寄った。

本体の負傷により、少女を乗っ取っていた神の一部は弾き出されたが、酷使された少女の体と魂は衰弱しきっていた。

しかし最大の衰弱原因は、少女が自分を乗っ取る神の一部に激しく抵抗した為だった。

抵抗の末、取り戻した自由で神に一撃を食らわした結果、中にあった神の一部は暴走し、少女の魂を蹂躪した。

もはや瀕死なのは誰の目にも見て取れた。

幸せに生きる筈だった。

幸せになれる筈だった。

なのに、神々によってその運命を狂わせられ、その穢れ無き魂の

糸が切れかけていた。

少女の命はもはや灯火。

いや、このままでは冥界にすら飛び立てずに消滅するだろう。
魂の色はどんどん薄くなり、その存在を弱めていく。

乗っ取られ、酷使され、抵抗し、最後は痛めつけるように蹂躪された穢れなき魂。

待ち受けるのは、死すら超えた完全なる消滅。

消滅すれば、もう二度と転生すら出来ない。

完全なる『終わり』

私のせいで――。

貴妃は嘆き哀しみ、そして嘆願した。

魂の疲弊から神にする事も出来ず、もはや手段がないと分かりつつも、それでもなお。

どうか少女を――。

そこに居たのは、美しい貴妃でなく、死に逝く女を愛する一人の男だった。

どうか。

どうか。

どうか……。

そして少女の時は止められた。

「私の――」

貴妃は少女の眠る柱に縋り付く。
ようやく気づいた想い。

自分を狙う者達への恐怖すら凌駕し、ただ少女の元に駆けたいと
願い始めた矢先の悲劇。

あの時、力ずくでも神にしていれば良かった。

少女が望むなら――それを理由にし、伝えなかった想い。

ずっと側に居て欲しい……。

その願いは歪められた状態で叶った。

少女はもう二度と何処にも行かない。

貴妃の力が続く限り、永遠にこの柱の中で眠り続ける。

生きたまま、死の、いや消滅の直前で止まったままの状態で、永
遠に――。

「私の、愛しい娘――」

動かせない。

動かさない。

止めたままの時計の針。

いつか。

いつか。

少女を助けられる術が見付かるその日まで――。

「初めて、神である事に感謝しますよ」

その美貌が災いし、男達に飼われていた過去、どれほどその長い神生に絶望しただろうか。

どこまでも続く生き地獄にどれだけ怯えただろうか。

けれど——今、貴妃は感謝する。

その長い時を自分が生きる限り、少女の時間は止まったまま。

逆に進みゆく外の時間。

そして進んだ先に待ち受ける——未来。

いつか、少女を助ける術が見付かったならば——。

貴妃はそつと柱に顔を近付ける。

そうして、今も眠り続ける少女と口づけを交わすように、蒼く流れる水の柱へと唇を這わせた。

海国貴妃（男）×人間の少女（最後はアンハッピーエンド風）（後書き）

少女が目覚めるかどうかは、神のみぞ知る？

屈国高官×一般市民

花も恥じらい月も光を失う美少女とは、こういう相手を言うのか。いつもの様に王宮の学問所から帰宅する途中だった私は、正門前で一人の美少女を見つけた。

夕闇に照らされた長く艶やかな青髪。

小柄な体付き。

一目見た瞬間、ゾクリとする程の妖艶な色香を認識した私の体は、勝手にその少女の元へと歩み寄る。

まるで花に群がる虫になった気がする。

少女が此方に気づいた。

頬を赤らめ、魂が震える程甘く可憐な美貌に茫然としてみると、相手が私の手を掴んだ。

「お前、女か?! 女だなっ」

女じゃなきゃ何に見える。

と、酷い言い草に少しだけ陶醉感が薄れた時、私は気づいた。

美少女が身に纏う服装は男物だった。

目立たないが、その白い喉元には突起物もある。

男なら誰しもが持つ喉仏。

あれ?これ男?

「つかぬ事を聞きますが、男性ですか?」

気になったら聞く。

そんな性格によりもたらされた台詞に美少女が怪訝な顔をする。

「当たり前だろ！」

少し怒った顔も可愛らしいし、声も綺麗だ。
しかし、次の瞬間耳を疑った。

「頼む！ 紐パン売ってるとこ教えてくれ！！」

「消える変態」

パアンと、母直伝の斜め上からの上官ビンタを食らわし私は逃げ出した。

美人だからって頭もまともというわけではないのだと、何処かで嘆きながら。

*

次の日、学問所に来た私は拉致られた。

昨日の変態に。

相変わらず無駄に綺麗なのが腹立たしい。

「昨日は悪かった」

「はあ」

出来ればもう二度と顔を見せないで欲しかったが、そうもいかな

いらしい。

変態が自己紹介し始めた。

要約すると、変態はこの風国の高官——それも上層部に属する——人らしい。

んで、当然性は男で、昨日下着を捜していたのはある潜入捜査で女装する為だったとか。

「紐パン好きな相手だったんですか」
「むしろ紐パン以外に勃たないんだ」

勃たないってなんだ？
とりあえず、大切な何かなのだろう。

「そうですか。つまり貴方の趣味じゃなかったんですね」
「趣味でたまるかっ！」

別に外見だけ見れば似合いそうな気もするし、男が女の下着をつけてムラムラする女性も居るのだろう——と考えていけば、潜入先の相手は男だと告げられた。

そうか、今の世の中、紐パンつけた男が好きな男達が増えてるんだな。

特殊な嗜好だが、本人が良くて周囲に迷惑をかけなきゃ別にいい。

私は迷惑をかけられたけど。

「で、紐パンは無事にゲット出来たんですか？」

「ああ、何とか——くそっ！ これも全て紫蘭のせいだっ」
「紫蘭？」

変態高官曰く、何でも下働きの少女らしいが、もの凄い厄介な相手でもあるらしい。

「ばーいずらぶ好きなのはまだいいが、男性陣が任務で使って履き古した女性用の下着をネットオークションで売り払うとか。」

「使用済みだと、価値が数十倍になるとかワケわかんねえ事言いやがって！」

怒髪天を突く様な怒りっぷりだが、そろそろ私はお暇して良いだろうか。

勉強の時間も始まるし。

「つて事だから、俺は変態じゃない！」

「何となく分かりました」

「むしろ変態は俺達の下着を売り払う奴だ！」

「はあ」

「ま、まあ迷惑かけたから、後で詫びはする！ だから名前と住所教える！」

そう言われて、勢いに流されるまま教えたが、後に私は後悔する事となった。

いや、後悔したのは、この会話を盗み聞きされていた事に気づかなかった変態高官の方だったかもしれない。

*

「宅配便です」

三日後、届いた宅配便。
送り主は変態高官。

中身は果物類と書かれていたので、お詫びの件だと思い箱を開けた。

ぎゅしりと詰まっていたのは

到底果物に見えない紐パンティー（使用前）

「あら、いつもはゴムの下着なのに珍しいわね。誰か好きな男の子でも出来たの？」

暢気な母を余所に、箱を抱えて王宮に突っ走る。

そして――。

「ああ、荷物届いた」

「クタバレ変態！」

以前の二倍の威力で放った上官ビンタが、変態高官の頬に炸裂した。

そうして完全に切った縁。

しかし——変態との縁は極太強靱だったらしい。

それこそ、後に変態高官と夫婦になってしまいうくらいには。

見事敵を地に沈めた後。

事情を聞きつけた侍女長様によって、宅配便の件が紫蘭という少女の悪戯によって中身がすり替えられた為の悲劇だと知らされ、私は仕方なく変態高官に謝罪しにいった。

が、その際に変態高官に食われた挙げ句、聞きたくもない言葉を聞かされる事となる。

「お前のビンタと蔑む眼差しに惚れた！ 結婚しろ！！」

「どんだけドMだよ」

しかも発言ドMのくせして夜は鬼畜Sって何だよ。

その時は殴って逃げたが、向こうは腐っても大国の高官。一般市民が逃げ切れるはずもない。

気づけば逃げ場を塞がれ、観念するしかなかった私。

それでも、高官の妻として恵まれた神生を送れたので感謝もした。

しかし、だ。

「あのね、おとうさまとおかあさまはどうやってであつたの？」

と、子供に聞かれて素直に言えるロマンチックな出会いをしたかっただと思うのは、私の我が儘なんだろうか？

だつてねえ……

紐パン売り場を聞かれたのが出会いよ——なんて、
言えるわけ、
ない！！

当主×分家の娘（最後はアンハッピーエンド風）

閉じ込められていたのは地下の座敷牢。

そこから、あの人の部下である顔見知りの女性に助け出された私は、三日ぶりの外の空気に触れた。

時間は夜。

新月の夜は暗闇に包まれていたが、本邸に灯る光が闇夜を照らした。

「どうか、お急ぎ下さいませ」

女性に促され、私は外へと連れ出される。

あの人の命を受け、私を安全な場所に連れて行く事がこの人の役目。

異変を感じたのは、そのすぐ後だった。

本邸から上がる悲鳴に気づいた私は、手を引く女性を振り払い走り出した。

本邸にはあの人がいる。

身分違いだったが、末端の分家の娘である自分を妻にとまで言うてくれた人が。

あの人とは別れるつもりだった。

もう二度と、姿を現わさないつもりだった。

女性に手を引かれ、向かう先の安全な場所からひっそりと居なく

なる。

それで、全ておしまい。

けれど——それでも、心は望んだ。

最後に、あの人の顔を見たいと。

あの人の婚約者候補達によって座敷牢に入れられ、暗闇の中で過ごした三日間。

食べるものも与えられず衰弱した体の何処にこんな力が残されていたのか。

ただひたすら、あの人への思いを抱えて走る。

『どうぞ私と一緒に。全てが終わるまで、安全な場所でお待ちするようにとの事です』

あの人は何をしようとしているのかは分からない。

もしかしたら、婚約者候補の誰かと結婚するのかもしれない。

有力な分家の娘と結婚し、地盤を固めるまで。

となれば、私は愛人……。

『妾なら許してあげてもいいわよ。ただし、一生子の産めない体にしてやるっ！』

あの人の事を思うなら、愛人でも良いかもしれない。

けれど、もし子を産めば殺される。

女達の醜く歪んだ笑みを思い出すだけで恐怖に体が震える。

愛し合っているならどんな困難も超えていける――。

けれど、愛だけではどうにもならない事だつてある。

それに、冷静に考えても、かろうじて末端にひっかかる程度の分家の娘が本家の子息に相応しいわけがない。

だからあの人の前から消えよう。

少しでもこの家の影響の及ばない場所に行き、そこで暮すのだ。

あの人の子と共に――。

下腹部をそつと撫で、宿つて間もない命の鼓動を感じる。

もう二度と会わない。

もう二度と。

でも、それでも求めて止まない心が、異変の起きた本邸に私を走らせる。

あの人に、もしもの事があつたら……。

あの人は本邸に居ると聞いた。

もし何かあつたら自分は生きていけない。

そうして本邸に足を踏み入れた時、私は見てしまった。

「ひいっ！」

玄関を目指して倒れた血塗れの男を。

既に息絶えている事はすぐに分かった。

あの人かとも思ったが、すぐに違うと気づく。

「あ、わ、若、様、若様！」

幼い頃から呼び続けたあの人を呼びながら走り出す。

本来末端の分家の私には本邸に入る資格はないが、今は緊急事態だ。

お腹の子の事も頭によぎらなかつたわけでもないが、この家の分家の者として見過ごす事は出来ない。

しかも、既に一人死んでいるのだ。

強い血の臭いに吐き気を覚えつつも私は必死に奥へと進んだ。

一人、二人、三人。

廊下を進めば、途中で力尽きた遺体と幾つも出会った。

男も女も居た。

老人も若者も。

「い、一体、何が」

分家だけではない。

本家も、居た。

廊下を染める血に足をとられながらも、何とか壁伝いに歩き続けた。

「若、様……若様」

そうして、最奥の部屋に辿り着いた時だった。

絹を引き裂く女の悲鳴と共に、目の前の障子に血飛沫が飛んだ。
ガタリと、障子が倒れる。
その上には、女。

長いぬばたまの黒髪が美しい——若様の婚約者候補筆頭——。

自分こそが若様の奥方様になると信じ、またその家柄と美しさから周囲にも最有力候補と目されてきた。

けれど……どうして、その、人、が……血塗れに……。

「ああ……——か」

甘さも優しさもない、ただ冷たい氷の様な声が私の名を呼んだ瞬間、ぶるりと体が震えた。

有り得ない。

私は若様の事を心配してここまで来た。
だから、その、若様の声を聞けば、喜び安堵する筈だった。

なの、に。

ぞわりと這い上がる恐怖に戸惑いを覚える。

顔を上げるな。

このまま此処から去れ。

ドクドクと激しい鼓動と共に、冷や汗が流れ落ちる。

逃げる。

逃げる。

逃げる。

私は何処かで分かっていたのかもしれない。

この、異変が――。

若様によつて引き起こされたものだという事を。

意を決して顔を上げた私の視界に、否定出来ない真実が映り込んだ。

「若、様」

「来てしまったのか……全く、あいつは何をしていたんだか」

『夜華の君』と呼ばれる若様。

しかし今、その全身を、纏う着物を血に染めて立つ若様は、普段とは比べ物にならないほど艶やかで、壮絶な色香を放っていた。

血が若様のものではない事はすぐに分かった。

若様の手に握られた日本刀が血に濡れて鈍く光る。

確か数千万はする名刀で、数代前の当主が手に入れた後、刃を潰

さずこの大広間に置かれていた。

と、刀が鳴る音に我に振り返り視線を彷徨わせた瞬間、私は絶叫した。

血、血、血。

人、人、人。

大広間には、沢山の人が倒れていた。

皆血に塗れているばかりか、頭がない者、手足がない者まで居た。しかも――。

「お、大旦那、様……大、奥様」

当主夫妻も居た。

それに、当主の、息子夫婦――若様のご両親も。

「……あ、あ、あ」

ずるずるとその場に座り込む。

手が、服が血に塗れるのも気づかず、茫然とそれを見つめていた。

肉塊となった、人達を。

「お兄さま、向こうは全て始末したわ」

「こっちもだよ――って、どうして――がいるんだよっ」

焦った声に顔を上げれば、そこには若様の双子の妹弟が居た。

「――外に逃がしたのではなかったの？ お兄さま」

「ああ。その筈だったが……仕方ない」

「まあ、どっちにしろいつかは分かる事だったけどねえ」

「後のことは任せたよ」

目の前でやりとりされている事が分からなかった。

何が。

何が。

「さあ、おいで……お前は私のものだよ」

その時、何か叫んだ様な気がする。

泣き叫び、抵抗し、嘘だと必死に全てを否定して……。

そんな私に、若様が覆い被さり、粗末な着物をはぎ取られた。

開けてはいけないパンドラの箱を開けてしまった人間には罰が与えられる。

ガシャンと壊れた心の音を聞いたのが、最後だった。

「あは、はは、あはは、ははは」

そうして闇に沈んだ私は、目と耳と——心を閉じた。

ただ、時々、少しだけ聞こえてくる。

「お兄さま、義姉様のご様子はどうですか？」

「この通りだよ」

「まあ——どうかお気を落とさずに。私達が至らなかったせいですわね」

「気にするな。どうせいつかはバレていた。それに、待つ事は慣れている……今までもずっと待ち続けていたんだ」

「腐った分家と本家を全てあぶり出し」

「全員抹殺する時を、だよ、兄様」

「これで暫く家の事で煩わされる事はなくなる。後は任せた」

「ええ、お兄さまはどうぞ義姉様のお側に」

「子供ももうすぐ産まれるしな。にしても、あの肅正の時には既に妊娠していたなんて、兄様は本当に抜け目ないね」

「それぐらいでないと当主なんて務まるか。それより妻を少し休ませたい。もう帰れ」

「「はい」」

嬉しそうな声が二つ、落ち着いた声が一つを聞きながら、私はまた闇へと落ちていく。

後に、八大家神有家の歴史を変えたと言われる大肅正。

それを行った当主は、腐敗した神有家を立て直した名当主として長く歴史に名を刻むこととなる。

そんな彼は大肅正後すぐに妻を娶る。

大変な愛妻家としても名を馳せた彼がただ一人愛した少女は、末端の分家の娘。

しかし、表舞台に立つことは終ぞなく、死ぬまで本邸の奥座敷で過ごしたという。

それについては色々と説がある。

夫の愛情が余りにも強すぎたからとか、娘が病弱だったとか。はたまた、娘の心が狂っていたとか。

だが、当主と妻の間には五人もの子を残す事となる。

優秀揃いの子の中で、次の当主になったのは満場一致にて後継者指名を受けた長男。

あの大肅正の時に娘の腹に居た子だった。

その長男によって、神有家は八大家の頂点という地位を確立し、孫娘に至っては冥界の末皇子に嫁ぐ事になるが、それを狂った娘は見事なく早々にこの世を去ることとなる。

当主×分家の娘（最後はアンハッピーエンド風）（後書き）

気づいた方も居ると思いますが、香奈の曾祖父のお話です♪

海国徳妃（男）×元奴隸

こんなブサイクでは商品にならないではないか！

そう叫んだ私の買い手はメタボ体型のつるつぱげ。

ゴミを掴まされたとわめき立て、刀を抜き放つのが見えた。

ああ、これではようやく死ねる――

目を閉じた私が再び目を開けた時、その世界は一変していた。

*

「ね」

甘える様な声が後ろから聞こえてくる。

「ね〜ってばあ〜」

気だるげに誘う様な声音が近付いてくる。

「聞いているの〜？」

「聞いてません」

「聞いているじゃん」

甘く熱っぽい声が絶対零度に変化したか、私はそれを無視して掃

除を続ける。

「つか、ほらこっちむいてよ」

「掃除中なので」

「いいじゃん」

「忙しいので」

「僕の部屋は綺麗だからさ」

「王妃様に呼ばれているので」

「別に振り向くぐらいなら」

「無理です」

「少し」

「駄目です」

さあ、掃除も済んだことだ。

さっさと帰るか。

しかし、扉が開かない。

「鍵はこっちだよ」

「……」

「外に出して欲しかったら振り向くか、名前を僕に教える事」

「一介の侍女をおちよくるのもいい加減にして下さい」

そう告げた時だった。

「この僕に対して生意気」

耳元で聞こえた声に振り返る間もなく、私は覆い被さる重みに

潰された。

グッシャリと。

消えゆく意識の中、鍵がかかっている筈の扉がガチャリと音を立てて開いた。

「徳妃、あの詐欺男が呼んで——」

扉から顔を覗かせた王妃様が、徳妃様に潰されている私を発見した。

*

物心ついた時には既に奴隷だった。

そんな中で、私が最後の買い手に買われた時に悲劇は起きた。
美しい奴隷を買った筈なのに、手違いで来たのは可愛くもない奴隷が二人。

それが私と入ったばかりの新人奴隷の少女だった。

騙されたと買い手は騒いだ末、殺されかけた私達。

とりあえず死ぬのは恐くなかった。

生きるのに疲れていたから。

ただ、隣に居た新人奴隷の少女の事だけが気がかりだったが。

しかし、殺される直前で飛び込んで来た大勢の男達に私と新人奴隷は助けられた。

いや、彼らが助けたかったのは新人奴隷の方。

というのも、少女は海国という大国の王妃様だったのだ。

何でも王と大喧嘩して王宮を抜け出したところ、運悪く奴隷商人に捕まって売り飛ばされたらしい。

そうして買い手は捕らえられ、奴隷達は皆解放された。

因みに買い手は美しい奴隷達を愛玩物として飼う趣味があったらしく、奴隷となった者達はひとまず王宮で傷ついた心身を癒すまで保護される事となった。

だが、そんな中で私は一人王に呼ばれ、王妃様を守った事への御礼の言葉を述べられた。

確かに何も分らず不安がる王妃様の面倒を見た覚えはある。食事を分けて、寝るまで側に居た。

けどそれぐらいで、むしろ助けられたのはこちらの方だった。

と、そこで王が私に言われたのだ。

もしよければ側仕えとして王妃に仕えてくれないかと。

奴隷の私が？！と驚きもしたが、人手不足なので使える相手は率先して取り込むという方針だと告げられた。

どうやら私は使える相手だと判断されたらしい。

確かに奴隷から解放されたとなれば、生きる為には自分で稼がなければならぬ。

だから、仕事をくれるというならむしろ喜ぶべき事だった。

それに王妃様に仕えられるなら私も願ったり叶ったりだった。

ご自分も孤児らしいが、王妃となった後も奢ること無く優しく謙虚な方で、何でも結婚する前には風国という大国で下働きをしたいらしい。

そんな事もあり、時々下働きの仕事がしたくなるとかで、二人して下働きの仕事を手伝いに行くことも多々あった。

まあ——その度に、王様が奥様を捜して大騒ぎになっているが。

そんなわけで何とかかんとか始まった新生活。

しかし最初は色々と驚く事も多かった。

特に後宮事情。

なんとこの国の後宮の妃妾は全て男ばかりだったからだ。

確かに全員が下手な美女よりもよほど美しい者達ばかりだったし、男色家という人種ならば美女よりも美男子を侍らせたいだろう。

しかし、海国の王様の正妃は正真正銘の女である。

もしかして正妃だけは女にするように求められたのか？跡継の為に？

悩んでいたところ、宰相様から事情を説明された。

つまるところ

王は元々ノーマル。

だけど、自身がその美しさゆえに色々と酷い目に遭わされた過去から、同じように酷い目に遭わされていた者達、また遭わされそうな男達を後宮に保護しているという事だった。

妃妾達にしているのは、彼らを狙う者達へのパフォーマンスなだけで、いわばただのお飾りに過ぎず、大本命は正妃ただ一人だという。

そんなわけで、王妃様付きの侍女として働き出した私は、そこで運命？の再会をした。

それは、後宮の妃達（男）を紹介された時だった。

「あ」

「へ？」

後宮の妃の一人に、過去の奴隷仲間を見つけた。

その相手は徳妃様と呼ばれ、傾国クラスの愛らしく可憐な美少年だった。

実際に、国ではないが、この徳妃に溺れて身持ちを崩して家を傾けた貴族は数知れず、また徳妃に横恋慕して争って潰れた家も数知れず。

現在は、後宮のムードメイカーとして悠々自適に暮していると。

昔は泣いてばかり居たのに——なんて少しだけ懐かしく思った。

今では完全な悪ガキ——いや、周囲を翻弄する小悪魔だが、一時的に奴隷として同じ奴隷商人の元で暮していた時は本当に泣いてばかり居た。

当時は私の二つ下の五歳ぐらい。

昔から恐ろしいまでに可愛く、奴隷商人にまで手を出されかけていたのをたまたま私が助けたのだ。

おかげで私はボコボコにされたが、そのかいもあってその子は手を出されずにすんだ。

その後、まるで親鳥に懐く雛のように何処に行くにもついてまわったその子は、それから一月もしないうちに大金持ちの貴族に買い取られていった。

慰み者にされる為に。

泣き喚くその子を見ていられず、私は相手に縋り付きまたボコボ

「にされ、気づいた時にはその子は連れ去られていた。

その子が今、昔よりも美しくなって目の前に立っている。
どうやら、ようやく平穩を手に入れられたらしい。

思ったのはそれだけ。

向こうが気づいていたのは分ったが、名乗り出る気はなかった。

私は正妃付きの侍女として、相手は徳妃様として。
それだけのお付き合い。

それに、相手は一時的に後宮に保護されている身なだけで、外に出られるだけの力を手に入れ、好きな相手が出来たら出ていく。

それまでの付き合いなのだ。

だから必要以上に関わる事で、あの悪夢の様な奴隷時代をわざわざ思い出させる必要もないだろう。

そう思った筈なのに――。

*

「徳妃、私の侍女は徳妃の遊び道具じゃないのよ!」

徳妃様を正座させ、自身も正座してひたすら床を叩いて説教する
王妃様の横で、私は他の妃様達（男達）に介抱されていた。

「だから、王妃様に何度も言ってるでしょ？ 頂戴って」

「頂戴って、私の侍女は玩具じゃないのよ!!」

ぶーたれる徳妃様だが、その顔も酷く愛らしい。
というか、気づかぬ合間に私の所有権を巡っての言い争いになっている。

「代わりに王妃様の好きなものをあげるから」

「駄目！ 絶対に駄目！」

「……ならいいよ」

全然いいよという顔をしてない徳妃様。
その時に気づくべきだった。

徳妃様の本気を。

「ってか、なんで？」

「へっへっ」

翌日、私は寝台の中で目覚めた。
裸で。

しかも隣に裸の徳妃様が横たわった状態で。

「これでもう僕のもんだよね」

これはなんだ？お手つき？お手つきか？

ってか、妃のお手つきってどういう状況だ――

そんな事を考えて居ると、徳妃様が私に覆い被さってきた。
その愛らしい美貌が眼前に迫る。

滴る様な色香をまき散らしながら、ウツトリとした笑みが花開いた。

「今度こそ、絶対に離れないからね——ううん、逃がさないからね」

そうして交わされた濃厚な口づけに、逃げる間もなく翻弄された私は、もう一度食われた。

凧国医務室長×凧国女官長（前書き）

いつか連載出来たらな〜と思ってお蔵入りしていたものです。
短いプロローグ部分なので、たぶんさらりと読めます。

この二人は大根と王妃の本編でも出てくる予定です〜。

凧国医務室長×凧国女官長

神生なんてもんは一寸先は闇だよ

それが育ての親だった祖父母の言葉だった

けれど――

凧国王宮が上層部の一人――女官長は茫然とした。

痛む頭に思い起こされる記憶は、昨日の宴会のこと。

お酒も勧められ、断るのは失礼と少しだけ付き合い、後はひたすら裏方に徹した。

そうして夜遅くまで仕事をし――。

そこから記憶がない。

部屋に戻ってきた記憶はない。

だが、とにかく自分は部屋に戻って眠ったのだろう。

全裸で

しかし、自分の隣に居るのはなんだ。

女官長は、美しく淑やかな顔立ちの眠り姫に目眩を覚えた。

すやすやと眠っていた美姫が、その美しい眼を開いていく。

「あ、おはよう」

「っ！」

艶めかしい色香を放ちながら笑う美少女。

と、少女が動けば、白磁の様な滑らかな肌の上を、するりと上掛けが滑り落ちた。

全裸――

なんて認識する女官長の目にまず飛び込んだのは、たわわに実る大ぶり白桃が二つ。

更にその豊かな膨らみを下に辿れば、なだらかな腹部が現れる。ほっそりとした手足はしなやかに伸び、肉感的な白い太股は酷く艶めかしく眩しかった。

女性美に溢れた蠱惑的な曲線で描かれた艶姿。

両手を突っ張って起きる様は、酷く婀娜めいた姿だった。

だが――

女官長はそれを思わず見つめてしまった。

美しい少女の股間から、己の存在を見せつけるかの様にそそりたつ、それを。

紛れもない男の象徴。

猛々しく突き上げる欲望の証し。

それは、蠱惑的な曲線の肢体とはアンバランスであるだけに倒錯的で、奇妙ながらも壮絶な色香を漂わせていた。

そんな——相反する二つの性の象徴を同時に併せ持つのは、凧国上層部にはただ一人しか居ない。

凧国上層部が一人にして、医務室長。

上層部でも数少ない両性具有の一人だ。

しかも、男性器と女性器の両方を持ち、生殖能力もあるという才
プシヨンつき。

「あ……なた……」

裸の自分。

裸のこいつ。

二人して並んで、自分の寝台に横たわっていた事実。

出来るならばこのままもう一度意識を飛ばしたかった。

「お・は・よ？」

愛らしい鈴振る声。

愛らしい仕草。

その幻想的なまでの清らかさは、見る者全ての心に激しい独占欲
と劣情をかきたてる。

だが、女官長は知っている。

こいつが見た目を裏切る性格をしている事を。

策士家で計算高く、清らかな花の裏に隠し持つ妖艶な『妖花』の
如き色香でもって他者を傀儡とする危険物。

医務室長が何かする時は、いつも自分が被害を被る。

「ふふ、とくっても激しかったわ」

「は？」

「もう、腰が砕けちゃいそうなほど激しく責め立てられて……意地悪なんだからもう、お嫁に行けない、あ、お婿にも行けない」

だから

「責任、とってね？」

次の瞬間、王宮全体が揺れる様な絶叫が響き渡った。

*

凧国には、二つの美花が咲き誇る。

一人は『凧国の白百合』と呼ばれる、宰相の妹姫にして凧国一の美少女と名高い明燐。

彼女を見た者達は、まず誰もが凧国国王の愛妃たる王妃だと信じて疑わない。

そしてもう一人は、『凧国の真珠』と呼ばれる、凧国上層部が一人——医務室長。

両性具有、しかも男性器と女性器の両方を持ち、なおかつ生殖能力まで持っている希少な存在。

そんな二人の美貌は、自国どころか炎水界中に鳴り響き、求婚し

てくる男達は、有名、無名数知れなかった。

無理矢理、強引、権力にあかせた実力行使も毎度のこと。
大抵そんな二人の被害者になるのは決まっていた。

一人は王妃——果豎。

もう一人は——。

「医務室長さ」

「なに？」

いつにもましてご機嫌の医務室長に、朱詩は眉をひそめる。

「女官長に襲われたって本当？」

凧国王宮女官長。

女官達の長にして上層部の一人である。

王宮内では美少女としても名を馳せているが、キツイ性格に、ツリ目がトレードマークのキツメの美貌。

それが災いし、仲間達になかなか馴染めかったという過去を持っていた。

そんな女官長を仲間達に馴染ませたのは言うまでも無くあの果豎であり、それ以来女官長は果豎に対してデレデレ状態。

しかし——仲間達に馴染む前から女官長にべったりだった存在がいる。

それが、この医務室長だ。

「ふふ、もう広まっちゃってるんだ」

広まるも何も、わざと広めたくせに――

「君ね」

「ああ、式は子供が出来た後で行おうと思ってるんだ」

「医務室長」

「だってこんな体じゃ花婿の服を着ても様にならないし？ それに、男性化しないと身長も伸びないしね」

「聞けよ人の話」

くるりと振り向いた医務室長に、朱詩は溜息をつく。

そこに居たのは完全な男の顔をした医務室長。

たとえどれほど美少女の外見をしていようと、胸があろうと、好きな女に対して滾る欲望を表に出す顔は、紛れもない男である。

「なんだよ」

清楚な美少女の口から飛び出る男口調。

もし此処に医務室長の信崇者達が居れば、即座に首つりを決行しただろう。

しかし、朱詩には慣れたもんである。

いや、上層部や王も同様か。

「確か、女官長の寝台で二人して寝てたとか――裸で」

「女官長は激しいからな」

ハッと馬鹿にした様な笑みに、朱詩は笑顔のままで言う。

「そうなんだ。でも、昨日の宴が終った後、ふらふらの女官長を抱える君の姿、目撃されてるんだけど」

「その後に連れ込まれちゃって」

女口調に戻る医務室長は、いや〜んと他の女がやればムカツク様なブリっ子仕草をかまし、さっさとその場から立ち去ろうとした。

うん、認める。

他の女だとムカツクそのブリッ子も、医務室長がやると純粹に可愛いと思ってしまうだけの威力を持っている事も。

朱詩はガシッと医務室長の頭を掴んだ。

「女官長じゃないでしょ？」

「え〜、なにが〜？」

「君が、女官長を、寝台に連れ込んだらろっ」

「……………」

医務室長の抵抗が止む。

「だったらなんだって言うんだ？」

再び男口調に戻った医務室長に、朱詩は手を離れた。

「な〜んでそんな事するのかね〜」

「お前に言われたくないね」

医務室長がぐるりと振り向く。

クスクスと笑う顔は、男を墮落させる女夢魔。

「経験者だから言ってるんだよ」

「いいじゃん、他人が何しよう」と

「——そこまでしないと、失うから？」

「……………」

「随分、余裕がないんだね」

「うつさい、朱詩、お前マジでムカツク」

「ブリッ子医務室長に言われたくないよ」

共に男を惑わす魔性。

かたや、生まれつきの男を狂わせる存在——『男狂い』にして、過去の殆どを男娼として生き、体液全てが媚薬化した魔性の色香の持ち主。

かたや、生まれつきの両性具有にして、過去の殆どを男達の劣情にさらされた奴隷として生き、男娼顔負けの性技と知識に通じた妖艶な色香の持ち主。

「邪魔するなら許さない」

「邪魔はしないよ。忠告はするけど」

「忠告？」

「そ。やり方を間違えると、失うってね」

「……………」

無言のまま立ち去る医務室長に朱詩は頭を緩く振った。

「つたく、天の邪鬼なんだから」

自分も同類だが、たぶん奴よりはマシ。

しかしそんな事を考える朱詩も、周囲から見れば五十歩百歩である事には気づかなかった。

屈国医務室長×屈国女官長（後書き）

途中まで書いて断念したお話ですが、きりのいい所まで書いてあったのでのっけておきます。

海国宰相×海国文官？（前書き）

続き物となります

海国宰相×海国文官？

付き合っている相手に縁談が来た。
となれば当然やる事はただ一つ。

「今日をもってお勤めを終えさせて頂きます」

その言葉に、横に寝そべって私のばさばさの髪の毛を弄んでいた相手が、何故か固まった。

それは、炎水界に数多ある国の一つ。
海国の名宰相様とは思えない姿だったが、この世界では珍しい銀髪紫瞳の儂げな美貌が呆ける姿は、中々に色っぽかった。

*

私と宰相様の関係は、俗に言うセフレ。
愛人ですらない、夜のお供だけをするそれだが、普段はきちんと文官として働いている。

有名なのは風国や津国。

と同様に、この国にも建国に尽力し、大戦ではまだ無名だった海王に付き従い、共に戦地を駆け巡った上層部と呼ばれる高官達が居る。

宰相様はその時の一人で、大戦時代からずっと王を支えておられる偉大なる方だ。

因みに私はただの一市民で、陛下達に出会ったのは王宮に勤めしてから。

そんな私の家は貧乏まっしぐら。

幼い兄弟達を養うべく、十五歳になると同時に一番稼ぎの良い王宮で私は働き出した。

もちろん最初は下働きとして入ったのだが、たまたま読み書きが出来た為に目を付けられ、人手不足の酷い文官に回された先で宰相様に出会った。

それが全ての始まりだった。

最初は仕事上の関係。

本気鬼畜な宰相様の下でビシバシ扱かれた日々は、涙無しでは語れない。

けれど得る物も多く、上層部の方々に加え、隣国から来た王妃様や後宮の妃妾の方々と知り合う機会も多くとても良くして下さった。

因みに海国の後宮は、正妃を除けば美しい男の妃しか居ない場所だが、本来の後宮としての機能は皆無で、その美しさゆえに虐げられていた男達の駆け込み寺なものとなっていた。

当の王様は正妃様にぞっこんであり、それは上層部と妃妾達、そして一部の者達にとっては周知の事実で私も知らされていた。

宰相様も絶対に後宮入りレベルだと思ったが、それはある一件により必要ないと判断した。

そう――笑いながら自分を襲ってきた者達を皆殺しにしたあの光景。

見たくなかった、現実。

精霊の様な儚げな美貌が血に濡れ、妖艶に輝く様に、私は気を失いました。

なのになんで好きになってしまったのでしょうか？

そう——私の初恋は宰相様。

きっかけは特になく、何時の間にか好きになってしまっていたという感じだったが、とにかくその時点で完全なDMに片足をつっこんだのは言うまでも無い。

そんなわけで、気付けば初恋を抱いた私だが、それはすぐに壊れた。

身分違いとか不相応とかという理由もある。

けれど最大の原因は、宰相様には当時既に婚約者様が居たからだ。上層部の一人で、宰相様と共に王を支えていた——将軍の一人。

この女性が少ない王宮勤めの中でも、一際美しく有能で王からの信頼も深い麗しの姫将軍。

宰相様が精霊なら、相手は艶麗なる華。

体付きはボボンツキュツボンという蠱惑的な曲線美で、戦う姿は蝶のように舞い蜂のように刺す華麗さ。

時々宰相様の方がお姫さまに見えたが、そんなのは関係ない。

とても良くお似合いの二人だとして、国民達からも祝福された関係だった。

互いに想い合い、尊重し信頼し合う。

その姿を見ていると、初恋の痛みを押し退けてでも祝福したいと

思った。

なのに――。

五年前――その姫將軍様は、別の男性と結婚した。

相手は、たまたまこの国に来た流浪の民で、平凡な容姿の男性だった。

王宮に勤め、下級官吏として私の下についた事で、私とも親交が深かった男性。

それこそ、休みの日には他の官吏達と一緒に家に呼ぶぐらいに仲も良かった。

優しいけれど、地味で何処にでもいる様な相手だった。

けれど姫將軍は出会って一目で恋し、宰相様との婚約を破棄してその男性と結婚してしまった。

当然、周囲からは非難轟々になる――筈だったが、実際には殆ど非難は無く、むしろ祝福された結婚だった。

それは、五年前の大規模な反乱にてその男性が姫將軍を庇って瀕死に陥った姿や、その際の姫將軍の胸を突かれる様な激しい哀しみを目の当たりにしたからだろう。

更に反乱に巻き込まれた民達を身を挺して逃がした上、壊滅しかけた姫將軍の軍を救うべく単騎駆けした勇敢さには、民達だけでなく良心ある貴族達も心から称え賞賛した。

それに加え、宰相様もまたその男性と姫將軍の仲を祝福した。

命を賭けて姫將軍を守った男の偉業を称え、こういう男こそが姫將軍に相応しいと。

もちろん全てが全て祝福したわけではないが、そこは名宰相と言

われる手腕を際限なくふるって二人が結ばれるように尽力したのである。

けれど私は知っていた。

宰相様は、本当に姫將軍の事が好きだったのだと。

なのに、姫將軍の事を愛していたがゆえに、宰相様はその身を引かれた。

表では普段通り振る舞い、裏では気落ちした様に少しずつ荒れ出した生活。

見ていられなかった。

でも、私は何処かで喜んでいた。

もともと姫將軍を恨むことなんて出来なかった。

宰相の側に居たからこそ、姫將軍が罪悪感に支配され自分を律する姿を何度も隠れ見た。

他の男の婚約者でありながら、別の男に心惹かれる自分を拒み苦しんでいた。

宰相に何度も謝り、それでいて正々堂々と心変わりを告げた姫將軍。

その潔く誠実な態度に、私は羨ましささえ覚えた。

こういう方だからこそ、宰相様は愛されたのだろう。
多くの女性を捧げられながら、姫將軍を選んだのだ。

だからこそ、その哀しみは深い。

深すぎて、生活が荒れるまでに。

なのに喜んでしまった私。

姫將軍と婚約破棄した事で、独り身となった宰相様。すぐに新たな相手が選ばれるだろう事は分っていた。

けれど、それまでは少しでも夢を見たい。

例え届かない相手だとしても……。

そして、あの日、事件は起きた。

たまたま明日提出の書類を出し忘れた私は、夜遅くに宰相様の私室を訪れた。

本来ならこんな時間に訪れるべきではないが、すぐにも捺印の必要な重要書類な為、無礼覚悟で訪れた。

すると気配や物音があるのに開かない扉。

怪訝に眉を顰めた私に呻き声のような物が聞こえて来たのはその時だった。

まさか宰相様に何かあったのか？！

近頃はお酒の量も増えてきたから。

慌てて中に飛び込んだ私は、宰相様の姿に度肝を抜かれた。深酒していたのはいつもの事だった。

酔っ払い、服が乱れているのも。

けれど、その宰相様の上にのし掛る血走った目をした男達が居るなんて、思いもしなかった。

『ああ、お前も混ざるか？』

くすくすと笑いながら、男達と絡み合う姿は酷く淫靡であり、背徳的なものさえ感じた。

男達は私に気付かず、宰相様の体をひたすら貪っていた。

外に出なければ、誰か助けを求めなければと思いながらも足は動かなかった。

ただずると、何時の間にか閉まっていた背後の扉に寄りかかり座り込んでいた。

そうして気付けば、そこには宰相様と私しか居なかった。

血なまぐさい匂いに、ようやく寝台が真っ赤に染まっている事に気付いた。

男達は何処に行ったのだろう。

けれど、宰相様の気だるげな視線に私は息を呑んだ。

『用が無いならさっさと帰れ』

そんな宰相様に私は何と言ったのだろうか？

ただ、次の瞬間怒りを露わにした宰相様が眼前に迫っていた。

『黙れ！ お前に何が分る！』

終わったばかりのゾクリとする程の色香を漂わせ、濃厚なる跡が刻まれた裸体がのしかかってきた。

『婚約者が他の男を好きになって捨てられた俺の気持ちの何が分る

！ しかも、その婚約者と別の男の幸せのために尽力しなければならなかった俺の、俺の気持ちがお前なんかにつ

頬にかかる水滴に目を見開く。

宰相様は泣いていた。

『もうどうでも良い！ この傷を癒してくれる相手が居るなら、なんだって良いんだっ！』

叫ぶような悲鳴。

『疼くんだよ体がっ！』

愛しい婚約者を失った苛立ち。

けれど、それをぶつける事なんて出来ないから、それら全てを性欲に変換して処理していただけたと叫ぶ。

それは、血生臭い戦いで気分が以上に高揚した者達が、花街に行つて発散するのと同じ方法だった。

『抱かれてたのは、都合良く居た男達が抱く方が好きな奴らだったからだよ！ 別に構わないさ。俺は海王と大戦で出会ったまでは男妾だったんだからなっ！』

実の父と兄に凌辱され強引に『女』にされた宰相様。

その数年後には、その美しさを聞きつけた領主の妾として差し出されたが、それから一年事に主が代わった。

性別を超越した宰相様の美しさに惚れ込み、所有したいと願う者達が現れては次々と前の主を殺害して略奪していったからだ。

大戦中には法律も何もない。

美しく生まれついたが最後、強き者、権力を統べる者達に奪われるしかない——それが、世の決まりでもあった。

宰相様だけではない。

そんな哀しい被害者は、炎水界はおろか天界十三世界に溢れかえっている。

だから宰相様だけが特別なのではない。

酷い場合は、男の味が忘れられず、夫婦生活すらともに築き上げられないという。

これで割り切って男が好きだと認められたり、心から男の方が好きだというならまだ幸せだ。

けれど、どう頑張ってもノーマルなら大変な事になる。

宰相様は完全にノーマルの方だった。

それどころか、自分をそういう目で見る者達に嫌悪感すら抱いていたほどだ。

そして愛したのは姫將軍。

なのに、宰相様は男達を相手にしていた。

そこまで、追い詰められていたのだ。

もはや相手が誰だろうと構わないぐらいに。

それが哀しくて、悔しくて——。

これ以上自分を傷付けて欲しくなくて、私は宰相様に縋り付いた。

身分不相応なのは分っている。

私なんて姫將軍の代わりにすらなれない。

けれど、怒りをぶつける相手が欲しいなら、私になる。

そこに打算とか、少しでも宰相様と繋がれるなら、夢を見られるなら、とか思わなかったわけではない。

しかし、これ以上宰相様に堕ちて欲しくはなかった。

宰相様が新しく愛せる方が出来るまで、私は――。

――私がお相手するのでは駄目ですか？

たとえ遊びでも良い。

いや、ただの道具でも良い。

それで、宰相様を救えるなら。

そうして私は、その日より宰相様のお相手をする事になった。

一番当て嵌まるのはセフレ。

甘い言葉も愛情も必要ない。

ただ体だけのそれ。

期間は宰相様に愛する女性が出るか、結婚が決まるまで。

だから、宰相様が結婚するとなれば、セフレの私は去らなければ

ならない。

「今日をもってお勤めを終えさせて頂きます」

別れましようでも、終わりにしましようでもない。

お勤め

それが、私の立場だ。

海国宰相×海国文官？

お勤め終了を宣言した翌日。

私は頭の中でやるべき事を組み立てていく。

「とりあえず、退職届けを提出してと」

別に宰相様とのセフレ関係を終了しただけで退職までするなんて馬鹿らしい、と思う者達も居るかも知れない。

しかし、やはり昔の女が同じ職場に居るのは好ましくないだろう。普通に考えたって、同じ職場に旦那の元セフレが居れば、妻にとっては絶対に良い気はしない。

自分達の関係は内緒にはしているが、それでも知っている者達は知っている。

「退職届けは準備していたから、仕事前に事務長に提出して——と」

一応一ヶ月前に退職の意向を伝えるのが決まりだが、宰相様の結婚までには余裕で間に合うだろう。

そもそも地位ある人の結婚には時間がかかるから、その方が来るまでには私の存在を余裕で消しきる事が出来る。

「問題は次の仕事ね」

とりあえず、今住んでいる王都からは引越すつもりだ。
少しでも遠くに行く。

それは宰相様の新しい奥様の為であり、自分の為だ。

「やっぱり……好きな相手が別の女性と一緒に居るのは……ね」

逃げると言われてもいい。
それでも、この体を焦がす様な嫉妬に吞まれる前に逃げ出すべきなのだ。

でなければ、私は……。

*

「シケた面してるな」

食堂で昼食を取っていた私が顔を上げると、食事の載ったトレイを手に二人の男性が横に立っていた。

「ああ、副事務長様に侍従長様」

副事務長様は短髪と鋭い眼差しが凛々しい精悍な軍人系タイプの二十歳過ぎの美男子で、侍従長様はふわふわの巻き毛と大きな瞳の十代後半の可愛い系美少年だった。

二人とも宰相様の友人で、精霊且つ綺麗系の宰相様と並べば破壊力は三倍。

以前三人並んで公式の場に出たせいで、男女問わず多くの民達を卒倒させた事件は記憶に新しい。

だがそれ以上に恐かったのは、卒倒している民達を余所にさっさと自分のスピーチを終わらせて去っていった国王様だ。
完全に我関せず状態。

まあ、あの時は王妃様が体調を崩されていたのもあったが、それでもあまりにも酷い。

しかし民達からはツンツンツンデレと取られたらしく、人気は更に鰻登り。

やっぱり美形って徳ですね。

「シケた面がイヤなら、別のテーブルで食べて下さい」

しかし副事務長様は私の前に、侍従長様は私の隣に陣取る。

しかも私は壁側に座って居たので、絶対に逃がさないぞという意思がビシバシ感じられた。

もともと二人は仲が良く、大抵暇な時間は一緒に居るので、実は出来ているのかという噂がある。

けれどそういう事は全くないのを、私は知っている。

というのも、特別な相手が居ないからこそ、宰相様と付き合っているのだから。

そう——実は、この二人も宰相様のセフレ。

但し、副事務長様は宰相様を抱く方で、侍従長様は宰相様に抱かれる方だ。

ノーマルな宰相様だが、男妾として飼われていた時に使用された強力な媚薬の後遺症が残っているらしく、定期的に男が欲しくなるらしい。

その発作は二種類あり、女として男に抱かれるタイプと、男として男を抱くタイプの両方が交互に来るのである。

既に製造停止となつて久しい凶悪媚薬の一つ——『悪魔の蜜』。
一度使えば、死ぬまで依存症となるそれ。

『中和』の力を持つ神によつて治療されたが、それでも完全ではなく一定の周期で発作は起きる。

それほどに、媚薬は強力だったのだ。

それを知り、特定の相手が居ない副事務長と侍従長が宰相様の相手をしているのである。

しかし実は、それが同じ媚薬の犠牲者同士の発作対処協定による物である事を知るのは、王夫妻と上層部、そして後宮の妃妾達に宰相様のセフレだった私ぐらいだろう。

つまり、それぞれが発作を起こした時の対処相手として、宰相様達三人は協定を結んでいるのである。

因みに、私がセフレになる前からの協定で、姫將軍はもちろんこの事を知っていた。

なので当時それを知らなかった私は、二人の事を知るや否や思った。

あれ？私いらんじゃない？

しかしそれを口に出した途端、宰相様が切れた。

約束を、契約を破るのかと怒鳴られて。

しかも当時は、まだセフレ関係になつてからの月日も浅く、当然ながら激しいそれに寝込んでしまった。

けれどそれもあつて、私と副事務長様、侍従長様は仲良くなつたのだ。

それは、その仕打ちを知つた副事務長様と侍従長様が宰相様を説

教された後に、宰相様が暫く私に近付かないように見張ってくれた事が発端だった。

『嫌なら嫌と言え』

『あいつ、ああ見えて子供っぽいところがあるからさ』

しかも実家で寝込んでいた間、私の弟妹達の面倒まで見てくれて、頭が下がる思いだった。

そうして気付けば仲良くなっていた。

普通はセフレ同士で仲良くななんて有り得ない。

それこそ相手の寵愛を争って唾み合ってもおかしくないが……たぶんあれだと思う。

吊り橋効果。

危機的状況では仲良くなりやすい。

副事務長様と侍従長様は、ある程度割り切って宰相様との関係を楽しんでいる節があるが、私の場合は違う。

宰相様を助けたくて、これ以上堕ちて欲しくなくて、私の方から強引に契約した関係だ。

心の何処かでは不安だったのだろう。

けれど、こんな特殊な関係を他の人に相談なんて出来ない。

そもそも宰相様に憧れている者達が多いし、ヘタに話せば、それこそセフレでも良いからと大勢の者達が宰相様の所に詰めかけるかも知れない。

だから、副事務長様達と仲良くなれた事で、私は少しだけ気が楽になった。

といっても、二人からすれば迷惑かもしれないが。

けれど、それでも私は二人の好意に縋ってしまう。
もしかしたら、二人が居てくれたから、私は狂わずにすんだのか
もしれない。

宰相様との関係が一時的なものである事、そしていつか来る別れ
に怯えながらも正気でいられるのかもしれない。

そう――私は宰相様だけでなく二人の事も利用しているのだ。
最悪な悪女である。

でも、それももう終わり。

宰相様と別れば、二人を利用する事も無くなる。

そうしたら、今度は本当の意味で仲良くなれるだろうか？

例え、私が文官を辞めたとしても。

私は二人を交互に見る。

自分が文官を辞めて王宮を離れたら、こうしてご飯と一緒に食べ
る事も無くなるだろう。

公式面では上司部下だが、仲良くなってからはプライベートでは
ご飯も一緒に食べたりするし、買い物とかにも付き合ってもらった
りするほど密接な関係を築いている。

と、もし私が宰相様の事を慕っているのを知る者がいれば、別の
男と買い物に行くのに繭を顰めるかも知れない。

しかし宰相様とはセフレ関係で結ばれる事なんて絶対に無い。

それに、こうして別の男性と遊びに行くことは、宰相様にとって

も気が楽になる筈だ。

それだけ、私がこの関係を軽く考えているとして。

その方が、別れる時にも別れやすい。

罪悪感など、一欠片も宰相様が抱かないように。

全ては私の我が儘だったから。

しかし、それももう終わり。

何時の間にか食事の手を止めていた私は、そつと差し出されたお皿に顔を上げた。

「副事務長様」

「お前、これ好きだっただろ」

それはライチだった。

王宮に勤め始めた頃に食堂で出されて以来、私の大好物となった。

「ほれ、食え」

「じゃあ、僕のも」

侍従長様も差し出してくる。

おかげで、私のトレイにはライチが山積みになった。

「つて、こんなに食べると太ります」

「むしろ太れ。痩せすぎだ」

「うん、太った方がいいよ」

それは私に対して挑戦だろうか？

一週間前の体重測定で三キロも太ったんだぞ。

ちくしょう、良い体してるからって酷すぎる！

私は二人の体をガン見する。

鍛えられた素晴らしい肉体美を誇る副事務長様。

服の上からでは分りにくいですが、脱いだらその野生の獣の様なすりとした体付きに、鼻血を流して倒れる者達が多い。

また、侍従長様も、そのほっそりとした男とは思えない白い裸体の眩しさに悩殺される者達は多く、二人が歩いた後の道はそれこそ屍累々。

おかげで二人を捜す時はとても役に立つ。

屍を辿っていけば良いのだから。

「お前、変なこと考えてるだろ」

「いえ、なんにもぎゅう」

口の中にむいたライチを押し込まれた。

「そんなにいつぺんに食べたら味わえないよ」

「一気食いが美味しいんだろ」

何処かずれてる侍従長様の言葉に、副事務長様がニヤリと不敵に笑う。

「えー、一個ずつの方が美味しいのに」

と、皿に載っていたライチを一つ掴むと、ペロリと出した赤い舌の上に載せて口を含む侍従長様。

噛みしめた瞬間、口の端からツツと垂れていく果汁。
その一つ一つの動作全てが淫猥でイヤらしい。

そんな、そんな食べ方なんて。

「負けました」

ペタリと私はテーブルの上で土下座した。

「え？　ちよつ、何がっ？！」

私にはそんな色っぽい食べ方は出来ません。
というか、あれを習得出来たら、別の神生が開けるかも知れませ
んが。

それこそ、男達を侍らしてウツハウハ。

と、そこで私は考えた。

仕事を辞めるとなれば、当然別の職に就かなければならない。

しかし私が出来る事と言えば限りはある。

読み書きが出来るから、今の所は何処かで事務職に就こうかとは思
っているが。

王宮に勤めていたという事で箔が付くかも知れないし。

それにもし最悪の場合でも、宰相様とのセフレ関係で鍛えられた
この寝技で！！

「なんかまた変なこと考えてるだろ」

「いえいえ、何にも考えてません」

「でもまだ眉間に皺寄ってるよ」

心配そうな侍従長様の可憐な色香に、副侍従長様の後方から鼻血の噴水が上がった。

そのまま天井を見れば、鼻血で描かれたハートが見え、私は椅子ごと後退った。

あれか？イルカのバブルリング的なものか？

しかしあれと違って、なんか呪われそうな感がばっちり漂っている。

「そういえばさっきの子供の話じゃないが」

まだ子供の件を引き摺っているのか。

「実はああ言ったのも、面白い話を聞いたからなんだ」

「そうですか」

一刻も早くこの場から抜け出す為に、私はライチを口に放り込んでいく。

「うちの上司——事務長から、お前の退職願を受け取ったって」

私はライチに伸ばした手を止めた。

「な？　すんげえ面白い話だろ？」

「面白くないです何にも」

私は残ったライチを哀しげに見つめながら退却の準備をするが、ガシッと横に居た侍従長様に捕まった。

「なんかあったのか？」

「何にもありません。ナンニモアリマセン」

「思い切り動揺してるが」

「あれか？　もしかして子供が出来ちゃったとか」

ニヤリと笑う副事務長様に、私は有り得るわけもないと鼻で笑う。完全に避妊しているのに出来るわけがないだろう。

女性とする時に問題になるのは、子供が出来るという事である。はつきりいつてセフレとの間に出来たら大問題だから、そこには特に注意した。

おかげで何度か危ない時もあったが、こうして無事に失敗せずにこれた。

というか、もし失敗していたら、今回の件ではかなりややこしい事になっただろう。

それこそ、墮ろせと言われたかもしれない。

宰相様でなくても、周囲から。

そこで、ふと私は思い出した。

いつだったか酷く酔っ払った宰相様の相手をした時、避妊を忘れて事に及ばれかけた事があった。

その時に思い切り抵抗すると、宰相様が苛立たしげに言われたのだ。

『面倒臭い』

って。

そう、女である私とする場合は、子供が出来ないようにしなければならぬから手間がかかるのだ。

だから、めんどくさいのだ。

そう言われたのは、一度や二度では無い。

避妊を忘れる度に拒む私に、宰相様は呟かれた。

面倒臭い。

面倒臭い。

面倒臭い――。

面倒臭な女――それが私。

それは、私の中に微かにあつた淡い思いを完全に打ち碎いた。

愛した姫將軍様でもない。

協定関係と信頼関係で結ばれた、副事務長様や侍従長様とも違う。

途中から、勝手に割り込んできた邪魔者。

別に私なんて、居ても居なくても良かったのに。

既に副事務長様や侍従長様という、欲望の発散相手が居たのに。

強引に割って入ってきた、邪魔者。

中途半端に事態を引つかき回した厄介者。

わざわざ宰相様の手を煩わせる馬鹿な女。

せめて男なら良かった。

そうすれば、面倒臭くなくて済む。

そう――女であるから、厄介なのだ。

それに子供以外にも問題がある。

それは一度月の障りが訪れたら、相手が出来ないのだ。

もちろん、それでも良いという相手も居るだろうが、宰相様は月の障りが訪れた私を相手にはしない。

そして、その度に呟くのだ。

腹が立つ――と。

男だったら良かったのに。

子供が出来る危険性もないし、月の障りに阻まれる事もないのだから。

「って、あれ？　もしかして本当？」

黙ってしまった私に副事務長様が乾いた笑いをこぼす。

「お前な……」

「い、いや、軽い冗談だったんだけど」

侍従長様が愛らしい顔とは裏腹にキツイ視線を向ければ、副事務長様が慌て出す。

その様子には私はハツとした。

このままでは子供が出来たという流れになってしまう。

そんな事は事実無根なのだから、さっさと否定しなければ。

「いや、子供なんて出来てません。そもそも相手は居ませんし」

その言葉に二人が反論しようとして止める。

この事実を知っているのはごく一部の者達だけ。

昼時に混雑している食堂で話すには、部外者が余りにも多すぎた。

というか、子供か。

私に似たらあんまり可愛くなくて、将来結婚で苦労させてしまいそう。

それに比べれば、前と隣に座る二人の方が――。

「私が産むより、侍従長様や副事務長様が産んだ方が良いかも」

ブホッと吹き出す二人を余所に、私は残っていたお茶を飲み干す。

「産めてたまるか！」

「無理だよそんなのっ」

「ビジュアル的に問題はないと思います」

むしろ可愛くて綺麗な子供が産まれて周囲は喜ぶだろう。

「ビジュって」

「ええ、美呪有留的に」

今、変な誤変換しなかった？という二人の眼差しを静かに受け流し、私は立ち上がった。

受け止めない、受け流す。

これが大事である。

流す神生万々歳。

そう、話しているうちに、羨ましいぜ！こんちくしょう！！なんて、思っていない。

しかし二人は、大戦中では海王の側で多くの敵を屠った猛者。

「逃がすか」

「前に同じ」

ガシッと掴まれ、捕獲された。

海国宰相×海国文官？

宰相様が結婚する。

それを聞いたのは、今から一週間ほど前の事だ。

隣国の姫君だという。

華奢な細い体、纏う甘い花の香り、小さな顔に色づく桜色の唇と大きな瞳。

泉国国王の妹君で、まるで春の妖精の様に温かく優しくな空気を纏うお方だという。

それ故に、多くの者達がこぞって手に入れようと多くの縁談が舞い込み、引く手数多の状態だとか。

そんな王妹を王はいたく寵愛している。

今回の縁談は、そんな王から来たものだった。

つまり、その王のお眼鏡にかなったという事だ。

この国の宰相閣下は。

それはとても光栄な事であり、誇るべきものである。

精霊の様な銀髪紫瞳の美貌の宰相閣下と春の妖精の様な王妹。

二人並んだ姿はさぞや眼福に違いない。

そう、そこに余計なものが入る隙間などないのだ。

泉国国王の王妹はとてもお優しいお方。

泉国国王が寵愛し、かの国の上層部も大切にする姫君を悲しませる事など出来ない。

「だから、別れると」

「そついう事なの？」

副事務長様と侍従長様の言葉に私は頷いた。

なんだか不機嫌そうな声だ。

食堂で拉致られた後、私は中庭の奥にある人気の無い四阿にて、二人に全てを白状させられた。

すなわち、何故辞表届けを提出したかについて。

その原因となつた宰相様のセフレの終了と、更にその終了に関わる原因を。

宰相様の結婚が決まればお勤めは終了。

最初からそう決まっていた。

もちろん、今までにも縁談が来た事は何度かあったが、全て私が知る頃には宰相様によつて断られていた為、お勤めを終了する間もなく関係が続いていただけ。

だから今回が初めてだった。

しかし、それは同時に、この縁談がすぐに断れるものではないという事を意味する。

いや、断るなんてとんでもない。

この縁談は必ずや纏まらなければならぬものである。

あの王妹を愛する王が、今までどれほど縁談が来ようと断り続けた王が、自ら持ち込んできた縁談である。

断るなんて考えられない。

それは身分や立場、国同士の関係を別にしてもである。

あの美しい姫君を欲しいと望む者達は数多く、既に今回の縁談を邪魔しようとする者達や、縁談が決まる前に姫君を攫おうとしている者達も動き始めているとか。

既成事実さえ作ってしまえばこちらのもの——そんな最低なことを思う輩は何時の時代にも居るものだ。

けれど、今回ばかりはそれを実行させたりはしない。

万全の体制で、縁談は進められる。

そう、欠片と言えども、縁談の邪魔になるものは排除しなければ。とくに私はその最たるものだ。

結婚前にセフレが居た事实は、もしかしたらバレるかもしれない人の邪魔をしたい、欲しいものを手に入れるのに手段を問わない輩は、どんなに隠そうとも暴いてくるから。

但し、そういう輩に限って妾だとか遊びで女性をわんさか抱えているものである。

つまり、好色で遊ぶ為に女性を妾や愛人として抱えるのだ。だから、それについては彼らもとやかくは言えないだろう。

大切なのは、縁談前に別れている事である。

しっかりと、きっぱり別れる。

難癖はつけて来るだろうが、縁談前にとつと辞めてしまえばそれで何の問題もない。

地位や身分の高い相手の縁談に時間がかかるのは、こういう身辺整理の為もある。

副事務長様と侍従長様がセフレを辞めるかは分らない。

最悪な媚薬のせいで、今も男を欲しがるという副作用に悩まされる宰相様の体の事もあるから。

しかし私の場合は違う。

別に居ても居なくてもいいのだ。

それに女という事もあり、子供の問題とか色々と厄介な事もある。だから早く別れなければ。

宰相様には別れると告げたから、後は引き継ぎをしつつ事務長がさつさと退職の処理をしてくれるのを待つだけである。

ああ、挨拶もしなければ。

それに次の仕事と住む場所と、家族の事も何とかしなければ。

そんな事をつらつらと考えて居ると、なんだか突き刺す視線に気付いた。

顔を上げれば、二対の瞳が私を見ている。

「な、なんですか？」

「お前、本当にそれでいいのか？」

副事務長様の言葉に私は戸惑った。

「いいも何も、そうする約束でしたから。それに、普通に考えても元セフレが部下として働くのは妻としては嫌だと思えます。というか私なら嫌です」

ならどうしてセフレをしていたのかと問われれば苦しいものがある。

だが、あの時は私も必死だった。

宰相様を助けたかった。

そして何処かで、宰相様に触れたかった。

仮初めでも、代わりでも、八つ当たりの道具でもいい。

ただ、側に居たかった。

「で、全部諦めると」

「諦めるんじゃないです。約束を果たすだけです」

諦めるとか、それで良いのかとか、おかしい事ばかり言う。

それは普通恋人に言う台詞ではないだろうか。

私の場合は恋人ではなくセフレ。

契約によって結ばれた関係であり、契約終了の条件が揃えばそこで終わりとなる。

それだけなのに、どうして二人はそんな顔をするのか。

「お前馬鹿だよ」

「そうだよ、気付いてないと思ってたの？」

馬鹿だ、馬鹿だと二人が言う。

「気付いてないって」

「だから、君の本当の気持ちにだよ」

本当の気持ち。

本当の……。

そこで私はハッとして二人を見た。

そうか、やっぱり気付かれていたか。

そんな気は、していた。

知っていて、気付かないふりをしていたくれた。

その優しさに私は知らず知らずのうちに涙を流していたらしい。

慌てた副事務長様がハンカチを渡してくれて、侍従長様が私の頭を撫でてくれた。

兄が居たらこう感じるのだろうか。

その後、私は副事務長様と別れて侍従長様に部屋まで送って貰った。

「まあ、とりあえずすんなりと辞められるかは分らないと思うよ」
侍従長様が苦笑しながら言う。

「どうしてですか？」

「うーん、まあ、ね」

そう言うつと、侍従長様が私の頭を撫でた。

「けど次の仕事とか見つけるのがまず問題だよ。アテはあるの？」

「え——」

ない、と素直に告げるとまた笑われた。

「君らしいよ」

「私らしいですか」

「うん。ああ、でももしどうしても次の職に困ったら、僕が紹介してあげようか」

「え？」

侍従長様が紹介してくれる仕事なら信頼出来る。

しかし、問題は場所だ。

けれど、次に侍従長様の口から出た言葉に私は固まった。

「僕の奥さんなんてどう？」

何処からか、ポク、ポク、ポク、チーンという音が聞こえてきた。

「お買い得だよ？ 愛人持たないし」

いやいや、セフレですよ？ 宰相様の。

もう既にお持ちですよ——とは言えなかった。

いや、その前に侍従長様と結婚？ この方が夫？ この女性よりも可憐で愛らしい方と？

「……僕じゃ駄目？」

「……」

女性なんて目じゃないぐらいに可憐で愛らしい方で、料理などの家事も完璧で、男なのに男性からモテモテで、男でも良いから結婚してくれという申し出は数知れず。

実際、既成事実を作ろうとして襲ってくる者達まで居るほどの大

人気で。

……私、殺されるんじゃないだろうか。

いや、そういう輩は侍従長様を妻にと望んでいるから、私みたい
に夫になる分には良いのかも。

って事は、侍従長様は別の方を夫とし、私の夫となる。

あれ？矢印が変な方向に向いた気がする。

三角関係じゃなくて一方通行だよ、これ。

いやいやいや、そうじゃなくて。

侍従長様が夫。

じゃなくて、もっと大切な事がある筈だ。

「侍従長様」

「ん？」

「冗談でもそういう事は言っちゃ駄目です」

「ええ〜？」と侍従長様が声を上げる。

一瞬傷ついた様に見えたが、きつと目の錯覚だろう。

「そういうのは、本当に心から愛する女性に言っして下さい」

「だから言っただでしょ？」

「侍従長様、本気で怒りますよ？」

すると、「むう〜」と唇を尖らせる侍従長様に私は説教した。

「侍従長様ほど綺麗な方なら、例え冗談でもそれを真剣に取る方
は多いんですからね。もっと、ご自分を大切にして下さい」

「してるよ〜」

「してませんよ。この前だって雪が降ってたのに外套も纏わずに外
に出られて」

「ちよつと雪が降ってて浮かれてただけじゃん」

「侍従長様って、大人に見えて実は子供ですよね」

そう——普段は完璧に振る舞っているから気付かれにくいですが、実
はこう見えて結構好き勝手する事が多い。

「ふふ、君の前だけだよ」

「はいはい」

「ああもつ、本気にしてくれないんだね」

本気も何も、「冗談を本気にする事は出来ない。

「僕も男の子なのに」

「当たり前じゃないですか、侍従長様は男です」

私はきつぱりと言った。

「どんなに見た目が女の子より可愛くても、れっきとした男、それ以外の何ものでもありません」

ほっそりとした手足、体毛のない白い肌、ふわふわの髪にけぶるような長い睫に縁取られた大きな瞳。

ふつくらとした赤い唇がどれほど妖艶に動こうと、侍従長様は男なのだ。

「だから部屋に入れたりもしませんし」

一緒に買い物に出かけても、食事をして、部屋にだけは入れない。

彼は男。

侍従長様は男だから。

「そうだね」

「そうです。そしてたぶんとっても男らしい部類の男ですよ」

「……」

たぶん私が頼りないせいもあると思うが、それでも重たいものを軽々と運んだりする姿や、襲ってくる痴漢を撃退する時の姿などはやはりかつこよかった。

「まあ、痴漢、暴漢その他全て侍従長様目当てですけど」

むしろ、夜道を共に歩いていて危険なのは侍従長様だが。

「それは言わないで」

私の鼻を指で突つきながら、侍従長様が溜息をついた。

「ま、いいか——まだ」

「え？」

「うつん。でも、君ぐらいだよ、僕の事をそんなにはっきりと男って断言するのは」

そうだろうか？

というか、侍従長様は男なのだから男と言って何が悪いのか。

……はっ！ もしや、女になりたいとかそついう願望が。

「ないから、マジでないから」

「侍従長様？！ いつのまに読心術をつ」

「顔に書いてるんだよ。つてか、女になりたくないから。むしろ、僕は男になりたいね。かつこいい男。好きな女を守れるような」

そつ言う侍従長様の顔は、決意に満ちながらも何処か辛そうだった。

まるで、決して手の届かないものを得ようともがいているように。

「……じゃあ、一緒に頑張りますよう」

「え？」

「私も、これから幸せになる為に頑張りますから」

「……一緒に、君はこの仕事を辞めるんだよね？」

「ええ。でも、場所は違つても頑張れますから。だから私も新しい場所で頑張ります」

私をジツと見る侍従長様に笑いかける。

「……君は、頑張れるの？ こんなに苦しい思いをして」

「頑張つて来ましたからね」

抱えた、叶わぬ恋心に苦しみながら。

「でも、私が頑張つて来れたのはお二人の御陰ですよ」

「……」

「副事務長様と侍従長様のお二人が居てくれたから」

だから、頑張つてこれた。

どんなに苦しくても、ここまで来れた。

「こつ見えても、お二人と離れるのも哀しいんですよ？」

黙つたままの侍従長様に私は先を続けた。

「本当に、沢山助けられました。決して世間に誇れる立場じゃなくても、いえ、強引に宰相様の傷ついた心を利用して手に入れた筈なのに、私は、本当に」

侍従長様に向かって笑う。

まだ、時間はあるけれど。

それでも言いたかった。

「ありがとうございます」

心からの感謝を告げる。

宰相様への愛とは違うが、それでも副事務兆様と侍従長様に抱く深い親愛の思い。

いつか二人も、あの最悪な媚薬の手を逃れて愛する女性と幸せになつて欲しい。

本当に、心から愛する女性と。

「なんで、そんな顔するんだよ」

狂おしい声が耳元に聞こえたかと思つた瞬間、私は動けなくなつた。

「なんで、なんで」

「あ——」

「そんな顔したら、我慢出来なくなる、止まらなくなるのに」

私を抱き締める侍従長様。

何が起きているのか。

一体何が。

「まだ時間はあるから。もっと時間をかけてつて。宰相と、あいつと別れるなら、僕にも、俺にもチャンスがあるかもつて」

何を、言っているのだろう。

「ずっと、初めて見た時はそんなんじゃない、でも、一緒に居て、僕は、俺は、俺は——」

その時、ガタンという音が近くから聞こえて、私は侍従長様の胸から顔を上げた。

そこに居たのは。

「宰……相……様」

何処までも冷たい表情を浮かべた宰相様が立っていた。

海国宰相×海国文官？

全てが凍り付く。

心も、言葉を紡ぐ口も、視線も。

時すらも凍り付く中、私は宰相様から視線を外せなかった。

外せば、全てが終わる——そんな恐ろしい考えすら頭によぎる。

まるで此処だけ他の空間から切り離されたように、全ての音が消える。

私の部屋のある場所は、王宮の片隅で、人は殆ど来ない。

ましてやこの時間なら、尚更だ。

だから、余計に静寂が痛い。

宰相様は何も言わなかった。

ただ、私達を、私を見ていた。

何の感情もない、眼差しで。

せめて怒りでも浮かんでくれればどれほど心が安らいだか。

それほど冷たい眼差しに、私は息をするのも苦しくなる。

宰相様は何も言わない。

ただそこに立っているだけ。

けれど、私は激しく責め立てられる思いだった。

全身を氷の剣で貫かれたとしても、此処までの痛みは憶えないだろう。

もう一人の私が叫ぶ。

すぐに侍従長様から離れるべきだと。

しかし体が動かない。

また侍従長様が私を抱き締める腕に力を込める。

離してと言わなければ。

なのに声が出ない。

そうして端から見れば、恋人同士の様な状態となった私達を、宰相様は無言で見つめていた。

苦しい。

辛い。

違う。

申し訳ありません。

幾つもの言葉が浮かぶ。

いや、そもそもどうして謝っているのだろう。

宰相様のセフレの時ならまだしも、今の私は完全なるフリーだ。
きちんとセフレ終了を告げてきた。

だから誰と一緒に居たって別に何の問題もないではないか。

なのに、どうして、私は。

驚き、焦り、羞恥、後悔。

なんで、こんな。

「……か」

宰相様の声が聞こえ、私の金縛りがとける。

何の問題もない筈なのに、口が勝手に謝罪の言葉を述べようとす
る。

けれど、それは宰相様自身によって封じられた。

「そういう事か」

軽蔑。

そう、軽蔑。

そんな眼差しで宰相様は私を見ていた。

軽蔑、侮蔑、蔑み。

今までに数回だけ見た事がある。

宰相様が信用に値しない相手に向けた視線。

それを、今、私は向けられている。

今まで一度も、セフレになると宣言した時でさえ、そんな目を向
けられた事はなかった。

なのに、今、私はその対象となっている。

そこまで一気に、堕ちた。

ああ、堕ちてしまった。

足下が崩れる。

今まで築きあげてきたものが、培ってきたものが、その全てが壊れる。

信用、信賴、絆。

セフレを辞めても部下としての関係は残る。

けれど今、それすらも私の手からすり抜けてしまった。

やめて、見ないで。

何処までも冷たい蔑みの眼差しが私をズタズタにする。

磨き抜かれた刀で四肢を切り落とされても、これほどの痛みではない筈だ。

痛い。

痛い。

見ないで。

ワタシヲミナイデ。

「突然セフレを辞めたいというからどうしたのかと思えば……他の男と付き合う為か」

鼻で笑う。

侮蔑に染まる瞳がイヤらしく歪んだ。

それでもなお美しい宰相様。

美しくて、綺麗過ぎて、側に居る事さえ許されない。

いや、逆に自分が汚いものに思えてくる。

全身から力が抜けていく。

そんな私を侍従長様が慌てて抱き留めた。

宰相様から感じられる侮蔑の気配が強まる。

「しかも選んだ男がよりもよってそれか。女よりも女らしい、男の下で腰を振る愛玩動物とはな」

侍従長様を侮蔑する言葉に、空になっていく頭が反応した。

何故侍従長様がそんな侮蔑を受けなければならないのか。

宰相様の言葉とは思えなかった。

この国の後宮を見れば分るように、その美貌ゆえに囚われ女とし

て凌辱されてきた美しい男達。

侍従長様だけでなく、宰相様だって同じ筈だ。

自分の美貌を呪い、自分を虐げた者達を呪い、そんな運命を与えたこの世の全てを呪い続けた。

中には愛する者を奪われ、また愛する者を守る為に心を偽り続けなければならぬ者達も居た。

尊厳も何もかも奪われ、ただの愛玩動物として、妾として、妻として、男である事を否定されて女として強制的に生かし続けられた。死さえ奪われて。

そんな経験をした一人である宰相様だからこそ、侍従長様に向けた言葉が信じられなかった。

好きでそんな事をしていたわけではない。

凶悪な媚薬を使用され、今も男を受け入れなければ媚薬の後遺症で狂い死ぬ。

それこそ自分の意思すらも狂わせ、ただ男を求め彷徨い歩く肉の塊となる。

最も忌避する存在になる。

それを防ぐ為に、宰相様と侍従長様、副事務長様は協定を結んだ。いつか出来るかもしれない解毒剤を待つ為に、いつか出来るかもしれない治療法を待つ為に。

きっとその媚薬の犠牲者達はもつともつと多いだろう。

たとえその媚薬でなくても、別の媚薬や、野獣のような男達から受けた性的虐待という暴力、更には精神的な虐待により女にされた者達の悲劇は今も続く。

それを知っている、筈なのに。
どうして。

そんなことを言えるのか！！

「訂正して下さい！」

私は宰相様に向けて、初めて、こんな強い怒りをぶつけていた。
一度吹き出した心は止まらない。

それは、今まで押し込めてきた苦しみも混じり更に大きな物となる。

自分で望んだ筈の関係。
いつか終わる筈の関係。

それが分っていて結んだのは私。

この身に渦巻く怒りはあまりにも身勝手過ぎる。
筈なのに、止められない。

「それにどうして、宰相様にそんな事を言われなきゃならないんですかっ！」

「っ！」

驚いた様に目を見開く宰相様。

けれど、たぶんそれは私の態度に驚いているのだろう。

今まで従順に従い、それこそ刃向かうなんて考えもしなかった――
いや、刃向かう筈もないただの道具が、突然暴走を始めたのだから。

道具。

私は道具。

宰相様の為に動く、ただのモノ。

道具が使えなくなったらどうするのか。

そんな事は考えずともわかる。

使えない道具は捨てるしかない。

暴走した道具は壊すしかない。

道具は使うためにある。

使えなければ、意味はない。

「生意気だ」

怒りに染まった宰相様の瞳が、血走った瞳が、私を睨み付ける。
燃える、膨れる、暴れる。

渦巻く怒りが、最後の堰を切って流れ出す。

「ただの、抱き人形の、くせに」

その言葉が耳に入った時、私の中の何かが音を立てて壊れていっ

た。

それは、心の中で最後の最後まで捨てられずに残っていたもの。何処かで、期待していた。

何度も、何度も壊して、捨てて、その度に最後と決めて。なのにまだ残っていたのか。

「人形なら人形らしく大人しくしていればいいっ！」

伸ばされた手が、私へと迫る。

けれど、目の前でその手は弾かれた。

「っ！」

「人が黙ってれば何だよその言い草」

「黙れ！ この愛玩人形！」

愛玩人形——それは、過去に侍従長様を飼っていた男達が侍従長様を呼ぶ時の呼び名だった。

人形の様に愛らしく可憐な侍従長様は、そうやって生き人形同然に愛でられた。

衣服をはぎ取られ、鎖と枷をつけられ、望まぬ凌辱を受けた。

そんな過去を持つ侍従長様への禁句。

それを宰相様は躊躇なく言い放った。

頭に血が上りすぎての結果と思いたい。

けれど、宰相様の目を見れば、残念ながらそれはなかった。

侮蔑と共に現れた凶悪な敵意、憎悪、殺意。

灼熱のマグマよりも熱く、氷河の氷よりも冷たい。

そんな相反する二つを宿し、絡め、創り出される恐ろしいまでの憎しみに私の体がガタガタと震え出す。

恐い、恐い、恐い！！

いつもその視線は敵に向けられた。

国の敵、王の敵、民の敵。

そして、宰相様にとっての敵。

その敵に、今、私はなった。

そう——敵なのだ。

宰相様にとっては排除すべき、忌むべき存在。

もうその腕が抱き締めてくれる事はない。

時折見せてくれる笑顔も、部下として側に近付く事も出来ない。

まるで真綿で首を絞められていくようだった。

いや、ただの真綿ではなく、綿に隠れ潜む氷の棘がぐさりと喉に突き刺さったままじわじわと締められていく。

恐い、消えたい。

恐い、居なくなりたい。

恐い、死にたい。

今すぐ死んだ方がマシという程のそれに、私の齒がガチガチと鳴る。

宰相様と侍従長様は互いににらみ合っている。

あれから、一つも言葉は出てこない。

二つの怒りが、ぶつかりあい火花を散らす。

今なら視線だけで魔族の一人や二人なら簡単に瞬殺できるだろう。もう駄目だ。

私の心が悲鳴をあげる。

「寄越せ」

宰相様の声に、私は噛みかけた舌をそのままに固まった。

よこせ？

分らない。

何を言ってるのか。

「それを寄越せ」

「イヤだね。もう君とこの子は何の関係もないんだから」

「なんだと？」

「確かに昨日まではそうだったと思う。でも、もうこの子は関係の終了を告げたんだから、もう宰相とは関係ないんだよ」

「俺は認めてないが」

「は？ 認めてない？ 認めない、それで済むと思うの？ 泉国と戦争する気？」

戦争——それが、私の心をつなぎ止める。

「何を」

「何をじゃないよ。それとも何？ 海国の国力なら別に戦っても勝てるか思ってる？ ふざけるなよ。言っとくけど、戦争始める気なら僕は今此処で君を殺すよ」

侍従長様の言葉に私は息を呑んだ。

「確かに避けられない戦いというものはある。でも、君の我が儘で引き起こされる戦いは許さない。もちろん、これは君だけじゃなくて、王宮に勤める、政治に関わる全ての者達に当て嵌まることだよ」

厳しい眼差し、声で、侍従長様は更に言い募る。

「君は今の自分の立場を分ってるの？ はっ！ この子の方がよほど分ってるよ。今の状態で、今のままで君がこの子を連れて行く。それによって引き起こされるのは、泉国の王妹への侮辱と、かの国の怒りだ」

「っ?!」

宰相様が息を呑むのが分った。

「あの国は一度火がつくと止まらないよ。特に、あの国で聖女と呼ばれているほど民達、貴族達から人気の高い王妹に関しては。多くの男達が手に入れようと争っている。そんな中で、王が持ち込まれる全ての縁談を断る中で、初めて自ら縁談を持ち込んだ相手が君」

改めて告げられた内容に私の胸が締め付けられる。

そう……妹を寵愛する泉王が、初めて持つて来た縁談。

「その聡明さ、美しさ、全てにおいて周辺国にまで広く知れ渡る美姫との縁談があるというのに、自ら身を引こうとするセフレを強引に引き留めるなんて醜聞が立ったらどうなる？ 思い切り相手への侮辱だよな？ 下手したら、この子まで巻き込まれる」

侍従長様が私を強く抱き締める。

まるで失ってたまるものかというように。

「それだけじゃない、王妹を辱められたとして戦だよ、戦。何度も言っけど、あの国にとって王妹は聖女同然。王妹の為なら、起こす

よ——」

それほどに、あの国にとって王妹の存在は大きい。大きすぎて、暴発寸前の風船だと侍従長様は小さく呟いた。

この国と同じく、賢君が統治する泉国。

有能な上層部も居り、民達も国の繁栄の為に尽力し続けている。

そんな彼らにとつての希望、光——それが王妹。

会った事はない。

けれど、きつととても素敵の方なのだろう。

伝え聞く噂は全て好意的なものであり、どれほど多くの男達が王妹を花嫁にしたいと願っているかというものばかり。

誰が彼女の夫になるのか。

誰が彼女を花嫁に迎えるのか。

その注目は自国ばかりか周辺国からも集まっている。

そこで傾国の美姫という言葉を出した。

多くの男達はその身を巡って争い、権力者達がこぞって欲する麗しの美姫。

きつと彼女はそれなのだろう。

そういえば、凧国の宰相閣下の妹である明燐姫様や津国の愛蓮様もそうだった筈。

そこに泉国の王妹を加えて——そう、その三姫で三大傾国と呼ばれていたのを思い出す。

彼女達こそ、傾国。

美しさも聡明さも、男を惑わしその本能を揺さぶり独占欲をかきたてる高嶺の花。

それに比べて、私は岩陰に生えるタダの雑草だ。

比べるまでもない。

比べるなんて烏滸がましい。

「まあ、向こうだって今まで一人も遊び相手や関係した相手が居ないなんて思っていない」

それは有り得ないと、誰もが知っている。

特に美しい者ならば、恐ろしく幸運でもない限りは殆ど全てが被害にあつたと言っている。

それほど、大戦中は酷かった。

美しければ攫われ、奪われ、奴隷狩りにあい、権力者の慰み者や妻妾、愛玩動物にされる——それが、常識、世界の決まりとでも言うような時代だったから。

そしてそれは、あの時代を経験してきた者達は皆知っている。

知っているから、だから言わない。

そう——侍従長様の言うとおり、今まで一人も居なかったなんて思わない。

「でも、だからといって結婚後に居るのはアウトだよ」

「……」

「結婚前に全ての関係を清算する。それが、ケジメってもんじゃない？」

何処かからかう様に言う侍従長様に鋭い舌打ちがなされる。

「なら、お前はどつする？」

侍従長様も宰相様のセフレの一人。

関係を清算するなら、当然侍従長様も別れなければならない。

「別に僕はいいよ。副事務長が居るから。それより問題は宰相だよね？ 君は男に抱かれ、男を抱きたいという衝動に悩まされてる。

まあ、それぐらいなら向こうに事情を説明して、解毒剤か治療法が出来るまでの間ぐらいなら目を瞑って貰えると思うよ」

向こうの国にも、凶悪な媚薬の後遺症に悩む者達が居るといふ。

それは上層部にも。

だから、事情を話せば分って貰えると侍従長様は笑う。

「まあ別の相手が良いならそれでもいいけど？ でも、この子は駄目だ。女の子だからね。王妹を苦しめる存在として認識される。だから、絶対に駄目」

そう……私だけ、駄目だ。

「だから、俺と別れてそいつはさっさと別の男のセフレになると？」

「黙りなよ。いくら君でも怒るよ」

「はっ！ そうじゃないか。俺と別れると告げた次の日にお前と抱き合っている。この状態の何処を見て、そいつが尻軽じゃないと言える？　すぐに次の男が欲しくてたまらなかったからだろうが！」

「訂正しろ。この子は尻軽じゃない。それにセフレって何？　恋人って言えないの？」

「そいつなんてセフレで十分だ」
セフレで十分。

私は侍従長様の胸に顔を埋めた。

涙が、抑えきれなかったから。

そう言われる様な行動をとり続けてきたのは私。

なのに、どうしてこんなにも涙が出るのか。

「君、本気でそう言ってるの？」

「煩い。それよりとっとと寄越せ」

「しかもさっき言った事を全く聞いてないの？」

「聞いたさ。だが、まだ縁談まで時間があるからな」

「それまで、たっぷりとこの子を使って楽しむと？　最悪な男だね」

「そういう男達に飼われてきたからな」

ハッと笑う宰相様の声に、一瞬投げやりなものを感じた気がした。

「とにかく、寄越せ。俺はまだ契約解除を認めてない」

「しつこい男は嫌われるよ。それに、契約の条件は揃った筈だよ。

君が結婚するか愛しい相手が出来たら、そこで終わり。君は結婚の可能性が高い縁談をする。だから、この子との関係は終わりなんだよ」

「黙れ！　お前の指図は受けないっ！」

そう言った途端、ガツと強い力で二の腕を掴まれる。

「こっちに来い！」

「やめなよ！」

私を留めようとする侍従長様と、私を連れて行こうとする宰相様。二人がそれぞれから私を引っばる。

痛い。

やはりどんなに見た目が美女でも、やはり男。
手加減はしてくれているかもしれないが、一歩間違えれば真つ二
つに裂かれそうだ。

互いに離せと言いながら、私を引っぱる。

両手に花。

二人の美女——いや、美男子に取り合いされる私。

普通なら萌えるシユチュエーションとやらだが、今の私にそんな
余裕はない。

やっぱりこのまま真つ二つエンド。

そんな事を考えていた時、悲鳴があがった。

廊下の奥に見えたのは一人の少女。

それが王妃様だと知った分った時、私の体は侍従長様の腕の中に
居た。

宰相様が、自分の手を茫然と見ていたのは一瞬だった。

「ちよつ、一体何を」

王妃様が私達の元に来る。

それとは裏腹に、宰相様が優雅な笑みを浮かべた。

「何でもないですよ」

そう言つと、王妃様の腕を掴む。

「また脱走されて来たのですね。駄目ですよ」

「え、ちょ、や、ちよつとま——」

そのまま連れていかれる王妃様を、私は侍従長様と一緒に茫然と
見送る。

と、宰相様がちらりと此方を見た。

瞬間、震え上がる様な怒りに貫かれ、私は侍従長様に抱かれてい
なければその場にへたり込んでいた。

赤い唇が、動く。

それだけで分ってしまった。

音もない、ただの唇の動き。

けれど宰相様は諦めていない。

きつとまた、来る。

あの、冷たい眼差しを浮かべて。

宰相様の姿が見えなくなつた後も私は震え続けた。

そんな私を侍従長様が優しく抱き締めた。

「大丈夫、僕が守るから」

優しい声、優しい笑み。

「だから、大丈夫」

多くの男達を魅せてきた笑みではなく、それは。

「なんで……」

「言つたでしょ？ 奥さんになつてつて」

いや、奥さんつてどう？と言つただけだ。

しかし茶化す事なんて出来ないほど真剣な視線に絡め取られる。

「あれ、本気。僕は、ずっと君のことが好きだつたんだ」

「……」

「最初は、物好きな事をする子つて印象だった。あと、宰相の部下の一人つて。でも、君がセフレになつて、前よりもずっと一緒に居て、話をして……そうしているうちに、好きになつてつた」

「侍従長様……」

「それに、君は僕をきちんと男として見てくれる」

この女性の様な容姿から、女として生きる事を強いられた。

それは解放された今でも肉体と魂に染みつき、自然と女性らしく振る舞ってしまう。

こんな、穢れた体——そう、侍従長様が自嘲した。

「それでも君は、僕のことを男として扱ってくれた」

何の躊躇いもなく、それが当然だと言うように、男として見てくれたと笑う。

「でもそれは理由の一つ。君が好きなんだ。理屈とか、理由とか全て抜きにしてさ」

何時の頃からか、セフレとして宰相様に抱かれる私の姿を見て心

を痛めるようになったと。

激しい嫉妬を憶えるようになったのだと。

宰相に渡したくない、自分だけのものにしたい、セフレを辞めさせて、自分だけのものに。

そう告げた侍従長様が苦笑する。

「好きなんだ、君の事。ううん、愛してる、男として」

自覚し、でも一度は諦めたという。

私の宰相様への気持ちに気付いたから。

でも、今こうして私はセフレ関係を清算した。

だから――。

「けど本当はこんなに急ぐ気はなかったんだ」

もつと時間をかけて。

新しく、初めて、築き上げたかったという。

「僕じゃ駄目？」

「侍従長様……」

「本当はさ、半分ぐらいは、ううん、さっきまではね、宰相との仲を応援してやりたいって思いがあった。好きだけど、それでもまだ今なら抑えられるって」

宰相様に見付かる前に自分の思いがあふれ出しても尚。

まだ、戻れると、無かった事にしてやれると。

「やっぱり君の思いを考えたら、僕の気持ちを封印しても、手伝ってあげたいって。でも、あんな態度を取るなら、渡せない。渡したくない。じゃないと、あまりにも惨めじゃん」

少しだけ泣き笑いする様に笑うのは、一体誰なのか。

侍従長様は男。

でも、男は男でも、まるで知らない相手のように思える。

あの優しい侍従長様は何処に行ってしまったのだろう。

此処に居るのは、私を女として求める一人の異性。

「わた、しは」

「ごめん、突然過ぎたね。でも、気持ちは本当。君が振り向いてく

れるなら、何でもする。したい。けど、今は……」

ガクンと体の力が抜ける。

もう何度も抜けてた筈なのに、まだ抜けるだけのものが残っていたのか。

そして意識が、少しずつ暗くなっていく。

「沢山あったからね。ゆっくり休んだ方が良い」
大丈夫だから。

最後に、そんな言葉を聞いた気がした。

海国宰相×海国文官？

全てが悪い夢だと思いたかった。

けれど、全てが逃れようのない現実だった。

侍従長様に抱きしめられている姿を宰相様に見られた挙げ句、侍従長様と宰相様は言い争ってしまった。

原因は私。

宰相様のセフレでありながら、侍従長様と抱き合っていたから。いや、もう私はセフレではない。

だから誰と抱き合っていたようと構わないのに、この激しい罪悪感は一切何なのだろう。

目を覚ました時、私は自分の部屋の寝台で目覚めた。

全てが夢だったらと思いたかったけれど、恐る恐る出仕した仕事場にてその思いは裏切られた。

宰相様の睨付ける様な視線に身がすくみ、まるで針のむしろ状態だった。

しかも侍従長様が何かと私の所に来ては構うので、余計に宰相様の機嫌が悪くなる。

そしてすぐに始まる宰相様と侍従長様の言い合いは激しさを増し、職場の雰囲気が悪くなるを超えて吹雪が吹き荒れていた。

同僚達は一体何があったのかと恐れおののき、当然仕事の効率は下がる。

そうして結局は終わりきらなかった仕事は残業となり、同僚達は私も含めて定時をとくに過ぎた夜更けになっても仕事を続ける羽目となった。

そうして残業が始まって一週間が経った。

「ごめん、これ届けてくるから」

「わかった」

一番仲の良い同僚が他の部署に書類を届けに駆けていく。
だがその疲れた様な後ろ姿に私は申し訳なく思った。

また、かすかに聞こえる疲れを含む複数のため息に視線を巡らせれば、他の同僚達が書類と格闘しているのが見えた。

この現状を作り出しているのは紛れもなく私だ。
私の浅慮な行いが宰相様と侍従長様をいがみ合わせ、その余波を職場に及ぼしてしまう羽目となっている。

まさかこんな事になるとは思ってもみなかった。

ただ、セフレをやめればそれですむと思っていた。

別の仕事を探して、文官を退職して、新しい場所で生きていく。

それで済む筈だったのに、気づけば多くの人達に迷惑をかけている。

私は一体何をしたかったのだろうか。

美しい姫君を妻に迎える宰相様との関係を清算し、宰相様の新しい門出を祝福し、姫君が悲しまないようあらゆる禍根を残さないようにする。

宰相様のセフレが何を言うのかという話だが、それが私に出来る唯一の事だった。

なのに今、私はこうして多くの人達に迷惑ばかりかけている。

こんな筈じゃなかった。
こんな筈では。

そして私は、侍従長様の思いからも逃げようとしている。
好きだと言ってくれたのに。
愛していると言ってくれたのに。

私は、それにたいして何の反応も返していない。
秘める筈だった思いを告げてくれたのに、答えを返すどころかも
ういっぱいいっぱいで。

頭の中がぐちゃぐちゃだった。
優柔不断でどっちつかずで、何処までも逃げ続ける卑怯者。

ピチャンと筆から墨が滴り落ち、手元の紙を濡らしていく。

「書き直しか……」

黒く染まってしまった紙はもう使えない。
私はため息をつきながら、新しい紙に筆を滑らせていった。

そうして最後の書類を書き上げた私は、気づけば職場に一人残さ
れていた。

一瞬惚けた様に周囲を見回したが、そういえば同僚達が帰りの挨拶
をしていくのを見送った気がする。
残りは明日すれば良いという仲の良い同僚の言葉も聞いたのを思
い出し、ようやく状況判断が出来た。

それらを断り、最後まで仕事を終わらせようとして残り続けた結
果、今の状況になったのだ。

広い職場にたった一人。

灯りはついているが、シンとした静寂と窓の外の闇が孤独感を煽る。

とはいえ、新人の頃はいつもこうして遅くまで残っていた事もあり、私にとってはどこか懐かしい気もした。

そういえば、あときはちよくちよく宰相様が様子を見に来ていたっけ。

宰相様に直々に使えるようにしてやると言われ、びしびし鍛えられたけれど、どんなに遅くなっても最後は宰相様が来て書類をチェックしてくださった。

そうしてきちんと全て出し終わると、その美貌に淡い笑みを浮かべて言ってくれたのだ。

『よく頑張ったな』

そして糖分をとれとばかりに、口の中にライチを放り込んでくれた。

宰相様の屋敷の庭に生えているとかで、よく食べさせてもらったものだ。

私がライチ好きだとどこかで聞いたのだろう。

そうして多いときには一籠も渡され、腐りきる前に食べようとして二、三日ライチだけで過ごして怒られた事もある。

『知っているか？ ライチは、人間界のとある皇帝の寵姫が好きだった果物だそう。傾国の美姫として後世語り継がれるほどの美女が愛した果物らしい』

じゃあ傾国の美姫じゃない私が食べたらずいですね、と答えた私に、宰相様はお腹を抱えて笑われた。

『何言ってる。その国はどうか知らないが、この国にそんな法律があるわけない。食べたければ食べればいいさ』

そうして私の口の中にライチを押し込んでくれた。

あの時のライチは、食堂で出されるものより美味しかった気がする。

口寂しさを感じて机の上を見れば、ライチの果汁で作った飴があった。

それを手に取り、包装紙を開ける。

「またライチか」

「っ！」

突然背後から声をかけられ、私の手から転げ落ちたあめ玉が床を転がっていく。

だが、普段ならあめ玉を追いかける私の体は条件反射のように転がったあめ玉とは逆の方向を振り返る。

そこに立っていた相手に、私は息をのんだ。

居るはずがない相手だった。

いや、昔は、セフレをやめる前まではよく来ていたが、それでも今は……。

「宰相様……」

「残業か、しかも最後まで残っているなんて相変わらず要領が悪いな」

「……」

確かにその通りだが、宰相様の小馬鹿にした様な表情にショックを受ける。

今まではそんな顔を向けられた事なんてなかったのに。

「で、終わったのか？」

「え？」

「仕事だ」

「あ、はい。後は朝一であの書類を届ければそれで」

既に届け先の部署も終わっている。
だから朝一で届けるしかない。

「そ、その、私ももう帰るので」

荷物を纏め、灯りを消し、鍵をかける。

それが一番最後に職場を出る官吏の役目だ。

しかし、荷物を纏めて灯りを消した所で、私は鍵が所定の場所
ない事に気づいた。

「あ、あれ？」

「鍵ならここだ」

宰相様が鍵を手を持ち揺らしているのが見えた。

一体なぜと問おうとしたが、その前に腕を掴まれて外に出される。
そうしてさっさと施錠した宰相様はその鍵を天井へと投げた。

「え?!」

その行動にぎょつとした私だが、次の瞬間更に驚いた。
投げられ宙に浮いた鍵がふつとまるで消えるように姿を消したのだ。

「あ、え?!」

「影に渡しただけだ。管理室まで届けるように頼んだ」

影という言葉に宰相様の子飼いの存在が思い出される。

この国の王のように、宰相様も自分の手足となって動く影の存在が数名ほど存在している。

しかしまさか鍵を返す為だけに使われるとは……。

が、啞然としていた私は突然腕を強くひかれてつんのめった。

「っ!」

「何を惚けている、とつとと行くぞ」

「行く?」

私の手を掴み強く引き寄せる宰相様に混乱しながらも、何とか足を踏ん張って抵抗する。

「行くって何処にですかっ」

「そんなの決まってるだろう? 求めにはいつでも応じると言ったのはお前だ」

それが、何を意味しているのかすぐに分かった。

セフレとして契約を結んだ時に私は確かにそう言ったこともある。
しかし、それはセフレとしての関係が成り立っていた時のものであり、関係が終わった今のものではない。

「さ、宰相様っ！」
「行くぞ」

強引に引きずられ、私は歩かされる中違うと叫び続けた。
こんな時間に大声を出せば誰かが駆けつけてくるという考えすら吹っ飛び、宰相様に懇願する。

「私と宰相様の関係はもう終わっただんです！　ですから、もう私はお相手は出来ないんですっ」

「そうだな。お前は侍従長と寝たんだからな」
「え？」

侍従長と寝た？
一体それはどういう事か。

「聞きもしないのにわざわざ話してくれた者達が居る。そう、俺のセフレをしている時からお前と侍従長は深い仲だったと。いや、侍従長に近寄るためにお前は俺のセフレになったのだと」

「なっ?!」
「確かにそうでもなさや、お前みたいな種類の女がセフレなんてものにはならないだろうな。愛する者の為には手段を問わない。好きでもない男の愛玩動物として体まで売る。全ては好きな相手に近づくため」

違うと叫びたかった。
けれど、ギラギラとした視線を向けてくる宰相様が恐ろしくて声が出せない。
もし何か口にした途端、その喉に食らいつかれそんな気がしたから。

「結局、お前の望み通り侍従長はお前を特別な相手として見た。まあ、確かにセフレ仲間なんていう異常な関係は吊り橋効果以上に影響力がありそうだしなあ。はは、さしずめ俺はキューピッド役、いや、だまされた間抜けな道化の方がいいか」

「さ……い……しようさま」

「そう、俺は騙されていた。下心がなさそうな顔をしてすり寄ってきた女狐にな」

女狐——その言葉に、何とかして逃げだそうとしていた私の体から力が抜ける。

「上手くやった——そう思っているなら、とんだ大馬鹿だ。俺は俺に刃向かう相手には容赦しない。たとえば、相手が女だろうと」

宰相様が私の耳元で囁く。

——報いを受けさせてやる

まるで魂を望む悪魔の様な声音に、私はガタガタと震え出す。

違う、誤解なのに。

だがその誤解を作り出したのは私だ。

セフレをやめる。

宰相様と泉王の王妹様との仲を祝福する。

王妹様の憂いにならないように、全ての関係を清算して仕事を辞める。

ただ、それだけを望んでいたのに。

宰相様の幸せを望んでいたのに。

荷物を放り出し、廊下を駆けた私は、中庭に飛び出たところで宰相様に捕まった。

それでも必死に抵抗したけれど、とうとう茂みの中に押し倒され、服をはぎ取られた。

凄まじい衝撃と痛みに世界が真っ白になる。

覚えているのは、満天の星空だった。

夜遅くまで仕事した後、書類のチェックに来た宰相様と一緒に帰る中で見た星空の美しさと何一つ変わらないのに。

どうして、私は……。

それが、海国王宮で見た最後の星空だった。

海国宰相×海国文官？

夜の道をひた走る。

月の無い新月の闇が、この身を覆い隠してくれるのを願いながら、私は必死に走った。

激しい誘惑にかられて後ろを振り返って後悔した。

灯りが付く。

騒がしくなり始めた屋敷に、私が抜け出した事がバレたのだと知った。

いつかは知られると分かっていたが、これほど早くに気づかれるとは思っていなかった。

けれど、もう後戻りは出来ない。

次に捕まれば、私は今度こそあの檻から出られなくなる――。

あの日、宰相様に中庭で体を奪われた私は、そのまま宰相様の別宅に連れ込まれた。

宰相様の本邸は王宮の敷地内にあるが、そちらに連れ込まれなかったのは私の存在を王宮から覆い隠す為だったのかもしれない。

壮絶な陵辱に意識を飛ばし、別宅で目覚めた私に待っていたのは、自由のない虜囚生活だった。

広い別宅の中でも、離れと呼ばれる場所に私は閉じ込められた。それは、屋敷の者達はまず近づかないような場所で、私の世話をする侍女数人以外には宰相様しか訪れなかった。

ただ虜囚と言っても、生活の場として与えられた場所は、私には不相応なものばかりだった。

広すぎる部屋は続き部屋も含めて三室あり、家具も調度品も全て高級品で埋め尽くされていた。

生活していく為に必要なものだけではなく、贅沢品と呼ばれる物もあった。

毎日身に纏う衣服は貴族の姫君が着るような衣装ばかりだし、装飾品のあまりの美しさにはしばし凍り付いたほどだ。

浴室もトイレも全て揃っていて、食事を作る場所もあったが、基本的に調理場は私の部屋の外にある為、部屋から出られない私が入った事は一度も無い。

何もかもが揃っていた部屋。

けれど、窓は全てはめ殺しの細工窓で牢屋を思わせ、部屋の扉には外から鍵がかけられていた。

それが開くのは、食事や贈り物を運ぶ侍女の訪れか、宰相様が来た時だけだった。

毎夜のように離れを訪れる宰相様は、私に夜伽を強要した。

拒んだところで、不機嫌になった宰相様に強引に体を奪われるかの違いだけで、一週間もしないうちに私は抵抗するのをやめた。

それは、不機嫌になった宰相様が避妊をしない事に気づいたからだ。

けれど、従順にしていれば、宰相様は冷静に振る舞われる。

私は子を身ごもる事だけは避けたくて、必死に宰相様の機嫌をとった。

ただ、そんな私でも、最初の頃は宰相様を説得し続けた。

こんな事をして何になるのか。

私をここに閉じ込め続けたら、周囲が異変に気づく。

宰相様には見合いが控えているのに、屋敷に女性を閉じ込めていては泉国が誤解する。

私は家族を養わなければならないし、面倒を見るためにも家に帰して。

けれど、私の説得は全て宰相様に封じられた。

というのも、元々辞表届けを私が出していた事もあり、宰相様を手を少し回すだけで正式に退職扱いになったという事。

家族には、宰相様から私が別の仕事に就く事になり、その仕事場に単身赴任で行くことになったと説明した事。

幼い兄弟達の面倒は、宰相様の信頼おける方が見ているという事。

だから周囲が異変に気づく事はないと言われた。

「まあ、あいつだけは五月蠅かったがな」

あいつ——それは、侍従長様だ。

あの方は最後まで私の行方を知りたがって宰相様に詰め寄ったと言う。

しかしそれ以上の事は教えてもらえなかった。

また、泉国との事についても私の訴えは全て流されてしまい、結局私の説得は全て封じられてしまった。

ただ、それでも私は諦めていなかった。
泉国の王妹の為にも、私は絶対に宰相様から離れなければなら
ないのだから。

しかしこれといった打開策はなく、一週間、一ヶ月。

無為に時は過ぎ去り、私は日々宰相様に体をむさぼられ続けた。
そしてそれに慣れてきた自分も居た。

最初こそ激しさを増したが、次第に労るような抱き方となり、抵
抗さえしなければまるで恋人同士の逢瀬かとも錯覚する夜の時間。

毎日届けられる贈り物に心は動かされずとも、宰相様の訪れに反
応する私は酷く現金なのだろう。

いつまでもこの時間が続いて欲しい。

たとえ終わりが待っているとしても、気づけばそんな事を思っ
ていた。

だから、バチがあたったのだ。

離れに閉じ込められてから二ヶ月目。

その夜、宰相様は離れに来ることはなかった。

付けられている侍女に聞けば、王宮での仕事が長引いているとの
事だった。

しかし、その次の日も、そのまた次の日も宰相様は来なかった。

次の日も、次の日も。

気づけば、二週間が経過しようとしていたその日、聞き覚えのな
い声を耳にした。

離れの窓からそつと外をうかがえば、侍女姿をした少女が数人。
私に付けられた侍女ではない事から、別邸自体に勤めている侍女

達だろう。

年頃の少女達に特有などこか軽めな明るい雰囲気を漂わせ、噂話に興じていた。

私に付けられた侍女達は、必要の無い事は話さないように言い含められているせい、殆ど会話が成り立たない。

しかも、私の部屋にも必要な時以外は立ち入るうとせず、私は常に孤独に苛まれていた。

それもあつたのだろう。

夜の宰相様の訪れが、次第に嬉しく心待ちになっていったのは。

それにしても、ここに近づく者達は珍しかった。

元々この場所に用のある様な者は居らず、下働きでさえ近づかないとされていた場所だ。

話に夢中になり過ぎて迷い込んでしまったのかもしれない。

と、その話の内容が分かるほど侍女達が離れに近づき、私は耳を澄ませた。

その時、なぜ姿を隠したままにしたのかは後になっても分からない。

ただ、何かの予感があつたのかもしれない。

私の耳が、それを聞き取った。

泉国の王妹様が――。

驚き目を見開いた私がその言葉を脳裏で反芻するも、理解する間もなく耳は新たな言葉を拾っていった。

「本当にお似合いよね、宰相様と泉国の王妹様は」

「ええ、まさしく一枚の絵画。歩く絶景。あれほど美しいお二人はいらっしゃらないわ」

「あら？ 陛下は美しくないの？」

「陛下は美しいけれど、王妃様がね、なんか残念って感じだし」
「はは、言えてるわね」

「どうしてあんな平凡な王妃様を迎えたのかしら。私の方がよっぽど美人なのに」

「はいはい、あんたの文句は後で聞くから、今は宰相様の事よ」

くすくすと侍女達の笑い声が木霊する。

「宰相様は王妹様と結婚なされるのかしら」

「もちろんするでしょう！ あれほどの仲の良さだし」

「もう、出会った瞬間互いに一目惚れしたっていうか」

「いや、絶対にしてるわよ！ 二週間前の初めての顔合わせの時にはしばらく見つめ合っていたもの」

「周囲もかなり乗り気ですものね」

「特に、泉国側がもう宰相様を気に入って凄いいましいだし、これは確実に結婚すると思うわ」

「という事は、王妹様が私達の奥様になるのね」

「そうね、でもあの方なら是非とも仕えたいわ！」

「あれほど美しくて優しい方はいらっしゃらないわ……自国でも聖女様って呼ばれているらしいけど、あの方は本物の聖女様よ」

「ああ！ 早く宰相様と結婚してくださいませんかしら」

感極まったように騒ぐ年少の侍女に、年長の侍女が呆れたように言う。

「というか、いくらお二人がご結婚されても、王妹様が住まわれるのは王宮の本宅でしょう？ 別宅の侍女である私達がお側に行く事は出来ないわよ」

「ええ〜！」

「まあ、別宅の侍女達ってようは本宅に勤める事の出来なかったあぶれ者って感じだしね」

「あゝあ、落ちこぼれは辛いわね」

「何よ！ 私、絶対にあの美しい王妹様の侍女になってやるんだから！」

「はいはい——で、やばっ！ 話しているうちに変なところまで来ちゃったじゃないっ」

「げっ！ ここって、あの立ち入り禁止区域の？」

「そうよ！ しかも入った事がバレたらお目玉だわ！」

「なんで立ち入り禁止区域なの？」

「知らないわよ！ おおかた、何かやばいものでもあるんじゃないの？ まあ貴族なんてやばいものの一つや二つは抱えているって言うし」

「それこそ、妾とか」

「そんなわけないでしょ！ 居たとしても、遊び女じゃない？ けど、王妹様と結婚されるんだもの！ すぐに放り出されるわよっ」

哀れね——。

まるで私が聞いているのを知っているかのような言葉だった。

私は動けなかった。

宰相様は既に王妹様と出会っていたのだ。
という事は既に見合いは行われたのだろう。

いや、それよりも驚いたのは、それらを私は全く知らなかったという事だ。

知らないまま、ずっと逃げ出す機会を探っていた。

違う——探っていたんじゃない、このぬるま湯に浸かっていただけだ。

少し強く言われて宰相様への説得を諦めて、その後は逃げ出す機会を伺うと良いながら、私はこの生活を少しずつ受け入れ始めていた。

外と切り離され、全ての喧噪とは無縁のここで、夜ごと宰相様を受け入れる日々を、いつしか心地よく感じていたのだ。

だからこそ、私は今もここに居るのだ。

王妹様と宰相様がとつくに会った事も知らずに。

二週間——。

それは、宰相様が私のところに訪れなくなった日の始まりである。

なぜ宰相様が来なくなったのかと怯えていた。

けれど、それも当然だった。

宰相様はその日に王妹様と出会い、そして恋に落ちたのだ。

侍女達が言っていたではないか。

互いに一目惚れし、とても仲が良いと。

周囲が乗り気で、泉国は宰相様をとても気に入っていらっしやる。

二人は、結婚される。

そして王妹様は王宮の本宅に住まわれるのだらう。

それを思えば、直接顔を合わせずに良かったと思う。

もしここが本宅、または王妹様が別宅に招かれていればいつか顔を合わせてしまったかもしれない。

いや——もしかしたら、宰相様はそこまで考えていたのかもしれない。

王妹様の心を傷つけない為に、私を別宅に人知れず囲い、王妹様を王宮の本宅へと迎える。

確かに警備の面を考えても、その方が断然良い。

そう、王妹様は私と顔を合わせることはない。

しかし、それにホッとしたのもつかの間。

王妹様と顔を合わせる事はないとなれば、私の存在を王妹様が知る可能性は少ない。

いや、誰かが吹き込むかもしれないが、あの宰相様の事だからそういう可能性にも手を打っているだらう。

それに、宰相様は王妹様を迎えてからこちらには一度も訪れていない。

きつともう二度と来ることはないだらう。

偽物よりも本物。

安いものよりも高いもの。

貧乏文官よりも、美しい聖女のような泉国の王妹様を選ばない男性など居ない。

私は近いうちにここから出される。

流れる涙を無視し、私は喜んだ。

あるべき流れに戻るのだ。

この場所の事は全て夢。

そう、不相应な夢だったのだから。

私は最初から最後までセフレ以外の何ものでもなかった。
妾にすらなれない、ただの抱き人形。
けれど、それが私の選んだ道であり、その結果だった。

私はここを去る。

そして今度こそ、宰相様の下から姿を消すのだ。

長く離れている幼い兄弟の顔を思い浮かべ、未来に思いを馳せる。
その未来が、どれも暗く閉ざされている事に目をつぶって――。

実際、未来は塗りつぶされていた。

更に一週間後、宰相様は私の居る離れを訪れた。

そして、何事もなかった様に私を求めたのだ。

それに驚き、けれど怒りを覚えて私は抵抗した。

当然驚いた宰相様は私を押さえつけたが、私のいつにない激しい
抵抗には手を焼かれていた。

その優勢に私が調子にのつたのがいけなかった。

王妹様がいるにも関わらず、私を求める宰相様に私は恥知らずと
叫んでいた。

そうしてついつい、私が離れの側まで来た侍女達から話を聞いた
事を口にしてしまった。

程なく、私は自分が大失敗を犯した事に気づいた。

宰相様は何も言わず離れを出られ、小一時間もせずに遠くで騒ぎが起きた。

怯える私に同情したのか、侍女の一人が小さく囁いた。

『氣にはなりません。あれは、当然のことです。ただ、命を奪われずに追放されただけ温情と思うべきなのです』

私は問題となつた侍女達が追い出された事を知った。

私の不用意な一言のせいで、侍女達を路頭に迷わせた事実には怯え、悲鳴をあげた。

なんとこの事をしてしまったのか。

と同時に、宰相様の恐ろしさを再度認識した。

ただ彼女達は噂話をしていただけだ。

誰だつてするもので、ただそれに集中しすぎて離れにまで近づいてきてしまっただけ。

それに彼女達は真実を話していただけだ。

それは、宰相様と激しい口論をした時にしっかりと確認出来た。

宰相様は王妹様を酷く大切にされている。

だからこそ許せない。

王妹様を裏切る行為が。

そして、王妹様という愛しい相手がいるにも関わらず、戯れに私に手を出す事が。

いや、私は自ら戯れの関係を結んだ。

けれど、愛する相手が出来るまでという期限での契約だった。

その関係は終わった筈なのに、いまだこうして宰相様に囲われ続ける私。

間違いは正さなくてはならない。

気づいた時、私は外に出ようとしていた侍女を突き飛ばしていた。そして侍女の悲鳴が上がる前に私は外へと飛び出した。

離れの場所が、果たして別宅のどの位置にあるのかは分からなかったが、とにかく外に向かって走り出す。

運が良かったのだろう。

別宅に、王妹様が訪れた時に抜け出せたのが。

泉国王家の紋章の入った馬車から降りてくる王妹様の姿を遠くから見た。

そして、皆がそちらにかかりきりになっている時に、私は外へと向かって走り出した。

最初に考えたのは幼い兄弟達。

彼らを連れて、逃げなければ。

ここから、この国から。

ただ、それは酷く難しいだろう。

逃げ出す為の資金集めはどうしたらいいのか。

そして、どうやって隣国まで逃げだしたらいいのか。

隣国に抜けるにしても、あの方の影響が及ばない場所なんてこの国にはない。

絶望しかない未来。

いつしか空は灰色の雲で覆われ、豪雨が降り注ぐ。
逃げ切れるかすら分からない逃亡だが、もう私に後戻りは出来な
かった。

王×王妃？（シリアス物）（前書き）

これも続き物となります♪

警告）最後は救いがありますが、それまでがかなり痛いです。

王×王妃？（シリアス物）

愛しているよ——俺のただの一人の……

ええ、私も愛しているわ

繋いだ手を握りしめ、交わした口づけ

美しい花嫁衣装もなく、ご馳走すらなかったけれど幸せだった

大好きだった仲間達が側に居てくれて

祝福してくれて

夫の側に居られた

ただ、それだけで……

*

愛していた夫が妾妃を持ったのは、建国から五十年ほど経過した頃のことだった。

大戦が終わり、夫はその神力の強さと高い能力から王に就任した。国は、後に全ての河を司る河国として、その名を馳せる大国の一つだった。

王は国の統治者であるが、それ以上に不安定な世界を支え、国の領土を支える為に存在する。

夫は統治者としても、領土のある空間を支える存在としても有能で、上層部もまた王に次ぐ実力者達としてその力を振るっていた。

けれど――明らかに王達の負担が大きく、日に日にそれが増していく事はすぐに分った。

もともと、その当時は私の住む国だけでなく、天界十三世界中で圧倒的に神材が少なかった。

政治面でも、国の領土を支える為の力の持ち主達も、王と上層部でギリギリだった。

そんな中で、跡継であり王の力を引き継ぐ子供は、何が何でも必要だったのは言うまでも無い。

産めや増やせや育てれや。

私は王妃だった。

王の唯一の妻で、大戦中に夫と結ばれた。

けれど、王や上層部に比べるとどうか、一般市民と比べても神力は弱く、空間の安定に注ぐほどの力も無かった。

むしろ、弱い力は逆に王達後からに影響し不安定さに拍車をかけてしまう。

役立たずの王妃――。

だから、せめて子供だけでも産み育てようと思った。

他に家族は居ない。

夫だけが唯一の家族だった。

そして——結果は、妾妃を娶るという夫の言葉だった。

建国から五十年目。

本当なら建国から三年もせずに妾妃や側室の話はあったが、夫は
ずっと拒否してくれていた。

いない、お前だけでいい。

お前だけが俺の妻だ。

そう言つて、ずっとずっと役立たずの妻を守ってくれた。

空間の安定に力を注げず、かといって跡継も産めない私を、ずつ
と……ずっと……。

上層部とは仲が良かった。

共に戦った仲間達。

彼らもまた私を守ってくれた。

大丈夫、きっと産まれるよ。

子供なんて居なくていいじゃない——とは誰も言わなかった。
言えなかったから。

それが、上に立つ者——権力を持つ者達の義務。

この国を、大勢の民達をまとめ上げる者達に課せられた使命なの
だ。

お前だけだ。

貴方は何も心配しなくていいの。

王と上層部はそう言い続けてくれた。

けれど、周囲の……跡継を望む声はどんどん高まり——五十年目にとうとう夫は受け入れた。

苦しそうに、辛そうな顔をする夫に私は淡く微笑んだ。

遅かったぐらいだ。

本当はもっと前にそうなる筈だった。

いや、本当はもっと前に私から言うはずだった。

なのに周囲に甘えていたせいで私は夫を苦しめてしまった。

「ありがとう——」

夫の名前を呼び、その体を抱き締める。

悔しそうな、けれど何処かホツとしたような、それでいてそんな自分達を激しく嫌悪する上層部にも礼を言った。

「ありがとう——」

産めない私が悪いの。

王妃であるならば、国の為に犠牲にならなければならない時だつてある。

それに、本当は王妃そのものから私を引きずり下ろそうとする動きがあつたのを、夫が妾妃を受け入れる代わりに私を王妃に留めてくれたのだ。

愛しているのはお前だけだ。

今にも泣きそうな顔で言う夫に私は笑う。

そうね——私もよ……そう、答えて。

だからそつと心の扉に鍵をかけて、私はその鍵を飲込んだ。
流れる涙は当の昔に涸れ果てていたから、一生懸命喉の奥に押し込めて。

それから一月後、夫は妾妃を娶った。
微かな望みをかけた夫の希望は叶わず、私は妊娠しなかった。

*

跡継が産まれたのは一年後だつた。
国中が湧き、妾妃を娶った王の英断に貴族達は大いに喜び湧き立
った。

と同時に、囁かれる王妃への不満。

跡継が出来なかったのは、王妃に問題があったから。そう囁く者達は、私の耳に入るように噂していく。

子無きは去ね

無能は去ね

役立たずは去ね

子供を産んだ妾妃が国母となる事は間違いなかった。

そんな大仕事を、この国に未来を与えてくれた姫君を妾妃のままにしておくなどんでもない。

その姫君こそ、王妃になるべきなのだ——そう、彼らは囁いた。

けれど、実際に私を引きずり下ろせなかったのは、王と上層部の抵抗と、妾妃達を送り込んだ者達自身の野心の結果だった。

初めての子供が産まれた時、王には跡継を産んだ妾妃以外にも六人の妾妃が居た。

全部で七人の妾妃達。

そして残りの者達も全員が妊娠していた。

王は最初、妾妃は一人しか娶らないつもりだった。

けれど、一人迎えれば二人も三人も一緒に強引に押し切られていった。

それに民達も賛同したのだ。

当時は混乱期だった中。

周辺国では、王や上層部が空間を支えきれずに国と民が一瞬にし

て消滅する事もあり、その報せを聞く度に民達は怯えていた。少しでも強い力を受け継ぐ王の子供を多く生み出して欲しい。それは当然の事だった。

民達に、領土に安寧を与える為にも、王の血を引く子供は一人でも多い方がいいのは誰の目にも明らかだった。

そこに、野心を抱き、自分の息のかかった娘を王の傍に上げたいと思っている者達が巧みに動き、何時の間にか妾妃として送り込んでいたのである。

正妻である私に子供がいない状況は、尚更にそれらの人々の権力欲を煽っていた。

しかも、夫は妾妃の元に通うのは週に一回で、残りは王妃である私の所で過ごしていた。

正妃は子供が出来なかった。

けれど、今後もそうとは限らない。

つまり、王が私の側に居れば居るほど子を孕む危険性があるのだ。そしてもし妾妃に子供出来ても、正妃に子供が出来れば、そちらを跡継にしようとする動きが出てくるかも知れない。

だから、王が王妃に構って居られないように、多くの女達を送り込もうとした。

そうして熾烈な争いで後宮に入れられた七人の妾妃達。

それが、王派たる上層部側と野心を持った者達が争った末のギリギリの妥協線だった。

しかし、一人に週一回定期的に通っているならば、他の妾妃達にも公平に通わなければならないという周囲の言葉に、結局王は他の

妾妃達にも通う事になった。

もちろん、その後私の所にも通ってくれるが、次第に隔週となり、月一と回数を減らしていった。

そうして妾妃達は見事に全員が妊娠したのだ。
たった一年で。

けれど、全員が同時期に妊娠したのが妾妃を送り込んだ者達の誤算だった。

つまり、最初に子供を産もつとも、他の妾妃達だって子供を産むのだから立場は全員同等な筈。

ここで強引に王妃を引きずり下ろして最初に子を産んだ妾妃を正妃の座に据えた場合、他の妾妃達の親族が黙っていないだろう。

しかし王妃の座を空位にすれば、それこそ歯止めが利かなくなる。

とくに、妾妃達の方が積極的だったからだ。

王は妾妃達を迎える際に言った。

『妾妃を受け入れよう。但し、俺の心は王妃にだけ捧げられている。そしてそれは永遠に変わる事はない。だから、妾妃となる娘達を愛する事は未来永劫ないと思え。子を産む道具。それで構わないのなら、受け入れよう』

そして王は宣言通り、妾妃達に心を傾けることはなかった。

容姿端麗で文武両道。

賢君の名にふさわしい王の才を持つ若き王に、妾妃達は一目で心

奪われた。

そして王に愛を注ぎ、何とかして自分の方に心を傾けさせようとした。

どんな手段を使っても――。

決して愛する事はないと言われても、時間と共にいつかは愛してくれるかもしれない。

そんな願いを抱いた妾妃達はいつしか互いに争いだし、水面下の争いは熾烈なものとなった。

最初の子供が産まれた後は、争いは更に過激になっていった。けれど、私はそれに構って居る暇は全くなかった。

というのも、私も子を宿したからだ。

それは、三人目の子供が妾妃の一人から産まれた頃の事だ。

体調の異変に気付いた私は子を身籠もっている事に気付いた。

だが、それがなんだというのか。

既に王の跡継が三人も居る中で、正妃の子など邪魔にしかならな
い事は、火を見るよりも明らかだった。

そもそも、王妃に子供が出来ないから七人もの妾妃を娶る羽目とな
ったのだ。

これでまだ子供が産まれていないならまだしも、既に三人も妾腹
で産まれている。

そこに正妃の子――。

誰かが言い出すかも知れない。

妾腹よりも正妃腹の子を跡継にしようと。

妾妃達は、誰もが自分の子供こそ跡継にと願っている。けれど、ここで私が子供を産めば彼女達はどう思うか。

そんな事、考えずとも分った。

私の腹の子を確実に消しにかかるだろう。

それどころか、大規模な争いを引き起こすかもしれない。

既に産まれた三人の子供達の事で、妾妃達やその親族達のいがみ合いは大きくなっている。

今必死に安定させている国が大きく揺らぐかも知れない。

そんな事はさせられない。

私は、子の存在を隠すことにした。

この子は誰にも祝福されない。

誰にも祝福されない、国の未来には邪魔な子。

けれど――私にとっては、何よりも愛しい子。

夫との間にようやく出来た子。

本当なら、この子と共に暮らしたかった。

全てを捨ててでも、この子と共に生きたかった。

子が宿つたと知った瞬間から私の中に膨れあがる母性本能が、子を求め続ける。

でも、誰にも知られてはいけない。

この子は存在してはいけない。

王の子として、存在してはならない。

誰かに相談する事も考えないわけではなかった。

けれど、王宮の至所に妾妃達の『目』と『耳』があり、相談すればバレる恐れもあった。

バレてはいけない。

バレれば殺される。

だから、私は子を隠した。

誰にも相談せず、体調を崩したとして私は王宮から遠く離れた離宮へと移り住んだ。

王や上層部の罪悪感を煽れば簡単に事は済んだし、四人目の子供が産まれるとかで王妃に構って居る暇はなく、妾妃達やその親族側も隙だらけだった。

その離宮を選んだのは、大戦時代にお世話になった老夫婦が近くに住んでいたから。

そうして私は彼らを呼び寄せ、事の全てを話した。

この子は存在してはならない子。

離宮に行く準備で手間取り、ようやく離宮に入った時には妊娠五

ヶ月目を過ぎた頃だった。

誰にもバレないように、隠し続けた数ヶ月。
夫にも、仲の良い親身になってくれる上層部にすら話さず、私は
お腹の子に語りかけた。

——知れては駄目

——大人しくしていて

——静かに……そう、声を出しては駄目よ

何度も、何度も語りかけた。

お腹の中で育っていく我が子を愛しいと思う反面、どうして今に
なつてと思う心。

愛しい、どうして。

愛しい、何故今。

愛しい、声を出さないで。

誰にも知られては駄目。

誰にも、誰にも。

私は願い続けた。

けれどその願いは願いではない。

それは呪い。

呪いにも似た母の願いが、後に我が子を苦しめる事になるとも知
らずに、私は……。

それから数ヶ月後——臨月を迎えて私は女の子を産んだ。

産声一つあげない我が子。

それは、私の呪いにも似た願いの結果だった。

五体満足で産まれた娘は、声だけは発する事はなかった。

産声も、泣き声も、笑い声も……。

そう——生涯、声を、出す事は

なかった——。

王×王妃？（シリアス物）

十八歳での出産は、神々の世界では普通だったし、もつと幼くして子を産む者も居た。

けれど、貧困が日常化していた大戦中に成長時期だった私の体は余りにも未熟で、どんなに大目に見ても十代後半とは思えない体付きだった。

その上、長らく心身をすり減らした体での出産は、やはり多大な負担がかかった。

三日三晩、私は苦しんだ末に娘を産んだ。

けれど、無事に産まれた筈の娘からは、いつまで経っても産声は聞こえない。

しかし、それ以外は元気な娘に、私はクタクタの体に鞭打って我が子を抱き締めた。

もしかしたらその時、既に分っていたのかもしれない。

この子との時間が余りにも短いことを。

この子との別れがすぐそこに迫っていた事を。

私は老夫婦の家で子供を産んだ。

離宮には数少ない共だけを連れて来ていたが、彼らには一切妊娠を教えなかった。

というのも、私は殆どを寝台の上で過ごしていた事と、服を着込めばお腹がそれほど目立たなかった事、そして何よりも老夫婦が協力してくれたのだ。

もちろん、共達も信頼出来る者達であるが、彼らの主は王である。

王のために、私の産んだの子の存在を明かすかもしれない。

しかし、私は子の存在を決して報せる気はなかった。

既に七人目の妾妃が、三ヶ月前に七人目の子供を産んだという報告が入っている。

全員男の子という巡り合わせ。

これから先は、我が子を跡継にしたい妾妃達とその親族達で壮絶な争いが繰り広げられるだろう。

もし私のお腹の子が男の子ならば確実に殺される。

実際には娘だったけれど、それでも危険性は変わらなかった。

娘だつて王位は継げるのだ。

それに、もし男しか王位が継げなかったとしても、一人産めたのだ。

次に男を産まれたらと向こうは考えるだろう。

それを思えば、私は子を産めない女でいなければならなかった。

これ以上、争いを激化させない為にも。

しかし娘は可愛かった。

小さな体、温かな体温。

到底手放せないと思った。

後から後から湧き上がる母性本能が叫ぶ。

この子と共に生きたい！！

王妃としての身分を捨て、産まれたばかりの小さな娘と暮らしたかった。

夫への愛が薄れたわけではない。

夫の事は変わらず愛していた。

今も上層部と共に必死に国の為に力を注いでいる夫を支えたいと思う。

けれど、夫の下に戻るという事は、この子を手放さなければならぬ。

産むまではそれも仕方ないと考えて居た。

夫を支え、子を守る為にはそれも仕方ないと。

例えば子に恨まれても、あんな伏魔殿にこの子連れ帰ってむざむざ殺されるぐらいなら……。

「手放せない……」

でももう無理だ。

腕の中ですよすやと眠る娘。

まだ、目も開けていない我が子の温もりを知ってしまった今、もう駄目だった。

十ヶ月お腹に入れて守ってきた。

初めて動いた時も、子供の生きている音も全て知っている。

「この子と共に生きたい」

成長し、愛する男と結ばれ子を産むまで見届けたい。

娘はどんな女性に成長するだろうか？

どんな相手と結ばれるだろうか？

孫は男の子か女の子か？

それは、母となった者ならば誰もが抱く夢。

けれど……所詮夢は夢だった。

そして私は、やはり母にはなれなかった。

出産から数時間後、老夫婦の夫が私の元にやってきた。

それは、離宮からの使いを知らせる為だった。

私は我が子を老夫婦に預け、急ぎ離宮へと戻った。

その時、私は再び我が子に会えると思っていた。

ずっと側にいる事は出来ないけれど、離宮から老夫婦の家はそう遠くなく、私が離宮にいる限りは頻繁に訪れる事は出来る。

ずっと側にはいられない。

けれど、その分通い子の成長を見守りたい。

せめて、子が乳離れするまでは。

少しでも、長く、娘の側に。

長く居れば居るほど情が移り、子供を手放せなくなると分かっていても願ってしまった。

娘と共に暮らす……儚い夢を。

しかし、その夢はあっけなく潰えた。

離宮に来たのは、懐かしい上層部の一人だった。

出産間もない体の私は、よほど具合が悪く見えたのだろう。
私を気遣う様子は、本当に心配しているのが分った。

もともと、上層部の中では一番仲の良かった相手だったから、余計にだろう。

そうして一通り再会を喜び合った後、私は相手の言葉を待った。

離宮に来てから数ヶ月。

今までは上層部ではなく、彼らが信頼する部下が定期的に来ていた。

なのに此処に来て上層部が来るという事は、何かがあったのだ。

もしや王宮に戻れと言うのだろうか？

確かに王妃が長らく王宮から離れているのは、決して褒められたことではない。

王妃不適合として退位させられてもおかしくない。

だが、相手の話した内容は驚くべきものだった。

「実は、王子達が……」

殺されたの。

私は茫然とした。

王子——妾妃達の子供達が殺されたという。

妾妃達とは愛しい相手を巡るライバル。

けれど子を産んだ今、我が子を失った哀しみはいかほどかとそればかり考える。

もし私が娘を失ったら……きっと生きてはいられない。

「どういう……こと？」

「実は……彼らを殺したのは、その、母親達なのよ」
「っ?!」

話はこうだ。

子が産まれた後、王は出産後の体を労るという名目で子を産んだ妾妃に通うのをやめた。

もちろん、妾妃からすれば相手が出来ずとも通ってきて欲しいのが本音だ。

それに、子は多ければ多い方が良いから、その点から言っても王にはむしろ通ってきて欲しい。

だが、それ以上に妾妃達は王を愛していた。

それに、子を産んだ後こそ側で愛して欲しい。

その逞しい腕で自分を抱き、激しく抱いて欲しい。

けれど王は、妾妃達の陳状を一切受け付けず、子供の顔を見るのも侍女に言っただけで自分の所まで運ばせる始末だった。

まるで、子供さえ生まれれば後は用はない。

義務は果たしたと言わんばかりのそれに、妾妃達は嘆き悲しんだ。

だが王はなしのつづて。

それどころか、妾妃達に冷たく告げたという。

『最初に言った筈だ。お前達は子供を産む道具。子供を産む代わりに一生生活に困らない面倒は見るがそれだけだ。契約に違反するなら、とつと放り出すまでだ。お前達の代わりなんていくらでも居る。俺が欲しいのは子供を産む、道具だ』

それは最初から、何度も言われていた言葉だ。
けれど、妾妃達は願っていた。

子供さえ生まれれば、いつか王も自分を愛してくれるかもしれないと。

その儚い願いに縋り付いていたのに、王の心は決して変わらない。

『他の者達にも言おう。俺が妾妃に求めるのは愛ではない。子供を産む為の器であつて、それ以上でもそれ以下でもない。もし今後俺に新しい妾妃を差し出すならば、それを徹底しろ。いいか？ お前達はそれでも良いから娶れと言ったんだ。そしてこうも言ったな？ 私達の娘は本当に聞き分けの良い娘だと。王の意に沿う物静かな娘だと』

王は嘲笑ったという。

『とんだ欠陥品だ』

あの人がそんな事を言うなんて、信じられなかった。

けれど、上層部は仕方の無い事だと言った。

妾妃達の争いは日に日に激化しているばかりか、妾妃の位を笠に着てやりたい放題。

贅沢も制限無く行い、日々国の財政を傾けているという。

もちろん王は何度も警告したが、聞き入れず余計に度は増していった。

親族達も嗜めるどころか、そんな妾妃達の権を笠に着て権力闘争に明け暮れる始末。

「今思えば、妾妃達は王の注意を惹くためだったんだろうけどね」

しかし王は何度も宣言した。

妾妃は子供を産む道具だと。

愛する正妃を悲しませてでも跡継の為に妾妃を娶った。

妾妃は道具。

妾妃は愛するものではなく、子供を産む為だけに存在する。

妾妃は子供を産むことで国家に尽くすのであって、それが嫌ならならなければならない。

王は決して妾妃に強制はしなかった。

中には、本人の意思に反して強引に後宮入りさせられた者も居たけれど、そういう相手は密かに逃がし、結局は本人の意思で来た者達だけが妾妃となった。

そしてその者達にも何度も伝えた。

お前達はただ子供を産めば良い。

道具として、きっちり役目を果たせと。

それが嫌なら、帰れと。

その言葉は、虬国や津国など他国の王達の出席する宴でもしっかりと伝えられていた。

だから周辺国も、この国の王が妾妃達を迎えたのは跡継の為だけで、子供を産ませればそれで終わりだと認識していた。

妾妃達やその親族達の思惑を余所に、大勢の前で宣言する事で夫は正妃への愛を示していたのだ。

けれど、それがどれだけ妾妃達の心を傷付けたのだろう。

子供を産んだ途端、宣言通り見向きもされなくなった妾妃達。

子供は多ければ多い方が良いから二人目をと王に懇願しても、七人も居るのだからと断られ、また産まれた子をしっかりと育てるように告げたという。

確かに七人も居れば子供の心配はないし、また余りにも多ければ余計に争いが起きる。

それを津国と虬国の王達がそれぞれチクリと言ってくれたという。

彼らは私に同情してくれた。

二人とも、ただ一人の妻を愛していた人達だった。

そして二人は、夫と私が愛し合っていたのを知っていた。だからこそ、夫の苦渋の決断に何も言わなかった。

子供は必要。

それが分かっていたから。

それは王である限り——他者の上に立つ限り、逃れられない義務である。

ならば王を退位すれば良いという話もあるが、代わりが居るならすぐに夫はそれを選んでいた。

代わりが居なかったからこそ、妾妃を娶るしかなかったのだ。そして、私を側に置き続けるには、彼らの要求を呑むしか無かったのだ。

上層部も必死に抗ってくれた。
今、私の目の前にいる彼女も。

それでもどうにもならなかったから、妾妃は迎えられたのだ。

その時、私には二つの道が呈示されていた。
妾妃を拒否して王の元を去るか、それとも受け入れて側に留まるか。

私は自分の意思で選んだ。
王の側にあり続ける事を。

『結婚して欲しい』

そうぶっきらぼうに言いながらも、必死な形相の夫を受け入れた時に誓ったのだ。

夫が私をいらないと言うまで側に居ようと。

だから夫の側に居続けた。

夫が妾妃を抱いている時も必死に耐えた。

王である事を捨てられない夫。

それは、権力の為では無く、夫を信じてついてきた者達の為に。

夫が王を辞めるという事は、その者達全てを捨てると言う事。
今この時点で捨てられれば、彼らは生きてはいけない。

あつという間に戦火に飲込まれて国は瓦解する。

だから夫は、王で有り続けるしかなかった。

と同時に、夫が妾妃を迎える事で上層部への風当たりを弱めさせた。

上層部にも、子供に恵まれない夫婦は何組か居たから。

彼らの為にも、そして国の為に夫は王で有り続ける。

だからこそ、私は愛したのだ。

そんな優しく誠実な夫を、愛したのだ。

誰よりも誠実な夫。

決して思わせぶりの事をせず、妾妃達にも誠実に対応した。

愛せない事は分っていたから、そう伝えて。

でも、決して蔑ろにはしなかった。

妾妃達とは夜の生活以外は殆ど会わず、会わなければならない時には必ず第三者を同席させた。

妾妃達やその親族達がどれだけ第三者を排除しようとも、絶対にそれを認めなかった。

妾妃達が生活に困らないようにきちんと采配をふるい、最低限の

事をした。

でも、それだけ。

王の愛が欲しかった妾妃達は満足できなかった。

王に愛され、正妃の座に就く。

その為には、どんな手段だって彼女達は取った。

それが、実の子供を殺すという事だった。

子供が産まれてからは、どれだけ懇願しようとも王は通ってくれなくなつた。

妾妃達は次第に子供を産んだ事を後悔し始めた。

子供が出来た時はあんなに喜んだというのに、子供が産まれたばかりに王の足は遠のいた。

自分達は子を産むための道具。

けれどそれを認められず、ひたすら儚い希望を抱き続けた。

そして考えついたのだ。

子供を作る為ならば、王は来てくれると。

しかし、二人目を願おうにも来てくれない。

数は十分だからと言って。

ならば方法はただ一つ。

今居る子供を殺すしかない。

それも、自分の子供を殺すしかなかった。

というのも、他人の子供を殺したとしても、それでは王の足は他人に向いてしまう。

今居る子供をしつかり育てると言うのが王の言葉。
だから、自分の子供を殺すしかなかった。

一番最初に子を産んだ妾妃は、私が離宮に移って数日後に我が子を殺した。

まだ、五ヶ月目だった我が子の口と鼻を塞いで。

けれど……悲劇はそれだけでは終わらなかった。

「最初の子が死んだ時は、赤ん坊に良くある突然死として処理されたの」

大戦前もそうだが、今も赤ん坊の死亡率は高い。

それは、子供を産む時に母子共に死んでしまう場合も含めてだが、子供が大きくなるには今の時代は余りにも過酷だった。

だからこそ、赤ん坊が死んだと聞いても突然死として処理されたのだろう。

そして妾妃の予想通り、王は親族達の煩い追いつてにより子供を作るべく訪れた。

妾妃は狂喜し王を迎え入れた。

と同時に、妾妃は子供が出来ないように細工をしていたという。

それは、子供が出来れば王の足は遠のくから。

だから、妾妃は王を独占する為に子供が出来ないようにしていた。

しかし、その企みはすぐに他の妾妃達にも伝わった。

そうして王を独占する妾妃に憎悪し、王を取り戻そうと次々と子供達を殺したのだ。

子供はただの道具——そう笑いながら、子供を殺した妾妃も居たという。

七人とも、死んだ。

それもたった二月の間に。

余りにも異常だったそれに、王が不審を抱いたのは言うまでも無い。

そうして秘密裏に続けられた調査。

王は妾妃達の油断を誘う為に通い続け、二人ほどが妊娠した。その二人は最初に殺した妾妃と違い、子が産まれてもまた殺せばいいと思っていたのだろう。

そして調査結果が出たという。
今から、一月半前に。

妾妃達は子を殺した殺人罪で全員が捕らえられ、また親族達も次々と捕縛されていった。

それは、余りにも煩い親族達を叩き出す為の材料集めをしていた王と上層部の努力が実り、人身売買、奴隷狩り、その他多くの罪を親族達が犯していた事が発覚したのだ。

何としても自分の血を引く子供を次期国王に。

その思いが暴走し、多くの罪を重ね始める機会を王達はずっと狙っていたのだ。

彼らがやり過ぎたのは、妾妃の親族という自負が強すぎたのが原因だ。

いつしか、まるで自分達が王のように振る舞い、暴走し始めた。

それは、子飼いの奴隷商人達の暴走も許し、各大国から民達を誘拐するまでとなり、各国を怒らせたのだ。

とくに虬国と津国は、言い逃れの出来ない証拠を叩付けた。それは、王と上層部とあらかじめ相談していたものだ。

親族の暴走が過ぎ、各国にまでその魔手を伸ばしていたと知ってすぐに王と上層部は各国の王達にその旨を伝え、親族達を一斉に捕らえる準備を練っていた。

頼るべき親族が居なければ妾妃達も好き勝手にはできない。そう考えてもいたのだろう。

結果、妾妃達への注意は弱まり、その隙を突かれて子供達は殺されていった。

しかも、何処からか情報が漏れ、親族達の一部に逃げられてしまった。

妾妃達を見捨てた親族はそれぞれの領地に籠もり、徹底抗戦をしたという。

また彼らは、離宮に居る私を人質に取ろうとしたが、虬国と津国側に協力を依頼していた為、近付く事は出来なかったらしい。

間者は徹底的に始末されたから。

けれど向こうはそれでも諦めずに交戦し、王妃を人質に取ろうと続けた。

しかし、とうとう十日前に決着が付いたという。

「親族は全員確保。後は処罰を待つ身よ」

全員が捕まった。

但し、協力者達という残党はまだ残っているという。

それに、一月以上に及ぶ内乱による余波もある。

余波は余りにも大きく、流石の津国と凧国もそれには介入出来ない。

それぞれの国にも、それ以上の余力はないからだ。

この国よりも遙かな大国を統治している各王と上層部達。むしろ十分過ぎるほどしてくれただろう。

他の国では、介入させるだけの力すらないのだから。

だから、後はこの国の者達だけで何とかしなければならない。

多くの者達が犠牲になった。

内乱に巻き込まれただけでなく、親族達が降伏を言い渡す王達に交戦し、無駄に多くの者達を死なせたからだ。

できる限り助けた。

できる限り保護した。

けれど、複数で起きた内乱により国の経済は混乱し、民達生活は大きく揺らいだ。

周辺国にも多大な影響を与えた。

今回の内乱で戦争孤児、戦争未亡人、家族を失った者達も居た。

その者達の生活を立て直さなければならない。
被害に遭った者達を補償しなければならない。
そして死んでいった者達を弔わなければ……。

それらを、王と上層部は行わなければならないのだ。
それが、夫達の勤め。

そして王妃である私の勤めである。

「でも、無理はしないで。まだ体調が悪いし……ただ、今回みたいに王妃が人質にされるかもしれないというのもあって、出来れば王宮に戻って欲しいの」

警備面からしても――。

そう伝える上層部の彼女。

その瞳の中に、私は見てしまった。

子を殺され、内乱で国が揺らぎ、それでも国を立て直す為に今も戦い続けている夫。

その夫の側に戻り支えて欲しいと告げている。

私は告げた。

「分りました」

娘の事が頭によぎらなかつたわけではない。
けれど、私は決めた。

王妃である責任を果たし、王を支え国の為に働こうと。

一日だけ貰った時間で、私は老夫婦の元に戻った。
そして数時間ぶりの娘を抱き締めた。

娘は連れて行けない。

確かに妾妃達や親族達は居なくなった。

けれど、今回の事で一気に子供の数が減った王には、落ち着けば
また子供を望む声上がるだろう。

そうすれば、新しい妾妃達を娶らなければならない。

その時に、正妃に子供が居ればやはり危険になるだろう。
子供は娘だが、王位を継ぐ可能性だってある。

既に子供が三人も居た以前とは違い、最初から子供が居れば、そ
の子を王位にという言葉に賛同する者達はいくつかも知れない。

しかし、新しい妾妃達からすれば目の上のたんこぶであり、娘の
命は狙われ続けるだろう。

それに、まだ今回の事件が全て終わったわけではない。
協力者達はまだ捕まっていないのだ。

彼らは残党として、いまだ機会を狙って暗躍しているという。

そんな所に娘を連れて帰れば、格好の標的にされる。

誘拐、脅迫、殺害。

あらゆる魔手が娘に向かって伸ばされていくだろう。

王の他の子供達のように、小さな命を散らすかもしれない。

そんなのは絶対にイヤだ。

娘を守るうにも、暫くは王も上層部も全員が駆けずり回らなければならず、娘の警備にまで手を回す余裕はない。

夫は王。

親友達は上層部。

そして私は王妃。

王妃は、国のために尽くすもの。

今民達が苦しんでいる中で、娘を優先にする事は出来ない。

だから……私は娘に謝った。

「ごめんね……ごめんね……」

娘の安全の為に、私がしてやれる事はただ一つ。

王妃である事を選んだ私がしてやれる事は、娘を手放す事だけ。

連れては帰れない。

連れて帰れば、殺される。

だから、娘を手放す。

他の誰にも報せず、此処に置いていく。

迎えに来た上層部の彼女にも伝えなかった。
何処に『目』と『耳』があるか分からないから。

信頼してないわけではない。

でも、娘を守る為には報せない事が必要だった。

「ごめんね……」

私は娘の名を呼んだ。

娘だったら付けたかった名前。

その名を呼び、母乳を与えて抱き締める。

「この子を頼みます」

老夫婦に全てを話せば、自分達が面倒を見ると言ってくれた。

その方が、もし私が子供を引き取りにきたいと言った時に、すぐに返せるからと。

「私達はこの子を一時的に預かるんです」

あくまでも母は貴方だと老夫婦は言った。

その言葉がどれだけ嬉しかった事か。

いつか……いつか……。

娘と共に暮らせる日が来たならば……。

但し、それは同時に王妃を退位する事を意味する。

夫との別れを意味する。

いつか、そんな時が来たら……。

その日は、娘と共に寝た。

そして次の日、私は自分の持っていた匂い袋を手渡した。
夫が初めて作ってくれた贈り物。

側に居られない母の代わりに、それを形見としてもらう為に。

ふわりと薫る椿の匂い袋を娘に握らせた時、娘の目が開いた。

美しい、夫の色。

ああ……紛れもない、私と夫の娘。

そうして私は、老夫婦に娘を託して走り出した。

後ろから母を求めて泣く娘の声に耳を塞ぎ、離宮へと戻った私は、
待っていた上層部の彼女と共にその場を後にした。

ごめんなさい

ごめんなさい

心の中で泣き、心の中で謝る。

そうして数ヶ月ぶりに戻った王宮。

そこで私の王妃としての戦いが始まった。

王×王妃？（シリアス物）（前書き）

警告（母乳に関する表現が出て来ます。苦手な方はUターンお願いします。

王×王妃？（シリアス物）

王宮に戻った私を最初に出迎えたのは夫だった。

三つ編みの淡い青味を帯びた長い銀髪に、私は目を細めた。

血を呑んだ様な赤い唇が私の名を紡ぎ、触れた雪花石膏の滑らかさに目を閉じる。

色素の薄い瞳は切れ長で鋭く、冷たい印象を和らげる為にいつも着用している伊達眼鏡は外されていた。

艶麗な美女の如き美貌は、津国や凧国の王に並んで炎水界でも轟く絶世さだった。

少しやつれているようだったが、それがまた何とも言えない色香を漂わせていた。

鼻孔をくすぐる甘い香り。

「ああ、ようやく帰ってきた——」

私の名を呼ぶ夫。

力強く抱き締めるそれに、やはり男だと改めて認識する。

服の上からでは分らないが、鍛えられた体は無駄な贅肉のないしなやかなもの。

長身痩躯だが、決してヒヨロナガではない逞しい体は、多くの女性達がその腕に抱かれ乱れたいと願うものだった。

この腕で、妾妃達を抱いたのだ。

何故今更そう思ったのか。

それは、夫から感じた女物の香水が原因だったのか。

夫が私の頬を両手で包み込み顔を近付ける。
奪われる様に塞がれた唇。

その激しい口づけに、まさかという思いがあった。

ここは謁見の間だ。

私的なそれだとはいえ、誰が入ってくるとも知れない場所。

当然拒んだ私に、夫は縋り付く。

「逃げるな、逃げるな——」

そのまま押倒された私の瞳を夫が覗き込む。

美人は得だと思ふほど、哀しげに歪められた顔は壮絶な色香を称えていた。

抱き締めて慰めてあげたい

そう思ふほどに悲痛な色を見せる夫。

この数ヶ月間、子供達を全員失い、反乱の収束やらなにやらと駆けずり回されていた夫。

そうだ——子供達は何処に埋葬されたのだろうか。

半分とはいえ愛しい夫の血を引く子供達。

先に産まれた三人は、皆妾妃達にそっくりだったという。

だからだろうか？

妾妃達があんなにも簡単に子を殺してしまったのは……。
いや、そんな馬鹿な理由で殺すなんて有り得ない。

求めていたのは愛しい男の愛。

ただ愛して欲しくて、歯止めを失い暴走した悲劇の結末。

愛しい相手に愛してほしくて、たった一人の相手にしてほしくて。

それは実の子すら殺すほどに……。

上層部の一人は言った。

哀れな女達だったと。

けれど、本当に哀れなのだろうか？

私だって……もし、私がその妾妃だったならば……。
喉の奥底に押し込んだものが心を突く。

私ならば……どうしただろう？

妾妃達の話聞いてから、心の片隅で考えて居た。
私ならば、何をしたのか。

最初の妾妃が思い出される。

妾妃はたった一人だけと言った夫。

けれどそうして迎えられてみれば、その後すぐに他の妾妃達が続々と迎えられていった。

その時の妾妃は夫に詰め寄り泣き叫んだという。
私だけだと言ったのに。

私一人だけが唯一の妾妃だと。

夫の愛を、他の女性達と共有する事を拒否した一番苛烈な姫だった。

周囲に当り散らし、他の妾妃達をいじめ抜いた。

彼女がようやく落ち着いたのは、妊娠が分った時である。

自分が一番最初に子を産むのだと知り、優越感に浸り、何度も他の妾妃達を読んでお茶会を開いた。

そして私をも呼び、その新しい命が宿った腹を見せつけてきた。

現正妃である貴方にも出来ない事を私はしてみせたのだと。私こそが、正妃に相応しいのだと。

反対に私はどうしただろうか？

嫉妬というより諦めが強かった。

それは、夫が妾妃を持つと決めた時と同じ。ずっと前から気付いていた。

子供が居ないから妾妃を持った夫。

けれど、私との間に子が居たとしても、ずっと妻一人だけで通せたのだろうか？と。

心変わりを別としても、王である夫はその地位故に別の女性を娶らなければならない時がいつか来るかもしれない。

王は国に尽くすべきモノ。

国と民の安寧の為に力を注ぐ。

その絶対的権力と引き替えに、王は多くのものを犠牲にしなければならぬ。

それが例え愛する存在だとしても。

美しく気高く誰よりも愛しい人。

だから、静かに諦めた。

夫が王になった時から心の片隅に留めて置いた。

いつか、別の女性を迎える時が来たならば、それを受け入れようと。

笑顔で、文句一つ言わずに。

それは決意。

でも、言い換えれば諦めだった。

ただ一人の妃になる為に戦い続けた妾妃。

戦う前から諦めた正妃。

果たして、どちらが正しかったのだろう。

私にも分らなかった。

ただ分るのは、国を少しでも早く以前の水準まで戻す必要がある事だけ。

そして――。

私を押倒したままの夫が私の服の裾から手を入れる。
それが、太股に触れた時だ。

「っ——」

胸の頂きから流れたものが服を濡らす感覚にハツとした。
それが何かを理解する前に、夫の手を拒み距離を取る。

驚く夫の視線に私は取り繕う様に告げた。

「ご、ごめんなさい、まだ体調が安定してなくて……」

体調が優れないとして離宮に移った身だったから、夫はすぐに納得してくれた。

そんな夫に申し訳なく思いながら、私は胸に感じる違和感に冷水を浴びせられた様な思いだった。

思い出すのは娘の顔。

母になった体は正直だった。

此処に我が子が居ないにもかかわらず、産まれた我が子の為に蜜をこぼし続ける。

愛しい娘。

私と老夫婦しか知らない、隠された子。

待っていて。

いつか、必ず会いに行くから。

それが一時になるのか、永遠になるのかは分らない。

けれど……。

私は遠く離れた場所に居る娘へと思いを馳せた。

*

それからの私は、殆ど不眠不休で働き続けた。

もちろん、落ちこぼれで無能な王妃に出来る事はそれほど多くなかったが、それでも猫の手よりはマシと思わせるくらい良く動いた。

休んでいる暇などなかった。

今こうしている間にも、貧困と戦火の傷で倒れていく民達を思えば、休むなどという単語は浮かばなかった。

それに、少しでも早く娘に会う為には、とにかく働かなければならない。

一ヶ月、三ヶ月。

時はどんどん過ぎていったが、その年は洪水やら土砂崩れなどの災害も発生し、復興を阻害した。

また私自身も、頻繁に仕事を中断しなければならなかった。

それは、胸から流れる母乳が原因だった。

子を産んだ体は、子を育む為の母乳を作る。
例え子が側に居なくても、体には関係ない。

ポタポタと垂れて服に染み込む感覚に気付くと、すぐに物陰へと走る。

そして胸を手で押えて母乳を絞り出すのだ。

一度そのまま放置した事があるが、服の濡れは誤魔化せても匂い
でばれそうになった。

子供を産んでいない筈なのに、母乳が出ているなんて知られたら
一発ではれてしまう。

それ以来、私は母乳が流れ出すとすぐに絞る様になった。

けれど、絞った母乳はそのまま地面か排水溝に流すしかない。
それを見る度に、私は何をしているのだろうと自嘲した。

本当ならば産んだ娘に含ませていた母乳。
たった一度だけ与えたそれを、娘は勢いよく飲んでくれた。

なのに今は誰の口に入るわけでもなく、こうして流れ落ちていく。

「馬鹿、みたい」

私は涙を拭い続けながら搾乳し続けた。

娘に飲ませてあげたかった……。

そんな私に、王宮に響く赤子の声が追い打ちをかけた。
官吏の子供だろう。

赤ん坊の泣き声が聞こえる度に、無意識に娘を捜し続けた日々。
それに加え、赤ん坊の声に私の胸から母乳がにじみ出していく。

いつその事、全てをばらして娘を迎えに行きたかった。

けれど、次第に王宮に入り込む暗殺者の増加に私はその願いを諦
めた。

暗殺者は、妾妃達の親族達の協力者が差し向けた者達だけでなく、今後新たに妾妃を送り込もうとする者達から差し向けられた者達も多く、その全てが正妃である私を標的としていた。

今ならば、全ての罪を捕縛された妾妃達の協力者達に押し付けられる——そんな考えを抱いているのだ。

だから、諦めるしか無かった。

命を狙われている母の側ほど危険な場所はないから。

また問題はもう一つあった。

子を産んだ体は子の為の体となっていた。

毎日流れ出る母乳は一向に止まる様子を見せない。

そんな体では当然夫を側に近付ける事すら出来なかった。

それどころか、夜の生活を求めてくる夫を拒み、寝室すら別にしなければならなかった。

体調不良という名目は、不眠不休で働く時点でもう使えなかった。だから、今は民達の為に働く時だと誤魔化し続けたが、夫の不満は日に日に募っていった。

元々迎えたくもない妾妃達を迎え、ようやく産まれた子供達は全員殺され、反乱収束後には舞い込む大量の仕事をこなす日々。

なのに、ようやく戻って来た妻からはひたすら拒まれる。

上層部からもそれとなく懇願されたが、出来る筈がない。

夫に抱かれている最中にもし流れ出したらと思うと、私は夫を拒み続けるしかなかった。

そうして私が王宮に戻ってから数ヶ月目。

捕縛された時に身重だった二人の妾妃の一人が出産した。

しかし、出産した妾妃は乳母達に剣を振り上げて子供を奪い取り、塔の上に立て籠もってしまった。

子供は生まれ次第取り上げと聞いていた私は、子を奪われる苦しみ故の事だと考えた。

それまでも、同じ母として子を奪うのは余りにも酷だと夫に懇願した事もあったが、聞き入れて貰う事は出来なかった。

『あの女どもにも同情など無用だ！ 産まれても殺せば良いと言い放った奴等だぞっ』

それほどまでに貴方を愛していたのよ――。

思わず口を突いて出た言葉に浮かべた夫の笑みは、今も瞼の裏に焼き付く。

『愛していれば何をしてもいいのか？ ならば、とつくの昔に俺は国を見捨てていた。お前以外を娶らせようとする国を！ 俺は捨てた！』

愛していた。

愛していたけれど、どうにもならなかった。

傷ついていたのは夫も同じ。

国のために、民達のために、子供を残すためだけに夫は妾妃を娶った。

愛する妻を手放さない為に。

私を側に置き続けてくれる為に。

子が産めない正妃を側に置くために、愛してもいない女達を抱いた夫。

全てを承知の上だった正妃と王と妾妃達。

夫は自分を犠牲者だとは決して言わない。
私も、言わない。

だって、一番の犠牲者が誰かなんて知っているから。

ただ、国のために生み出された子供達。

そして母の愛故に殺された子供達。

両親が愛し合っていないと知った時、子供達はどう思うだろう。
巻き込まれた子供達。
犠牲になった子供達。

夫は子供達を決して蔑ろにはしないだろう。
けれど、それだけだ。

跡継として育てる。

けれど、父としての愛情を注げるか分らないと言った夫。

その様子に、それ以上の事を要求するのは無理だった。

夫は王になどなる気はなかった人だ。

けれど、大勢の者達が大戦で死に、他になれる者が居なかったから受け入れた。

そして必死に自分の義務と責任をこなし、妾妃まで受け入れた。
七人もの子をつくり、その子供達に対してもできる限りの教育を
施そうとした。

もしかしたら時間が経てば変わるかもしれない。
けれど、今は駄目。

夫が壊れる。

不遇な幼少時を過ごし、王になってからも自分の権力と美貌に多
くの者達が群がり、妾妃達は夫の心を争い子供達まで殺してしまっ
た。

夫が受け入れれば良かったのだろうか？

全てを諦めて、全てを割り切って……。

けれど、もし夫が妾妃達を愛しても、彼女達がそれで満足した可
能性は低い。

ただ一人の女性になりたい。
ただ一人の妃になりたい。

他の女達など死んでしまえ！！

そう願いつづけていた妾妃達。

その為には、どんな手段だってとり、王の忠告も警告も無視した
彼女達。

そうして捕らえられた後も、ひたすら王への愛を叫び、死んだ子
供達の事は欠片も口にしない。

私も褒められた存在ではない。

王妃であることを選び、産まれたばかりの娘を置き去りにした鬼母なのだから。

けれど……。

それでも何処かで信じたかった。

同じく子を産んだ者として、妾妃達の子への愛情を。

けれど、それが浅はかな思いだった事は、誰に指摘されるまでもなく私の心に染み込んでいった。

今思えば、その時に気付くべきだったのかも知れない。

夫の、壊れ逝く心を。

そして、命を預け合った仲間であり、敬愛する主君の不遇に対する己の無力さに苛立つ上層部達の狂気に。

「どうかわらわを正妃に！ でなければこの子を殺しますっ」

私が塔に駆け付けた時、妾妃は子の首を掴んで柵の外にぶらさげていた。

まるで猫の子供——いや、物でも掴むかのように。

「わらわは貴方様を愛してる！ わらわこそが正妃に相應しい！
どうかわらわをお側において下さいませっ」

妾妃は泣き叫び懇願した。

けれど、夫は終に頷く事はなかった。

そして妾妃は絶望し——子を塔の外へと放り投げたのだった。

「あ——」

気付けば走り出していた。

伸ばされた夫の手をすり抜け、柵を乗り越えて赤ん坊を掴む。

「——っ！」

何か聞こえた気がした。

けれど、視界は一気に真っ暗になり気付いた時には、寝台の上に寝ていた。

赤ん坊は傷一つ無く助かったと言われた。

そして妾妃は処刑したと言われた。

それも、夫を道連れにしようとし、その場で切り捨てられたのだという。

私は手足の複雑骨折に加え、子宮を損傷していた。

何でも、落下したときに、緩衝剤になった茂みから突き出た木の枝が子宮を貫いていたらしい。

こうして、私は二度と子の産めない体になった。

それは同時に、新しい正妃又は妾妃が必要になるという事だった。

しかし命がけで妾妃の子供を守りきった私を目撃した者達は多かった。

王宮勤めの者達だけでなく、王宮一の高さからの塔だったが故に民達の目にもその光景は一部始終目撃されていた。

私は、他の妃の子を命がけで救った勇氣ある心優しき王妃と謳われた。

結果、子が産めなくなったにも関わらず、王妃から引きずり下ろされる事はなかった。

けれど、ただそれだけ。

確かに王妃で居る事は満場一致で可決された。

しかし、王妃の地位が許されたからといって、王に新しい妾妃が不要というわけではなく、新しい妾妃選びを止める事は出来なかった。

私にも、王にも、上層部にも。

それから一月後、身重だった最後の妾妃が産んだ子とあわせて王の子は二人。

けれど、新たに自分の縁者の娘を妾妃に差し出したい者達にとっては、罪人の子供として王子二人の存在を無視し、新たな妾妃の必要性を訴え続けた。

そんな彼らも、私が王妃で居続けることに承認の意を示した者達だったが、それは民達や貴族達にとって美談の主となっていた王妃を引きずり下ろす事で彼らの怒りを買う事を恐れたからだろう。

ライバルの子を命がけで守りきった王妃は称えられこそすれ、退任させたとなれば間違いなく国民達の怒りを買う。

私は知らなかったが、夫の為に文句一つ言わず妾妃達を認めた私は、国民達にとっては国のために尽くす理想の王妃として認識されていたらしい。

と同時に、問題を起こした妾妃達の一件から、王が新しい妾妃達

を持つ事を忌避する傾向が広がっていたという。

だから、彼らは王妃を辞めさせられなかったのだ。

辞めさせれば、妾妃すらも王の側に上げられなくなる。

もし正妃が無理でも妾妃として送り込むという手段を封じられるぐらいなら、ほとぼりが冷めるまでは王妃はほっとくべきだ。

そちらに天秤が向いたとしても不思議ではなかった。

そんなわけで、妾妃選びも慎重に行われると共に、内乱による後始末が一段落するまでは、一人たりとも新しい妾妃が王の側に上がることはなかった。

一方、残された二人の王子の身の振り方が問題になったが、できる限り妾妃達を減らしたかった王達によって、王位継承権は一時預かりとしてそのまま王子として育てられる事になった。

それは現時点では王位継承権を返上しているが、成長し今後の頑張り次第によつては王位を継ぐことが出来るというものだった。

だが、それは他の妾妃に新たな王子が産まれれば、王位継承権は果てしなく遠のくという条件付きで。

とはいえ、罪人として駆逐される事なく、王子として王宮に留まれたのは幸運だっただろう。

問題は、妾妃達の血を引く王子二人の面倒を見たいと思う者達が居ないというだけで。

そうして気付けば、私が王子達の世話役を引き受けていた。

王×王妃？（シリアス物）

神は五十年で一つ年を取る。

あれから三百年。

王子達は共に六歳になった。

それは、同時に遠く離れた私の娘も同い年になった事を示す。

王子達の親族は全て処分された。

全員が反乱に関わっていたからだ。

反乱における王の対応は英断とされ、河国はその後王と上層部の尽力によりたった百年で元の水準まで戻る事が出来た。

更に二百年が経過し、発展を遂げた。

「おかあさま」

「かあさま」

夫によく似た王子達が私に駆け寄ってくる。

先に死んだ七人の王子達とは違い、この二人だけは夫にそっくりだった。

長男の方は美しい銀髪を一本に三つ編みにし、弟は後頭部で高く結い上げている。

まるで双子のような容姿は、成長するにつれてその輝きを増す。それでいて、父譲りの聡明さと才知は六歳にして学者達、將軍達も舌を巻くほどだった。

あれほど罪人の子供と蔑んでいた者達でさえ、良い婿がねとして

見るほどに。

そればかりか、王宮全体の雰囲気も今では柔らかくなっていた。

実の母を失った王子達は、世話役である私を本当の母として慕う。確かに王妃ともなれば、第二の母とも言つべき立場。

しかし、乳母すらつかなかった王子達を世話した私にとっても、二人の王子は本当の我が子のようにだった。

それでも、最初は王子達を世話する気など私には無かった。

それは王妃の子供だからではない。

ただ、いつ王宮から居なくなるか分らない私が、中途半端に手を出す事は自重するべきだろうと考えたのだ。

私はいつか王宮を去る。

日々募る娘への思いに、当時私はそう決心していた。

夫を愛していたけれど、それでも娘を思う気持ちの方がいつしか優りだした。

一番良いのは娘を引き取り夫に事の次第を話す事だが、それは無理だった。

新しい妾妃達が入る事が決まっている状態で、正妃の子供の存在は危険すぎたから。

でも、娘の存在を明かせないのは、それだけが理由では無かった。

娘は声を出すことが出来なかったのだ。

言葉を話せないのではなく、声自体が出ない。

それを知り、私は愕然とした。

理由を付けてもう一度娘に会いに来た私は、どんなに促しても声を出さない娘に言葉を失った。

泣き声がない。

それは、笑う年齢になっても、言葉を話す年齢になっても同様だった。

転んだ時に痛みで涙を流しても、声だけは出ない。
声帯に問題があるわけでもない。

言葉も覚え、読み書きも出来る。

けれど、「声」だけは無いまま。

まるで私のお腹に忘れて出て来てしまったかのようにだった。

会話は全て書字や手話だけで行う。

こんなんでは到底王位を継ぐことは出来ない。
そればかりか、まず周囲から反対が来るだろう。

どうして？

なぜ？

喜怒哀楽に富んだ娘。

心優しく他者を思いやる娘に成長しながらも、「声」だけは紡げないまま。

どれほど自分を責めただろうか？

私のせいで……。

嘆き続けた日々。

けれど、逆に「王位継承者」として「欠陥品」ならばとも考えた。最初から争うだけの価値もなければ、見過ごして貰えるかもと。娘の命が脅かされる事なく、王宮に引き取れるのではないかと夢見た事もあった。

しかし、少しでも隙を見せればあつという間に食い殺される伏魔殿。

娘は命こそ奪われないかもしれない。けれど、利用されないなどという保証が何処にあるのだろう。

それに、夫が娘の存在を知れば、きっと手元に置こうとする筈だ。それこそ、二人の王子達よりもずっと、これから産まれるだろう新しい王子や姫よりも可愛がってくれるかもしれない。

だが、それではまた先の妾妃達の二の舞になってしまう。

一人だけを寵愛すれば、絶対にバランスが崩れる。妾妃達や子供達の嫉妬が娘を殺してしまうかもしれない。

それだけは避けなければ。それに、「声」を失った娘は奇異の目で見られるだろう。心ない者達の声も未だ高く、娘は格好の餌食となってしまう。

老夫婦の元でのびのびと育っている娘。時折顔を見せる私を母と慕ってくれる娘を、そんな危険な場所に連れて行くことは出来ない。

せめて、娘だけは幸せに育って欲しい。

手元に引き取れない娘に涙し、代わりに私は王子達を精一杯育てた。

それに、この王子達の母は私のせいで死んだようなものだ。

心の何処かでは、妾妃達が一掃された事を喜んでいた私。

どうして、もっと妾妃達の事に気を配らなかったのだろう。

同じ男を愛した者同士、わかり合える所もあつたかもしれない。

例え無理でも、せめて王子達から母を奪う事だけはしたくなかった。

偽善者と言われるかもしれない。

愚かだと蔑まされるかもしれない。

けれど、娘を授かった私にとって、ただ母を失った王子達の将来だけが気がかりだった。

罪人の子供として蔑まされ、厄介者として扱われていた二人の王子。

縁者の娘を妾妃に差し出したい者達は厄介者という視線を向け、下級の王宮勤め達は好奇な目を向け、中級の者達はある限り関わらないようにし、上級の者達に至っては完全に仕事と割り切っていた。

上層部はマシだったが、それでも妾妃の血を引く子として見てしまい、王は我が子として扱うがどうしても壁があった。

このままでは、子供達の未来すら狂いかねないとして、私は世話役を願い出た。

見捨ててしまえば良い。

思わなかったわけではない。

けれど、それでは何も変わらない。

新たな悲劇を生み出し、それは大きな禍根となってこの国を揺るがすだろう。

それは、王妃としては避けなければならない事態だ。

しかしそれ以上に、誰からも厄介者として扱われる王子達を見捨てられなかった。

そうして私は密かに母乳を与えた。

我が子に与えられないそれを、二人の王子達に与えたのだ。誰にも知られないように、ひっそりと。

オムツを替え、ぐずればあやし、できる限り子供達の側に居た。遠く離れた娘に出来なかった分、溢れんばかりの愛情を注いだ。

と同時に募りゆく娘への思い。

娘に会いたい。

やはり娘と離れて暮らすなんて無理だ。

王子達を育てれば育てるほど、遠くの我が子への思いは強まる。

そして王宮を離れる事を、より強く決意させた。

いつか私は王宮を去る。

だからこそ、中途半端に関わるべきではない。

関われば、王子達の哀しみは何倍にも跳ね上がって返ってくるだろう。

なのに、それでも私は見捨てられなかった。

気付けば、王子達が六歳になるまで私は育てていた。

そこに辿り着くまで、色々な事があった。

中でも一番は、夫の自暴自棄だ。

妻に拒まれ続けた夫。

王として賢君と謳われるまでに国を支え、発展させ、周辺国で内乱や戦が勃発する中でも国を守り続けてきた。

そんな夫を支えてきた私だったけれど、夜のそれだけはどうしても受け入れられなかった。

それどころか、子を産んだ体を知られたくなく、側に近付ける事もしなかった。

普通ならばとっくの昔に愛想を尽かされも当然で、別の女性の下に行かれてもおかしくなかった。

嫌だった。

他の女性の所に行かせるなんて。

けれど、夫は新しい妾妃を娶る事は決まっているし、それまでの猶予期間を突っ返しているのは私自身。

文句など言える身分ではなかった。

それに、周囲は私が夫を拒んでいる事に対して、「子を産めない女として当然」思っている節があった。

それは、下級の王宮勤め達や妾妃を献上したい者達ほど顕著だったが、他の者達も思っていただろう。

子を産めないのだから、夜を共にする必要などない。

そう声高に嘲笑する者達も多かった。

中級の者達は我関せず。

上級勤め達は下級の者達を叱咤するが、完全に口を閉じさせる事は無理だった。

仕方ない。

仕方ない。

夫を支えたいと願いながら、私自身が夫を傷付けている。

分っているけれど、受け入れる事は出来ない。

いつその事、今のうちに正妃から妾妃に格下げして賣おうかとも思ったが、妾妃が政治に関わる事は出来ない。

妾妃は子を産むだけの存在。

王の手足となって駆けずり回る必要がまだある今、やはり正妃から降りる事は出来なかった。

早く、早く、早く。

必死に働き続け、一刻も早く国が落ち着くのを願った。

けれど、夫の心はそれよりも早くに大きく揺らいでいった。

そして――。

「一緒に逃げよう」

ある夜、夫は私を寝台に押倒して囁いた。

逃げよう。

もうこんな国どうでもいい。

こんな国などいない。

今まで弱音一つ吐かずに戦ってきた夫の初めての泣き言だった。

「いない、いない、いない！」

夫はこの国を憎んでいた。

いや、最初は愛していたのかもしれない。

けれど、妾妃達を強引に娶らされ、子を作らされ、挙げ句の果てには子を殺され妾妃達は自分の要求ばかりを押し付けてきた。

そして親族達は身勝手に振る舞い、反乱を起こして内乱を勃発させた。

夫は叫んだ。

壊れてしまえ――と。

この国に対して呪詛の言葉を吐き、私が遠のくきっかけとなった
妾妃達への怨嗟の言葉を吐き続けた。

「国を……ようやく落ち着いてきた国をここで見捨てたら、どうなるの」

私は夫に語りかけた。

「それに、王子達の事も」

「子供には信頼おける養父母を見つける」

夫は言った。

子供を愛せないと。

子供を通して妾妃達を見てしまうと。

「努力した！ 何度も、何度も！」

夫は子供に無関心だったわけではない。

毎日我が子の顔を見に来たし、抱き上げたりもした。

来れない時も様子を他の者に聞き、病氣の時には滋養に良い物を
運ばせた。

無関心だったわけではない。

でも、愛する事は出来なかった。

「分ってるさ！ 一番の被害者は子供達だった事を！ 跡継として
作っただけでは余りにも哀れだ。愛そうとした。母親達は憎くても、
子供は別だとして！ けれど、愛せない。お前をより惨めにする子

供など愛せない！」

「惨め？」

「そうじゃないか！ お前に散々酷い事をした妾妃達の子供をお前が育てる。子宮を失い子供の産めなくなつたお前に別の女の子を育てさせている。はっ！ 俺はとんだ駄目夫だ！ なんで、なんでこんな——違う、違う、俺だ、俺が悪いんだ」

夫は自分を責めた。

子供を愛せない自分。

妾妃を取るしかなかった自分。

妻は一人だけと言いながら、それを果たせなかった自分。

妾妃達が私を虐めていながらも、手出しする事で妾妃達を余計に刺激させかねないとして黙殺するしか無かった自分。

そして反乱を未然に防げなかった自分。

夫は最後に言った。

「もう……いらない。いや、この国には俺はいらない」

そんな事ない。

そんな事などない。

夫が必死に努力したから、この国は今も続いている。

もちろん夫だけの力では無い。

けれど、夫が率先して前に立ち続けることで、多くの者達が着いてきた。

王を助け、この国の為に働きたいと思わせ、実際に行動に移させたのは夫が頑張ったおかげだ。

そんな夫を私は拒み続けた。

なんて酷い妻なのだろう。

けれど、分つていてもどうしようも出来なかった。

全てを話したかったけれど、娘を殺伐とした世界に引きずり込ま
たくなかった。

「もう、いい……もう……国なんて、いい」

死のう——。

そう夫が告げた時、娘の顔が蘇った。

全てを滅ぼし、共に消えようとする夫を……。

「な、何を」

私は夫に短刀を突きつけていた。

「私は死なないわ」

「……」

「そして貴方も死なせない、絶対に」

「……生きろとも言つのか？ この、苦しみを続けろと」

夫の怒りに、何度意識を飛ばしそうになったか。

しかし退く事は出来ない。

「俺は王になどなりたくなかった！」

それは夫の本音。

そして、同じ本音を持つ王は炎水界だけでなく、天界十三世界に

数多く居る。

静かに、ひっそりと暮らしたかった。
けれど、他に任せられる相手が居なかったから、なるしかなかった。

風国の王も、津国の王も、他の多くの王達も。

中には自ら望んでなった王もいるし、当然と享受した者も居たが、それでも多くの者達は。

でも、例えばどんな理由があろうとも、王を引き受けた時点で義務と責任が発生する。

例え――。

「俺はお前と静かに暮らしたかった!」

それが、愛した人との仲を裂くことになったとしても。

「我慢した! 国のためだから、民達のためだから! それがこのザマか!」

自分が我が儘を言っていると、夫は分っている。

しかし、もう我慢すら出来ないほどに突き抜けてしまったのだらう。

そして私は、そんな夫に短刀を突きつけている。
一緒に死ぬことも、逃げることも選ばずに。

なんて酷い妻。

なんて酷い妃。

けれど、逃げる事はしなくなかった。
死ぬ事もしなくなかった。

娘の為にも。

夫が放棄すれば、国は消える。
文字通り、消えるのだ。

この国は他国に比べて空間が酷く不安定な国の一つであり、空間を安定させる王の力が消えれば即座に消滅する。

そうなれば民達は死ぬ。

この国に居る者達全てが、消える。

娘も。

だから、私は夫の願いを拒絶する。

以前の私なら、もしかしたら頷いていたかもしれない。

けれど、娘を産み守るべきものを得た今、それだけは出来なかった。

例え、夫と敵対する事になったとしても。

死ねない。

逃げない。

辞めさせられない。

続け、維持させていかなければならないのだ。

娘の未来を、娘の生きる世界を壊させないために。

いつか何処かに居る娘の運命の相手と出会い、娘が幸せに生きる為にも。

と、そこで自分を嘲笑った。

民達よりも、娘を選ぶ自分もある意味一緒。

でも、それでもいい。

例えばどんな理由だって……逃げられないなら、苦しみの中を生き続けるなら、私は……せめて、自分だけには嘘をつきたくない。

娘の為に、国を守り続ける。

それが、王妃として生きる私が、娘にしてやれる唯一のこと。

「貴方は王。私は王妃。夫と妻である以前に、私達はこの国の柱」
「……」

「その道を選んだ時点で、私達には義務がある」

そう……義務と責任が。

泣き崩れる夫を私は抱き締めた。

酷い事をしている。

酷い事を言っている。

私を憎めばいい。
私を恨めばいい。

苦しむ夫に更なる苦しみを与える私を。

でもね……。

本当は夫の手を取りたかった。

娘と、王子——息子二人を連れて、何処までも逃げてみたかった。

家族五人で暮らせる新天地で……静かに暮らしたかった。

*

国も少しずつ安定し、新たな妾妃達の後宮入りを一ヶ月後に控えたその日、私は決意した。

この頃には、王子達に対しても大幅に態度を軟化させた上層部達も多く、共に面倒を見てくれるようになっていた。

信頼おける女性の一人も乳母の打診に快く応じ、この一年の間で王子達とも仲良くなってくれた。

彼女ならば、王子達の母代わりとしてしっかり育ててくれるだろう。

既に子供を二人産み、彼女の夫もこの国の王の側近として働いてくれている。

恋愛結婚だった。

十年ほど前に夫の側近が訪れた辺境の地で見つけ、妻として連れ

帰った女性。

気が強くもあるけど、心優しく情に厚い彼女になら任せられる。

友でもある女性に私は初めて全てを告げた。

我が子の事を。

そして、王妃を辞めることを。

驚く彼女は当然私を止めた。

「どうして?!」

泣きながら、彼女は言った。

どうして——確かに、どうして?だ。

夫に苦しい道を進ませる事を強要した私。

一度はそんな夫を支え続けよう。

逃げずに、例え娘と共に暮らせなくても——そう願った。

けれど、私が共に居る事で夫が危険な目に遭うならば、その限りではない。

それは、去年から始まった隣国同士の間が原因だった。

国の規模は共に中規模で戦力も同等。

けれど、二つの国の争いは周辺国にも及び、どんどん焦臭くなっていた。

このままでは、直にこの国にも争いの火の粉が降りかかるだろう。

それを止めるには力が必要だ。

それも、各国に働きかける強力な力が。

その力を持つのは、残念ながら王ではなかった。
この国で最も狡猾と名高いある貴族。

その貴族の当主は、夫と娘の婚姻を望んでいた。

一応建前は妾妃として娘を献上するとの事だが、裏では正妃にと望んでいた。

そうして私の下に、ご機嫌伺いと称してやって来た当主は、暗にそのことを告げていた。

すぐにではなくとも、娘が妊娠するまでに王妃を辞めるようにと。もしこれを拒むならば、王に協力しないと。

今此处でこの貴族に離反されれば、この国は一気に戦火に巻き込まれるだろう。

今まで睨みを利かせてくれていた凧国や津国が自国で手一杯になり、これを好機と捉えた小国や中程度の国の一部で戦が勃発し始めている。

そればかりか、大国にも牙を剥こうとする所までも。

この国を戦火にさらせない。

三百年前の内乱で民達は苦しんだ。

そして、更に以前の暗黒大戦では財産も家族も全て失った。

私も、家族を失った。

これ以上、失えない。
娘の事だけではない。

王妃として、戦を回避出来る手段があるなら、それを選ぶまでだ。例え、私が王妃を降りる事になっても。

それに——もともと王妃を辞めるつもりだったのだ。

娘と暮らすために。

娘と生きる為に。

だから苦しくなんて無い。

辛くなんて無い。

夫は今度こそ、自分に相応しい妻を得るのだ。

「その娘さんを王宮には連れてこれないの？ その、確かに危険だけれど……だったら、王妃を辞めて王宮の片隅でひっそりと暮らすとかは」

そうすれば、夫も通って来れるという彼女に、私は首を横に振った。

彼女には、貴族の申し出の事に関しては何も話していない。

ただ、娘の事でずっと以前から王妃を辞めようとしていた事、国が安定し、新たな妾妃達が後宮入りしてくる頃を目処に王妃を退位する事を考えていた事だけを告げる。

そう——一番最初に考えて居た、退位のそれだけを伝えた。

貴族のことは話せない。

話せば、苦しませる。

いや、話せば貴族は離反する。

だから、上層部にも夫にも話すことは出来ない。

誰にも知られず、王妃を退位してひっそりと娘と暮らすのだ。

「王妃様は、陛下の事はもういいの？」

良くない。

良くないに決まっている。

けれど、私が側に残ればこの国は戦火に巻き込まれる。

妾妃としても残る事を許さないと云った貴族。

王宮勤めとしても、許さない。

出て行けと言った。

王都から出ていき、辺境の地でなら生きる事を許すと。

私の力では、それを受け入れる事しか出来なかった。

しかし、夫は受け入れてくれないだろう。

きつと、激しく怒る。

偉そうなことを言って、苦しい道を歩かせ、自分一人を置き去りにして私だけが楽な道に行く。

でも、言えない。

貴族の間者はそこら中に居る。

言えない。

言えない。

そして私は結局逃げ出した。

全ての仕事を終わらせ、王子達を乳母に任せ、王妃に対する旨の書状を残して。

これで王妃が不在なままでも、新たな王妃を擁立し即位させられる。

そうして夫達に事情を説明する以外の全てのやるべき事を終えて、私は一人王宮から姿を消した。

そうして、老夫婦の下で娘を引き取り何処までも逃げた。

辿り着いたのは、山奥の小さな庵。

誰も巻き込めないから、同行するといった老夫婦すら振り切り六つの娘と逃げ延びた。

「これからは、ずっと側に居るからね」

いまだ「声」を発しない娘を抱き締め、ようやく私は取り戻した。

娘との時間。

そして失った。

夫や息子達との時間。

仲の良かった上層部達。

親身になってくれた老夫婦。

失ったものは余りにも多かった。

けれど、それでもこの国が戦火に巻き込まれずにすむならば……。

私はそれだけを祈り、娘と新たな生活を始めた。

貧しくとも充実した生活。

しかし、それはたった三年で終わりを告げた。

三年目のある満月の夜。

私の居場所を突き止めた夫と上層部によつて、私達は王宮へと連れ戻された。

そして知った、貴族の死と夫達の狂気。

王×王妃？（シリアス物）

大きな破壊音が、娘との穏やかな生活の終わりを告げる鐘だった。

何の前触れもなく、庵の扉が壊され、私は反射的に娘を胸に抱き締めた。

ゆっくりと姿を現わした夫の姿は壮絶なまでに美しく、三年前と同じ、いや、それ以上に美しかった。

「見つけた——」

艶然と微笑む様は、狂い咲く赤薔薇の如く艶麗でいて、狂気を帯びる。

以前は心から美しいと思ったそれが、とてつもなく恐ろしかった。

けれど体は動かず、また庵を囲む複数の気配に逃げる事は無理だと悟った私に、夫はまた笑った。

「さあ、おいで——」

強引に庵から引きずり出された私達を、夜空に輝く青銀の月だけが一部始終を見ていた。

*

夫は気付いていた。
私が子を産んだことを。

気付いていて、探し出したのだ。

私と子を。

夫は見ていたという。

私が、二人の王子達に乳を含ませていたのを。
ただ一度だけ。

満月の光に照らされた中で見た、幽玄の世界が作り出す光景。

その後、二度と見ることはなく、夫も夢だと思うようになった。
けれど、私が姿を消した事で再びそれを思いだし、夫は知ってしまっただ。

老夫婦を騙して口を割らせ、私^が子を産んだ事を聞き出した。
狂気に堕ち、狂いながらも夫は妻と子を求め続けた。

そして、とうとう見つけた。
とうとう見付かってしまった。

王宮に連れ戻された私は、後宮の一室に監禁された。

それは、王妃として過ごしていた頃に使っていた王妃の間ではなく、高い高い塔の上。

小さい頃に母に聞かされた物語のお姫さまのように、私は閉じ込められた。

部屋の前には見張りの女兵士が配置され、入れるのはごく僅かの限られた者達のみ。

部屋は広く、生活に必要な物は全て揃っていた。

女ならば誰もが夢見る様な物があつた。

豪華な衣装、美しい装飾品に部屋の内装。

食事も文句の付けようがなく、鈴を鳴らせばすぐに女官が飛んでくる。

けれど、窓はまるで檻を思わせるはめ殺しの格子状となっており、部屋の唯一の出入り口は常に鍵がかかっている。

高貴な虜囚という言葉が頭によぎった。

私はもう王妃ではない。

ただの、囚われ人なのだと。

それも王を裏切った罪人。

だから、夫は私から奪ったのだ。

たった一人の娘を。

「返して！」

部屋に連れて来られた時、私は娘を胸に抱いていた。

けれど、娘は夫によって引き離された。

足枷をつけられた私の手から、強引に奪い取り連れて行かれた。

返して、返して、返して。

何度も泣き叫び、来る者全てに懇願した。

けれど娘は、長らく私の手に戻ってくる事はなかった。

代わりに夫は毎日やってきた。

そして私に、強姦同然の夜枷を強いた。

子供が産めない体だと説得しても応じず、こんな事は何の益も生まないと懇願しても聞き入れてくれなかった。

強引な口吻から始まり、服を剥がれ体を求められる。

泣いて拒み激しく抵抗すれば、縛り付けられて体を奪われた。

三年間、いや、子を産んでから一度も夫を受け入れてなかった体は当初悲鳴を上げたが、はって逃げ出そうとすれば引き摺り戻された。

そして言うのだ。

「逃げたら娘には会わせない」

「この国を見捨てる」

そう言われれば、耐えるしか無かった。

そんな生活は五年ほど続いた。

外と切り離され、ただ寝台の上で夫を待ち続ける日々。

まるで娼婦同然だと言われても言い返せない生活だった。

そんな中で、私は知ってしまった。

ずっと疑問だった――連れ戻されてから、一度たりともあの貴族が面会に来なかった事を。

娘と夫を結婚させ、私に夫と別れる様に言ったあの貴族は、一度

も顔を見せなかった。

その理由は、連れ戻されてから暫くして分った。

丁度その頃、周辺国での戦が終結し、戦火を免れた事が国中が大いに沸き立っていた。

それは、全てあの貴族のお手柄だろうと考えて居た私に、女官の一人が口を滑らせたのだ。

上層部のお気に入りの女官は、笑いながら告げた。

あの貴族の末路を。

「王とあの我が儘娘を結婚させようなど馬鹿な事を」

私が居なくなって半月後。

王妃が失踪しようとも、妾妃達は予定通り後宮入りした。

その中に、貴族の娘も居た。

そして貴族は、喜々としながら夫に申し出たのだ。

戦回避に尽力し、これからも夫の貢献を続ける代わりに娘を正妃にしてくれるようにと。

夫はそれを受け入れ、式は盛大に行うためにも半年という期間を設けた。

貴族は自分野勝利を確信し、未来の国王の外祖父という地位に酔いしれた。

しかしそれこそが夫の狙いだった。

私が居なくなっただけ、まるで狙ったかのように近付いて来た貴族に不信感を抱いた夫は、即座に貴族を調べた。

そして私の失踪に関わっていると知るやいなや、夫はその貴族を見せしめに使ったのだ。

元々、裏で色々とあくどい事もしていたらしく、事は簡単に進んだ。

先の妾妃達の事もあったのだろう。

夫はその時の経験を無駄にせず、上層部達と共に笑いながら罠にかけたという。

既にその時には狂気に堕ちていたのだろう。

貴族だけではなく、その姫君すらも処刑された。

その凄惨な末路に、夫に文句を言える者は居なくなつた——表向きには。

けれど、先の妾妃達が生きていた頃に比べれば、大幅な進歩だつただろう。

それは、既の後宮入りした新たな妾妃達すらも怯えさせ、その親族達の行動を封じた。

そればかりか、王妃を捜す王を誰も止められなかつた。

上層部達が止めさせなかつた。

狂いゆく王と共に狂つていく上層部。

下級の王宮仕えの者達は怯えていた。

王達は狂ってしまったのだと。

けれど、私は知っている。

昔、同じ姿を見た事があったから。

全てに絶望し、全てを忌避し、生きる事すら望まなかった彼ら。それを強引に生かしてしまったのは私だ。

そのままそこに留まれば死ぬ筈だった皆を、夫を、強引に外へと引きずり出させた。

後に虬国と津国の王妃となった二人に懇願し、後々彼女達の夫を巻き込み、その土地と共に死を願う夫達を光の下へと引きずり出した。

だから、その後の苦しみは全て私のせい。

壊れ狂いゆく自分達に恐怖し、全てを消し去ろうとした彼らを、私が留めたのだ。

死と共に得られる筈だった安息を全て取り上げて。

「愛してるよ」

子の産めぬ体を貪りながら、夫は嘔き続けた。

それが、まるで呪いの言葉の様に聞こえたのは何故だろう。

愛してるのに。

愛していたのに。

きつと何処かで間違えてしまったのだ。

息子達とは、三年目を過ぎた頃から会わせて貰えるようになった。置いていった二人の王子。

恨まれていると思っていた。

だから、会って貰えなくても仕方ないと思っていた。

けれど、娘と共に逃げ続けても、どうしても忘れられなかった息子達。

身勝手だけれど、息子達の様子をどうしても知りたくて、知りたくて……夫にその事を伝えたと、次の日には会わせて貰えた。

息子達は私のことを責めなかった。

お母さんと呼び、会えた事を喜んでくれた。

その小さな温もりになどだけ癒されただろう。

そして、見捨てて逃げてしまったことを後悔しただろう。

息子達がこうして今も私を受け入れてくれるのは、奇跡でしかなかった。

それほどに私は最低なことをしたのだ。

けれど、息子達もまた狂気に堕ちていると知ったのは、それから間もなくの事だった。

「おかあさんをいじめるあいてはもういないよ」

「みんな、ころしちやった」

天使の様に愛らしく美しい笑顔で「殺す」という言葉を二人は使った。

驚く私にクスクスと笑い続け、もう大丈夫と穢れの無い笑みを向けた。

「これでずっといいしょだね」

「うん、いいしょ」

「ぼくと、おとうとと、ととさまとおかあさまと」

「あのことごとくにん」

夫は私が居なくなつた後も、息子達と変わらず接していたという。愛せなくても、父としてできる限りの事はしていたと。

「ととさまのときはころさなきや」

「そう、おかあさまたちをいじめるあいてなんて、いらない」

私の身勝手な行動は、息子達まで狂わせたと知るも、既にどうする事も出来なかつた。

夫の嘆き悲しむ姿に、息子達は思ったのだ。

お母様が居ないからだ。

お母様が此処に居られないようにした奴等のせいだと。

「ずっといつしよだよ、おかあさま」

「いつしよだよ」

私の、せいで。

それ以来、息子達は週に一度来てくれるようになった。週に一度なのは、それ以上は夫が許さなかつたからだ。

また逃げるかもしれないという恐れから、息子達と会うときにも必ず監視がついた。

それも仕方ない。

私は逃げたのだから。

そして、もしまだ逃げられるのならば逃げたい、という思いは消えてはいなかつたから。

それから更に二年が経ち、王宮に連れ戻されてから五年目の春を迎えたその日、ようやく逃亡の恐れがないとして私は娘と再会する

事が出来た。

娘は元気にしている、姫として最高の教育を受けていると皆からは聞かされていた。

息子達からも、夫が娘を大事にしてくれている事は聞かされていた。

今まで離れていた分を埋めるように、母を恋しがる娘に根気強く接し続けた夫。

夫に手を引かれやってきた娘は、美しい衣に身を包み綺麗に髪を結われていた。

五年も経ったのだ。

私の事を忘れてしまっていないだろうか。

そんな恐怖も、娘と出会った瞬間何処かに吹っ飛んでしまった。

ただ娘を抱きしめれば、娘も抱き締め返してくれた。

「声」が無いにもかかわらず、お母さんと呼ばれた気がした。

それから、やはり息子達と同じく週に一度部屋を訪れてくれるようになった。

娘と息子達は非常に仲が良いらしい。

といっても、息子達が一方的に娘を構い倒し、遊びに引き入れていくのだという。

「本当に仲の良いご姉弟で」

見た目は娘の方が幼いが、実は息子達の方が年下だ。

けれど息子達は、娘の方が年下だと言って譲らないらしい。

そんなたわいない女官達の会話に笑みをこぼし、私は愕然とした。

気付かぬ間の心境の変化。

それは、確かに起こっていたのかもしれない。

それは夫も同様だった。

その頃から、少しずつ、少しずつ。

夜伽は相変わらず毎夜求められたが、昼間は週に一度外に連れ出してくれるようになった。

そうして私は多くのことを知った。

とくに、夫がどれだけ子供達にとって良い父であろうとしていたかを。

息子達に武術の鍛錬を行う夫を見た。

何日かに一度、自ら王都につれていき市政を学ばせた。

昼食だけは、必ず子供達ととった。

愛せないと言った筈の王子達にも声をかけ、その姿は普通の父子のようだった。

それは王宮の者達にも好意的で、もはや誰も王子達を罪人の子として見る者は居なかった。

また夫は、当時取り戻したばかりの娘が「声」を出せない事を知ると、すぐに国中の医者呼んで診させたという。

そうして、ありとあらゆる手を尽くしてくれたと。

結果は残念なものに終わったが、夫は娘を心から愛してくれた。

「お父様の事は好き？」

「すき、おかあさまとおなじくらい」

娘は父親を慕っていた。
母の身勝手ですっと引き離していたとは思えぬほど、父親に懐いていた。

引き離すべきではなかったのかもしれない。
私は初めて自分の行いを恥じた。

だが、それでもあの時は精一杯だったのだ。
娘の命を守るために。

でも、娘と夫の姿を見れば見るほど、心の中の後悔と苦悩は大きくなった。

娘の身を守ることと、父や弟達との時間を守ること。

果たして、どちらを優先すれば良かったのだろうか？

私自身にも、分らなくなってきた。
けれど、もう、逃げる事は諦めていた。

娘と夫の姿を見れば、子供達の仲の良い姿を見れば、もうそんな事は考えられない。
上層部にも言われた。

夫は娘と会えて本当に喜んでいたと。
もう、二人を引き離さないでくれと。
引き離されれば、今度こそ夫は狂い壊れると。

同時に、私にも此処に留まり、王妃として居続けるように懇願さ

れた。

何者からも守るから。

貴方が居れば、自分達は優しいままで居られるから。

津国や凧国の上層部にも引けを取らない優秀な彼ら。

美しく聡明で才高い彼らは、同時に恐ろしいまでの脆さを持つ。
その脆さの奥に潜むのは、確かに狂気。

一度解き放たれば、もう止められなくなる。

けれど、夫達はその狂気を少しずつ押さえ込んでいった。

娘を抱き締め笑う夫の姿を見ていれば、嫌でも分る。

だから……。

そうして穏やかな日々が続き、私はその日々を楽しむようになっていた。

また、娘と再会して半年ほど経った頃に、ようやく娘と共に住まう事が許された。

といっても、娘と同じ部屋ではなく、私と夫の部屋のある宮の一室に娘や息子達の部屋があるというものだった。

けれど、行き来は自由で、いつでも会いに行けた。

ただ、まだ私への監視はあったが、それでもようやく取り戻した娘との生活に私は浮かれていた。

いや、娘だけではない。

息子達も居る。

夫も居るし、連れ戻された当初の頃よりも優しくしてくれるよう

になった。

友人である上層部達も頻繁に来てくれた。

幸せだった。

満たされていた。

たぶん、神生の中で一番幸せな一時だっただろう。

そうして、いつしか忘れてしまっていた。

私と娘が王宮に留まることが、いかに危険な事であるかという事を。

例え、夫の狂気に怯えたとしても、それ以上に夫の魅力に虜になつていく彼女達の存在を。

彼女達にも心があり感情があるという事を、見て見ぬふりをした。

それが、引き起こした悲劇。

いや、バチが当たったのだ。

不相応にも、沢山の幸せを手に入れてしまったから。

私の幸せの影で、あんなにも多くの姫君達が嘆き哀しみ狂つていく事に気づけなかったから。

私は王妃。

王妃は後宮の主であり、後宮の管理者。

私は、それを忘れていた。

王の訪れがないまま放置された後宮で人知れず恨み辛み、嫉妬を募らせていった妾妃達の暴走は、最悪の結果を引き起こすものとなった。

「いやあああああつ！ フォレンティーナああつ」

子供達の居た塔に放たれた火は、私の娘を食らいつくし、骨一つ残さず焼き尽くした。

それは、初めて娘と夫が出会ってから、丁度十年目を迎える数日前の事だった。

王×王妃？（シリアス物）（前書き）

王妃編はこれで終了です。

次回は王様編が一話ぐらいですかね。

王×王妃？（シリアス物）

何処で間違えてしまったのだろうか？

何を間違えてしまったのだろうか？

けれど、失った命はもはや戻らない

残された道は、ただ、突き進むことだけ

＊

享年六歳。

余りにも早すぎる娘の死だった。

ただ、それでも大戦を経験してきた者達にとっては、それほど年齢に注目する者は居ない。

赤ん坊も幼児もバタバタ死んでいった。

それが、あの暗黒大戦。

ただ死ぬだけならまだマシだった。

食べる物がなく、子の肉を食らい、他の子へ食わせる為に間引いた地域もあった。

普通に生きる事は無理でも、普通に死にたい。

でも、それが難しかったのがあの暗黒時代。

普通って何？

美しければ意思を無視して奪われ、永遠に弄ばれる。

醜ければ、長らく痛めつけられ虫けらのように虐殺される。

命の尊さなど微塵も無く、民達はただ換えのきく道具でしかない。

大切なものを奪われ、弄ばれ、ただ快樂の為に殺されていく。

それに終止符を打ったのが、現天帝夫妻と十二王家。

一番最初に蜂起したのがあの方々。

そしてそれに呼応するように、各地で反乱と言う名の蜂起が幾つも始まった。

その殆どが後に王と謳われる者達。

彼らは現天帝軍と十二王家軍の指揮下に入り、それぞれが大戦終結に向けて戦い抜いた。

そしてまた大量に死んだ。

子供も大人も、男も女も、若者も老神も。

ただ、未来を掴み残す為に。

普通に生き、死ぬ事が出来る未来を得る為に。

死んだ私の娘——フォレンティーナ。

彼女が死んだのは、塔の中だった。

それは、今は使われていない塔の一つで、王宮の片隅にあった。当時そこには娘の他に息子達も居た。

三人で、密かにそこに通っていたのだ。

何故？

それは、私と夫への贈り物を作る為だ。

ぎくしゃくとしながらも、少しずつ修復されていった関係。

愛が無くなったわけではない。

愛していた。

誰よりも、愛していた。

ただ、それでも最後に子供達を選んでしまつぐらいには。

夫は強いから。

でも、子供はまだ親の手を必要とする。

神の子供と言うのは、実に弱く脆弱な存在だった。

真っ白で、少し手を触れただけで解けゆく処女雪の如きそれは心だけでなく。

強い神力、強い身体能力を持つ『完璧』に近い存在——それが『神』。

創世の二神が初めて生み出した原初神が作り出した、最初の『モノ』。

守ってあげなければならない。

神はただでさえ子供が出来にくい。

それもあり、子供達は神々にとっての宝とさえ言われ、慈しまれていた。

けれどどんな血も年月と共に腐るように、その本能さえ腐り果てていった。

いつだって犠牲になるのは、弱い者達。
子供達も例に漏れず犠牲になっていった。

大戦中はとくに。

それを知っているからだったのか。

私の母性は驚くほど強く、それは夫を二の次にするほどだった。

でも、愛しているのだ。

他の誰よりも。

ただ、子供達と比べる事が出来ないだけで。

愛してる。

愛してる。

でも、色々と間違ってしまったのが分っているから、酷い事をし
たと分っているから、互いに心の奥底だけは隠し接してきた。

そんな私達を間近で見て育った子供達。

誰から聞いたのか——私達の結婚した日を祝うために、三人で贈
り物を用意していた。

塔はその秘密基地。

せっせと毎日通い、その贈り物を作っていた子供達。
それを知ったのは、塔が焼けた後だった。

「フォレンが！」

「ティーナ——！」

塔に駆け付けた時、地獄の業火が塔を包んでいた。
その前で泣き叫ぶ息子達が、上層部に押え付けられていた。

「まさか、そんな……」

娘の名を叫ぶ息子達。

勢いの強い炎に阻まれ、中に入れない上層部。

その必死な形相に、娘がまだ中に残っているのを知った。

「フォレンティーナ……」

塔から娘の遺体は最後まで見付からなかった。

妾妃達が付けた火は、ただの火ではなかった。

あの大戦時に頻繁に使用された『呪具』の一つが使用されていた。
神を簡単に殺す事の出来る、呪われた道具。

優しい娘。

他者を思いやる事の出来る娘。

娘は息子達を庇って死んだ。

火に気付き、子供達はすぐに外に出ようとした。

でも、扉は開かず窓も開かなかった。

そんな中で、娘は何度も窓に体当たりし、息子達を外へと突き飛ばしたという。

そうして自分も外に出ようとして、上からの落下物に巻き込まれて姿が見えなくなったのだと。

目の前で、すぐに後を追いついてくると思っていた娘の姿が見え

なくなっていくのを、息子達はどんな思いで見たのだろう。
最初に駆け付けた上層部達も、どんな思いで。

しかも、上層部が駆け付けた時には、妾妃達の雇った者達が邪魔をした。

更に駆け付け絶叫した私に、それが起きた。

全て始末したと思っていた筈の刺客が私の体を貫いたのだ。
塔を燃やしたものは別の、呪われた『呪具』が肉をえぐった。

シンデシマエー！

妾妃達の止め処ない恨みと怒りが刃を通して、注がれた呪い。

『呪具』——それは神を殺すもの。

一度その刃にかかれば、助かっても消えない傷を体に残す。
術でも決して消せない、傷を。

私の場合は、それに加えて身を蝕む強力な呪いが残った。

そして告げられた。

呪いを遅らせる事は出来ても、解くことは出来ない。
それは、呪った者達が死んでも同じ。

どんなに周囲が尽力しても、五十年保つかどうかだと。

しかしそれで夫達が諦めるわけもなかった。

殺せと、心ある者達も終には言った。

妾妃達を殺せ。

それに関わった全ての者達を処罰しろ。

娘の死を突きつけても、一切の反省も見せなかった彼女達。
ただあるのは、王の事ばかり。

王、王、王。

王に見て貰えるなら、愛される為ならばどんな手段だってとる。
と同時に、王の正妃である私を傷付ける為なら、どんな事だって
する。

女として見て貰えず、長らく放置されたままの年月が彼女達を大
きく歪めた。

元からそうだったと言われても、きつと違う。

たとえそうでも、ここまでの事をするからには、それだけの理由
がある。

愛しい相手に見て貰えず、実家からは王の寵愛を手に入れろとせ
つつかれ、憎い相手が王の側に居続ける。

何の為に自分は此処に居るのか。

本来その場所は自分の場所なのに。

王を愛している。

王のただ一人の存在になりたい。

それは、王ともなれば、多くの女性達を侍らしても当然という教
育が徹底されているにも関わらず彼女達が願った強い思い。

王の子を産みたい。

王の関心を手に入りたい。

自分のため、実家の為、王に愛される為。

妻になる事も母になることも許されず、ひたすら飼ひ殺しにされる日々。

王は自分の心と体以外の全てを与えた。

彼女達が望めば、予算内でそれらを叶えた。

そしてそんな自分に愛想を尽かしたならば、そこから逃げる為の手段も用意していた。

けれど彼女達はそれを選ばなかった。

選ばず、残り続け、そして堕ちていった。

開けてはならない狂気の箱を解き放ち、そこにあった全ての憎悪を憎い相手に叩付けて。

娘は死んだ。

私の愛しい娘。

私達の愛しい子。

娘の亡骸が無いまま、行われた冥府送りの儀。

「声」なき娘は苦しみながら死んでいく中で一体何を思ったのだろうか。

そして、体を焼き尽くす炎に悲鳴を上げただろうか。

殺せ、殺せ、殺せ。

我慢に我慢を重ね、耐え続け、一度は堕ちた心を必死にたぐり寄せて修復した上層部の心に一気に罅が入った。

ただ一言。

それで全てが終わる筈だった。

妾妃達と今回の一件に関わった者達の、処刑宣告を。

でも、私は言えなかった。

見つけてしまった日記。

「声」を出せない娘が、毎日書き続けていた秘密の「声」。

そこには、まるで自分の死を予感したかのように書き連ねられていた。

ある時から、それは未来日記になっていたのだ。

ある筈だった未来。

続くはずだった道。

強引に断たれたけれど、娘は夢見ていた。

いつかの先に待つものを。

『みんなでしあわせにくらせて、わたしはともしあわせ』

流れゆく涙が、紙面の文字をにじませる。

しあわせです。

幸せです。

幸せ——。

『まいにちがともしあわせなの』

娘の笑顔が蘇る。

そして最後のページを捲った時、そこに書かれていたものは――。

それは憎悪と怒りを私に抑えさせ、一つの決断をさせた。

妾妃達と今回の一件に関わった者達の永久幽閉。

彼らは言った。

お前など王に相応しくないのだと。

お前が王妃でいる限り、この国に発展はないのだと。

だから分らせてやったと。

と同時に、腐った血が続くのを防いだのだと、彼らは笑い続けた。

腐った血。

腐った血が続く。

娘の存在は彼らにとっては目の上のこぶだった。

たとえ娘が寵妃になろうとも、正妃の生んだ子が優先される。

だから、殺さなければ。

だから、始末しなければ。

彼らにとって娘は庇護するべきものではなく、ただの邪魔者。

自分達の野望の邪魔になる、ただの障害物。

娘と、王妃である私は、どこまでも厄介者でしかない。

彼らは叫ぶ。

腐った血を持ったものが国を継ぐのを阻止したと。
尊い血こそが続かなければならないと。

私が王妃でいる限り、この国に未来はないと。

もはや言っている事は支離滅裂になりながらも、血走った目で泡を飛びしながら叫び続ける彼ら。

私を王妃から引きずり下ろし、娘を殺し、自らの娘を後宮入りさせて権力を握る。

今までの者達と比べれば、彼らは優秀だろう。

娘を殺し、王妃の寿命を限りなく縮めさせたのだから。

普段は厳しい警備が手薄になり、王妃に隙が出来るその一瞬を待って、待つて、待ち続けて。

報いた一矢。

呪いは今も続き、私の命を食らい続ける。

助かる方法はない。

延命は出来ても、呪いから解放される手段はない。

『終わり』の存在しないこの世界に、呪いを終わらせる手段はなかった。

彼らは笑った。

苦しいかと。

そして自分達はもっと苦しかったと笑った。

死ね、死ね、死ね。

少しでも苦しんで死ね。

この身を蝕む呪いは、私に壮絶な苦しみをもたらすだろう。

だが、だからといって彼らの思い通りになる気はなかった。
見せたのは、とびっきりの笑み。

「では、見ていなさい、生きて」

大人になりたかった娘。

幸せになりたかった娘。

みんなで、みんなでなりたかった。

そして――。

「生きながらえ、目の当たりにすればいい。自分達の予測が外れた
事を」

私が王妃でいる限り国は駄目になると言うならば、大いに悔しが
ればいいのだ。

それが、私の復讐。

娘を奪い、私の寿命を食らい続ける呪いへの。

夫達との時間を奪った者達への。

もうとつくに気付いていた。

彼らは私が生きているだけでも駄目なのだと。

王妃として妾妃を認めることが王への愛と言ったのは誰だったか。

けれど、妾妃を認めても、何か起きればすぐに私への責めに変わった。

結局は何をしても、私の存在は忌々しいものでしかない。

しかし、それで泣きながら逃げるには少々心が強くなりすぎていた。

いや、そもそもそんなに優しくはない。

だから力を貸して。

最後まで駆け抜けるから。

彼らが悔しがる位に、生きるから。

最後の最後まで、王妃として、母として、友として。

呪いすらも生きる理由に変えて。

そして造ろう――。

途絶えると彼らが言い切った、この国の、未来を。

*

コホッと出た咳に眉を顰める。

混じる血が、命の終わりが近い事を告げる。

あの日以来、酷使し続けてきた体はとうの昔に限界を超えていた。

それでもなお頑張れたのは、単純な意地と子供達、そして夫達の為である。

五十年前に彼らに下した判決。
当時は夫達も大反対した。

禍根を残さないように殺してしまえ。
そんな声は大きかった。

どうして許せるんだと、何度も言われた。

許したわけではない。

許しているなら、ここまでしない。

許さない、絶対に。

でも、だからといって感情のままに殺せば止まらなくなる。
だから別の方法で復讐することにしたのだ。

彼らが最後に絶るものを徹底的に叩きつぶす、その方法で。

それが、この国を発展させる事。

でもそれ以上に私がこの国を守り繁栄させていく事を望んだのは――。

私は枕の下に置いていた日記帳を取り出す。
そこに書かれていた文字をゆっくりとなぞった。

実はもうあまり目も見えない。
呪いでボロボロとなった体は、私から多くのものをうばった。

だが、それでも過去に呪いで死んでいった者達に比べれば断然マシだった。

周囲が必死に尽力してくれたおかげで、五十年も生き続けることが出来たのだから。

でなければとつくの昔に冥府に旅立っていた。

長年の過労もあって、私は呪いを増長させやすい体質になっていたから。

休めと言われた事は数知れず。

誰の目から見ても明らかすぎて、何度も何度も説得された。

でも、これだけは譲れなかった。

娘を失い、狂った様に泣き伏しこの世を呪った夫。

それでも国を見捨てないでくれるのは、娘の思いを知ったから。

民達の為ではなく、娘の為に。

そして息子達の生きる世界を壊さないために。

本当に、駄目駄目な統治者である。

でも……それでも、ここまで頑張ってきたのだから責めないで欲しい。

夫も、上層部も。

そしてそれを支えてくれた全ての者達を。

彼らの思いを封じ、強要し、国を維持させ続けてきたのは全て私の私。

だから元凶たる私が、休んでいる暇などない。

駆けつけてきた。

ずっと、ずっと休みなく。

コホンと先程より大きな咳をする。

ゴボリと大量の血を吐く。

また、命の終わりが近付く。

心残りは沢山あった。

まだ七つの息子達の事。

夫の事、友人達の事、国の事、民の事。

もつともつと頑張りたかった。

夫を支えなかった。

息子達の成長を見たかった。

娘が愛したこの国の繁栄を見たかった。

たった五十年。

それまでの間に色々あった。

ありすぎて、全て覚えている事が難しいぐらいに。

再び咳をする。

仕事を全て上層部に引き継がせて床につくようになったのは、今から半月前の事。

もう、これ以上粘れば引き継ぎも出来ないまま逝くと判断し、ようやく周囲の言葉を受け入れた。
それから症状は急激に進み出した。

毎日見舞いがあつた。

夫は毎日側に居た。

朝は共に起き、食事を一緒にとり、仕事の帰りを待つ。

今が貴方達の蜜月ね――。

友人達の言葉に、こしょばゆいものを感じた。

蜜月……そんなものは、結婚する前もしてからもなかった。

ああ、そうか……。

今が、それなのか。

蜜月――別名子作り期間。

もう子供達は居るから、二人だけの時間。

でも、それももうすぐ終わる。

近隣で起きた戦の收拾にかり出された夫は数日前に旅立った。

『すぐに戻ってくる』

何度もそう言った夫を、私は笑顔で送り出した。

『帰ってきたら一緒に行きたい場所があるんだ』

それを言い出すまでに何時間かかったのだろう。

息子達にからかわれながら、ようやく口にした言葉に私は笑ってしまった。

一緒に行くからね――

叶わぬ約束であると互いに知りながら。
それでも交わした約束。

でも……。

瞳を閉じれば、今にも見えるのは過去の思い出。
大変で辛い事も多かったが、幸せなことばかりが思い出されてい
く。

駆け抜けた時間。

共に駆け抜けた者達。

私は幸せだっただろうか？

そう考え、私は笑った。

そんな事、分かり切っているではないか。

パタパタと走る音が聞こえ、ひょこりと顔を出したものに私は微
笑んだ。

「ありがとう、迎えに来てくれたのね」

あの時とは逆の光景に、私は堪えきれない笑みをこぼした。

命の終わりの音が、すぐそこに迫っていた。

『——ティナ、フォルティナ』

『ルドラスカ、お帰りなさい』

『ああ、ただいま。調子は良さそうだな』

『ええ。で、行くの？』

『と思っていたが……なんだかお前の方が行きたくて溜まらないって感じだな』

『当たり前よ。だって、こういうのは初めてだもの』

『はは、そうだな。なら、一緒に行こうか——俺の愛しい奥さん』

何処までも――。

国の繁栄に尽力した賢后――河国王妃フォルティナの逝去。
それは、王宮に帰還した河国国王が、真っ先に妻の部屋に駆け付
ける少し前のことだった。

○月○日

おかあさんがすき。

おとうさんがすき。

おとうとたちがすき。

じょうそうぶも、わたしをそだててくれたおじいちゃんとおばあ
ちゃんも。

そしてこのくにもだいすき。

またこんどもこのくににうまれない。

おとうさんとおかあさんのこととして。
おとうとたちもいて、みんなでくらすの。
だから、うんでくれてありがとう。

王×王妃？（シリアス物） 【完結】（前書き）

これで、河国国王夫妻の物語は終わりとなります。

今回は、王サイドのお話と、その後のお話です。
視点が色々と変わるのでご注意ください。

王×王妃？（シリアス物） 【完結】

フォルティナが死んだ。

彼女の大好きな白い花の咲く季節に、ひっそりと。

河国王妃の葬儀は、彼女の遺言により王妃としてはあまりにも慎ましいものだった。

葬送の鐘が鳴り響く中、王妃を慕っていた者達の泣き声が響く。

上層部も居た、下働きの者達も居た。

官吏の中にも、武官の中にも、貴族の中にも、慕っている者達は多く居た。

民達も、きっと彼女の為に泣いている。

フォルティナが駆け抜けた神生の結果に、耐えられなくなった俺の瞳から涙が零れた。

思い出せば、一人の男と女としての付き合いより、王と王妃としての時間の方が長かっただろう。

不甲斐ない夫。

妻一人幸せに出来なかった駄目夫。

側室達やその背後の者達の暴走を止められず、側室との間に出来た息子達やフォルティナとの間に生まれた娘も失ってしまった。

残されたのは二人の息子達。

憎い側室達の血を引きながらも、それでも息子として接することが出来たのは、妻や娘の御陰だった。

愛する事は出来ない。

けれど、大切に育もう。

二人の息子のどちらかが王になり、残された方が王を補佐する。自分とは違う王になれば良い。

賢君と謳われた俺だが、賢君は一種類しか居ないわけではない。国を思い、民を思い、上層部や官吏、軍部と協力して国のために働き、更なる発展と栄華をもたらす。

それでいて、妻と子を守りきれぬ王になれるように。

俺は、息子達を鍛えた。

知識も、政治手腕も、神力の使い方も、全てを与えた。

まるで自分の命を削るように、息子達に、妻が与えられなかった分まで与え、引き出した。

そうして五百年余。

息子達は共に十七を数える年齢となり、王位を継ぐに相応しい才能と実力を兼ねそろえるようになった。

自分達で見つけた多くの側近に加え、俺と共に建国に尽力した上層部の心も掴んだ息子達はとても頼もしく思えた。

また、この国もようやく安定し、すぐに何か事が起きる可能性は少ないだろう。

一番最高のままで、継ぐに相応しい息子達に渡す。

それはたぶん、どの国にとっても最大の願いであり、望みだろう。

息子達が成果を出し、一つずつ認められていくのを見る度に思う。もう、これで大丈夫。

きつと、この国を俺達以上によりよいものにしてくれる。

けれど、出来るならば二十歳ぐらいまでは頑張ってやりたかった。せめて、心から愛する者がその側に寄り添うまでは。

「もう十分ですよ、父様」

それは、新月の夜の事だった。

月の無い夜、中庭の四阿に居た俺の前に、すっかり一人前の男の顔をした息子達が現れた。

「大丈夫ですよ、俺達は」

息子達の顔を見て、気付いた。
全て分かっているのだと。

ずっと隠し続けてきた。

知っているのは、上層部達だけで、他は誰も知らない。

限られた残り時間が分かってすぐに動き出した。

少しずつ、少しずつ上層部に仕事を引き継がせ、息子達に王の仕事をさせていった。

息子達は聡い。

知らなくても良い事まで知ってしまうほどに。

「あなたが俺達を愛せない事は分かっていました」

息子の言葉は、予想していたものであつて驚く事はしなかった。

「俺達の母親の所行を考えれば、当然の事です」

「でも、貴方は愛せなくても、俺達を大切に育ててくれました」

愛せなくても、大切に育てる。

それが、せめてもの償いだった。

この世に生み出し、母を奪い、愛せない事への。

「それに寂しく思った事はないですから」

「常に誰か彼かは気にかけてくれた」

息子達が嬉しそうに笑うのが見えた。

不思議だった。

新月で、周囲に灯りもないのに、それでも息子達の顔がよく見える。

「それに、俺達には実の母以上の存在が居ましたからね」

「フォルティナお母様、そしてフォレンティーナという姉も」

「そして父様も居た」

父様――。

「そう、俺達にとっては、やはり貴方は父だ」

だから――と、息子達が笑う。

この国を継いでもいいと思ったと。

「頑張りましたよ。少しでも早く王位を継げるように」

「それでは、俺はいろいろな国王みたいだな」

「ええ、父様はいりません。もう、この国には」

息子の言葉に、少しだけ寂しさを覚える自分に驚いた。

「そうか――」

「だから、後は余生を好きに使って下さい、父様」

「……」

「この国で待つのも良し。別の場所に行くのも良し」
「いつか生まれ変わるフォルティナお母様と出会える事を祈ってます」

そうしたら、二人で一緒に来て下さいねと笑う息子達に、俺は堪えきれずに笑い出した。

「ああ、そうだな」

「そうですよ」

「どちらが先に愛しい相手と出会えるか競争ですね」

風が、四阿から見える花をゆらす。

「俺達が、フォレンティーナの生まれ変わりに会えるのが先か、それとも父様が母様に会えるのが先か」
「え？」

フォレンティーナ？

……まさか。

「お前達の愛する相手は」

「ええ」

「これだけは、母様を恨みました」

にっこりと、二人揃って笑う。

「まさか」

「姉弟で生まれてくるなんて」

確かに、生まれ変わりでもしなければ結ばれない。

「といっても、フォレンティーナが死んで嬉しいなんて事はありませんからね」

「たとえ血のつながりのある姉弟でも、結ばれる方法は色々ありますし」

そう、色々と。

その笑みに、やはり親子なのだと悟る。

もしフォルティナが生きていれば、今頃卒倒していただろう。フォレンティーナも、絶対に食われていたに違いない。

「——いつそ、フォレンティーナだけ十二王家に生まれればいいのに」

「父様?!」

「俺達に死ねと?!」

「それで結ばれれば、愛は本物だ」

「勝手に人の愛を測らないで下さい!」

神々にとっての神たる存在が、天帝陛下と十二王家である。

そこに喧嘩を売り見事愛を勝ち取れば、きつと何事にも打ち勝てる。

「父様もこの数百年で性格が悪くなりましたね」

「本当だよ」

「ハッ! これぐらいで狼狽していたら皿国国王と渡り合えないぞ」

「いや、長いものには巻かれます」

「あの方だけは戦いたくありません」

「ああ、それが正しい選択だ」

強い者には絶対服従。

それが全て正しいとは限らないが、相手があの凧国国王に関してはそれを薦める。

特に、凧国王妃が居ない今は。

「……そろそろ、戻れ。明日も早い」

少しずつ強くなってきた風に、咲き誇る花の揺れも大きくなる。色とりどりの花弁が空を舞う。

まるで、新たなる旅路を祝福するように。

「——父様」

「ん？」

「また会いましょう」

「きつとです」

息子達がそう言うと、二人そろって頭を下げる。長くて数十秒。

けれど、永遠の時にも感じられた。

それでもいつかは終わりが来る。

息子達は分かっている。

皆に見守られながらというのは性に合わない父の気性を。

そして、上層部もまた気付いているだろう。

今まで、ずっと共に国のために働いてきた。

大戦からの付き合いの仲間達であり、盟友達の言葉が蘇る。

またな——。

ああ、またな。

「では」

「また」

立ち去ろうとする息子達に、俺は最後の言葉をかける。

「式には呼んでくれ。妻と一緒に参加する」

その言葉に、息子達は一瞬顔を見合わせたが、すぐに笑顔を見せた。

喜んで――。

息子達の足音が聞こえなくなり、一人残った四阿から空舞う花弁を見上げる。

息子達に言いたいことはまだあった。

体に気をつけてだとか、良い王になれとか、幸せになれとか。

けれど、考えて考えて、一番相応しいと思ったのは、再会の言葉。

そう……俺なりに、この国を愛していた。

大戦の中で立上がり、勝ち取り、天帝陛下達から与えられたこの国をよりよいものにする為に、戦い続けた。

全ては、帰るべき場所を守る為に。

あの大戦で、住むべき場所、帰るべき故郷を無くした者達はあまりにも多い。

妻もその一人だった。

風国の国王が愛する妻の為に平和な国を作ろうとしたように、俺もまた愛する妻と生まれてくる子供が幸せに居きられる国を作りたいかった。

そうして、走りつづけた。
でも、それももう終わる。

震える指先を見る。

神と言えど、酷使し続けた体は人間と同じように衰弱し、酷くなれば死ぬ。

神は不老であっても不死ではない。
そう、神でも、死ぬのだ。

殆ど休み無く働いた体が、限界を訴える。
けれど、もう出来る事は全て行った。
十二王家にも、連絡した。

息子達の王位就任をこの目で見れなかったのは残念だが、きっと良い王になるだろう。

もっと自分を大切にしろと言われるかもしれないが、俺にはこんな生き方しか出来なかった。

息子の為には生きれない。

でも、息子達が今後生きる為に、少しでも良い未来を作る為には生きられる。

そうして生きた五百年は、驚くほどあっという間に過ぎた。

「なのに、父と認めるのか……」

娘を失い、妻を失った。

それでも、生き続けた五百年。

今まで必死に堪えていた物が流れ出す。

最初は少しずつ、次第に流れを増して。

サラサラと流れる命の砂が、終わりに向けて流れていく。

誰にも見せない。

誰にも見送らせない。

彼らには先を見て欲しいから。

またな――。

また会いましょう。

盟友達の声が、息子達の声が聞こえる。

花卉の舞う向こうに、人影が見えた。

「……フォルティナ……フォレンティーナ？」

娘の手を引き、笑う妻の姿が見えた。

体が勝手に動き、弾かれるように走り出す。

腕を伸ばし、咲き誇る花畑の中で妻と娘を抱き締める。

待ってたよ——約束の場所で。

朝日が昇る。

その四阿に、彼らは集まっていた。

「父様……」

長椅子にもたれかかるように座り、だらりと降ろされたままの父の手をそつと取る。

命の炎が完全に消えた手は冷たかった。

けれど、その顔は何処までも幸せそうに笑っていた。

父の周りに散らばる白い花弁に、誰もが気付いた。

迎えに来たのだと。

王妃が、王女が愛した白い花。

その花弁の中で眠るように逝った河国国王に、その場に居た王子二人と彼らの側近達、そして王と長きに渡って苦樂をともした上層部は一斉に頭を下げたのだった。

河国国王の亡骸は、その白い花弁に埋もれるようにして棺に収められたという。

沢山の白い花弁が、青空に舞う。

その美しさに、病院の中庭からそれを見上げた患者や看護師から
歓声あがった。

彼女達を除いては。

「あ」

「あ、じゃない！ どうするのよ香奈っ！」

「わ、わざとじゃない」

「ってか、どうしてそれで柚ポンを殴るのよお！！」

ぎゃあぎゃああと喚く友人に、香奈は花弁の無くなった花束を見た。
確かに今のは自分が悪かった。

「ばっか」

「煩い柚緋！」

「ってか、私の好きな花だったのにいつ」

涙声の美鈴に、重樹がぽりぽりと頬をかく。

「あゝ、そんなに欲しいなら、後でもう一度買っから」

「え？」

その花束を美鈴にくれたのは、重樹だった。
怪我をした美鈴のお見舞として持って来たのだ。
丁度病院の中庭を散歩していた時に渡された花束は、美鈴が一番
大好きな花だった。

物心ついた時には既に気に入っていた白い花。

なのに、同じく見舞いに来ていた香奈が、からかってきた柚緋の
頭をその花束で叩いたのだ。

結果、花束は茎だけとなった。

更に不幸なことに、花弁は風に舞い飛んでってしまう始末。

本気で泣きたくなった美鈴だったが、重樹がもう一度くれるとい
う約束によりやく笑顔を見せた。

「それより、もうすぐ検査だろ、お前」

柚緋の指摘に、美鈴がハッと腕時計を見る。

「そうだった。でも」

「今日は何の用時もないから、俺と香奈は夕方まで居る。重樹もだ
ろ？」

「あ、ああ」

「って事だ。言ってこい。香奈、お前もついてけ」
「え？」

「花束をダメにしたんだ。美鈴に馬車馬の様にこき使われてこい」
「あ、それいいかも」

逃げようとした香奈を捕まえ、美鈴はにっこり笑って病棟へと向

かった。

また、風が強くなってきた事もあって、他の患者達も次々と病棟へと戻り、柚緋と重樹の二人が中庭に留まり続ける事になった。

「遅かったな」

「え？」

「どうせ、どうでも良い事をウジウジと考えていたんだろう？ はっ、小心な所は全く変わらないな——ルドラスカ」

「……」

「それに、美鈴が怪我した時のお前の切れっぷりも見物だった……そんなに失う事は怖いかな？ フォルティナを」

「……なら、お前ならどうする？」

そう言つて柚緋を見つめた相手の顔からは、重樹が綺麗に消え、代わりに神であり、河国国王として生きたルドラスカが居た。

「ふん……河国か……お前がその国の王になったのもまた運命」

柚緋が歌うように口にする。

それに、重樹の肉体を持ったルドラスカがくつりと口の端を引き上げる。

「そうだな……河は、生と死の境界線。古来、人間界では河を渡る事で死の国に行くのだとした国もあった」

「そう、国によつては違うがな」

それが、辻であつたり、河原であつたり、橋であつたり。

けれど、河もまた生と死の境界線を司る。

つまり——それは、ルドラスカが死の関係者であるという事。

いや、正確にはフォルティナこそが関係者であり、ルドラスカはそれを隠す為の幕である。

逆にルドラスカは自分と同じ——いや、自分の。
柚緋が笑い、ルドラスカが笑う。

共に、死を愛し、死を守る事を決めた。

「俺の事より、自分の事をどうぞ。此度も中々に厳しそうですから」
「俺に意見するのか？」

「ええ、フォルティナ——いや、美鈴を守る為には。美鈴にとって死の女神は特別な存在。女神を守る為なら、どんな怪我さえ厭わない。だから」

「そう、守るしか無い。香奈を」

「ええ。けれど、俺など柚緋の足下にも及ばないから」

強さも、頭の回転も。

「ふん、狸が」

そう言って笑う柚緋にルドラスカは苦笑する。

「それにしても、全員が揃うなんて何千年ぶりか」

「そうだな。俺達の方と、香奈側の方。全員が揃うのは……あの時以来か」

まだ、原初神達が居た頃、天界十三世界が『始まりの世界』だった頃。

「さて、今度はどうなるか」

あの時のように失うか、それとも――。

「神のみぞ知る、か」

「そうだな」

願うのは、愛した女の生。

望むのは、愛した相手と一緒に生きる事。

「まあ、今回も色々と大変だという事だ」

柚緋の言葉に、ルドラスは空を見上げた。

ヒラヒラと舞い落ちてきた花弁が、伸ばした掌へと収まる。

フォルティナが愛した花。

前世は沢山の柵に絡め取られた神生だった。

けれど、今回は。

「分からないぞ？ 柵なんぞいくらでも生まれる」

「それなら、全て断ち切る。今度こそ」

神では無く人間として生まれ変わってきた。

王と王妃ではなく、ただの一般市民として。

もちろん、それで全てが上手くいくわけではない。

沢山の努力が必要となるだろう。

でも――。

フォルティナの笑顔が、美鈴の笑顔に重なる。

今度こそ――。

「幸せになれるといいな」

柚緋の言葉を最後に、ルドラス力は再び意識を沈めていく。

自分達が叶えられなかった願いを、重樹と美鈴が成就させてくれる事を願いながら――。

王×王妃（シリアス物） 【完結】

海影一員×生贄（妻を傷付けた者達に対する夫の復讐物）前編（前書き）

警告）サブタイトルにも書きましたが、妻を傷付けた相手への夫の復讐物です。嫌な方はUターンして下さい。

警告2）前編、後編の続き物です。一話で終わらせようかと思いましたが、続きます。

海影一員×生贄（妻を傷付けた者達に対する夫の復讐物）前編

ドンツと突き落とされたのは、暗い暗い水の中。

服が水を吸い、縛られた手足につけられた重石が私の体を沈めていく。

酸素を求めて体を動かすが、その度に肺に流れ込む水にどんどん酸素が奪われた。

ごめんなさい

姉の泣き顔が蘇る。

すまない

恋人の泣き顔が蘇る。

本当は、姉が生贄になる筈だった。

村一番美しかった姉。

村長の若様の従姉妹。

けれど、村長の若様だった恋人は、私ではなく姉を選んだ。

物心ついた頃から、恋人と姉と三人で遊んでいた。

産まれた時から生贄になる事に決まっていた姉とは違い、私が若様の許嫁となった。

けれど、それでも若様は優しく私を愛してくれた。

お前を愛している

幸せだった。

と同時に、姉の運命に憤りを感じた。

何故姉が生贄になるのか。

私のたった一人の姉。

なのに美しいという理由だけで生贄に捧げられる。

村の悪しき因習。

今までも何人も美しい少女達が海の藻屑と消えた。

おかしい、おかしい、おかしい。

どうしても姉を助けたくて、調べた。

生贄を捧げる必要性があるのかと。

生贄を捧げたって、海の荒れが鎮まらない時はあつたではないか。

ならば娘はただの無駄死に。

これ以上犠牲を出してはならない。

若様の許嫁となった私であれば、生贄制度自体を潰せるかもしれない。

こんな、悪しき因習。

絶対に、無くさなければ。

けれど、何百年も続いた因習は村人達の心に染み込み、私は幾つもの壁にぶちあたった。

そうするうちに、姉が生贄になる日が近付いて来た。

このままでは姉が死ぬ。

けれど、姉を逃がしても別の少女が生贄に捧げられる。

村に少女が居なければ、別の場所から連れて来られる。

それを防ぐには、因習から村を解き放たなければ。

私は、村の最長老にして若様の曾祖母様に直接嘆願した。

何度も、何度も。

生贄制度はおかしいと。

同じく姉を失った曾祖母様なら、きっと分つてくれると信じて。

けれど海は次第に荒れ始め、少しずつ説得に応じて来た曾祖母様や村の古老達の心も揺れ始める。

そして最後の日。

説得が上手く行かなかった私がせめて姉だけでも逃がそうとした時、若様がやってきたのだ。

若様が姉を助け出そうと言った時に私は即座に頷いた。

やはり若様も姉を助けたいと、生贄制度の廃止を願っていたのだ――と嬉しくなった。

まさか、思ってもみなかった。

若様と姉が愛し合っていたなんて。

代わりに私を生贄にする気だったなんて。

若様と姉は愛し合っていた。

幼い頃からずっと。

けれど姉は生贄になる。

だからよく似た妹の私を許嫁にしたのだと、縛られていく私に若様は告げた。

どうしても諦められなくて。

募った恋心。

積もった狂気。

姉を愛している。

姉を死なせたくない。

何故あの少女なのだと。

何故、あの少女が生贄にならなければならないのだと。

何故、別の少女ではなかったのだと。

生贄制度を疑問視するのではなく、姉が生贄になる事に疑問を抱いた若様。

他の少女でも良いではないか。

他の少女でも構わないではないか。

愛する少女以外ならば誰でも良い。

そうして選ばれたのが、私。

生贄となる姉とよく似た妹ならば構わないと。

神をも謀る恐ろしい考えを抱き、企て実行した。

そして私は、若様の意を受けた者達に縛られ海へと投げ捨てられた。

時化の酷い、嵐の晩のことだ。

生贄となった私は、海の奥底へと沈んでいった。

ごめんなさい

姉が泣く。

泣いて、泣いて、私が沈められていく事を謝っていた。

すまない。

若様が謝る。

何度も何度も頭を下げて、その口の端に笑みを浮かべる。

そして二人は寄り添い、苦難を乗り越え神に祝福された恋人の様にお互いを抱き締め合う。

悲しかった。

苦しかった。

憎かった。

辛かった。

吐き出すのは罵倒のそれ。

だった筈なのに、叫んだ言葉は全く違った。

「お願い！　なら、せめてこれで最後にして！　生贄は、最後に！」

生贄制度を調べる中で分った沢山の悲劇。

生贄となった少女達の家族や恋人の哀しみと苦しみ。

昔は確かに生贄を捧げて海の荒れが収まった事もあったかもしれない。
しかし、近年では生贄を捧げて海が収まることの方が大幅に少ない。

くつてきた。

けれど、昔から続くからとして、続けられる呪われた儀式。

せめて、せめて。

生贄になど出したくなかった――

前回の生贄となった娘の母を訪れた私に、彼女は泣きながら思いの丈を吐き出した。

それでも、最後には村人達に連れ攫われた娘。

本来生贄になる筈の少女は、村長の息子の妻になるからと、代わり選ばれた。

結婚を三日後にして、突然生贄にされたのだ。

けれど、海の荒れは収まらなかった。

家族の命と引き替えに海に消えた娘の命。

こんな制度、無くして欲しいと必死に枯れ枝の様な皺の手で私を掴み、彼女は泣いた。

生贄制度なんていない。

いないのだ。

でも、私は生贄となる。

生贄にされる。

ならば、どうかこれを最後に。

不思議だった。

辛いのに。

苦しいのに。

恐いのに。

悔しいのに。

助けてと叫びたいのに。

それでも……。

「お願い、生贄制度を」

「大丈夫だよ」

若様が笑う。

「そんな事を気にするより、お前は海の神に精一杯仕えてくれ」

狂気の笑みが私を居抜き、指が鳴らされた。

ドンツと、若様の配下の青年に私の体は海へと押し出された。

そんな事？

そんな事って？

私は何だったのだろうか？

「生贄制度を無くすなんて出来るわけがないじゃないか。なぜならこの村は」

微かに聞こえて来た言葉に、絶望に目を見開く。

ゴポンと最後の気泡が口から出され、私の意識は途切れていった。
最期に、美しい何かを見た気がする。

＊

「何してるのよアンタ」
「い、茨戯様」

自分の配下である男の手元を見ながら、茨戯は首を傾げた。
この男にこれほど似合わないものはない。

「こ、これは、その」

男が慌てて隠したのは、アンティークドールのカタログ。
といってもこの男の趣味ではないのは確かだ。

「なんでそんなもん持つてるのよ」
「そ、それは、その」

頬を染め、もじもじとし出すその格好は到底二十代前半の男とは思えない。

しかも見た目は、他の男の娘達とは違い、妖艶ながらも精悍な男性的な美貌をしている。

似合わない

茨戯は本気で思った。

美形だけど、美男子だけど、他の男の娘達とは違う男性的な美貌には、余りにも似合わなかった。

「つてかそれ、朱詩の持ってたカタログよね？」

「か、借りたんです」

「ターゲットの趣味？」

茨戯もこの男も国王直属の影——『海影』に所属する。

諜報、暗殺、その他裏に関わる全ての仕事を引き受ける。

ターゲットの所に潜入する事もあり、その為の情報収集としてなら茨戯も自分の趣味ではない雑誌を読みふけることはあった。

しかし、男は首を横に振った。

「いえ、これは妻への贈り物で」

「妻？——ああ、あの子ね」

「はい」

茨戯は男の妻を思い出した。

男が熱愛し、献身的に尽くす相手。

確か、数年前に男が人間界の海で拾った少女だった。
荒れ狂う海に潜む『魔性』退治に赴いた先で、海の中に沈んできたという。

「海の神を偽る『魔性』への生贄だったのよね」

「ええ——」

男が見つけた、瀕死の状態で風国へと運び込まれた。

「当時は扱いに困ったのよね」

人間なのだから人間界に返す。

けれど、生贄として捧げられたとしては家に帰せない。

というのも、以前に生贄は必要ないと返した所、人間達はその生贄を忌むべき者として扱い、別の生贄を捧げてきたからだ。

だから逃がすならば別の場所。

それもあるべく早く。

人間の体では、神々の世界は毒であり、長く留まれば後遺症どころか死んでしまう。

しかし……少女は心を壊していた。

「姉と恋人——いえ、許嫁に騙され、姉の身代わりとして生贄にされたなんてね」

「茨戯様」

「分ってるわ、言わないわ」

心を壊した少女をどうするかと途方に暮れた上層部に、この男は願ひ出たのだ。

自分の妻にしたいと。

「アンタなら、相手なんて選び放題だったのに」

男の申し出は受け入れられた。
炎水家が許し、神籍が与えられたからだ。

「茨戯様」

「あら、アタシは感心しているの。アンタの献身さにね。おかげで、奥方もかなり調子がいいと聞くし」

他の部下達の話で囁かれていた。

その時は右から左で聞き流してはいたが、微かに頭の隅に留めて置いた。

「そうであってくれば良いのですが」

一目惚れだった。

少女が意識のあつた最後に自分を見た時の、その瞳に。

男は心奪われた。

それは少女が心を壊しても変わらぬほど、少女に恋い焦がれた。

自分が待ち続けていたのは、この少女。

生贄を求める神の心が少しだけ分った気がした。

だが、男は生贄を求める神の様に強引な手段はとらない。

「まあ、アタシも人のことは言えないけどね」

男は茨戯を見る。

ただ一人の少女だけを求めた主。

そして、今も少女が生まれ変わるのを待ち続けている。

そんな主は、自分が少女を引き取ると決めた時に、即座に同意し、擁護してくれた。

「人形も良いけど、アンタ達の子も早く見てみたいわね」

「それは授かりものですから」

「ふふ、神に授かりもの——人間達が知ったら驚くわよね」

子供が欲しくて神に願掛けする者達もいるぐらいだから。

「そうだ、そんなアンタにとびっきりのお仕事あげる」

「え？」

「一切の容赦を加えなくても良いわよ。ふふ、奥方も連れて行ったら良いんじゃないかしら？」

優しい笑みが、ニタリと妖艶で見る者全てを墮落させる様な笑みへと変わる。

そして渡されたファイル。

「出発は深夜。そのまま決行よ」

男は渡されたファイルの中を一目すると、ゆっくりと息を吐き出した。

ああ、長かった。

けれど、ようやくこれで。

「情状酌量の余地は無し。例え巻き込まれても、致し方ないわ」

生贄制度が続いても、仕方ない――

自分達の業は自分に返る。

「そうですね」

さあ、始まりだ。

観客は妻。

とびつきりの舞台を披露しよう。

後編に続く

海影一員×生贄（妻を傷付けた者達に対する夫の復讐物）後編

（前書き）

警告）後半、残酷表現が強いです。嫌な方はUターンをお願いします。

海影一員×生贄（妻を傷付けた者達に対する夫の復讐物）後編

山と海に囲まれた場所に、その村はあった。

村といっても、もう後少し人口があれば町にもなる大きさ。

その村の息子として産まれた。

都心部から離れた村は、山奥の吊り橋を除けば海路でしか他の町村に行くことが出来ない陸の孤島。

似たような村では過疎かが進み、幾つもの村が消えていった。

しかし、この村は富んでいた。

村長の家を始め、とくに富んだ幾つかの名家と呼ばれる家々は、豊かな財を示す広い邸宅を持つ。

外から来た者は言う。

有り得ない。

何故こんな山奥に。

この富は何処から。

人の欲望と言うのは限りがなく、何処までも深い。

それは、他者の命を犠牲にしても己の願いを叶えようとするまでに。

この村が出来たのは、今から数百年前。

戦で敗れた者達が隠れ済むようにして辿り着いた場所。

しかし、立地条件が災いして、あっという間に村は貧困に陥った。海で生計を立てるにも、殆どにおいて荒れ果てており、ともに

船さえ出せない。

けれど、時折凪いだ海で漁をすれば、そこには驚くほど豊かな海産資源があつた。

畑は作れず、海で漁をするぐらいしか出来ない。
しかし、魚が出来るのは海が凪いだ時だけ。

当時の村長は海へと語りかけた。

生贄を捧げよう。

だから、この海の恵みを我らにもたらせ——と。

生贄に捧げられたのは、村一番の美少女だつた。

美少女の体が波間に消えると共に、海は凪いだ。

そして沢山の海産資源に加え、真珠、珊瑚などの宝石も得る事が出来た。

それから十年ほどたつた頃だ。

それまで穏やかだつた海が、数ヶ月にも及び荒れ出した。

村長は迷わなかつた。

新たな生贄を選び捧げると、海は再び凪ぎ、膨大な資源が村にもたらされた。

更に十年後。

その更に十年後——海が荒れ続ける度に生贄を捧げ、それによつてもたらされた富。

十年ごとの生贄制度が確立した。

こうして村人達は味を占め、美しい少女達を捧げ続けた。村に居なければ、外で攫ってきた。

そんな中、誰が初めに気付いたのだろうか。

海の神と思っていたそれは、『魔性』と言われる化け物だという事を。

今も知るのは村長と数件の名家のみ。しかし、相手が何だろうと関係ない。

富、富、富。

自分達に利益があるなら、それで構わなかった。

そうして数百年が経過しても、村は繁栄し続け生贄制度は存続した。

その村長の息子として産まれた私は、当然その制度の存続を求められた。

だが、何故その生贄が愛しい少女だったのだろうか。小さい頃、初めて見た瞬間から恋に落ちた。

自分はこの従姉妹と結婚するのだと思っていた。

なのに、従姉妹は産まれながら生贄になる事が運命づけられていた。

何故？何故？

他の少女なら誰でも良い。

けれど、従姉妹だけは駄目だ。

私の愛しい少女だけは許せない。

私の願いはささやかな物だった。

ただ、従姉妹を救い自分の妻にしたいだけ。

従姉妹と共に生きたいだけだった。

従姉妹の妹の様に、生贄制度自体を潰そうとは思わなかった。

生贄制度は村に必要なだ。

自然条件の厳しいこの場所で村が存続していく為には、沢山の恵みが必要となる。

それを与えてくれる海の神。

感謝の印を捧げず牙を剥くなんて罰当たりな事は出来ない。

相手が『魔性』だろうと関係ない。

恵まれた環境の中で育ててくれた両親のように、私は愛しい従姉妹との子供を恵みの中で育てたかった。

なのに――。

『諦める、あの娘が一番この村で美しい』

それが激しく憤る私への曾祖母の言葉だった。

何故、別の少女では駄目なのだ？

他にも少女は沢山居る。

従姉妹ほど美しくなくても、代わりは沢山いるのだ。

しかし、従姉妹ほどの美しさでなければ駄目だと、村の長老共は言う。

私は諦められなかった。

それは、従姉妹の妹も同じだった。

可愛い妹。

姉を助けようとする妹。

お前だけが俺の味方だった。

そんな従姉妹の妹は、私の許嫁だった。

年々従姉妹に似ていく美しい少女にせめてもの慰みを覚えつつ、
けれどやはりまがい物だと落胆した。

従姉妹はその様には笑わない。

従姉妹の声はその様ではない。

従姉妹はもつと美しい。

やはりまがい物はまがい物。

そんな時、私は気付いた。

姉妹ならばどうだろうと。

従姉妹に年々似ていく妹。

生贄となる姉とよく似ているならば、少しは神もお許し下さるだ
ろう。

同じ血を引き、似た容姿。

従姉妹に比べるとんだじゃ馬だが、前回の生贄は大人しい
少女だったから、ここらで趣向を変えてみるのもいい。

もし駄目だったら、外から別の少女達を連れて来よう。

そして私は、まず従姉妹を口説き落とした。

最初は何度も拒みつつも、最後には受け入れてくれた愛しい少女。死ぬのが、生贄になるのが恐かったと泣きじゃくり、本当は私のことが好きだった、許嫁となり全ての幸せを得る妹が腹立たしく憎かったと叫ぶ少女に、私は胸に強い痛みを覚えた。

何故もつと早くに少女を助け出さなかったのかと。

少女がこんなにも嘆き哀しみ、苦しみ続けたのは自分の行動が遅かったから。

そして、許嫁に対する怒りを覚えた。

生贄制度を潰すよりも、何故幸薄い姉の身代わりになろうとしなかったのか。

妹ならば、姉の幸せの為に身を捧げるべきなのだと。

とんだ役立たずだ。

けれど、最後にはしっかりと役に立って貰う。

そうして姉を助ける為と言葉巧みに騙し、私は許嫁を生贄として海に捧げた。

それから程なく、私は従姉妹を妻に迎えた。

結婚式は盛大に行われた。

生贄を捧げた後にもたらされた沢山の海産資源。それを売ったお金で、妻を綺麗に飾り付けた。

喜ぶ妻に、私は自分の考えが正しかった事を悟った。

だが、生贄を捧げて数年目の事だ。

珍しく雨が降り続き長雨となった。

こんなに降るのは珍しいと思いながら、一時的なものだと考えた。

「暫く漁は休みか」

残念だが、暫く漁を休んでも十分なほどの財がある。

他の者達もそう思ったのだろう。

しばらくは子作りにでも励むか。

まだ妻との間には子が居ない。

これまで忙しかった分、たつぷりと可愛がってやろう。

そうして集会場から自宅への帰途についた私は、そこで有り得ないものを見た。

村長の自宅は、海に面した崖上に場所にある。

その為、家路から海が綺麗に見渡せた。

「あ……」

何かに呼ばれた様な気がして海を見た時、私の目にそれは映った。

「……ま、まさか」

海の上に立っていた。

元、許嫁が。

鳴り響いた雷鳴に意識が逸れた私が、再び海に視線を戻した時には、誰も居なくなっていた。

あれは何だったのか。

だが、嫌な予感がする。

急に妻のことが心配になり家に戻ると、怯え泣き喚く妻の姿があった。

女中達ですら手が付けられず、皆オロオロとしているばかりだった。

「貴方、貴方、妹が、あの子がつ！」

どうやら、あいつは妻のもとにも現れたらしい。

怨霊だろうか。

いや、そんな筈は無い。

今頃は神の御許で懸命に仕えている筈だ。

だが、もし万が一、私達を恨んで化けて出て来たとしたら、とんだ逆恨みだ。

妻をこんなにも怖がらせたあいつを許さない。

この村の長として、私は断固戦う。

そう、断固——。

*

「全く、本当にびっくりしたんだからな」

キョトンとする妻の頬を両手で挟み、コツンと額を付ける。
すると後ろからクスクスと笑う声が聞こえた。

「俺がやると、おかしいですか」

「いや、すまない」

「なんていうか、うん」

朱詩様の側近である玲珠と柳。

今回の仕事のチームの一員である。

この他に、もう一人海影所属の同僚が居る。

影仲間は、少し離れた所から下を見下ろしていた。

ここは、山の頂。

すぐ側には、大きく地滑りした跡がある。

いや、正確には大規模な山体崩壊をさせたのだ。

風の神にも協力を願い、集中豪雨を起こさせたところで、大量の水を操り事を為した。

山の形状すら大きく崩す程のそれは、何もかも飲み込みながら海まで到達した。

何もかも。

何もかも、飲み込んで。

「まあ、これで門は完全に埋まったね」

影仲間が言う。

此処は元は聖地だった。

そして二つの門が存在した。

山と海に、古代猛威を振るった『魔性』を封じ込めた、門が。

しかし、長年生贄を捧げ続けたせいで、その門の封印が解かれ始めた。

最初は海。

新しい『魔性』がそこで生贄を食らい続けた事で、生贄となった少女達の怨念により封印が緩んだ。

今度は山。

丁度村のすぐ側に、門があった。

それも殆ど開きかけていた。

普通ならば、村人達を避難させて封印作業は行われる。
間違っても、巻き添えにはしない。

しかし、何百年にもわたって行われつけた生贄の儀により、村はおろか村人達自体が『魔性』の一部と変貌していった。

そう——この、山にある、全てのものが。

村人達を一人でも残せば、門は完全に閉まりきらない。

直ぐに決断は出された。

少しでも影響の少ない者達は助け出す。

しかし、子供を生贄に奪われた者達は伸ばされた手を振り払った。

自分達も同罪だと。

子を最後まで守りきれなかった罪を、ここであがなうと言って笑った。

そして、村は山滑りによって埋まった。
地中深く、門と共に。

「でも、お前も本当に性格が悪いよ」

「確かに」

「だな」

クスクスと笑う、凧国王宮でも名高い男の娘三人組に俺は顔をしかめた。

性格が悪いのはお互い様。

それでも、我慢した方だというのに。

本当は、一人ずつ切り刻みたかった。

動けないようにして、その手足を切り落とし首を飛ばし。

とくに、妻の元許嫁は念入りと苦しめて。

まあでも、生き埋めにしてやったからこれで我慢するしかない。
それに、生き埋めは本当に苦しい。

一瞬で息の根が止まらぬように、空間を作ってやった。

数日は生き延びることの出来る、空間を。

じわじわと、苦しめば良い。

じわじわと。

じわじわと。

死への恐怖を味わえば良いのだ。

「本当に、性格が悪い」

「それでも、我慢した」

罪をあがなうと言った者達は、冥府へと旅立つのが見えた。彼らだけは苦しまずに死ねるようにしてやった。

それがせめてもの、自分達からの手向けの花。

けれど、生贄の儀を率先して続けた者達は、死後も長らく此処に留まり続けるだろう。

そう——生贄にされた者達の恨みが消えるまで、彼らは此処に縛り付けられる。

その作業の少し前だった。

俺の妻が居なくなっただのは。

妻に見せてやりたくて、此処に連れて来た。

妻を裏切り、生贄として捧げた、この村の末路を。

なのに、少し目を離れた際に居なくなった。

妻は海の上で遊んでいた。

海面の上をクスクスと笑いながら歩き、踊っていた。

風の神に教えられ、すぐに迎えに行っても笑い続けていた。

そして妻は、夫の腕の中で村の終焉を見守った。

「これで終わりだ。お前を苦しめるものは全て消えた」

「……」

「さあ、帰ろう」

振り返る事なく立ち去ったそこは、長きに渡って人々から忘れ去

られた場所となるのだが、そんな事はどうでも良かった。

数百年に及び富み続けた村。

しかし今、その名残は何処にも無い。

冥姫く驚崎 椿の母のお話く（前書き）

題名通り、驚崎 椿の母親のお話です。

冥姫く鷺崎 椿の母のお話く

父の事業が失敗した日、沙羅の生活の全ては終わりを告げた。

名門鷺崎家令嬢として生を受けて十五年目のある日。

お父様が事業を失敗しました——という老執事からのたった一本の電話で、鷺崎 沙羅の人生は崩れた。

財閥令嬢としての何不自由ない生活を営み、その時も全寮制の聖ローズ学園の寮に居た。

それから数日もせずに屋敷も全て失い、沙羅は学校に留まる事が不可能になった。

幸いなのは、負債を全て穴埋め出来た事ぐらいだ。

また数年前に亡くなった母の生命保険がある程度あったので、長年勤めてくれた屋敷の者達に退職金を支払う事が出来た。

しかし、それで全ての財産は失われ、沙羅父子は完全なる無一文状態。

その後、父は起死回生の為に借金をして外国に渡る事を決めた。だが、運命は残酷で、唯一残った父すらも事故で奪っていった。

無一文にして、天涯孤独となった沙羅。

聖ローズ学園退去の一週間前の出来事だった。

「可哀想に」

「事業の失敗で財産は全て失い、父親も事故死」

「これ以上ない転落人生だよな」

「というか、無一文の天涯孤独でどうやって生活していくんだ？」

「なんか親戚達が引き取るって話みたいよ」

「ああ、確かに引き取るだけの価値はあるな。あの容姿だ。政略結婚の駒として十分使える」

「確かにあの婚約者なら縁づきたいわね」

好き勝手言うのは、級友達。

といっても、沙羅が無一文になった途端に離れていった者達だった。

少し前までは、親しげに会話していたというのに、全てを失った途端に厄介事はごめんだと距離を置く。

それどころか、まるでゴミでも見るかの様な嘲りの視線を向け嘲笑する。

今まで自分が大切にしてきたものはこんなものだったのか。

多くの上流家庭の子息令嬢が通う学校の華やかさの裏に隠された毒に、沙羅は心を蝕まれていく。

父が死んだ。

なのに、葬式を上げるお金もなく、親戚に頭を下げて火葬だけはしてもらった。

そうして骨壺に入った父と共に学園に帰ってきた沙羅に向けられたのは、嘲笑と哀れみ、侮蔑、悲哀、差別。

此処に居る資格のない者への明らかな拒絶に、沙羅は足早に自分の部屋へと戻った。

机の上に白い布で包まれた骨壺を置き、ベッドに横たわる。

ここも、あと数日もしないうちに他人のものとなる。

沙羅に残された物は何もない。

家も、土地も、着る物すら満足にない状況で、どのようにして生きていけばいいか。

級友の言った様に、親戚達が沙羅を引き取る話をしているが、そ

れは政略結婚の道具という認識である。

それも、沙羅の婚約者に入る為、醜い争いを繰り広げている。
たまたま沙羅の母と相手の母が友達同士だった為に決められた縁
組み。

いくら沙羅の鷺崎家が名門財閥と言えど、相手の家との家格はあ
まりにも違いすぎた。

そんな中で決まった縁組みに、一族は喜び、年頃の少女達は嫉妬
を見せた。

ただ、沙羅自身は許嫁とは殆どあつた事はない。

体の弱い母の為、共に空気の良い高原の別荘で母が亡くなるまで
暮らしてきた。

そう——三年前まで。

母が亡くなると同時に、沙羅は父に呼び戻されてそのまま聖ロー
ズ学園に途中入学した。

父は母の為に働いていた。

母を愛し、母を思つて空気の良い場所へと向かわせた。

そして母が死んだ後は、ひたすら仕事の鬼となった。

寂しかったのだろう。

今頃は、母に出会えただろうか。

母と二人、生きていた時には一緒に居られなかった分、ずっと一
緒にいる。

沙羅は流れる涙を抑えきれなかった。

残ったのは自分一人。

そして、示された未来は親戚に引き取られて政略結婚の駒になる
か、それとも一人で生きていくか。

政略結婚の方も、相手は両親が決めた相手ではないだろう。

元々、身分不相応な縁組みで、母達の間で取り交わされた口約束の印象が強かったし、相手の方では色々と反対などもあったと聞いている。

これ幸いと婚約破棄となるだろう。

まあ、殆ど会った事のない相手だから破棄されたとしてもそれほど哀しくもないが。

それよりも気になるのは、婚約破棄後である。

親戚達は、今の婚約者と婚約している沙羅の後見人になりたがっている。

だからそれが無理だと分かれば引き取り手は減るだろう。

しかし、母によく似た沙羅の美貌は十分政略結婚に使えるものがある。

没落した娘だから正妻は無理でも、後妻や妾としての引き取り手は腐るほどあるに違いない。

好色ジジイとの結婚なんて死んでもごめんだ。

しかし、まだ十五の子供が一人で生きていけるほど世間は甘くないし、成人していない状況では後見人の意思に左右される。

逃げるとしても、何処に逃げ場所があるだろう。

逃げ込んだ場所に迷惑がかかるし、そもそも逃げたって食べていく事すら出来ない。

それどころかすぐに連れ戻され、嫁ぐ日まで監禁されるだろう。

下手すれば、十六を迎えると同時に結婚させられるかもしれない。自由など何処にもない。

絶望に沈んだ沙羅の耳に、コンコンと扉を叩く音が聞こえた。

一体誰が何の用なのか。

昔ならいざしらず、今は汚いものでも見る様に皆が距離を取っている。

そんな中、誰が訪ねてきたのか。

扉を開けて、沙羅は驚いた。

「宮子」

「沙羅っ」

部屋に飛び込んで来たのは、膝下まである長い黒髪が印象的な美少女。

神々しささえ漂う清楚な美しさに加え、文武両道、品行方正。

更には、この聖ローズ学園の創始者一族の直系であり、現理事長の孫娘である宮子は、沙羅の級友であり大親友だった。

この学校に途中入学したその日に、意気投合して仲良くなった。

しかし、かたや何処にでもいる転入生で、かたや学園の象徴たる

「青薔薇姫」。

だから宮子の親衛隊やらファンクラブに沙羅はいつも妬まれ追いかけて回された。

沙羅の容姿も巷では珍しいほどの美少女だが、青薔薇姫とは比べる事すら愚問なのだろう。

宮子の容姿はどちらかと言うと赤牡丹を思わせる鮮やかさで、青薔薇姫と聞いた時には驚いた。

だが、青薔薇の意味を聞けば逆に納得した。

青い薔薇は自然には存在せず、いわば人の手が加わって創り出そうとしている『奇跡の花』。

そう、宮子の様に完璧なお嬢様にこそ相応しい称号なのである。

父の事業失敗を知ってから、宮子とは会っていないかった。

忙しくて、会う暇がなかったと言った方が正しい。

そして、まさか会いに来るなんて思いもしなかった。

「宮子、どうしたの？」

「沙羅が、ここを退学するって聞いたから」

どうやらそれを聞いて駆け付けてきたらしい。

「本当なの？ 沙羅」

「……うん」

「そんなっ！ ど、どうして?!」

どうして——宮子には信じられないのだろう。

この学校に入りたい学生は大勢居る。

けれど、名家の子息令嬢でも入るのが難しい倍率の高さであり、ここに入るという事自体が近隣の生徒達からの憧憬・尊敬の的であった。

それこそ、この国における七大学校の一つである。

何としても入学したい、そして何としてもこの学生で居たい。

そんな学生達が多い中、自ら辞めていく生徒達は殆ど居ない。

沙羅だって辞めようとは思っていなかった。

しかし、授業料が払えなければ辞めるしかないのだ。

宮子はこの学園理事の孫娘だから、彼女が同じ目に遭う事は決してないだろう。

だからこそ、宮子は余計に理解出来ない。

「沙羅、辞めないで、お願い、此処に居て」

「宮子……」

生粋のお嬢様。

神有財閥にこそ叶わぬが、それでも古くからの名家の家柄を持ち、一年ほど前に篠宮財閥の跡取り息子と婚約した。

全てに恵まれた少女とは宮子の様な子を言うのだろう。

少々やつかみが入ってしまい、沙羅は自分を恥じた。

全てを失い此処から去る自分とは余に違いすぎる友人。

でも、それでも彼女はこうして沙羅の所まで来てくれた。

それで、十分ではないか。

嘲笑われても仕方が無いのに、それどころかこうして惜しんでくれる。

それだけで、沙羅はかけがえのないものを得た。

「沙羅、ずっと一緒に居て」

「宮子、ごめんね。それは出来ないの」

「お父様の事業が失敗したから?!」

宮子の言葉に沙羅は頷いた。

「そう。そして、お父様も亡くなってしまった。親戚が引き取ってくれるかもしれないけれど……」

だが、政略結婚の駒としてであって、この学校の学費まで払うつもりはないだろう。

それこそ、自分達に多くの利をもたらししてくれる婚約者がそれを望まない限りは。

「なら私がお父様に頼むわっ」

「宮子？」

「奨学金制度を使えば良いのよ」

「宮子、それは優等生のみに使えるものよ」

自分がお金を出すと言わなかっただけマシだが、代わりに提案されたものも沙羅にとっては非現実的という事ではあまり変わらなかった。

というか、聖ローズ学園の奨学金制度で選ばれるには、宝くじで一等が当たる可能性と同確率と言われるほど選定が厳しかった。

しかも、全額免除になれば、毎年一人しか居ないのだ。

万年平均並みの沙羅が選ばれるはずもない。

それに、今から勉強しても時間が足りなさすぎる。

「でも、そうじゃなきゃ沙羅が居なくなっちゃっ」

「宮子……」

何とかして自分を引き留めようとする宮子を沙羅は抱き締める。

「ありがとう、宮子。貴方が居てくれて本当に良かったよ」

他の級友達が背を向ける中で、宮子一人が沙羅をここまで惜しんでくれる。

「沙羅、やだ、いやよっ」

嫌だ嫌だと泣く宮子を沙羅は抱き締めながら背中をさすり続けた。宮子の言葉が嬉しい。

でも、全てを失った沙羅にとってこの学園は余にも冷たく、掌を返した級友達と共に居るだけの強さはもう残っていなかった。

＊

「沙羅さん、お迎えが来ていますよ」

全ての準備を終え、寮の部屋を引き渡した朝。

疲れ果てて眠り込む宮子を迎えに来た執事に任せて校門に辿り着いた沙羅は、そこに立っていたシスターの言葉に首を傾げた。

自分を迎えに来るような相手はもう居ない。

一瞬親戚かとも思ったが、校門前に止まる黒のベンツから出て来た相手は親戚にしては若すぎた。

目の前に立ったのは、二十歳前後の白く清楚な百合の花を思わせる美女。

美しい長い黒髪を一本に纏め、白い清楚なパンツスーツを着こなしてこちらに歩いてくる。

だが、そこで沙羅はある事に気付いた。

そのパンツスーツは女物ではなく、男物で、履いている靴も以下同文。

男装の麗人という言葉が脳裏によぎった。

華奢で小顔の輪郭、すっきりとした鼻梁、切れ長の黒い瞳。

白く艶めかしい肌に色づく紅を引いた様な唇が目について離れない。

柔らかな物腰、その一つ一つの仕草に抗いがたい色香を感じる。

どれほど茫然としていたのだろう。

ただ、その美女からもたらされた思いもかけない言葉に、沙羅はようやく我に返った。

「ふーん、まあちったあ見れる様に育ったみたいねえ」

「……え？」

美しく清楚な美貌とは裏腹に、出て来た言葉はまるで下町の女の

様だった。

「あら？ あたしの事覚えてないの？」

「え、えっと」

「ふ〜ん、婚約者の顔を忘れるなんて、とんだ鳥頭みたいねえ」

「こ——」

今、この美女はなんと言っただろうか？

婚約者？

だが、自分の婚約者は男だった筈。

「もしかして、あたしの事を女だとか思ってる？」

「そ、その」

「つたく、これだから嫌なのよお嬢様は。見る目なさ過ぎじゃない」
「やれやれと頭を振れば、髪が宙を舞いそれがまたゾクリとする程妖艶だった。」

「つたく……まあいいわ。とつとと乗りなさい」

「へ？」

「だから、あんたはあたしの家に来るのよ」

「い、家って」

完全に置いて行かれている沙羅に彼女——いや、彼は悪戯っぽく笑った。

「無一文、天涯孤独のあんたに行くところなんてないでしょ」

彼は自分の置かれた状況を知っているのだと沙羅は悟る。

しかし、だからといって、突然現れた美女——いや、美女の様な見知らぬ男についていける筈もない。

「ほら、早くしてよ！ こっちも時間がないんだから。次の公演を明日に控えてる中で時間を割いて来てやってんのよ?!」

「け、けど」

「別に食いやしないわよ。いや、婚約者だから将来的には食うのか。でも、それもまだ先の事ね。いくら美人でも子供と寝る気はないから。ふふ、あたしは十分に育ててから食べる方なの」

そんな事を言われても困る。

「というか、公演？」

「そういえば、婚約者は有名な人形師だったと聞いている。人形と共に舞い踊る宗家の長男。」

他に茶道や華道の家元とも姻戚関係がある、その世界では名を知らぬ者が居ない存在。

「とはいえ、昔は母の事ばかりで、母が死んでからは新しい生活に馴染むために必死だった。」

「だから、芸事の世界に関しては殆ど知らない。」

「ただ、それでもその宗家の長男には恋人が居ると一度聞いた事がある。」

「そう——それも、美しい人形師の青年だとか。」

「芸の世界では同性愛もおかしくなく、互いにずば抜けた美人同士という事で、忌避されるどころか、逆に多くの女性達を虜にしているという。」

「沙羅は彼をじっくりと見る。」

「自分を邪険にする態度と思い出した情報に、なるほどと納得した。恋人が居るなら、親同士の決めた許嫁など邪魔に思う筈である。特に、その恋人と心の底から愛し合っているならば。」

「さつさと乗りなさい」

「でも、私には親戚が」

「あ？ 親戚なら、もう話をついたわ」

「え？」

すると、彼が馬鹿にした様に唇の端をつり上げた。

「あたしね、色々と周囲から言われるの嫌なのよ。特にあんたの親戚はその手の輩だから、交換条件を出したのよ。そうしたら飛びついてきたわよ？ で、あんたは」

沙羅は息を呑んだ。

「五千万であたしに買われたのよ」

「……」

五千万という金額に、沙羅はどうしていいか分からなかった。
高いのか、安いのか、それさえも判断が出来ない。

ただ、一つだけ疑問があった。

「どうして」

そう、どうして。

「どうして、そこまでして私を連れて行こうとするんですか？」

すると、彼は思いきり馬鹿にした様に沙羅に告げる。

「仕方ないじゃない、婚約者なんだから。あんたの父親が死んで破棄にでもなるのかと思えば、お母様があんたを家に連れて来なさいって。大切な友人の娘が心細く思っているだろうから、すぐに安全な此処に連れて来いっていうのよ」

そうか、この人の意思ではないのか。

予想していた事だが、沙羅は不思議と胸の痛みを覚えた。

「とにかく、さっさと来なさい」

強引に手を引かれ、車に放り込まれる。

助手席に座らされ、反対側の運転席に回り込んだ彼が中に滑り込む。

すぐにサイドレバーが外され、ギアチェンジと共にアクセルが踏み込まれた。

「ああ、言っとくけどね」

車が動き出す中、彼が沙羅の方をちらりと見て笑う。

赤く染まった唇の妖艶さに、ただただ声もなく魅入る沙羅に。

「家に連れて行くからって、誤解しないでね」

「え？」

「あたしとあんたは婚約している。だからこのままで行けば、結婚

するでしょう。でもね、あたし自身はこの結婚には不満があるのよ」

「……」
「そうよ。なんだってあんたみたいなのと結婚しなきゃならないんだか」

「……ごめんなさい」

それしか言えなかった。

美しい彼。

清楚だけど妖艶な色香を放つ蜜溢れる花の様な彼に、多くの男達が蜜に吸い寄せられる蝶のように舞い降りてきた。

そんな中、沙羅は孤独だった。

彼の両親は優しくしてくれたけれど、彼の恋人達からは酷く妬まれた。

唯一優しかったのは、彼が最も愛する恋人たる青年だけ。

沙羅が婚約者である彼と校門前で出会った時、噂で聞いていた事を思い出した彼の最愛の恋人だった青年。

それでも、青年にとって一番大切なのは彼なのだ。

それが寂しくて、少しだけ妬ましく思った。

自然と三人でいる事が多くなったけれど、彼は沙羅の存在を邪魔に思い、青年の関心を少しでも得れば沙羅を嫌った。

彼と青年はお似合いだった。

本当に、とても。

でも、それでも耐えられたのは、引き取られた先での沢山の出会いがあったから。

宮子とも、学校を退学してからも再会出来た。

もちろん沢山の別れもあったけど、どれも忘れたくない思い出。

でも、その中の一つの事件で、彼とも少しだけ仲良くなる事が出来た。

けど、あの日の出来事が沙羅をその場から去らせる事となった。

*

「お母さん」

娘の声に、沙羅は我に返った。

そして無意識に辺りに視線をせわしなく向け、今居る場所に気づいた途端、苦笑した。

寝室に使っている和室には沢山の着物が広げられていた。
どうやら、着物の整理をしている内にぼんやりとしてしまったらしい。

「どうしたの？　ぼくとして」

娘が横に座り、沙羅に甘えてくる。

「なんでもないわ」

そう言うと、娘の頭を撫でた。

十二歳になって少しは娘らしくなってきたが、それでもまだまだ沙羅にとっては可愛い我が子。

そして——あの人との間に生まれた娘だ。

あの日、美しく咲いていた花から名をとり、椿と名付けた。

鷺崎 椿

彼の姓ではなく、自分の姓を名乗らせている。だが、どちらにしろ娘は彼の姓を名乗れない。なぜなら、彼は娘を知らないのだから。認知以前の問題である。

あの吹雪の夜、沙羅は身一つで彼の家を飛び出した。子供が居ると分かり、もうあの場所には居られなかった。

ただの間違いだったから。沙羅と彼の一夜は。

だから、逃げた。

知られば、彼は激怒する。

もしかしたら中絶を迫られるかもしれない。

いや、たとえ迫らなくてもきつと彼は苦しむはずだ。

それに優しくしてくれた彼の恋人である青年も苦しむ。

でも中絶だけは出来なかった。

彼の両親に相談する事も出来ず、沙羅には逃げるしかなかった。

そうして辿り着いたのは、この場所だ。

泣きながら、雪の夜を彷徨い歩き、拾われた。

『どうしたの？』

神無 清奈——彼女が手を差し伸べてくれた。それからまた色々な事があって、篠宮家当主夫人となった宮子と

再会して。

けれど、彼とだけは会わなかった。
いや、会わないように隠れ続けたから。
忘れよう、忘れなくてはならない。

そう思い続けたこの十二年。

なのに今になってどうして思い出してしまったのだろう。

「お母さん、これ綺麗ね」

椿の言葉に沙羅は視線を向け、納得した。
椿が指さす着物は、彼が沙羅に贈ってくれた着物だったから。
これだけは持つてきてしまった。
大切なものだったから。

「あのね、これ私が大きくなったら着たいな」

母が何時も大切にしまっており、あるのは椿も知っていた。
一目見た時から気に入った着物。
いつか着たいとずっと願っていた。

娘のおねだりに、沙羅は苦笑する。
もしかしたら娘も何処かで感じ取っているのかもしれない。

自分の父との縁を。

娘は父のことを言わないし聞かない。
でも、父親を恋しがっている事は気付いている。

「椿」

「なに？」

「お父さん、欲しい？」

しかし椿は首を横に振った。

「ううん、お母さんだけでいい」

父の居ない寂しさを押し隠し、会いたいという思いを禁じてまで母を思う娘に沙羅は目元を抑えた。

「お、お母さん？」

「ごめんね、椿」

そしてごめんなさい――

彼に謝る。

こんなにも素晴らしい娘を与えてくれた彼に。

そして、彼の血を引く存在を隠した事に。

彼とは会っていない。

彼との情報もわざと遮断している。

着物の先生として働きながらも、意図して隠し続ける。

彼を愛してしまったのが全ての罪。

そしてそれが、娘から父を奪い、彼をも裏切った。

だからせめて、ここから彼の幸せを願う。
どうか、幸せに。

彼が心から愛した青年との幸せな未来を。

いつか、跡継を求められるだろうが、それでも少しでも長くその幸せが続けば良い。

と同時に、せめて彼が女性ならばという思いに蓋をして。

同性同士ゆえの悲劇。

跡継が望まれる名家であればあるほど、その悲劇は大きい。

でも、どうか。

どうか――。

愛し、娘を与えてくれた彼の幸せを、沙羅は願う。

なんかブローグみたいなもの（後味良くないです）（前書き）

警告）途中で人が人を食うカリバニズム的な表記がありますので、嫌な方はご注意を。

警告2）近親相姦的内容がありますのでご注意を。

なんかブローグみたいなもの（後味良くないです）

自分が贈ったポットからコポコポと注がれる黄金色の液体。
お茶——と言っても、一般的なお茶では無い。

茶はこの国でもごく一部の高貴な者達しか飲めない飲料。
だから、これは彼女が山で捜してきた似たような葉っぱから造った飲み物である。

「美味しい」

口に含めば、花の香りが鼻孔へと吸い込まれていく。
味は苦みの中にもほのかな甘さがあり、癖になる味わいである。

しかし、それ以上に味に深みを与えているのは、きっと彼女が入れてくれたからだろう。

「それを飲んだら、お帰りですね」
「帰って欲しい感じだな」

確かにお茶を飲んだら帰るのが日課。
けれど、彼女からそう言われるとなんだか面白くない。
そんな彼女は、静かに机を挟んだ向かいに座って居る。

微笑んでいると、すぐに分かった。
それでも最初は全く分からなかった。
それは、彼女の顔を覆うもののせいで。

仮面——それが、彼女の素顔を隠す。
それは、彼女の顔を隠す為。

彼女が自分の醜さを隠す為に自ら被り始めた。

彼女を蔑む者達を傷付けぬ為に。
醜いものを見せないように。

「妹は元気ですか？」

彼女の質問に、自分は頷いた。

彼女には双子の妹が居る。

余にも美し過ぎた妹は、赤ん坊の頃に離れ離れになった実の父――この国の王に引き取られ、今は王宮で過ごしている。

なのに姉の彼女は何故此処に居るのかと聞かれれば簡単である。

彼女は捨てられたのだ――実の父に。

醜かった彼女はただ一人この荒屋での暮らしを強いられ、妹だけがその美しさゆえに強引に父王に引き取られた。

妹の美しさを聞きつけ、まるで奪うように無理矢理王宮へと連れ去った王の所行は鬼畜そのものだろう。

そうして引き取られた妹は、王の娘として認められ、長年離れ離れになっていた父娘の感動的な再会として、美談のように民達に語られているが、実際にはただの虜囚である。

後宮の部屋から一步も出られず、父王の方も娘を愛玩動物の様に愛でるだけで、自由を与えることは決してなかった。

その魔手は、妹の周囲に集まりだした『完末』と呼ばれる者達へと及んでいた。

自分も『完末』だった。

妹の方に頼まれ、姉である彼女の下へと赴く。

妹は願っているのだ。

いつか、姉と一緒に暮らせる日を。

そして一人残された姉を心配して、閉じ込められている自分の代わりに別の者に様子を見に行かせた。

それが自分の役目であり日課。

だが、こうして彼女と話すようになり、お茶をすすめられるようになってからどれほど時間が経っただろう。

一月、半年、一年――。

初めて見た時は、仮面姿の彼女に驚いた。

けれど、今はその仮面が見えなくなると胸がズキズキと痛み、つい最近ようやくその想いの名前を知った。

自分は彼女に恋をしている。

今まで多くの美しい女性達と出会った。

自分は美少年と呼ばれる部類で、その美貌目当てに多くの者達が近付いて来た。

王もその一人であり、自分に縁談を持ち込む者達もそうして美貌に目が眩んだ俗物達だ。

女だけでは無い、男達も数多く寄ってきた。
相手など選び放題。

なのに、自分は彼女を選んでしまった。

「お代わりは？」

「もらおう」

程よい量を注がれた茶器を手に取り、口を含む。
温度も濃さも全てが自分好みに整えられている。

美味しい——素直にその言葉が出た。

「さあ、それを飲んだらお帰り下さいね」

もう日が暮れると彼女が呟く。

それが合図。

日が暮れば、彼女と別れて自分は王宮に、妹の元に戻らなければならぬ。

自分が守り愛すべき妹の元へと。

彼女の幸せと安全を守るために、自分達『完未』はあらゆる手段を講じる。

それでも……彼女への思慕は募っていく。

いつも笑顔で出迎えてもてなしてくれるのに、時間がくればそっけなく自分を追い出す女。

「イリス」

名を呼べば、彼女はいつものように首を傾げる。

さらりと、肩までの髪が揺れた。

「どうしたの？エンディーン」

彼女が自分の名を呼ぶ。

エンディーン、それが自分の名前。

「今日は」

「ん？」

「此処に残ろうか」

疑問ではなく、断定でもなく。

純粹なる懇願のそれに、握った彼女の手が離れて行く。

「イリス」

「駄目よ、帰って」

彼女は自分に背を向け、そう告げる。
完全な拒絶に、胸が締め付けられる。

「どうして」

「どうしてもよ」

納得出来ず、彼女の肩に手をかける。
強引に振り向かせ、仮面に覆われた顔の中で唯一仮面の上からでも見える瞳に視線を合わせ。

「イリスも気付いている筈だ。僕は君を愛している」

「……」

「此処に通う中で、僕は君への恋心を育んでいた」

「それはただの勘違いです」

「イリス」

「私は醜い女。人前に出ることの許されぬ影として生きるのが宿命。
この荒屋で静かに暮らしていくのが、今の私の望みです」

「エリスはそれを望んでいない」

「今だけです。でも、きつと妹もいつか分かってくれる筈です。なんたってこの国の姫ですからね」

全てを覆い尽す仮面から見える二つの瞳が、優しく微笑む。

「馬鹿な事を言っな！」

「馬鹿はどちらですか」

イリスが微笑む。

優しいけれど、全てを諦めたような、傷ついた笑顔で。

「確かに今は何も出来ない。けれど、いつかお前をエリスと会わせる」

「……」

「それからでもいい、僕との事は。でも、考えて欲しい」

「考える必要はありませんよ。可愛らしい婚約者様とお幸せに、エインディーヌ」

息が止まるかと思った。

王に勝手に押し付けられた縁談。

娘を溺愛する宰相が娘の意のままに王へと働きかけ、強制された話。

王は自分を手中に収める格好の手段として飛びつき、周囲は当然のように祝った。

他の『完末』達とエリスだけが、その話に不満を持つ。

そしてそれ以上に、自分には婚約者の事などどうでも良かった。

愛するのはイリスだけ。

この仮面の少女への思いは今も募り形を大きくする。

「イリス」

後ろから抱き締めれば、抵抗される。
受け入れてくれていたと思った彼女が、自分を拒む。

醜い自分には生きる価値がないと思っている。
この荒れ果てた小屋にずっと住み続けなければならないと思っている。

それは、王の使者の言葉が原因だ。

醜き者は死ねと言わんばかりの使者の言葉に、彼女は街にも赴く
事なく自給自足で暮らす。

たった一人で。

「愛してる、イリス」

婚約話など、いつか潰してやる。
腐ったこの国の上層部や貴族を全て一掃し、彼女に相応しい揺り
かごを造ろう。

熟れすぎた果実が中から腐り落ちていくように、この国ももう変
る時期に入っている。

少しずつ、少しずつ根を張り枝を伸ばし。

膿を除いていく。

「イリス、また来る」

そうして強引に約束を取り付け、自分は彼女の家を後にした。

必ず迎えに来るから。

イリスを迎える日を夢見て、イリスの願いに手を貸す。

ナ ノ ニ

「イリス……」

狂ったイリスが叫ぶ。
王の言葉が耳を突く。

——美しいイリスの病を治せたとして、姉も本望であろう

そう言って、あのケダモノは笑った。

悪魔だ。

悪魔。

そう、あいつは、悪魔。

——姉の肉は美味しかったか？イリス

あいつは、不治の病にかかったエリスに殺したイリスの肉を食わせた。

それが、唯一の治療法だと信じて。

病は治ったが、エリスは狂った。

そして、他の『完末』達も狂い、自分ももうすぐ狂うだろう。

「あははははははっ！」

呪怨の言葉を吐きながら、怨嗟の念を爆発させる。

その強い強い思いが、エリスの中で息絶えようとしていたウイルスを変貌させていく。

エリスを悩ませた病。

不治の病を引き起こし、イリスを死なせる原因となったウイルスは、今度はイリスを殺した奴等へと向けられる。

「私の可愛い子」

エリスは自分の体内に向かって囁き続ける。

その、変貌したウイルスに全ての呪いを込める。

「さあ、奴等に、報いを」

自分達を捨てたくせに美しいからと自分だけを引き取り、娘でなく女として凌辱し子を孕ませた挙げ句、イリスを殺したケダモノをまず最初に。

それを止めず黙って見ていた者達全てに。

イリスを醜いと嘲笑った者達全てに。

でも、本当にエリスが怒りと憎しみが抑えられなくなったのはあの一言。

——流石はエリス！その力があれば他の大陸すらも支配出来ようぞ！すぐさま軍を整え、戦の準備をするのだっ！

全てを壊す前に、戯れにエリスが見せたウィルスの効果。

そんなエリスの力に感動した王が震えながら告げた言葉がそれだった。

ああ、もう駄目だ、この国は。

誰も止めず、皆が新しい領土と富みと奴隷を求めて戦を喜ぶ姿に、確かに自分達は静かに諦めた。

もともと、この国はもう終わっていたのだ。

変る時期などもうとくに過ぎていた。

もう、終わっていたのだ。

だから、エリスは決断した。

「お父様、軍は必要ありません」

「何を言う！ 兵士達が居なければ攻め入る事は」

「だってお父様達が兵士の代わりをするのですから」

そう言って、エリスは王の喉元に食らいつき肉を食いちぎった。

王宮が焼ける。

王都が焼ける。

街が、村が。

人は食われていく。

食われた人はまた起き上がり、他者を食らう。
その繰り返し。

あつという間に出来上がる、死者の軍団。

災厄をまき散らしながら、彼らは進む。

まるで、災厄の詰まった箱を開けたかの様な光景。

死んだのに、死ねない体。

彼らは全て、エリスの思い通りに動く。

「さあ、戦いなさいな」

食らい、共に滅べば良いのだ。

「もっともっと——一人も逃がさない」

——私の美しい娘のエリスの為に、お前が死んでおくれ

そう言って、権力にしがみついたイリス達の母も嫌いだ。

後宮での争いに負けて顔を焼かれて追い出されたにもかかわらず、
王に利用されてイリスをエリスに食わせる協力をした。

殺され、体をバラバラにされ、エリスの食事となったイリス。

姉を食べてしまったエリスの心は、もう戻らない。

頭も胴体も手足も、内蔵も全て食べた。

愛する姉を食べた。

その絶望を、思い知れ。

それを良かったと笑い、更には戦を求めるほど堕ちたお前達には分からねかもしれないが。

憎い、憎い、憎い。

エリスの心は『完末』達にも伝わっていく。

憎い、にくい、ニクイ。

そう、ニクイ。

ニ ク イ

全てを壊したい。

もっともつと壊したい。

もっと沢山の死が見たい。

苦しみながら、惨たらしく食われていくその姿を。

足りない、まだ足りない。

大陸全ての者達が死者の軍団に変わろうとも、まだ足りない。

けれど、この大陸にはもう誰も――。

ああ、まだ居た。

他の大陸には、まだ沢山の人間達が居る。

もっと、もっと、もっと。

モット、モット、モット。

エリスが笑う。

他の『完末』達が笑う。

自分が笑う。

自分達は一蓮托生。

エリスのウィルスを体内に取り入れた自分達『完末』も、また化け物へと変わっていく。

さあ、血の祭典の始まりだ。

「……イリス、何故……」

眠らせられる。

彼女の力によって、全てが。

そうか、彼女が『眠り姫』だったのだ。

昔と変らぬ姿で自分達の前に現れ、力を解放した彼女。

彼女に自分達は殺せない。

彼女に自分達は倒せない。

代わりに、彼女は眠らせる。

眠ったまま、『終わり』がくる時を待ち続ける。

苦しみを与えるのではなく、眠りながら死んでいくその時まで。

その為に彼女は自分達の下に来たのだ。

大陸が沈む。

ネメシス大陸が、深い海の中へと堕ちていく。

その深い海の底で、全ての感染者達を眠らせたまま。

彼女は終わりの時を待つ。

——ごめんなさい

泣く彼女に、考えた。

ただ自分は、イリスと一緒に居たかった。

エリスの願いだけではなく、自分の願いでもあった。

醜いから死ななければならいなんて。

そんな、事。

伸ばした手首に、イリスの髪で作った細い腕輪を見つける。

髪は食えないからとゴミの様に庭にうち捨てられたそれを、必死に拾い集めた。

その殆どは棺に収めて神殿の奥に秘密裏に埋葬したが、一房だけ貰って作った腕輪。

自分はただ、イリスと――。

エリスの泣き声が聞こえる。

姉を求める幼い子供の声。

イリス、イリス、イリス。

ただ、自分達は……。

薄れゆく意識の中、最後に呟いた。

彼女に聞こえる様に。

海国と湖国へ愛する相手の為に（前書きを必ずお読み下さい！！！！）（前書き

注意）以前、ここの注意書きにて名前を出させて頂いた読者様の「饗餐様」ですが、この度ウルマツク様と名前を変更されたとの事なので、以降はウルマツク様で統一させていただきます。

このお話を読むにあたり、注意事項があります。

1）湖国関係者のキャラは、読者様であるウルマツク様が考えてくれたキャラと設定を使用させて頂いています

2）この番外編は、読者様であるウルマツク様を書いて下さる予定の「大根と王妃シリーズ二次創作」の番外編として、大雪が書かせて頂いたものです

3）ウルマツク様からは湖国キャラの使用の許可を頂いております。また、今後は、湖国キャラ以外にも、ウルマツク様から使用許可を頂いたキャラ達も大根と王妃本編や別の番外編、こちらの名も無きでも出して行きたいと思います。

これらの注意事項を読んだ上で、読む読まないの判断をお願いします。

また読んだ後の文句は受け付けられませんのでご注意を。

海国と湖国へ愛する相手の為に（前書きを必ずお読み下さい！！！！）

炎水界に存在する数多の国々の中でも水の第七位に位置する、『武を奉ずる尚武の地』——湖国。

全ての湖の管理者であるかの国は、他の国と大幅に違う面がある。それは、他国に比べて確保出来た貴族の数が極端に少なかった事から、貴族制を廃止し三権分立と議院制を導入した結果、国民の力が他の国に比べて格段に強いというものだった。

ゆえに、最終的な決断こそ国王や上層部にあるものの、他の制度に関してはかなりの部分で民が国政に関われるシステムとなっている。

だが、湖国の素晴らしいところは、誰の力が強かるうとも、国民達と王を含めた上層部が良好関係のもと一丸となつて協力し、他の大国に負けぬ栄華と繁栄を国にもたらしている事だろう。

そんな湖国に、一人の美しい王妃が居る。

他者を萎縮させる様な強い覇気を持ったキツメの美貌。

大戦時代もその武術でもって湖国国王を守り、今は湖国が有するその地域随一の機動力を誇る飛竜騎隊の長として黒竜を駆るその姿から、「黒竜妃」とも呼ばれる彼女。

炎水界でも、1、2を争う武闘派の彼女は、湖国の女性達から「お姉様」と呼ばれ慕われ、男性達からは恋敵として見られていた。というのも、湖国王妃はレス、という事で有名だったからだ。

そんな湖国王妃は深く悩んでいた。

「なあ、夫が変態的趣味を持った場合、お前ならどうする」
「離婚する」

茶飲み友達である海国王妃はあっさりと言いつつ放った。

「そうか……」

その後、湖国王妃は何も言わずただ無言でお茶を飲み干す。
そんな友人に、海国王妃はしばし考えた。

（なんかあったのかなあ？）

まさか、自分のその一言が後にとんだ事態を引き起こすなんて、
これっぽっちも考えなかった。

*

遠くから凄まじい砂煙が上がり、雄叫びが空に木霊する。

近付いてはなりませんよ——と、四妃に守られながらも海国王妃
は近付いてくるそれにピョンピョンと飛び跳ねて確認する。

凄まじいドリフトで近付いてきたのは、湖国国王。

相変わらず麗しい、葡萄色の髪と瞳を持つ、すべての男を跪かせ
る女王様タイプの男の娘の瞳に光るものにいち早く気付いたのは、
もちろん海国王妃。

涙を流しながら、素晴らしい回転で最後のコーナリングを回りき
り、四妃の前までやってきた。

「紅玉ちゃんっ！ 俺は」

その途端、何時もは穏やかな貴妃がスパアアンと上官のビンタを
湖王へと食らわした。

仮にも王という言葉は、きつと貴妃には通じない。

「誰が王妃の名前を呼んで良いと言いましたか、この変態がっ」
「ぬお?! いつも女装して男妃を楽しんでいるお前には言われたくないわっ」

実は貴妃と湖王は犬猿の仲だと言うのを知る者達は少ない。
知っているのは、互いの国の上層部や海国後宮の妃達、それに同盟国の中でも数力国の王と上層部ぐらいだろう。

どちらにも直視すれば昇天ものの美女——いや、美青年だが、何故か性格的に合わないらしい。
といつても、有事の時には割り切って協力し合うし、また互いに背後を任せるほどの信頼はしているのだが、普段はとことん気があわない。

「この暴力妃!」
「黙れこの変態国王! 王妃にこれ以上近付くな! 殺すぞっ」

どんどん言葉が男に戻っている貴妃から距離を取りつつ、湖王に挨拶する。

「こんにちわ、湖王様」
「ああ、やっぱり優しいな紅」

その瞬間、腹部に貴妃の膝蹴りが綺麗に入っただのを海国王妃——紅玉はしっかりと見た。

「クタバレ」
「おおっ! 貴妃の氷の笑みが出たぞ!」
「すげえ! うちの海王でさえ百年に一度出るか出ないかなのにつ」

「会う度に出せるそのパチスロなら玉垂れ流しの秘訣は何かつ」

他の三妃も完全に口調が男に戻っている。

「つていうか、死ぬか？ マジ死ぬか？」

「や、やめ、俺を虐めていいのは妻だけぐふううつつ」

その贅肉のない腹部にゴスつと一撃を入れられ、湖王は倒れた。

「さあ、王妃様、この後は庭園に参りましょう。池の蓮が見頃になつております」

「え、あの、湖王が」

「王妃様、あれは湖王ではございません。ただの変態でございます。というか、他国の王が別の国の王宮、しかも後宮にいる筈がありません。つまり幻覚なのですよ、あそこには何もいません」

すらすらと言い切る貴妃が激しく怖い。

「一体何の騒ぎだ？」

「あ、海王」

お付きの武官達を引き連れ、向こうからやってくる海王はきっと騒ぎに気付いたのだろう。

「貴妃、この騒ぎはなんだ？」

「何もございません、全てはいつも通りです」

顔は笑顔のまま口元を扇で隠し、視線そのまま池に湖王を蹴り入れる所行は一見して優雅だが――。

「湖王様があつ」

「王妃様、あれはただの石ころですよ」

変態から石ころにされた湖王。

というか、神という基本認識からも転がり落ちてしまった。

「そうか、石ころか」

「いやいやいや！ 信じないで！」

それは信じたら駄目だ。

「そつだ、この親友の危機に動じないなんて酷い男だな」

「……何時の間に来た」

普通にやりとりする海王だが、その視線に感情はない。

「さつき来た。ほら、二年に一度の同盟国間での会議。宰相も来たんだぞ」

「ああ、会った。相変わらず幸薄そうな顔をしていたな。奥さんにも相手にされていないとか」

「のおおお！ 海王つてば何時のまにドSになっちゃってんの！」

「ははあゝ、奥さんの為か？ 奥さんの為に虐められるの大好きなドMから」

「もう一度沈め」

湖王の頭を池に押し付ける夫に紅玉は絶叫した。

湖王も水を操るとはいえ、死ぬ。

絶対に死ぬ。

ジタバタと暴れた湖王が勢いよく水中から顔を上げた。

「殺す気か?!」

「当たり前だ。殺す気でやっている」

「ちよっ! 海王、お願いだから他国の王抹殺とかやめて下さい!」

「しかし王妃。この男を生かしておく事で私の不快指数が激上がりする気がして」

「そういえば、王妃様を名前で呼んでいましたよこの変態」

貴妃の告げ口。

海王のオーラが青から黒に輝いた。

なのに、髪の毛は金髪になりそうな勢いだ。

「ひいひいっ」

「死ね、マジで渡れ」

「ふふ、俺は負けない。妻の為にも」

決めポーズを取る湖王。

しかしそのポーズが激しい悩殺ポーズであるのは何故だろう。

他の男がやっても何にも面白くないのに、湖王だと色気が十割増しだ。

「凄い……羨ましい」

「女豹ポーズも俺は出来るね!」

「沙門、貴様とは一度決着をつけたいと思っていた」

湖王の本名を呼び、かちやっと剣を抜く海王。

「海王、俺の名前を可愛らしく愛らしい声で呼んでいいのは摩利だけだ」

「なら殺意に満ちた声で呼ぼう」

「ならオーケー」

「いいの?! それでいいの?!」

「海王ならね。因みに、凧国の萩波っちは俺の事を呼ぶ時は「ミ」でも見る様な目付きで、津国の咲駿なんて変態呼ばわりさ」

自虐的な事を言いながら笑う湖王に傷心の欠片も見受けられない。
これは演技なのか。

「あれが湖国の国王とは世も末ですね」

貴妃が溜息をつけば、徳妃が爆笑する。

「あはははは! でも、あれでも優秀な国王陛下様だよ。国民の力が強い湖国でも、上手に民達の代表と信頼関係を結び、民達からも慕われてるしさ」

「民達にとっては敬愛する存在ナンバーツーだそうです」

「え? じゃあ一位は?」

「湖国王妃様です」

「あゝ、摩利姉様か」

紅玉が摩利の事を思い出せば、確かに民達の彼女を見る目は尊敬の念に染まっていた。

但し、男性達に関しては焦燥感と嫉妬に塗れていたが。

尊敬しているが、同時に嫉妬もしている。

その二つの心に苛まれながらも、それでも王妃を尊敬する、そんな複雑な思い。

「で、宰相を放っておいてなんでお前は此处に居る」
「だから会議」

「後宮で会議するとても思ってるのか？ ああ？！」

いつもは穏やかな海王が切れた。

それもその筈。

ここには湖王に会わせたくない愛しい妻が居るのだ。

この男と関わって変態毒を受けたらどうする、いや、その前にこの男の目の前に出したくない。

何処までも独占欲の強い海王だった。

「いや、海王。私は大丈夫だよ。それに後宮だったって男しか居ないし」

紅玉は地雷を踏んだ。

「紅玉ちゃんそれは違うぞ！ 男だって男に襲われる事はある！ いや、むしろ美しければ性別なんて関係ない！」

「そうだぞ王妃！ 男にとって大切なのは美しいかどうかだけだ！」

「世の中には男をいたぶる方が好きっていう変態も多いんだから！ いや、大半だって！」

「そう、女性よりも美しい男を凌辱するのが大好きな男も居る」

「あの国、来艶とかいう馬鹿が支配していた国もそうだったな」

「あそこの後宮の寵姫は全て男だったらしい」

海王に湖王、そして四妃達の本気の叫びに戦きつつ、それでも何かがひっかかる。

「なら、私は余計に大丈夫だわ」

「なんでだっ！」

「男じゃないし、美しくもないから」

せめて美しければ襲われるかもしれないが、男でもなければ美しくも無い自分は完全に安全である。

「そんな事はないぞ王妃！ 私は常に王妃に欲情しているっ」

その時、時が止まった。

全ての時が、かちんこちに凍り付く。

「……海王の馬鹿あああっ！」

「ぐはあっ」

「わざと殴られてあげるなんて、海王はなんて妻思いなんだ！ 俺もよく摩利には殴られて」

「貴方のせいでしょうが！ 消えてしまいなさい！」

貴妃によつて二度目の蹴りを食らい、湖王の体は池へと飛んでいった。

場所は代わり、海国謁見の間にその面々は揃っていた。

「本当にすまない」

疲れ果てている集団の筆頭は、湖国宰相——玉兔。

『氷華』と呼ばれる美しい美女——の様な容姿はしているが、実は男の彼がぺこぺこ頭を下げる。

その度に揺れる翡翠色の長い髪が、光に反射しキラキラと輝く。

雪花石膏にも似た白い肌が今はほんのりと淡く色づき、その瞳には涙が浮かんでいた。

確かに泣きたい気分だろう。

他の数人の上層部や、彼らの子飼いの側近、そしてお付きの武官達に至ってはシクシクと泣いていた。

確かに泣きたいだろう。

ああ、湖国民代表の数人に至っては部屋の隅で四つん這いになっていた。

「心中お察ししよう。手の施しようがないとして」

「海王っ！」

紅玉が嗜めるのも間に合わず、わっと湖国の一団が泣き崩れる。民達代表者達に至っては、これさえなければ文句のつけようのない王なのにと床を叩いている。その姿は余にも哀れだった。

「こんなにも彼らを傷付けるとは酷い男だな、お前も」

「違うぞ海王、彼らはこの俺の妻を思う健気な姿に感動を」

「するわけあるかああああ！」

玉兎のボディブローが湖王の腹部に決まった。

流星は宰相閣下。

見た目こそ蠱惑的な美女でも、その威力は男のそれ。

「というか、どこの世界に会議で訪れた他国の後宮に真っ先に行く馬鹿がいるんだよ！」

「ここに居る！」

二度目のボディブローが繰り出されたが、湖王はその鍛えられた腹筋にて押留める。

美しい美貌には、笑顔すら浮かんでいた。

「ふっ、俺に二度目はぐぼお！」

後ろからの海王の一撃は防げなかった。

「次やったら本気で殺す」

「海王、それよりも次回の湖国側での会議で同じ事をするべきです。湖国後宮に入り、湖国王妃とお茶会をするのはどうでしょう」

「いつやああ！ 他の、他の後宮の女はどれだけたぶらかしても連れて行ってもいいけど摩利だけはだめええええっ」

現在湖国後宮には、自国他国から権力欲に取り憑かれた女達や、縁者達によって強引に送り込まれた女達が数十人居る。

その中の一割は強引に入れられた者達であり、湖国上層部は彼女達の解放に向けて尽力しているが、その他は全て王の寵愛を得ようと日々策略を張り巡らし、女達の戦いを繰り広げている。

出来れば、そういう救いようのない女性達から選んで欲しい。

「むしろ全員連れて行け！ 強引に後宮入りさせられた女達以外は
っ」

そしたら綺麗さっぱりすっきりである。

「湖王！ あんた何言ってるんだよっ」

玉兎が切れる。

確かに他国の王に自分の後宮の女を献上するという話はあるが、仮にも相手は水の第六位の海国。

かの国から要求があるならまだしも、いや、あったとしても色々問題がある

いや、その前に男色家と名高い——といっても、そう仕向けているだけだが——王に女性を送る馬鹿が何処に居る。

そんな事をすれば後宮の男妃達は危険に晒されるし、何よりも王妃一人を寵愛する海王が切れる。

それか、海王妃を大切にする海国側と戦が起きてしまう。

「なら、お前が引き取るか？」

「いやです」

玉兎は丁重にお断りした。

自分は赤鴉一人で十分なのだから。

赤鴉——禍津神として、周囲の蔑みと暴力の中で酷い神生を歩まされた少女。

その後、久那斗という『神工枷』となり、自分達『完末』の為に生きてくれた少女を玉兎は苦勞の末に手に入れた。

一目見た瞬間から、赤鴉を手元に囲う為にあらゆる手段を尽くし、強引に妻にした。

赤鴉だけでいい、他の女などいらない。

沢山の妻を娶るのが認められている国もあるかもしれないが、玉兎はそれを拒否する。

妻を沢山持つ事でのメリット以前の問題で、赤鴉しか必要の無い自分の所に嫁いでも相手の女性が迷惑だ。

それどころか、もし愛されない事で他の女が赤鴉を害そうものなら、きつと玉兎はその女を殺す。

より残酷に、より苦しめて。

それぐらいなら、他の女などいらない。

いや、最初から必要ない。

だから王から一時的とはいえ、後宮の妃を下賜されるなどまっぴらだった。

お気に入りの家臣に女を下賜するという制度が、現実にあるとも。

「という事なんだ」

湖王はやれやれと言った感じで首をふる。

「だから、一人ぐらいいいらない？」

「うちの王妃の前で言う事が、それは」

海国宰相がピリピリとその美貌から火花を散らせる。

「別にあげたところで、海王は相手にしないだろ」

「それでも何が起こるか分からないからな。そんな危険分子はいらない」

海王を余所にさつさと告げる海国宰相に、湖王は苦笑した。

「あゝあ、フラれちゃった」

その笑顔に、向こうも本気で言っていたわけではないと紅玉は悟る。

まあ、あの湖王が本気で自分の厄介事を他者に押し付けるわけもないが。

ああいう男は、自分の厄介事は自分で解決する事に全力を注ぐ。
見れば、湖国の一団もそれぞれ疲れた様に苦笑していた。

「で、なんだって王宮に着くやいなや、私の王妃の元に行った？」

「もちろんご機嫌伺い！ 沢山お土産持って来たんだよ」

「持って帰れ」

「選んだのはうちの奥さんだから」

「そうか、なら受け取ろう」

男からの贈物は死んでも受け取らせないのがモットー。

海王の妻への愛のなせるわざだった。

「むう、俺も紅玉ちゃんに贈物したいんだけど」

「いらん、そして王妃の名を呼ぶな」

「湖王様、どうもありがとうございます。王妃様にも私から御礼を
言っていたとお伝え下さい」

「やっぱり紅玉ちゃんは可愛いね」

「だから、私の妻の名を、呼ぶなど言っている」

海王の体から、ざわざわと黒い邪気が放出されるのが全員の目に
映った。

「けど、今日は摩利姉様は来られなかったんですね」

「……」

地雷だった。

摩利の名を出した瞬間、その場に体育座りをして床に字を書く湖
王に海国側がどん引きする。

「ふふ、摩利、そう、摩利……ふふふふ、二人っきり、せっかく」

「あの、何かありました？」

「聞いてくれる？！ 紅玉ちゃん！ ってか、最初から紅玉ちゃんと二人でお話する気だったけど」

「そうか、二人つきりで、最初から、ふん」

白い指を重ね合わせ、パキパキと指を鳴らす海王の艶麗な笑顔が黒く染まる。

「そう、二人で」

そこに火に油を注ぐ湖王に、玉兎が慌てて口を塞ぎにかかる。

「この私を前にして、人の妻と二人つきりか」

「だって、摩利と紅玉ちゃんは友達だし」

「友達是他にもいるだろう。果豎后や芙蓉后など、他にも」

他にも、の所を特に強調する海王。

「無理無理。あの萩波つちと暎駿つちが会わせてくれるわけないじゃん」

「それは貴様のせいだろう」

大根と旦那のどっちが好き？

そう聞いた湖王の質問に、果豎が本気で答えてしまったのが始まりだった。

「……………えっと、もちろん、萩波だよ」

長すぎる間がもたらすものはただ一つ。

当然、凧国の上層部は切れた。
湖国は平謝り。

上層部に加え、民達代表者達も自分の王に非があるとして土下座した。

王も怖かったが、何よりも特に王に近い彼らがもたらした恐怖は今も湖国に語り継がれている。

侍女長の明燐は無表情で鞭の調整をし、筆頭書記官の朱詩は黒ずぎる笑顔を浮かべ、『海影』の長の茨戯は持っていた扇を握り潰した。

そして明睡に至っては、虫けらでも見る様な視線を向け、その他上層部達もそれは氷の微笑みを浮かべる始末。

よく生きて帰れたと、後にその場に居た湖国一同は泣いたのだった。

「お前、の、せい、で！」

ぎりぎり王の首を絞める玉兎に湖王は笑顔で反論した。

「あははは、果豎ちゃんとのスキンシップだよ、コミュニケーションと言っ名の」

「どこがだ！　そして津国も怒らせやがって！」

あの後、今度は津国も怒らせた湖王。
わざとか、と本気で詰め寄ったのは湖国上層部の記憶にも新しかった。

「ちくしょう！　うちの国を潰す気かつ！」

「苦労しているんだな」

玉兔に同情するのは海王だけでなかった。

他の海国上層部も一様に同情する。

王としては最高なのに。

賢君の一人として名を馳せ、大国とも対等に渡り合い国を守りきるその姿には、国民達すらも魅了する。

なのに、この性格。

「紅玉ちゃん、なんかみんなが酷い視線を向けてくるんだけど」

「えーと、きゃっ！」

「うん、紅玉ちゃんだけだよ、ここでの俺の味方は」

「殺す」

妻に抱きつく害虫の駆除に海王は剣を抜いた。

「ふふ、俺を倒せるかな？」

そうして自らも剣を抜く湖王。

両者が対峙する姿に、その場に居た者達の殆どが過去を思い出す。

それは、大戦中に二人の王に付き従った者達の記憶。

現在天界十三世界にて王や上層部となっている者達の大半は、大戦中に現天帝と十二王家の下に集い、付き従った者達だ。

中でも、この炎水界の王や上層部の多くは、十二王家の一つ――炎水家当主夫妻の下に従軍していた。

普段は各々に指揮する自分の軍を纏めて各地に散り、それでも定期的に従軍する炎水家当主の下に赴いた。

そこで情報交換を始めとした各軍の交流が行われてきたのだ。

中でも、名物に近かったのは、各軍の長達や幹部達の間での模擬試合。

自分達の武を磨き、鼓舞し、ただ強いものと戦いたいという純粋な欲求を満たすためのものであり、辛い大戦の中での一種の余興でもあった。

特に湖王は海王と良く模擬試合で対戦相手となりその雌雄を争っていた。

凧王と津王がそうだったように。

「場所はどうする？」

「鍛錬場が」

「駄目！」

紅玉が夫の腕にしがみつく。

「王妃」

「紅玉ちゃん」

「そんな危ない事したら駄目よ！」

そこで初めて海国側も湖国側も気付く。

紅玉は大戦中、軍に所属していなかった。

そう——軍に所属しない、普通の少女であり、縁があつて凧国王宮に勤める事になった女性。

それ故に、海王と湖王がいつも模擬試合で戦っていた事を知らない。

それを、完全に彼らは失念していた。

それほど、大戦中互いの軍に居た者達にとっては普通な事であったから。

また国民代表者達も何度か目にしている事もあり、いわばここで二人の戦いを見た事がなかったのは紅玉だけである。

「王妃……」

「紅玉ちゃん……」

軍に所属していなかった紅玉が必死に止める姿に、二人は剣を降ろす。

だが、それに気付かない紅玉は更に言い募った。

「戦いなら別のにしましょう！」

「は？ 別の戦い？」

「そう、平和的に——」

と言いつつも、すぐには考えが浮かばない。

一体どんな戦いであればいいのか。

紅玉は考えた。

必死に必死に考えた。

そして、思いつく。

夫が怒るのは、湖王が自分に構い過ぎるから。

ならば、代わりに摩利の事を持ち出してみれば。

「じゃあ、摩利姉様にキスされた回数で争いましょう、私は五百回」

その瞬間、湖王は吐血した。

「ひいいいっ！　ちよつと王！」

「く、ぐうう！　し、初っ端から最終兵器なんてっ」

「紅玉、その戦いは私には無理だ。私は摩利には一度しかキスして貰ってない」

顔に――。

と続ける前に、湖王から凄まじい怨念が放出される。

「キス？」

「え？　じゃあ、摩利姉様にハグしてもらった回数！　私は三千五百回」

「ぐわほおおおお！」

「それでも私は十回ぐらいだな」

湖王が血の涙を流す。

「十回だと？！　何気に二桁だと？！　俺でさえハグなどという神聖な行為は九回しかしてもらってないのに」

「じゃあ同じぐらいで同点という事で」

「違っぞ王妃」

「そうだ！　紅玉ちゃん！　九回と十回には深い隔たりがあるんだ！　そう、九回は一桁だが、十回は二桁！　そこにあるのは、決して超えられない壁なんだ！」

「あゝ、それって二十九才と三十才の厚い壁みたいなの」

「「そうだ！！」」

「けど、海国王妃様に比べればドングリの背比べ状態ですから」

海国宰相の突っ込みが王達を貫く。

「ってか何?! 一体どうしてそんなハグされてるのおお! し
かもキスって何!」

「あ、でも果豎様の方が多いかも。三万五千九百二十五回程度でし
たから」

「のおおおおつ!」

重火器で言えば、戦車すら一撃のロケットランチャーを百連発食ら
った後のように、ぷすぷすと焦げながら湖王が倒れた。

「酷い、俺だってキスなんて滅多に出来ないのに」

「この前は襲い掛かって思い切り避けられましたしね」

冷たい玉兎の突っ込みに湖王はシクシクと泣いた。

「流石は私の王妃。湖王を一撃でノックアウトなんて」

それって、余計に事態を悪くした気がする。

しかし怪我とかしていないし、血も出てないからいいか。

納得する紅玉だが、心の傷というところにはまでは考えが及ばな
かった。

代わりに、先程湖王が言っていた言葉が思い出される。

「そういえば、さっき私と話がしたいとの事でしたが」

「うん、したい、摩利の事で」

「摩利姉様?」

キョトンとする紅玉が玉兎達を見るが、彼らも首を傾げるばかり

だった。

「というか、国を出発する前からシクシクと泣き、道中也泣き、ようやく海国王宮に辿り着いた瞬間、凄まじい速さで後宮へと走っていったしまったのだ。」

「摩利が、摩利がつ」

「摩利姉様が？」

「あいつが酷い事を言っただ！」

「どうせまたお前が何かしたんだろ。あいつの好みの女を寝取ったとか」

「うっさい！　んな事するかっ！」

湖王の正妃——摩利。

湖王ほどではないが、それなりに美しく綺麗な美貌に加え、炎水界でも武闘派王妃として名高い彼女は、大戦中には『燈湖（湖国首都）の処女狼』と呼ばれていた灰色の狼神にして戦女神だった。勇ましくて気高く、慈愛と慈悲に溢れたよく出来た女性で、どうしてこの湖王と結婚したのかいまいち海王にはよく分からない。

とりあえず、二人が結婚すると聞いた時には彼女に「神生を捨てるな」と止めてみた。

まあ、その時にはそそれがバレて湖王と大げんかしたが。

が、そんな彼女——摩利はレズだった。

確かに戦女神というものは結婚せず処女神を貫く者達が多い反面、同性愛に走りやすい。

つまり、女を相手にする。

だから、湖王などお呼びではないのだ。

いくら美女面していようと、生まれつき女として凌辱され続けて
こようとも。

「それは出立前夜の事だった」

「心底どうでもいい過去話が始まったな」

海王の突っ込みが入るが、湖王は気にせず話を続けて行く。

「その日、俺は仕事が早く終わり、珍しく夕方頃に妻の元を訪れた。
が、そんな妻は後宮に巣くう女達の美女美少女ウォッチングに熱中
していたんだ」

それも、海国側は知っている。

はつきりいつてレズの摩利にとつては美しい女性達の集う後宮は
天国同然。

そこを訪れるだけで、いつも美しい女性達を見れるのだから――
但し、彼女達は王の妻という事で決して手は付けないが。

反対に、湖王は後宮の女達に対して激しい怒りを常に燃やしてい
る。

嫉妬……そんな言葉では片付かないほどの怒り。

そもそも、後宮なんぞ開きたくも無かったし、別の女など欲しく
も無かった。

なのに、愛する女性からは結婚する前にレズだと宣言され、更に
は結婚後も後宮に入り浸られ女性達をウォッチングされている。

もちろん、王の寵愛を受けたがつている女性達からすれば敵と認
識されて近付く事も困難だが、無理矢理後宮入りさせられた女性達
とは既に仲良くなり「お姉様」と呼ばれて慕われている。

海王も見えた。

美しい美女美少女達に囲まれ、彼女達を侍らし「うふふ、可愛い子、あら貴方の胸は今日も素晴らしいわね」と椅子に座って足組みして微笑んでる摩利の姿を。

「そしてそこに加わろうとする赤鴉を玉兎が全力で止めて」

泣きながら止めていた姿も思い出す。

「当たり前だ！ 赤鴉は俺のもんだっ！」

「けど、最終的に赤鴉は摩利の所に行ったな」

「……」

その場に崩れ落ちて泣き伏す玉兎。

あの時、確かに玉兎は摩利に負けた。

もちろんその夜はしっかりとお仕置きをしたが。

「その摩利がウォッチングしてて何かあったのか？」

「摩利は女達を見て呟いていた。『良い乳してるね、あの子。あつちの子はお尻の形がいいし感度も良さそう』って——ってか、尻なら俺は負けない！」

「尻？」

キョトンとする紅玉を海王は引き寄せ抱き締める。

愛する妻が毒されないように、しっかりと抱き込んで。

「更に『ああ、あの子のお尻も弾力がありそうだし、凄く触り心地が良くて感度も良い感じね』って——俺なんて中の感度まで良好だ！」

湖王の頭に玉兎の踵落としがめり込んだ。

「中の感度って？　どこの感度？」

「はははは、王妃は一体何を話しているんだ。いや、湖王の言ったのは温度だ、部屋の温度」

「温度？」

あれ？そんな話してたつけど紅玉は首を何度も傾げた。

「何するんだ玉兔！」

「煩い！　その口閉じろ！」

「何を言う！　はっ！　言っとくが俺はお前にも勝つからな！　尻の使い方はっ」

再び玉兔の裏拳が炸裂した。

「馬鹿ばかり」

海国宰相がそう断じる。

が、特に、いや、馬鹿はただ一人だけだが。

「玉兔、何をそんなに怒る！　はっ！　まさかお前は俺よりも尻の感度と具合が良いというのか？！　尻の使い方が上手いというのか？！　それは認めないぞ！　この俺こそが最強だ！　だから摩利は俺の尻を可愛がってくれればいいんだっ！」

湖王が叫ぶ間ずっと紅玉は夫に耳を塞がれ続けた。

同時に、海国側からの冷たい視線に湖国側の胃がキリキリと痛む。

もう会議なんてどうでもいいから帰ってしまおうか。
そんな誘惑にもかられた。

「というか、その後の摩利の言葉は全て女達を褒め称えるものばかりだった」

そして何時の間にか話が戻っていた。

「この俺という完璧な夫が居ながら、愛する妻が別の女達を褒め称えるこの気持ちが見王には分かるか?!」

「わからない、そういう事は一度も無いから」

そもそも、後宮に居るのは全て男達であるし。

「くそおお！ 摩利は酷すぎる！ 他の女達の事ばかりウツトリと語って……だから、俺は摩利を押倒した！ この俺に気持ちを向ける為に！」

「体で言う事を聞かせるのか」

「違う！ ボディートークだ！」

どっちにしてもあまり変わらない。

「そう、俺は今まで俺が培ってきた全てを摩利に叩込もうとした」

「お前を襲い、女として飼ってきたゲス共に学ばされた事か」

「違う！ 俺独自在生み出した方法だっ」

海王は自分と同じ様な過去を持ち、それゆえに性技に長け、壮絶なる色香を放つようになった湖王を見る。

「なのに摩利は俺を拒否したんだっ」

「いつもの事でしょう」

玉兎は暴露した——王の夜伽事情を。

「日夜いつもいつも逃げられていて」

「いつも逃げられてるのか、残念な男だ」

「違う！ 俺の色香がまだ準備中なだけで」

半ば忘れられている紅玉が一生懸命に夫の手を耳から外そうとするが、上手く行かない。

「なら諦めろ」

「嫌だね。今回こそ上手く行くと思ったんだ！ 他の女の尻なんて一瞬にして興味を無くす秘策を俺は使ったんだからな！」

「何を」

「これを使った」

「そう言うと、湖王が取り出したのはくねくねと動く極太金属棒。いわゆる、大人の玩具である。」

「これで俺の尻を攻めてくれと頼んだ！ なのに、摩利は逃げた！」
「確かに逃げるだろうな、常識神だから」

男にこれで責めてくれと言われて責めてくれるのは、虬国の明燐ぐらいだろう。

あの女王様なら完璧に鞭で打ってくれる。

「その後は海国に出立する時にも見送りすら来てくれなかった」

「そうか、まあそういう失敗もあるさ」

「いつもなんだ！ いつも、この玩具を使って頼んでいるのに！」

「お前、さっき今回の秘策って言っただろ」

「今回は男を欲情させる笑顔もつけた、過去に培った最高の笑顔を

な」

その昔、多くの男達を墮としてきた笑みの実力は今も続行中である。

だが、一つ問題がある。

「摩利は女だから、男を墮とす笑みでは効果はないだろう」
「だからか?!」

湖王は衝撃を受けた。

一方、海王はこいつは馬鹿だと断じる。

いや、そもそも最初に出会った時から馬鹿だった。

もともと、自分と似たような過去を持つ男達は少なくなく、いや、美しければほぼ同じ過去を持っていた。

湖王やそこに居る玉兔を始めとした湖国上層部の男性陣もそうだ。美しく生まれてきてしまったが故に、生まれてからずっと、女のように扱われ凌辱されてきた。

時には加虐傾向のある男達に鞭や縄で弄ばれ、時には見世物のようにされ。

その美貌ゆえに多くの男達、時には女達の劣情に晒され、散々性的虐待を受け続けてきた。

中でも最も屈辱だったのは、彼らは常に女として扱われてきた事だ。

男でありながら、女物の衣装を身につけさせられ、仕草や言葉使いも改められ、女として凌辱される。

愛妾から性奴隷まで様々な立場に貶められ、多くの飼い主達に売り買いされ、時には新しく見初めた者が前の主と争ったり殺したり

して所有権が幾つも移り変わっていった。

その悪夢からようやく解放されても、現在でも定期的に男を受け入れなければ収まらず苦しむ者達も多く、湖王と玉兔などは特にその筆頭であり、海国にもそういう存在は少なからず居た。

きつと、炎水界、いや天界十三世界全土を見ればもつともつと数は多いだろう。

美しければ、強者に奪われる。

強者に愛でられ、弄ばれ、ただの愛玩動物として飼われ続ける。

男なのに正妻にされた者もいれば、愛妾にされた者もいる。

それぐらいなら性奴隷の方がよっぽどマシだと狂いかけた者も居る。

そういう者達が今、大戦を終え、その後の混乱時代を乗り越え、ようやく愛する者達と結ばれ始めた。

けれど、それでも同性と寝る者達が後を絶たない。

それは、任務だったり、愛するものを守る為だったり、単純に体が疼き苦しむがゆえにだったりと理由は様々。

それは、大戦がもたらした負の遺産と同じく、女として飼われてきた男達にとっては今も悩む後遺症である。

だが、と海王は湖王を見る。

この男はそれでも必死に生きてきた。

その悪夢の過去を振り払うように、必死に生きて、生きて。

大戦中も戦い続けた。

いつか来る自由という名の未来を待つのではなく、自らもぎ取るために。

軍を率いて、炎水家当主夫妻に従軍し、戦い続けた。

それは、玉兔や他の湖国メンバー達も同じ。

国の建国後は、そこに居る国民代表者達も一丸となって働いた。

その手腕、才能、神望、その他王として必要な全てを大戦の中で手に入れていた湖王。

しかし、この男が同時に馬鹿だと海王は知っている。

結婚して少しはマシになったかと思っても、次々とその期待を裏切られた。

摩利はあんなにも素晴らしい女性なのに——レス فقط。

「まあ、謝ればいいだろう」

とにかく、それしかない和海王は告げた。

「無理だ」

「なんでだ」

「だって、この玩具で責めてと伝えた時、摩利は俺に言った!」

『私、胸がたゆんたゆんに膨らんだ相手以外興味ないから』

「摩利の馬鹿ああっ! いや、俺はやる! 摩利の為にも俺は胸を膨らませる!」

無理だ。

その場に居た全員が思った——耳を塞がれている紅玉以外は。

「諦めろ、湖王。夢は叶わないからこそ夢なんだ」

「馬鹿野郎！ 夢は叶えてこそその夢だ！ 俺は負けないっ」

「で、結局うちの妻と何が話したかったんだ」

「いや、実は胸を膨らませる為の秘薬作りに必要な材料があるんだけど、その一つを紅玉ちゃんが栽培してる事を思い出して」

こいつマジだ。

全員がどん引きした——耳を塞がれている紅玉以外は。

というか、湖王の胸が膨らんだら一体かの国はどうなるのか。

「馬鹿！ 何考えてるんだよっ！」

「馬鹿じゃないぞ！ 赤鴉ちゃんだって素敵って言ってくれたし、薬が出来たら赤鴉ちゃんにもプレゼンとするんだからなっ」

「赤鴉の胸は俺が大きくする！ お前が出る幕はないっ」

「何を言っ！ 赤鴉ちゃんのささやかすぎる小さな胸をいつまでたっても成長させられないお前などただの無能だっ」

湖国宰相——玉兔。

その絶世の『氷華』と名高い冷たい美貌だけでなく、その政治手腕を始めとした多くの才から湖王の懐刀としての呼び名も高い。

また文武両道であり、その武術の腕前は湖国の將軍達にもひけをとらない程。

その男を無能呼ばわりする湖王もまた鬼畜かもしれない。
いや、失礼かもしれない。

「妻に尻を責めてくれと玩具を渡す変態に言われたくないわっ！」
「なんだと?! お前こそ、赤鴉ちゃんが嘆いてたぞ! 玉兎は凄く感じやすい受けの体なのに、気持ち良くさせようとすると怒るって! お前は鬼だ!」
「煩いその口縫うぞ!」

女として飼われてきた男達は、その激しい凌辱から基本的に受けとなり、責められる事で快感を覚えるようになる。
下手すると、二度と女性を抱けない体にされてしまうのだ。

特に玉兎は湖王並に感度が良すぎてしまい、胸の頂に触れるだけで全身を電気が駆け巡ったように快楽の痙攣を起こす。
それを赤鴉に見抜かれて以来、何度も責められかけ、事の大半はその攻防に費やされていた。

というか、ただでさえ男のプライドをズタボロにされているのに、女性を抱けず男を欲しがり責められる事を望む体。
それに絶望する者達はかなり多い。

その最も有名な例では、凧国に住まう珍珠達の例がある。
あの国——来艶とその父という馬鹿親子が治めていた国で、男色家だったその馬鹿親子と側近達に拉致監禁され寵姫として飼われてきた珍珠達は、来艶達が死に、祖国が滅ばされ、凧国に渡ってからその激しい凌辱で変えられた体に悩んでいた。

すなわち、女性に全く反応せず、男、それも強い男に抱かれないと勝手に反応する体に激しく絶望してきたのだ。

だがその絶望度で言えば、海国側も湖国側も決して負けないだろう。

幸いな事に、湖王と玉兔を含めた大半は、定期的に男を欲しがり抱かれなくなっても、女性をきちんと抱ける体を保つ事は出来ていた。

しかし、責められれば途端にただの淫らな肉人形となる体に、どれほど涙を流してきた事か。

海王も強引に女にさせられた性的虐待経験者として、その気持ちは分かる。

が――。

「はっ！ 言つとくが、妻の希望を叶えてやれない夫など失格だ」
「なんだと?!」

湖王の言葉に玉兔がたじろぐ。

「責めたいという赤鴉ちゃんの希望を叩きつぶし、彼女が泣いているのにも気付かないお前など男じゃない！」

「くっ！」

「玉兔、男になれ！ そしてこの玩具で赤鴉ちゃんに責められるんだ！ 彼女に尻を差し出せ！ それでこそ男だ！」

「――っ」

あ、かなり揺らいだ。

「俺の、尻を」

「そうだ！ それでこそ赤鴉ちゃんをメロメロにする栄光への第一歩となるんだ！」

その時、紅玉がようやく海王の手を外し、その一言を耳にする。

「さあ！ その尻を使って赤鴉ちゃんを」

湖王の頭に投げつけられたのは、鈍器と言つ名の椅子。
白木造り。

一種の芸術品たるそれを迷いなく湖王に投げつけた海王は、すかさず紅玉の体を回転させ自分の胸に顔を埋めさせる。

「は？ へ？」

そのまま、紅玉を抱きかかえる。

「妻が疲れたようだから、会議は午後に改めて」

その言葉に、反論する者は一人も居なかったという。

因みにその後、紅玉が摩利と話す機会があつた時に彼女から聞いてしまった真実に長らく紅玉は申し訳なさを覚える。

「湖王には毎回玩具を使って責めてくれと変態的趣味を強要されるんだ。けど、離婚は、したくない、し、……だから、胸が膨らんだ

相手しか相手にしたくないと告げてみた」
「……」

言葉は慎重に。

紅玉は言葉の持つ力を思い知ったのだった。

注意）以前、ここの注意書きにて名前を出させて頂いた読者様の「饗餐様」ですが、この度ウルマツク様と名前を変更されたとの事なので、以降はウルマツク様で統一させていただきます。

このお話を読むにあたり、注意事項があります。

1）湖国関係者のキャラは、読者様であるウルマツク様と考えてくれたキャラと設定を使用させて頂いています

2）この番外編は、読者様であるウルマツク様を書いて下さる予定の「大根と王妃シリーズ二次創作」の番外編として、大雪が書かせて頂いたものです

3）ウルマツク様からは湖国キャラの使用の許可を頂いております。また、今後は、湖国キャラ以外にも、ウルマツク様から使用許可を頂いたキャラ達も大根と王妃本編や別の番外編、こちらの名も無きでも出して行きたいと思います。

4）また、作中に出てくる湖国、香壁、四連会、久那斗、神工枷などの設定の方もウルマツク様から頂き、許可を貰い使用しております。

これらの注意事項を読んだ上で、読む読まないの判断をお願いします。

また読んだ後の文句は受け付けられませんのでご注意を。

湖国宰相物語『宝物は鳥籠の中へ』（前書きを必ずお読み下さい!!!）

湖国宰相玉兔ぎよくとと言えば、その絶世の美貌と類い希なる才能により、湖王の懐刀としてもその名を馳せる。

蠱惑的で冷たい美貌と妖艶な色香は、同性な筈の男達の心まで狂わせ、その身を求めさせるほど。

だが、それ以上に数多くの縁談が降り注ぎ、側室でも良いからと沢山の娘達が彼の側に侍る事を望んだ。

しかし彼が妻としたのは、ただ一人。

赤鴉せきあ——それがその妻の名前であり、彼女は身分も地位も持たない少女だった。

ある日突然玉兔が少女を何処からか連れて来た時には、周囲は騒然とした。

もちろん、娘を正妻、または第二夫人にと望んでいた者達は苦々しく思うものの、所詮は素性の分からぬ小娘、しかも美しくもない娘などは自分の娘の敵ではないと嘲笑った。

だが、内心は即座に排除しようとする者達も現れたほどだった。それほど、美しい玉兔の側に美しくない娘が居るのが許しがたかった。

しかし、それから程なく玉兔は赤鴉を妻にする事を望んだ。宰相が素性の知れない娘と結婚など出来るものか、国王達が許さないと高をくくっていた者達の思いとは裏腹に、国王や上層部、民達代表はその結婚に諸手を挙げんばかりに賛同してしまった。

もちろん彼らはそれに猛反対し、赤鴉が香壁という魔？の出身者であり、禍津神と呼ばれる存在だと突き止めるやいなや、まるで鬼の首でも取ったかのように赤鴉がいかに宰相に相応しくないかを叫び続けた。

だが、そんな彼らの反対も虚しく、あつという間に宰相の花嫁となった赤鴉に、今度こそ娘を妃にと願っていた者達は溢れる殺意のまま行動に移す。

そうして赤鴉は日々暗殺者に命を狙われる事となり、多くの女性達の嫉妬と憎悪に晒される事となった。

そしてそれは、二人の間に生まれた娘にも当然向かう事となる。

「きゃああああつ！ 不帰様^{ふぎ}、一体どうされたのですかつ」

玉兔の屋敷に仕える者達は、全て玉兔の意のままに動くか、彼に対して絶対的忠誠を捧げ心酔している者達。

その一人である侍女は、今年二才になる主夫婦の娘の姿に悲鳴をあげた。

「ふ、ふえ、ひしゅい、うえ」

赤眼の大きな瞳が涙に濡れ、それ以上に濃い焦茶色の髪がぐつしよりと濡れている。

いや、むしろ濡れていない所などなく、水草が所々に絡んでいる始末だった。

「早く着替えを！ 誰か、誰かつ」

その悲鳴にも似た叫びに、バタバタと遠くから走ってくる数人の足音が聞こえる。

「さあ、姫様。あちらで——」

不帰を抱え上げようとした侍女は、不帰の後ろにのっそりと現れ

た相手に凍り付いた。

此処に居る筈の無い相手に驚きつつ、更に相手がこの国の最高位である事、そしてその有り得ない姿へと変わり果てた様に喉が引きつる様な叫び声が上がった。

「へ、へへへ陛下あああつ?!」

「やつほう」

この国の最高位——湖王。

多くの者達にとって憧れと心酔の存在である彼の身は玉座にあるべきにも関わらず、今、目の前に悠然と立つ。

宰相である玉兔に負けず劣らずの美貌に、匂い立つ様な色香が全身から滴り落ちている。

それは今、水に濡れた事でよりいっそう艶めかしいものへと変わり、見慣れた筈の侍女でさえ下半身に強い疼きを感じる。

濡れた葡萄色の髪と潤む瞳から滲む色香は、その姿を見た全ての者の理性の鎖を引きちぎる。

それは訓練し強固たる鎖を得た侍女も同様で、まるで細い糸の様に引っぱられ、開いた扉の隙間から淫らな情欲が頭をもたげる。

だが、湖王が一步步き出した瞬間、侍女は必死で食い止めていた開きかかった扉が閉まるのを感じた。

湖王が、自分の色香と魅力を抑えてくれたのだと気づき、激しい罪悪感を抱く。

「気にするな」

「陛下……」

何処か困った様に笑う王に、侍女は胸が締め付けられる。

部下を思い、民を思い、国を思う賢君。

それでいて、公式の場で王として振る舞う以外は、こうして気軽

に声をかけてくれる。

炎水界には多くの賢君達が居るが、侍女は思う。

自分は、いや、この湖国の者達にとっての理想の主君こそ、この湖王なのだと。

熱くなる心、この方に仕えられる誇りに思わず頭を垂れかけた時、侍女はハッとした。

「そ、そそそ、その！ な、なぜここに——というか、なぜずぶ濡れにっ」

忘れていたが、今はそれを問いていた筈。

「あはは、池に落ちた」

「お、おち?!」

「ふき、おじちゃまにたちゆけてもりやったの」

「え？」

抱き上げた不帰の言葉に、侍女がハッとして湖王を見る。

「まさか」

「詳しい事は後だ」

その時、後ろに迫った複数の気配に侍女は振り返る。

同僚達を始め侍女長の顔が驚愕に染まっていた。

「早く不帰ちゃんを。このままじゃ風邪を引かせる」

王の言葉に、侍女達全員が我に返った様に動き出す。

そしてすぐさま不帰は侍女達に連れられ、屋敷の奥へと連れて行かれた。

＊

美しい装飾が成された窓枠が軋み、強化ガラスに罅が入る。

それは、この部屋に居る一人の存在から発せられる怒りの波動によるものだった。

「まず俺は何処から突っ込めばいいのか」

湖国宰相——玉兔。

椅子から立ち上がった彼を中心にして、風が巻き起こり、その余波は玉兔の向かいに座る王の艶やかな葡萄色の髪を乱していった。

それを見惚れるほど妖艶な仕草で直しながら、可愛らしく王が声を上げた。

「いや〜ん、玉ちゃんって怖〜い」

「玉兔様、どうかおやめ下さい！ 陛下は姫様を助けて下さった恩神で」

侍女——翡翠の言葉に、玉兔は唇を噛みしめ怒気を収める。

それは玉兔にも分かっていて。

騒ぎを聞きつけて王宮内にある自宅の屋敷に舞い戻ってみれば、妻の顔よりもまず最初に王が出迎えた。

しかも、玉兔の部屋着を身につけて。

『お前の部屋着って小さいよな。ふっ、つまり俺の方が筋肉があるという事か』

とのたまってくれた王に一撃を加える事は忘れなかったが。

確かに身長は王の方が頭半分ぐらいは大きい、筋肉量に関しては殆ど変らない。

良く言えば細マッチョ——無駄な贅肉のない肢体はその白く艶めかしい肌と絶妙な曲線美から中性的な雰囲気、濃く漂う、いわゆる男らしい筋肉質な体とは縁遠い。

もちろん、鍛えられた体付きではあるのだが、中性的で色気ダダ漏れという雰囲気が強すぎて、男の体として認識されにくいのだ。

それは、他の絶世の美貌を持つ男の娘達に多いが、玉兔に至ってはそれが凄まじいコンプレックスとなっている。

いくら見た目が美女だろうと、それでもこんな中性的な雰囲気漂う体でなければ、愛する妻に性別を間違われる事などなかったのだ——と、彼は信じている。

なのに余計な事を言う王に、玉兔は問答無用で一撃を食らわし、沈めた——娘の恩神だろうと。

だが、そんな玉兔でも予告無しに自分の屋敷に居る王には当然驚きを隠せなかった。

茫然とする玉兔に構わず王はよどみなく此処に居る理由を伝え、不帰に起きた事を報せてくれた。

本来その任を担う筈の妻は、浴室に居る不帰に付き添っていて今此処には居ない。

「玉兔様……」

翡翠の表情に、玉兎は大きく溜息をついた。

「分かっている」

自分が拾い育てた優秀な影でもある翡翠を困らせるつもりはなく、玉兎は不承不承ながらもそう答えた。

「うん、玉兎ちゃんは良い子良い子」

「頭を撫でるな！ その話し方やめろ！」

ぞわりと体が気持ち悪さに震える。

だが、それでも娘の命の恩神であるとして、何とか握りしめた拳から力を抜いた。

「まあでも、丁度良く俺が通りかかれて本当に良かったよ」

「ああ……」

王の言葉に、玉兎は自分の娘の身に起きた事を思いだし、苦虫を噛み潰した様に顔を歪めた。

玉兎が妻である赤鴉を迎えて以来、娘を正妻、愛妾にと望んでいた者達の赤鴉暗殺計画は白熱化の一途を辿り、実際に何人もの暗殺者に加え、毒蛇や毒蜘蛛という危険物が送りつけられ、飲み物には毒を入れられる事が多くなった。

娘が産まれてもそれは変わらず、むしろ娘にもその魔手は及んだ。

妻一人ならば、赤鴉本人が返り討ちに出来るが、まだ幼い娘が出来る筈もない。

玉兎の暗殺者への、いや、暗殺者を向けてくる者達への憎悪は正しく右肩上がりだった。

一体彼らは何をどうしたいのか。

赤鴉を殺したところで、自分から妻を奪った奴等の娘を妻にする
とも思うのか。

ましてや、愛するとも思うのか。

それこそ、地獄を見せて殺し、その首を送り返してやりたいとさ
え思う。

いや、今すぐそれをしてもいい。

それをしないのは、妻がそれを望まないからだ。

自分が返り討ちにすれば良いと笑う妻は、本当に強い。

それは心だけではなく、実際の武術面でもだ。

暗殺者達にひけをとらないほどの強さに、湖国の將軍達にも勝る
とも劣らない強さを持つ玉兎ですら男として危機を感じるほどであ
る。

しかし、いくら強かろうとも、玉兎にとっては愛する妻へ向けら
れる害は全て排除しなければならない。

娘が産まれてからは、その思いはより強まった。

赤鴉との間に生まれた大切な一人娘。

妻に似た娘は玉兎にとって宝物そのものだった。

その娘を害する相手など、生かしておく気もない。

そう、殺さなければならぬのだ。

「落ち着け、玉兎」

「王……」

「言つとくが、この状況で奴等を追いこむのは無理だ」

「何故?!」

娘の不帰は、自分の妻になりたいと望む者達に池に突き落とされたのだ。

大人でさえ足が届かない深い池に。
下手すれば死んでいたかもしれない。

池に落ち、必死で藻掻く娘を嘲笑いながら逃げていった女達。
もし通りがかった王に助けられなければ娘は死んでいたかもしれない。

「しかし、俺が駆け付けた時には娘達は居なくなっていたし、全員の顔を見たわけではない。取りこぼせば、確実にまた同じ事をする」

「……」

「それに、逆に子供が一人でそんな場所まで行ったとして、赤鴉ちゃんの保護責任を問われるかもしれない」

「っ——！！」

誰のせいだと玉兎は叫びたかった。

暗殺者から身を守る為に、赤鴉だけではなく不帰にも屋敷の奥での生活を強いていた。

それは自由を好む赤鴉にとっても、幼い娘にとっても酷い仕打ちだったが、二人を失う危険性を考えれば十分すぎる措置だった。

代わりに、屋敷の中に必要な設備は全て作った。

赤鴉の鍛錬場も、不帰の遊び場も。

宰相に相応しい広い屋敷の敷地内から、一步も出ずに暮らせるように。

だが、不帰は母似なのだろう。

よく外の話聞いたがり、侍女達の目をすり抜けて屋敷を抜け出した。

その度に肝を冷やすが、それでも赤鴉に比べればマシだと、いつしか誰もが思い始めていたのかもしれない。

赤鴉は禍津神にして、香壁という魔？の出身。

しかしそんな彼女にはもう一つの身分がある。

それは、『久那斗神』という存在だった。

この世には、遙か昔から存在する『枷』、『完末』、『それ以外の者達』と呼ばれる三つの存在があった。

そのうちの『枷』を神工的に創り出そうとして生まれたのが『久那斗神』と呼ばれる存在で、彼女は神非道的な実験の産物として生まれた存在だった。

『枷』は『完末』を制御する。

それも、全てにおいて完璧で完全たる美しい『完末』を。

そんな『完末』と呼ばれる者達に執着し、まるで神でも崇めるように祭り上げる者達は驚く程多いが、その中でもごく一部の者達が暴走した。

そうして、『完末至上主義』を謳う者達は、ただその完璧な存在を手に入れる事だけを願い実行したのだ。

その制御者を自分達の都合の良いように最初から創るという恐ろしい実験を——そして生まれたのが『久那斗神』だった。

今はもうその組織は壊滅して存在しないが、その実験による被害者は多く存在し、その中の一部が『久那斗神』として生きる事になった。

それは組織の為ではなく、『完末』達の為に。

あるゆる物を破壊し、神々の世界すらも消滅させかけた暗黒大戦。それよりも遙かに昔に起きた一つの大事件により、『枷』達は一

人も残す事なく消え去った。

だが、『完末』は『枷』無くして生きてはいけない。
そんな彼らを救うべく、実験の生き残りとなった者達は立ちあがった。

それが、『久那斗神』。

しかし、全ての者達が『完末』達の為に立ち上がったわけではなく、中には『完末至上主義』のせいで酷い目に遭わされた者達もあり、彼らは『枷』と『完末』の制度そのものに疑問を感じて立ち上がった。

鴉。

蛇。

蠍。

青虎。

玄竜。

それが、組織が壊滅した後に残った五人の『始まりの久那斗神』であり、そのうち最も幼かった蛇は炎水家に助けられたのち、久那斗神としての自分を捨てて戦神としてある王に仕えた。

一方、蠍は助けられた直後に自分の『完末』に連れ攫われ受けた仕打ちにより、この原因になった完末を激しく憎み、自分の完末すらも憎み、反完末レジスタンスを結成した。

残りの鴉と虎と竜は久那斗神を続ける事を忌避しつつも、『枷』

が居ない状態での『完末』達の哀しみと危険性を思い、彼らを救う為に久那斗神として生きる事を決めたのだった。

『完末』は完全にして完璧。

けれど、それゆえに多くの者達が彼らを求めて争い、結果そこに存在するだけで破滅と破壊、災いをもたらす。

自分の意思とは関係なく引き起こされる争い、奪われる自由、愛でられ強引に押し付けられる愛。

狂いゆく『完末』を『普通』に生かせるのは、『枷』だけ。

だから、『神工的に作られた枷』たる久那斗神として、鴉、蛇、蠍は自分達を苦しめた者達の研究を引き継ぎ、その場となる香壁を造りあげた。

それこそが、後に他の世界とも連絡路を持つ世界最大級の貿易都市として名を馳せる『香壁』であり、青虎、玄竜が中心となって四連会という、蒼虎連、白雀連、紅亀連、玄竜連からなる四つの巨大組織を立ち上げることとなる。

その後、香壁は迫害された禍津神と呼ばれる、古代より神々の世界にて忌むべき存在とされてきた者達——獣の特性を持つ者や忌避する力を持つ者、その他謂われなき差別により虐げられてきた者達や難民達を受け入れ、大都市としてその存在を炎水界に知らしめる事になったのだが、その裏には難民達や迫害された者達の避難場所としてもらう代わりに、一定の援助を続けていた各国の存在もあった。

更に香壁は、表向きを炎水家直轄の地とし、十二王家の一つ——炎水家から派遣してもらった領事が統治するという形式を取ること、その都市は炎水家の強い保護がある場所という認識を他者に植

え付け、その立場を更に強固たるものとしたのだった。

赤鴉はその香壁の出身者であり、久那斗神。

それも、『始まりの久那斗神』の一人、『鴉』、それこそが赤鴉の正体。

そして彼女は玉兎の妻となった後も、久那斗神の仕事が入れば即座にこの国を出て行く。

それが、彼女の役目であり神生をかけた使命だから。

その度に、玉兎を始めとしてこの国の上層部は胸をかきむしりた
い衝動にかられる。

なぜなら、玉兎達の『枷』は赤鴉だからだ。

そう、彼女こそが自分達の『枷』。

けれど、彼女は決して自分達だけのものにはなってくれない。

一度仕事が入れば、即座に彼女は去ってしまう。
手の届かない遠いところに。

それに比べれば、娘の行動はとても可愛らしいものに思えた。
その隙を突かれたのだ。

もし不帰を失っていたかと思うと、玉兎は爪先から冷たいものが
這い上がってくる様な気がした。

きつと玉兎は自分を許せない。

そして全てを破壊し尽くすだろう。

それほどに娘を愛する思いは強い。

「娘を、守らなければ」

ふらりと立ち上がる玉兔の肩に、王は手を置き強引に座らせる。

「落ち着け」

「落ち着いて、いられるかつ」

その恐怖に、その恐ろしさに、玉兔の瞳からは惹かれが失われていた。

そんな盟友を宥めるように、湖王は言葉を紡ぐ。

「お前の気持ちは分かる。俺も今回ばかりはひやりとしたからな」

小さな体が池に落ちた瞬間、王も走り出していた。

そして慌ててその体を抱え上げ、岸まで泳いだ。

腕の中で泣きじゃくる不帰に、この小さな娘が受けた恐怖の大きさを思い知った。

女達に殺意を覚えたのは自分も一緒。

けれど、下手に動く事は出来ない。

「不帰、そう、不帰、俺の娘——」

自分の手を被い走り出す玉兔に王は舌打ちしたが、追い掛ける事はしなかった。

一方、玉兔は不帰の居る浴室へと向かえば、丁度湯船から上がり体を乾かされている娘の姿を見つけた。

その隣には妻の姿もある。

「あ、玉兔だ」

「とうちやま」

「不帰、不帰、不帰」

娘の小さな体を抱き締める。

「玉兔、落ち着いてよ」

「赤鴉、何故不帰をきちんと見ていなかった！」

その怒声は、流石の赤鴉も驚きに目を見開く。

玉兔はそんな妻の姿に瞬時に我に返った。

「あ——」

「う、ごめん」

俯く赤鴉に、部屋の隅で固まっていた侍女達が駆け寄ってくる。

けれど玉兔はそれを手で制すると、赤鴉の手をとる。

「部屋に戻るぞ」

そのまま、娘と妻を連れて部屋に戻った玉兔は、侍女達を部屋に入れる事はなく長椅子に座った妻と娘の前に傳く。

「とうちやま……あのね、ごめんなさい」

娘が小さな頭を下げ、必死に謝る姿に玉兔の手が伸びる。

頭を優しく撫でると、娘が涙をためた目で見つめてきた。

「あのね、ふきがわりゆいの。だからおかあちやまはわりゆくない

の」

「不帰、違う。不帰は悪くないの」

「お母様の言うとおりだ、不帰。そうだな、不帰も外で遊びたかったんだよな」

同世代の子供であれば、もっと広い場所でのびのびと遊んでいる筈。

それは分かっていた。

「でも不帰、外は怖いんだ。これで分かっただろう？ 外に出たら、こういう怖い目に遭う」

「玉兔」

「赤鴉は黙ってる。不帰、今までは違ったかもしれない。でも、次も怖くないとは限らないんだ」

「ふき、こんどはいけにおちないよ？」

「池以外にも恐い事は沢山ある。それにもし不帰に何かあれば、お父様は生きていけない」

「いきて？」

「不帰の前から居なくなってしまうという事だ」

「やだ！！ ふき、おとうちゃまといつちよにいたいっ」

その言葉に、玉兔は唇の端をつり上げる。

「そうか……なら、お父様が居なくならないように、不帰はこの屋敷から出ては駄目だ」

今までは、目を瞑ってきた。
不帰の事を考え、少しなら大丈夫だと自分を誤魔化して。
けれど、もう耐えられない。

このような事態が二度と起きないように、この安全な場所に留めておく。

何かを言いたそうにする赤鴉を視線で押し留め、玉兎は娘を抱き締める。

「不帰、外に出ては駄目だ。外は怖い場所なんだ」

「おちよと、こわい？」

「そう、だから……不帰はここでずっと暮らすんだよ」

玉兎の瞳に混じる狂気に、不帰が気付くにはあまりにも幼すぎた。

だからこそ、あの事件は起きてしまったのかもしれない――。

*

夫が仕事に戻った後、赤鴉は項垂れた娘を抱き上げた。

「不帰……どうして池の側に行っちゃったの？」

暗殺者という者達が居なくとも、小さな子が池の側に行く事は危険すぎる。

普段から危険な場所には行かないように夫が口を酸っぱくして教え込んでいるが、やはり完全なものはない。

まだ幼い娘のことだ。

もしかしたら遊んでいるうちに忘れてしまったとしても、不思議ではなかった。

しかし、娘の答えは違った。

「おはな」

「お花？」

「うたげのおはな、いけにちゃいてたからとりに行ったの」

赤鴉は根気強く娘の話を聞く。

「おかあちゃまにあげゆの」

「私に？」

「うん、それつけておかあさま、おどゆの」

「……不帰」

不帰は赤鴉に一生懸命に話す。

屋敷に遊びに来た王妃から聞かされた宴の話を。

綺麗な洋服を着て、綺麗な石を身につけて。

「でね、おどゆちといゆっていったの」

「踊る人……」

舞姫の事だと赤鴉はすぐに分かった。

確かに宴では芸事を披露する者が必ず居る。

「でも、どうして私が踊るの？」

「だって、おかあちゃまちゅごくおどゆのじょうず」

「不帰……」

「うたげね、おどゆのうまいちとおどゆっていった。だから、おか

あちゃまおどゆの

「……」

不帰がにこにここと両手を振り回しながら説明する。

「でね、うたげ、きょうあゆってきいたから、がんばったの」

宴——そう、それは今日の夕方にある。

近隣諸国の貴族も来る、大規模なものだ。
もちろん、この国の有力者達も参加する。

玉兎の妻になりたいと願う女性達も当然参加するだろう。

けれど……。

「不帰、お母さんね、宴には参加しないんだよ」

「どうして？」

「ん、だって宴は夜遅くまでであるから、不帰と一緒に居られないもの」

本当は違う。

玉兎に宴の参加を禁じられていた。

自分が出る事で、女達を刺激するからと。

「お母さんね、不帰と一緒に居たいの。だから、宴には出ないの」

娘を理由にする自分に恥じつつも、真実を言うことは出来ない。

「だいじょうぶ、ふきもでゆもん」

母の言葉に、不帰はそう答えた。

実際、幼い不帰は宴の話聞いた瞬間から、自分も参加するつもりでいた。

綺麗な洋服を着て、父と母と一緒に参加する。

何よりも不帰は母が踊るのを見たかった。

いつも不帰が頼めば踊ってくれるが、その宴とやらではきっと素敵なのだろう。

不帰は母が綺麗な格好をして踊るのを楽しみにしていた。

その時に髪を飾る花を取りに行ったのだ——前に王妃様が髪に白い花を付けていたのがとても綺麗だったから。

そして王妃から聞いた宴に参加する事を何よりも楽しみにしていた。

なのに、母は哀しい顔を浮かべ、宴には出られないと告げる。

「不帰はまだ小さいから宴には出られないの」

「どうして？」

不帰は頬を膨らませ、母を見る。

「どうしても。不帰は宴に出るには小さすぎるの」

「なんで？　だって、ちゃんかちゅるっていった！」

不帰が上げた名前に、赤鴉は言葉を詰まらせた。

それは、上層部や有力者の子供達だ。

何時の間にか、彼らが宴に参加する事を知ってしまったらしい。

「不帰」

「わたちもいくの！」

「不帰、お父様が言つてたよね？ お外に出ちゃ駄目って。また恐い事が起きたらイヤでしょう？」

自分は良い。

でも、この小さな娘は守らなければならない。

その思いは夫と一緒に。

赤鴉は小さな娘を抱き締める。

だがそれがどれほど酷な事かも本能で分かっていた。
遊びたい盛りの娘をこの屋敷の中に閉じ込める。
屋敷は広いが、それでも子供には退屈な場所だ。

鳥籠——正にその言葉が相応しい。

実際、赤鴉の部屋は見た目も鳥籠そのものだった。
部屋の中央には、鳥籠そのものの様な造形の寝台が鎮座している。

「わたちもうたげでたい！！」

終には泣き出してしまった不帰を赤鴉は何も言わずに抱き締める。

他の子供達は出られるのに、自分だけが出られない。

宴に出られると信じ、母が踊るのだと信じ、その母にあげる花を
取りに行ったのだ……あの、池に。

そういえば、不帰が落ちた池には美しい白い花が咲いていたと赤
鴉は思い出した。

それはまだ自分がこの王宮に連れて来られて間もない頃、玉兔に
贈られた花だ。

「不帰……」

「ふええええんっ」

泣きじゃくる娘の背を撫でながら、赤鴉は窓を見る。

既に日は沈み、もうすぐ夜が来る。

宴が、始まる。

「そんなに、宴に出たいの？」

「でたいの。おかあちゃまのおどゆのみたい」

「……なら、一つだけね」

「ふえ？」

そう言つと、赤鴉は日が沈み闇が支配する夜の世界へと娘を連れて飛び出した。

夜の世界。

不帰にとっては、初めての光景。

いつも、窓から眺めていた遠い世界に、今自分は居るのだ。

夜空に輝く優しい月の光が、昼間に來た池を照らす。

「この花でしょう？」

「うん」

母に誘われ、その花を摘むと、また母に連れられて駆けだした。足を止めたのは、宴の会場の近くだった。

「おかあちゃま、あっちいかないの？」

不帰が指を指す先は、宴の会場。

花を手に入れ、後は宴に参加するだけ。

しかし母は動こうとしない。

「おかあちゃま、うたげ」

「うん、そうだね。でも、私達はこれ以上行けないの」

母の顔を不帰は大きな瞳で見つめる。

「どうして？」

しかし、赤鴉は何も言わなかった。

ただ、娘の心を守る為に。

自分はバカで無知だけど、娘を産んでから、何となく分かる部分が出て来た。

それは、娘に向かう悪意に関する事。

自分の時にはこれっぽっちも気にならなかった悪意が、娘の時のみ敏感に感じる事が出来る。

娘を産むまでは、何度玉兔に言われても分からなかった。

でも、娘が産まれてからは、赤鴉は宴に出ない、自分の意思で。全ては、娘を悪意から守る為に。

子供を産んだ事で、玉兔の思いが、少しだけ分かった。

「おかあちゃま……」

「不帰、ごめんね」

謝罪する赤鴉に不帰はキョトンとする。

「不帰」

「う？」

「これ以上先には行けないけど、ここで宴の代わりをしよう」

そう言つと、不帰を近くの岩の上に座らせる。

花を取った池とは比べ物にならない大きく美しい池の畔に立ち、池の向こう側にある宴が行われている離宮を背に赤鴉は娘に笑いかけた。

「なにちゆるの？」

「ん？ 不帰が楽しみにしてくれた事だよ……ただね、不帰」

赤鴉は不帰の額に自分のをくつつける。

「美味しい料理や綺麗な洋服とかは、ないの」

「ないの？」

「うん。でもね、お母さん頑張るから、これで我慢して欲しいの」

綺麗な服もない、美味しい料理もない。

でも、母が居る。

その手に、握られたのは母の相棒である刀。

飾り気は全くないが、その鞘から姿を現わす刃の美しさに不帰は何度もそれを見せてほしいと強請った。

そしてその刀は今、不帰が一番見たいものの為に使われる。

不帰は頷いた。

目を輝かせながら。

「じゃあ、始めるね」

そして赤鴉はゆつくりと腕を上げると、静かに舞い始めた。
月光の下、一人の舞姫がただ一人の観客の為に舞う。

*

玉兔は信じられなかった。

最初はたった数人。

酔い覚ましに離宮の外に出た者が、大きな池を挟んだ向こう岸に
居る存在に気付いた。

最初は不届き者かとも思ったが、すぐにその相手がしている事を
理解する。

月光の下で舞う舞姫に、ただ魅入られる。

それから、時間はあまり経たなかった。

玉兔の耳に最初に入れたのは、自分の子飼いの影。

驚き信じられないとばかりに離宮の外に出てみれば、既に何人も
の男達が池の向こうの存在に魅入っていた。

決して美しいわけではない。

蠱惑的な肢体も、滴る様な色香も、誰をも魅了する美貌も持っていない。

はつきりいつて、見た目だけなら下町の舞姫の方がよほど素晴らしい。上品さや高貴さを求めるならば上流階級の令嬢達には敵わない。

しかし――。

玉兎は目が離せなかった。

何時の間にか王や上層部もすぐ近くで池の向こうの舞姫を茫然と見つめているが、それすらも気付かずにただその存在を見つめる。

「どっ……して……」

靡く赤髪は炎の揺らめき。

くれる赤い瞳に宿るのは澄み切った清らかなる光。

揺れる裾と袖が夜空を覆う光の天幕を思わせる。

身につける服は宴に参加している女性の誰よりも劣っているのに、まるで巫女姫が着る様な美しい羽衣が見え。

優雅に動く腕の先に握られた刀の刀身が、月の光を浴びて美しく輝く。

鈴も、衣装も、音楽すらないのに、その存在をも惹き付け。

聖域に住まう穢れ無き清廉な巫女姫が舞うが如き神聖な舞に、何時しか宴に赴いていた全ての者達がその舞に心奪われる。

誰かが呟いた。

「あの舞姫は誰だ」

その言葉に、我に返る。

そして……。

「欲しい」

誰が呟いた言葉かは分からない。

だが、それが玉兔の中の何かを壊した。

欲しい——だと？

自分がずっと守ってきたものを、奪うというのか？

気付いた時、玉兔は赤鴉の前に立っていた。

何処か怯えた様に後ずさりながら、娘の不帰を背に守る。

不帰まで連れて来たのかという思いに、また、何かが壊れる。

大切な宝物が二つ。

そのどちらも、他人の目に触れてしまった。

そればかりか、欲しいと……怒りが、突き抜ける。

「玉兔——っ」

赤鴉を抱え込み、不帰の小さな手を握りしめ屋敷へと戻った後、
不帰を侍女に任せて赤鴉を寢所に引きずり込んだ。

自分が造った巨大な宙吊りの丸い鳥籠の寢台に押し込み、自らも
中に入る。

赤鴉が何か言っていた。
けれど、どうでも良い。

今はただ、赤鴉に自分を刻み込みたかった。

「出たら駄目って、言っただろう?」

誰にも渡さない、見せない。

紅い瞳に狂気の光が宿る。

愛する妻の四肢を枷で繋ぎ、鳥籠の中に閉じ込める。

自分から、妻を奪う者は許さない。

妻と娘を外に出す者には容赦しない。

そのまま、一週間寝台から、一月近く部屋から赤鴉を出さなかった。

それでも生活出来る様に、部屋をそう作ってあったから、何の問題もなかった。

閉じられた扉は、母の部屋に入る為のもの。

けれど、不帰が何度叩いても扉は開かなかった。

いつもは優しい父が、怖い顔をして母を連れて行ってしまった。

「おかあちゃま、おとうちゃまっ」

扉に縋り付き、父と母を求める。

そんな不帰を侍女達が引き剥がそうとするが、不帰は離れない。

泣きながら扉に縋り付く娘に父も気付いているのだろう。

すぐに部屋につれて行くように部屋の中から鋭く命ずる声が聞こえる。

「姫様、お部屋に戻りましょう」

「今日はもうお休みの時間ですよ」

「いやああつ！ おかあちゃま！！」

父が母を連れて行った。

自分が悪いことをしたから。

だから、あんな風に怖い顔をしたのだ。

宴に出てはいけないと言われた。

母にも言われたのに、自分が泣いてばかりいたから、母は外に連れ出してくれた。

自分が悪いのだ。

だから、不帰は謝る。

「ごめんなちゃい、おとうちゃま！！ ごめんなちゃいつ」

「姫様、姫様は悪くありませんわ」

「そうですね。お腹が空きましたでしょう？ ご飯にしましょうか」

「その前に体を温めましょう。長い間外に居たのですっかり体が冷えていますわ」

泣きじゃくる不帰に侍女達はそう言って宿め、終にはその小さな体を抱えて部屋の奥へと向かう。

だが不帰は泣き止むことなく、疲れ果てて眠るまで泣き続けたのだった。

＊

「不帰」

「おとうちやま……」

数日後、不帰は父に呼ばれた部屋で頂垂れていた。
きつと父に怒られる。

とても怖い顔をした父を思い出す度に、涙が止まらなくなった。
それに、自分のせいで母が酷い目に遭わされた事は何となく分か
っていた。

「ご、ごめ、ごめんなちゃい」
「……」

何も言わない父に、不帰は更に言葉を続けようとした。

しかし、ぎゅっと何か温かいものに包まれ、不帰は驚いて顔を上
げた。

「不帰、泣かなくても大丈夫だ」

「おとうちやま？」

「不帰は何も悪くないから」

「ふえ？」

「宴に出たかっただけなんだよな、不帰は」

「う、うん」

「そうか……なら、宴をしようか、この屋敷で」

「うたげ？」

「そう、王や王妃、此処に何時も来る者達だけ呼んで」

「おかあちゃまも？」

「ああ、赤鴉もだ」

ふわりと笑う父を、不帰は大きな瞳で見つめる。

「だから、泣かなくてもいい」

「おとうちゃま……」

「もう外に出たら駄目だぞ」

「だめ？」

「約束しただろう？外に出たら駄目だって。外は怖い事ばかりなんだ。だから、駄目」

歌うように、玉兔は娘に囁く。

「お父様と会えなくなるのはイヤだろう？」

「うん」

「お母様とも会いたいだろう？」

「うん」

「なら、この屋敷から外に出たら駄目だ」

「……わかった」

頷く娘に、玉兔は笑う。

もちろん、これで必ずというわけではない。

しかし、それでも構わない。

少しずつ、少しずつ囲い込む。

可愛い娘、愛しい娘。

赤鴉を縛る枷であり、何よりも愛しい妻との間に出来た宝物。

玉兎は大切なものを守る為には手段は問わなかった。

例え、妻と娘の自由をこの手で奪ったとしても……。

世界を敵に回す事になっても――。

その狂った狂気が、後に娘を追いつめ母と同じ『久那斗神』の道を歩ませる事になるとは、この時誰も予想出来なかった。

囚われた天女

『このままでは本当に死んでしまう。こっちにおいで』

『五月蠅いな！ もうどうでもいい！！ どうせ生きていたって私はただの生き人形なんだ！それなら、どこだって関係ない！』

それを知る者は果たして居るのだろうか。

東方の島国で強い権勢を誇る神有家。

その家が興るきっかけとなった出来事がある。

神有の名の由来になったそれは、その名の通りという言葉がふさわしい。

神が有るから、神が在るから。

古き物語に羽衣を奪い美しき天女をこの世に止めた様に、彼もまた彼女を留めた。

いにしえの古き神。

あまりの醜さに返されてしまったとされる岩長姫のように、そのあまりに醜さに奉られることすら忘れ去られてしまった神。

『こちらにおいで』

白き絶望が覆い被さる中で、彼女の優しさに触れた。

その時より、数多の神々に愛された美しい神子は願う。

神々さえ惑わす色香、魅了する美貌。

浚われ奪われ多くの権力者達の間を行き来し、時の大王さえ虜にして寵后として愛でられたその存在は、彼女に出会った瞬間人形から人となった。

自分が持つありとあらゆる物を使い、大王さえも傀儡とし。

その少年は手に入れた。

そうして墮とされた女神は、この世でも神の世でもない『庭』に枷をはめられ囲われ続ける。

*

——メ

ヨバナイデ

——ヒメ

あの子が私の名を呼ぶ。

私をここに閉じ込めた、憎くて愛しい神子が。

どこまでも続く青空の下には、どこまでも広がる花畑。

大きな屋敷もあり、神子が作り出した式の世話役や侍女達も居る。

何不自由ない暮らしを与えられながらも、手足にはめられた枷が現実を知らしめる。

美しい世界。

けれどここは現実の世界では無い。

あの子が創った偽りの世界は私を捕らえる豪華な檻。
鉄格子がない代わりに、出口も無い。

その扉を開けるのは、あの子ただ一人。

だから私は生かされ続ける。

あの子の為だけに。

守るべき場所からも引き離されて。

はらはらと、涙がこぼれ偽りの花や葉をぬらしていく。

もともと私は、この世ではない冥府の神の一柱として生を受けた。
迷える死者を導き、正しき輪廻の輪に向かうべく冥府の入り口へ
と誘う。

神は人と交わるべきではないと言われながらも、それでも神々の中
中で、数少ない人と直接接する事のできる仕事を成してきた。

だが、それも死者を導くという仕事での上。

なのに、なぜ彼を、生者たる彼を助けてしまったのか。
美しい神子だった。

人間達を統べる大王の寵后たる神子は、男の性を持ちながらも、
その美しさは性別、種族を超え、神々すらも彼を手に入れようと画
策するほどだった。

そうして行き着いた先は、一人の女神の暴走。

彼を自分の元に引き入れようとした一人の女神の所行はあまりにも身勝手かつ傲慢で、ついつい彼へと手をさしのべてしまった。

『馬鹿だのう。人の執着はたかだか数十年。神ならば永遠じゃ』

『ああそうですか。良いですよ、あなたは。執着されなくて』

『そうじゃな。私に執着するものなどいない。ほほ、どうせなら私とそなたを足して二で割ったぐらいであればちょうどよかったのう』
『認めてどうすんだよ!! っであんたといると本当に調子が狂う』
『!』

その結果がこうなるなど、誰が予想しただろう。

「ええ、誰も考えなかったでしょうね」

言葉少なく、淡々と世話をする侍女達にはあり得ない。

美しい声音を紡ぐ主は、この世界の創造主。

その美しさは人ならざる域に入り、神すらも堕とす狡猾さと狂気を身のうちに潜ませ、強き霊力は希代の大巫女さえも敵わぬ。

かの者が私の名を呼ぶ。

呪で縛され、奪われた真名を舌の上で弄ぶように紡いでいく。

たったその一言で、私の残された自由も消えゆく。

答えてはならないのに。

答えたくないのに。

名を呼ばれ、返事をするように求められればそれに応えてしまふ。

「私の愛しい神」

その白い織手が、私の髪を弄ぶ。

「久しぶりの逢瀬なのだから、応えて」

酷く官能的で魅惑的な声がささやく。

やめて、近寄るでない。

「逃がさないよ」

人である筈の彼が伸ばす触手に絡め取られる。

『そうか。私もそなたのその様な顔を見て本当に楽しい。これもそなたが生きていたからじゃのう』

『……っ！！ どうせどこに居たって同じなんだよ！ 生きてたつて死んでたって何にも変わらない！』

「そういえば、大王があなたに気づいたようなんだ。たぶん、大巫女のババアだろうね、あなたの存在をチクツたのは」

着物はすでに本来の役目を果たさず、人を受け入れ支配された痛みに泣く私に彼は告げる。

「あなたをこの国の国神とし、この国への繁栄をもたらしてもらお

うと考えているみたい。 ううん、違うね。 自分一人だけが神を独り占めしようとしている」

神を手に入れる事で、富を、権力を、神の力を利用しようとする。 愚かな者達の愚かな願い。

「けど、君が冥府の神だと知れば、一体どうなるだろうね」

「好きにせい」

「うん、だからあなたの事は言わない。 おのが権力の為に我が物にしようとするあんた大王の好きにはさせない」

「それはそなたと同じ事」

皮肉げに告げれば、彼はきょとした後に楽しげに笑う。

「そう、私も同じだよ。 あなたという神に恋し、この世に強引に堕とした」

『とにかくこの世界が嫌なんだよ！！ 自由を奪われ、意志を奪われ、権力者達の間でモノのようにやりとりされる！ しかもこっちが望まないのに勝手に人の所有権を巡って愚かに戦い殺し合う！！ はっ！ すばらしい殺人製造器だよ、私はっ！』

『男なのに寵后か』

『五月蠅い！ 文句あるかっ』

幾重にも張り巡らせた結界に捕え、この世界の虜囚とした。

「それぐらいしなければ、あなたは手に入らない」

なぜ——。

叫んだ。
何度も。

私はそこまで執着されるものなど何も持っていない。

生まれつき醜い容姿はどんな神すらも忌避した。

両親を持つ神でありながら、実の親にさえ疎まれ独りで生きてきた。

そんな私を、望む相手など居ない。

これは一時的な戯れだと思った。

ただ、神の力が欲しいが為に。

この醜さを弄ぶために。

なのに、この神子は――。

「逃がさない」

深く貫かれた体が悲鳴をあげる。

神と人との交わりを強いる神子が狂喜に笑む。

神子が本気だと知り、懇願に懇願を重ね。

それでも聞き入れられず、支配される。

『そんなに人に所有されたくないのなら、そなたが大王にでもなれば良いのではないか？ そなたにはそれだけの力があるから簡単だ

と思うが』

『……は？』

『おお、良い考えじゃ。そなたならば、きっと良い統治者となる』

「やめて」

逃げられない。

一生。

神でありながら、この偽りの樂園に囚われた冥府の神の叫びは誰にも届かない。

『できるわけ……』

『できる。そなたは優しい子じゃからのう。自分を巡って争う者達に呆れながらも、その戦を愚かしいと言って結局は彼らの命もまた惜しむ。そして自らのせいでと嘆く優しい子』

『……っ』

『きつとそなたなら、大切なものを奪われる者達の気持ちが分かる。傷つき血を流し、痛みを覚えたそなたならば』

そしてこの腹に宿す、男の子——。

『……生きていれば、変わるのか？』

『とりあえず、死んでしまふよりは変わる。それは生きているからじゃ。死ねばそこで成長とまり、転生するまで待たなければならぬ』

『……けれど、生きていたらあなたとは会えなくなるね。あなたは冥府の女神だから』

『私と会いたいと申すのか？ この神子は本当に珍しい。だが、そなたが会いたいなら』

それからまもなく、大王の寵后は罷り、代わりに一つの家が興る。その当主は大王の寵后にうり二つとも、本人だともまことひそかに囁かれ、次第にその噂も消える。

だが、その家は多くの名家が時代の流れに消えゆく中、それでも権勢を誇り続ける家として後にその名をはせる。

神有家――。

神の有る家、神を有する家。

時の大王すらも影から支配した初代当主の妻は、一柱の女神だったと言われる。

『やめっ！ そなたは何をしようとしているか分かって――』

『分かっているよ。でも、こうでもしなければあなたは私のものにはなってくれない』

『当たり前じゃ！ 私は』

『ふふ、まるで物語のようだね。こうして人間に拐かされた女神は羽衣を失いこの地に留められる。物語では最後に羽衣を見つけられて逃げられるけど、私はそこまで愚かじゃない。子を産ませただけで安心などしない』

『――っ！』

『ここは君の鳥籠だよ、ヒメ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4474u/>

名も無き者達の物語

2011年10月4日22時57分発行